

# 宮本武蔵

円明の巻

吉川英治

青空文庫



はるつげどり  
春告鳥

一

ここは、鶯の名所。

柳生の城のある柳生谷——

武者溜りの白壁に、二月の陽がほかりと映して、槍梅の影が一枝、静かな画になつて  
いる。

南枝の梅花は誘つても、片言の初音の声は、まだ稀にしか聞かれないが、野路や山路  
の雪が解けると共に、めつきり殖え出してくるのが、今、天下に遍き武者修行と称する客  
で、

——頼もう。頼もう。

の訪れだの、

——大祖石舟齋先生に一手。

だの。また、

——てまえこそは何の某なにがしが流れ汲む、何の誰それ。

だのといつて、例の石垣坂の閉まっている門を無益に叩く者が、寔まことに踵くびすを接して来るのである。

「どなたの御添書ごてんしょでお越しになろうと、宗祖は老年ゆえ、一切、お目にかかりませぬ」と、ここの番士は、十年一日のごとく同じ言葉で、そういう客を謝辞している。

中には、

「芸道には、貴賤の差も、名人と初心の差も、道においては、ないはずでござろうに」

などと小理窟こねて、憤々として帰る武芸者もあるが、何ぞ知らん、石舟斎はすでに去年、世に亡き人になっていた。

江戸表にある長子の但馬守宗矩むねのりが、この四月中旬にならなければ公儀から暇いとまをとって帰国できない事情にあるため——まだ喪もを発せずもに秘めてあるのだった。

心なしか、そう思つて、吉野朝以前からというここの古い砦とりで型の城を仰ぐと、四山の春は迫つて来ているにかか関わらず、どことなくしいんとして冷寂な感がある。

「お通さま」

奥の丸の中庭に立つて、ひとりの小僧が、今、彼方あち此方こちの棟を見まわしていた。

「——お通さま。どこにお在いででございませうな」

すると、一つの屋の障子があいた。室の中に焚たき籠こめられていた香の煙が、彼女と共に外へ流れた。百日の忌きを過ぎてもなお、陽に会わないでいるせいか、梨の花のように白い愁うれいを顔に湛たたえている。

「持仏堂でございませう」

「お。またそれへ」

「御用ですか」

「兵庫ひょうごさまが、ちよつと、来て欲しいと申されませう」

「はい」

縁づたいに、また、橋廊下を越えたりして、そこから遠い兵庫の部屋へ訪ねてゆく。——兵庫は縁に腰かけていたが、

「才才。お通どの、来てくれたか、わしの代りになって、ちよつと挨拶に出てもらいたいが」

「どなたか……お客間に？」

「先刻さつぎから通つて、木村助九郎が挨拶に出ておるが、あの長談義には閉口なのだ。殊に、坊主と兵法の議論などは参るからな」

「ではいつもの、宝蔵院様でいらつしやいますか」

## 二

奈良の宝蔵院と柳生ノ庄の柳生家とは、地理的な関係からも、遠くないし、槍法と刀法の上からも、因縁が浅くなかつた。

故石舟斎と、宝蔵院の初代胤いんえい榮とは、生前親しい間がらであつた。

石舟斎の壮年時代に、真に悟道の眼をひらかせてくれた恩人は、上かみいずみ泉伊勢守であつたが、その伊勢守を、初めて柳生ノ庄へ連れて来て紹介ひきあさせた者は、胤榮であつたのである。

——だがその胤榮も、今は故人になつて、二代胤いんしゆん舜が、師法をうけ、宝蔵院流の槍なるものは、その後愈、武道興隆の時潮に乗つて、時代の一角に、一つの大淵だいえんそう叢をなしているのだった。

「兵庫どのが、お見えにならぬが、胤舜が参つたこと、お伝えくださったかの」

今日しも、書院の客座に、二人の法弟を従えて、先刻から話している者が——その宝蔵院の二世権律師胤舜で、その応接に、下座にあるのが、柳生四高弟の一人、木村助九郎なのである。

故人との関係から、よくここへは訪れるのである。それも、忌日や法事などでなく、どうも兵庫をつかまえて、兵法を談じたいのが目的らしいのだ。そしてあわよくば、故人石舟齋が、

(叔父の但馬も及ばず、祖父のわれにも優れたるやつ)

と、眼の中へ入れても痛くないほど鍾愛して、上泉伊勢守から自身が受けた新陰の相伝、三巻の奥旨、一巻の絵目録など、すべてこれを生前に授けたと聴く、故人の孫の柳生兵庫に対し胤舜が自ら奉じるところの槍をもって、一手の試合を望んでいるらしい氣ぶりも仄見えるのである。

それを悟つたか、兵庫は、彼の訪れにもここ二、三回、  
(風邪ごこちにて)

とか、

(やむなき差しつかえで)

とかいって、避けている。

きょうも胤舜は、なかなか帰る気ぶりもなく、やがて兵庫が、席に見えるのを、何となく期待しているらしい。

木村助九郎は、察して、

「はい、最前、お伝えしておきましたゆえ、お気分さえよろしければ、ご挨拶に見えましようが……」

と、何とつかず、いい濁していた。

「まだ、お風邪気かな？」

と、胤舜はいう。

「は、どうも……」

「平常、お弱くおられるか」

「御頑健な質たちでおられますが、久しく江戸表にござって、山国の冬を越されたのは、近年ないことなので、馴れぬ寒さがこたえたのかも知れませぬ」

「頑健といえ、兵庫どのが、肥後の加藤清正公に見こまれて、高禄にて聘へいせられた折―



「お孫のために故人の石舟齋様が、おもしろい条件をつけられたそうですね」

「はて。聞き及んでおりませぬが」

「拙僧も、先師胤栄から聞いたのですが、肥後殿へこの大祖がいわゆるには、孫奴めは、殊のほか短慮者ゆえ、御奉公を過つても、三度まで死罪のお宥ゆるしをお含みおき下さるなら、差出しましょうといわれたそう。……はははは、そのように、兵庫どのは、御短慮と見えるが、大祖にはよほどお可愛かったものとみえますな」

### 三

そこへ、お通が出て、

「これは、宝蔵院様でいらつしやいますか。折悪く、兵庫さまには、江戸城へさし上のぼす何やらのお目録とかを認めしたた中で、失礼ながらお目にかかりかねる由にござりまする」

そう告げて、次の間まで用意して来た菓子、茶などを整え、

「粗葉そはでござりますが……」

と、胤舜へ先に——居並ぶ法弟たちの前へもすすめた。

胤舜は、落胆顔して、

「それは残念な。——実はお目にかかつてお告げ申したい大事があるのだが」

「何ぞ、てまえて足りる儀なればお伝え申しておきますが」

と、木村助九郎が傍わきからいうと、

「やむを得まい。では其許そこもとからお耳へ入れておかれい」

と胤舜は、やつと用談の本筋へはいった。

兵庫の耳へ入れたいというのはこうだ。この柳生ノ庄から一里ほど東——梅の樹の多い月ヶ瀬の辺りは、伊賀上野城の領地と、柳生家の領と、ちようど境になっているが、その辺は、山崩れやら、縦横の溪流や、部落も飛々とびとびで、確かな国境というものがない。

ところが。

伊賀上野城は従来、筒井入道定次つつい さだつぐの所領であったものを、家康が没取して、これを藤堂高虎とうどう たかたけに与え、その藤堂藩は、昨年、入部してから、上野城を改築し、年貢ねんぐの改租やら治水やら国境の充実やら、目ざましく新政を布しいている。

その勢いが余つてか、月ヶ瀬の辺りへ近頃たくさんな侍を派し、勝手に小屋を建てたり梅林を伐採したり、勝手に旅人を阻はばめたりして、柳生家の領土を侵害しているという噂が

頻りと聞えてくる。

「——思うに御当家が喪もちゆう中にあるのをよい機おりとして、藤堂家がわざと国境を押し出し、やがて勝手な所へ関の柵さくでも構かまえてしまおうという考えかもしれぬ。いささか老婆心に過ぎたるようじゃが、今のうちに、抗議なさらねば、悔いても及ばぬことになりはしまいか」

胤いんしゆん舜しゆんの話に助九郎は家臣の一人としても、

「よいお知らせを賜たまりました。早速、取り糺ただして抗議いたしましょう」

と、厚く礼をのべた。

客が帰ると、助九郎は、さつそく兵庫の部屋へ出向いた。兵庫は聞いたが、一笑に附して、

「抛ほうつておけ。そのうち叔父が帰国した時、処理するだろう」と、いった。

だが、国境沙汰となれば、一尺の地でも、問題はゆるがせに出来ない。どうしたものか、他の老臣や四高弟の者にも計つて、対策を講じなければなるまい。相手は藤堂という大藩だし、大事を取つてかかる要もある。

そう考えて、翌日を待っていると、その日の朝。

新陰堂の上の道場から、いつものように家中の若者へ一稽古をつけて、助九郎が出て来ると、外に立っていた炭焼山の小僧が、

「おじさん」

と、後から尾いて来て、彼の腰へお辞儀をした。

月ヶ瀬からずっと奥の服部郷荒木村という僻地から、常に炭だの猪の肉だのを——城内へ大人と一緒に担いでくる——丑之助という十三、四歳の山家の子だった。

「おう、丑之助か。また道場を覗きおつたな。きようは自然薯の土産はないか」

#### 四

彼の持つて来る山芋は、この附近の山芋よりうまかった。で、助九郎が戯れ半分に訊くと、

「きようは芋は持つて来なかったけど、これをお通さんに持つて来た」

と、丑之助は、手に提げていた藁苞を上げて見せた。

「藁の臺か」

「そんなもんじゃねえよ。生き物だ」

「生き物」

「おらが、月ヶ瀬を通るたんびに美しい声して啼く鶯うぐいすがいるんで、眼をつけといて捕まえたんさ。お通さんにやろうと思つて——」

「そうだ。そちはいつも、荒木村からこれへ来るには、月ヶ瀬を越えて参るわけだな」

「ああ、月ヶ瀬よか他ほかに道はねえもの」

「では訊くが……。あの辺に近ごろ、侍が沢山入り込んでおるか」

「そんなでもねえが、いるこたあいるよ」

「何をしているか」

「小屋あ建つて、住んで、寝てるよ」

「柵のような物を築いておりはせぬか」

「そんな事あねえな」

「梅の樹など伐り仆したり、往来の者を調べたりしておるか」

「樹を伐つたのは、小屋あ建てたり、雪解ゆきげで流された橋を渡したり、薪たきぎにしたりしたんだろ。往来調べなんか、おらあ見たことねえが」

「ふうむ……？」

宝蔵院衆の話とちがうので助九郎は小首をかしげた。

「その侍たちは藤堂藩の人数と聞いたが、然らば何のために、あんな所へ出張たむろつて屯たむろしておるのか。荒木村などでの噂はどうだ？」

「おじさん、そりやあ違うよ」

「どうちがう」

「月ヶ瀬にいる侍たちは、奈良から追われた牢人おばつかしだよ。宇治からも奈良からも、お奉行に趁おわれて、住むところがなくなつたから、山お中へ入つて来たんさ」

「牢人か」

「そうだよ」

助九郎は、それで解けた。

奈良奉行として、徳川家の大久保長安が着任してから、関ヶ原の乱後まだ仕官もせず職にもつかず、町で始末に困つていた遊民の侍を、各地から追つたことがある。

「おじさん。お通さんはどこにいるね。お通さんに、鶯うぐいすを上げたいんだけど」

「奥だろう。——だが、こら丑之助。御城内を勝手に飛びあるいてはいかんぞ。貴様、百

姓の子に似あわず、武芸好きだから、御道場を外から見ることだけは、特別にゆるしておくが」

「じゃあ、呼んで来てくれないかなあ」

「オ……。ちようどよい。お庭口から彼方むこうへ行くのは、それらしいぞ」

「あつ。お通さんだ」

丑之助は、駈けて行つた。

いつもお菓子をくれたり、優しい言葉をかけてくれる人である。それに山家やまがの少年の眼から見ると、この世の人とも思えない神秘的な美しさを感じるのであった。

その人は振向いて、遠くからにこと笑つた。丑之助は駈け寄つて、

「鶯つとを捕つて来た。お通さんに上げるよ、これ——」

と、苞つとを出して見せた。

「え。鶯……」

さぞ欣ぶかと思いのほか、彼女が眉をひそめたまま手を出さないの、丑之助は不平顔をした。

「とても美しい啼きをする奴なんだぜ。お通さんは、小禽こどりを飼うのは嫌いかい？」

## 五

「嫌いではないけれど、苞つとに入れたり、籠に入れたり、鶯が可哀そうですもの。籠に入れて飼わなくても、ひろい天地に放しておけば、いくらでも美しい音ねを聞かしてくれるでしょう……」

彼女が、諭さとすと、自分の好意を受けられなかったように不満だった丑之助も、

「じゃあ、放しちまおうか」

「ありがとう」

「放したほうが、お通さんは、欣うれしいんだろ」

「ええ。おまえが持つて来てくれた気持は受けておきますから」

「じゃあ、逃がしちまえ」

丑之助は、晴々といつて、藁苞わらづとの腹を破った。その中から一羽の鶯が跳はね出した。そして征矢そやみたいに、城の外へ飛んで行った。

「ごらん。——あんなに欣んで行ったでしょ」



「鶯のことを、春告鳥はるつげどりともいうんだってね」

「おや。誰に教えてもらいました？」

「そんなことぐらい、おらだって知ってらい」

「オヤ。ごめん」

「だからきつと、お通さんとこへ、何かいい便りがあるよ」

「まあ！ わたしにも春を告げて来るような、よい便りがあるというの。……ほんとに心待ちに待っていることがあるのだけれど」

お通が歩み出していたので、丑之助も歩いた。けれどそこらは本丸の奥の藪やぶだたみなので、

「お通さん、何処へ、何しに行くつもりだったんだい？ もうここはお城の山だけ」

「余りお部屋にばかりおりますから、気を晴らしに、そこらの梅花うめを見に出たのです」

「そんなら、月ヶ瀬へ行けばいいじゃないか。——お城の梅花うめなんか、つまらないや」

「遠いでしょ」

「すぐさ。一里だもの」

「行ってみたい気もするけれど……」

「行こう。——おらが薪たきぎを積んで来た牛が、この下に繋いであるから」

「牛の背へ」

「うん。おらが曳いて行くで」

ふと、彼女は心がうごいた。苞つとの鶯のように、この冬は、城の外へ出なかつた。

本丸から山づたいに、搦手からめての雑人門ぞうにんもんの方へ降りて行った。その城門には、常じょうづつ

詰めの番人がいて、いつも素槍を持って歩いていますが、彼女の姿を見ると、番人も遠方か

ら笑つて頷うなずいただけである。丑之助はもちろん鑑札かんざつを持っている。だが、その鑑札を示

す必要のないほど、彼も番人たちとは親しかつた。

「被衣かつぎを着てくればよかつた」

牛の背に乗つてから、彼女はそう気づいてつぶやいた。知ると知らぬかかに関わらず、道ば

たの軒から彼女を仰ぐ者や、行き会う百姓たちは、

「よいお日和ひよりさまでございます」

と、ていねいに挨拶した。

だが、しばらく行くと、城下の家々もまばらになつた。——そして後ろに柳生の城が山のすそに白く振り返られた。

「黙って出て来てしまつたけれど、陽の明るいうちには帰れますね」

「帰れるとも。おらがまた、送つて来るから」

「だって、おまえは、荒木村へ戻るのでしょ」

「一里ぐらい、何度往き来したつて……」

話しながら行くうちに、城下端れの塩屋の軒で、塩と子猪こじしの肉とを交換していた牢人ていこの男が後からのそのそ追いついて来た。

ほんぎゆう  
奔牛

一

道は、月ヶ瀬の溪流ゆきげに沿って行くのである。行く程にまた、その道は悪くなるばかりだつた。冬を越えた雪解ゆきげのあとは、通る旅人も稀れだし、この辺りまで、梅花うめを探りに来る者などは殆どない。

「丑うし之助のすけさん。おまえ村から里へ来る時は、いつもここを通つて来るの」

「ああ」

「荒木村からは、柳生へ出るよりも、上野の御城下へ出たほうが、何をするにも、近いんでしょ」

「けれど、上野には、柳生様みたいな剣法のお屋敷がないものなあ」

「剣法が好きかえ」

「うん」

「お百姓には、剣法はいらないじゃないか」

「今は百姓だけど、以前は百姓じゃねえもの」

「お侍」

「そうだよ」

「おまえも、お侍になる気？」

「アア」

丑之助は、牛の手綱なげうを抛なつて、溪流のふちへ駈かけ下りた。

岩かから岩へ架かけ渡してある丸太の端が、溪流に落ち込んでいるのを直して、戻かって来た。すると、後から歩いてきた牢人らうじんていの男が、先へ橋を渡って行った。橋の途中からも、

向うへ渡つてからも、お通のすがたを、何度も不遠慮に振り顧つて、すたすたと山間に隠れて行つた。

「誰だろ？」

お通は、牛の背で、ちよつと不気味な気もちに襲われてつぶやいた。丑之助はわらつて、  
「あんな者恐いのか」

「恐かないけれど……」

「奈良から追われた牢人だよ。この先へ行くと、山住居してたくさんいるぜ」

「大勢？」

お通は、帰ろうかと惑つた。梅花はもう眼を遣る所に咲いていた。けれど山峡の冷気が肌身に沁みて、梅花に楽しむよりも、心は人里にばかり牽かれていた。

だが、丑之助の引く手綱は、無心に先へ先へ歩いている。そして、

「お通さん、後生だから、おらを木村様に頼んで、お城の庭掃きでも水汲みにでも、雇つてくれねえかなあ」

などといった。

丑之助の日頃の望みは、それにあるらしかった。祖先の名は菊村といい、親代々、又右

衛門えもんを名乗つて来たから、自分も侍になつた上は、又右衛門と改める。そして菊村という名からは、偉い先祖が出ていないから、自分が剣法で家を立てたら、郷土の名を取つて荒木を姓にし、荒木又右衛門と名のるつもりだ——などと姿に似げない抱負を述べる。

お通は、この少年の夢を聞くにつけ、城太郎はどうしたろうと、弟のように、別れた彼の身が考え出された。

(もう、十九か二十歳はたち)

城太郎の年をかぞえると、ふと彼女は堪らない淋しさに駆られた。自分の年を思い出したからである。月ヶ瀬の梅花うめはまだ浅い春だったが、自分の春は過ぎようとしている。女の二十五を越えては——。

「もう帰りましょう。丑之助さん。元の道へ、返つておくれ」

丑之助は、飽気あつけない顔したが、いわゆるまま牛の頭かしらを向け直した。——と、何処かで、オオーイと呼ぶ声はその時聞えた。

さっきの牢人と、他にもう二人、同じ風体の男が近づいて来て、お通の乗っている牛のまわりに、腕拱うでぐみして立ったのである。

「おじさん達。呼び止めて、何か用があるのかい」

丑之助はいったが、丑之助へは振り向く者もない。三人が三人とも、卑いやしげな眼をお通へ集めて、

「なるほど」

と、呻うめき合っている。

そのうちに、一人がまた、

「ウーム、美人だ」

と、不遠慮にいつて、

「——おい」

と、仲間を顧みた。

「おれはこの女を、どこかで見た覚えがあるぜ。多分、京都だと思うが」

「京都にはちがいあるまい。見るからに山里の女とはちがう」

「町でちらと見ただけか、吉岡先生の道場で見たのか、覚えはないが、慥たしかに見たことは

ある女だ」

「おぬし、吉岡道場などに、いたことがあるのか」

「いたとも、関ヶ原の乱後、三年ほどはあそこの飯を喰っていたものだ」

——何の用事か分らない。人を止めておいて、こんな雑談をし——そしてはじろじろとお通の体から顔を、さもしい眼で撫で上げている。

丑之助は、腹を立てて、

「おい。山のおじさん。用があるなら早くいってくんな。帰り途かえみちの陽が暮れちまうから」  
ぎよろりと、牢人の一人が、初めて丑之助を見、

「われやあ、荒木村から出て来る、炭焼山の小僧じゃねえか」

「そんなことが、用なのかい」

「だまれ。用事は、汝われにあるわけじゃない。汝れは、さっさと帰る方へ帰れ」

「いわれなくても、帰るさ。退どいてくんな」

牛の手綱を曳きかけると、

「よこせ」

と、一人がその手綱をつかみ、そして恐い眼を丑之助へして見せた。



丑之助は、離さず、

「どうするのさ」

「用のある人を借りて行くのだ」

「どこへ」

「何処だろうが、黙って、手綱をよこせ」

「いけねえ！」

「いけないと」

「そうさ」

「こいつ、恐いということを知らねえのか。何か、つべこべいうぞ」

すると、他の二人も、脅しおどの眼を揃え、肩をいからせ、

「何だと」

「どうしたと」

丑之助の周りにかたまつて、松瘤まつこぶのような拳を突きつけた。

お通は、顫えふるあがつて、牛の背へしがみついた。そして、丑之助の肩に、凡ただならぬ出来

事が起りそうな気色を見たので、

「——あれッ」

と、それに対して、制止しかけたが、丑之助はかえって彼女のそれに感情の弦つるを切つて、いきなり片足あげて、前の男を蹴とばしたせつな、彼の石頭は、斜めにいた牢人の胸いたへ打ぶつけて行つて、その胸から敵の刀を抜き取るが早いか、自分のうしろへ向つて、盲打ちに薙なぎ払つた。

三

お通は、丑之助が気でも狂ちがつたかと思つた。丑之助の動作は、それほど、迅はやくて、向う見ずな仕方だつた。

だが、自分よりずっと上脊丈うわぜいのある三方の大人に対むかつて、彼がやった一瞬の身の動かし方は、同時に平等な打撃を相手に加えていた。

かんの働きといおうか、少年の無鉄砲といおうか、理や法を持った大人がそれに出し抜かれた形であつた。

うしろへ無法に振つた刀は、うしろに立っていた牢人の胸へ強くぶつかった。——お通

も何か愕おどろきを叫んだが、その牢人が、怒って吠えた声は、彼女の乗っていた牛を驚かすに足りる程だった。

しかも、仆れたその牢人の体から噴いた血が、牛の角から顔へ、霧のように走ったのである。

傷負ておいの呻うめきにつづいて、一声、牛が吠えた。丑之助は、二度めの刀で、牛の尻を撲りつけた。牛はまた、大きく吼ほえて、彼女を乗せたまま猛然と駈けだした。

「うぬ」

「餓鬼っ」

二人の牢人は丑之助を追うのに急だった。丑之助は、溪流へ跳び下り、岩から岩へ逃げ移って、

「おらは、悪くねえぞ」

と、いった。

大人の飛躍は、到底、彼の比でなかった。

愚を悟って、

「小僧は後にしろ」

と、二人は急に、お通を乗せて行つた牛の後を追い出した。

それと見ると、丑之助はまた、その後からどンドン駈けて、

「逃げるのかつ」

と、二つの背へ、声を投げた。

「何ッ」

口惜しげに、一つの顔が止まつて振向いたが、

「小僧は後にしろ」

と、連れがまた、同じ言葉を繰返して、ひたむきに先へ跳んで行く 奔ほんぎゆう牛へ、足幅を

跳とばし続けた。

彼女が先に手綱を引かれて来た時の道とちがつて、牛は、闇夜を眼をつぶつて駈けるよ

うに、溪たにがわ河沿いの道を離れ、低い山の背や尾根をめぐる——笠置街道とよんでいる細

道を果てなく駈けて行くのだった。

「——待てつ」

「待てえつ」

彼らは、牛より迅はやい自信を持つていたが、平常の牛に対する考えは当らなかつた。

奔牛は、またた瞬く間に、柳生ノ庄に近く——いや柳生よりも奈良に近い街道まで、息もつかずに来てしまった。

「……………」

お通は、眼をふさいだきりだった。もし牛の背に、炭俵や薪を付ける荷鞍がなかったら、振り落されていたに違いない。

「おお、誰か」

「牛が狂うて行く」

「助けてやれ。女子おなごが可哀そうな」

もう人通りのある街道を駆けているものとみえ、うつつな彼女の耳に、すれちがう往来の者の声は聞えるが、

「あれよ」

と、いうのみな、そうした人々の騒ぎも、忽ち、後へ後へと、流れ去ってしまうのだつた。

#### 四

もう般若野はんげやのに近かった。

——生ける心地もないお通であつた。止まる所を知らない奔牛の勢いであつた。どうなることか？

と、往來の者も、後振り向いて、お通の代りに声を揚げ合つていたが、その時、彼方の辻から、胸ふほこに文筥ふほこを掛けた何家どこかの下郎が、牛の前に歩いて来た。

「——あぶないつ」

と、誰か注意したが、その下郎はなお真つ直に歩いていた。当然盲目的に進んで来た奔牛の鼻づらと、下郎の体とは、恐ろしい勢いで打ぶつかったように見えた。

「ア。牛の角つのに突かれた」

「あほう！」

同情の余り、見ていた者は、かえつてその下郎のぼんやりののしを罵ののしつた。

だが、奔牛の角に掛けられたと思つたのは、路傍の人たちの錯覚さつかくだつた。ぼん——と何か音がしたのは、下郎の平掌ひらてが、途端に牛の横面をつよく撲はりつけたのだつた。

よほどな強打であつたとみえ、牛は太い喉のどくびを横へ上げて、ぐるりと半廻りほど廻つ

たが、猛然と、角を向け直したと思うと、前にも増した勢いで、また、駆け出した。

——けれど今度は、十尺とも進まぬうちに、奔牛の足は、ぴたと止まってしまった。そして口から夥おびただしい唾液だえきと息を洩らして、巨きな体に、喘あえぎの波を打たせておとなしくなっていた。

「お女中。はやく降りたがよい……」

下郎は、牛の後ろからいった。

この驚くべき働きに驚いた往来の者たちは、すぐわらわらと集まって来た。そして皆、下郎の足元に眼をみはった。——その片足が奔牛の手綱を踏んでいたからであった。

「……?」

どこどこの家しもべの下僕しもべだろうか。武家の仲ちゆうげん間のようでもなし、町家の下男しもべともみえない。

まわまわりに集たかつた者は、そんなことをすぐ考えている顔つきだった。——そしてはまた、下郎の足と、踏んでいる手綱を見て、

「えらい力じやな」

と単純に舌を巻いていた。

お通は、牛の背から降りて、下郎の前に、頭を下げていたが、まだわれかえに回り切れない

容子ようすだった。それに周りの人だかりにも気を縮めてしまい、その顔にも姿にも、容易に落着きがもどって来なかった。

「こんな素直な牛が、どうして暴れたものか」

下郎はすぐ牛の手綱を取って道ばたの木へ縛くしつけた。そして、初めて合点のいった顔をして、

「おう、尻に大怪我をしておるわ。刀で撲ったような大傷。……道理で、これでは」

牛の尻を眺めて、彼がそう呟つぶやいている間まであつた。辺りの人だかりを叱つて、追い払いながら、

「や。そちはいつも、胤いんしゆん舜御坊の供をしてみえる、宝蔵院の草履取ぞうりとりではないか」

と、そこへ立つた侍がある。

急いで駈けつけて来たものとみえ、その言葉も息喘いきぎれに弾はずんでいた。柳生の城の木村助九郎なのである。

## 五



宝蔵院の草履取は、

「よい所でお目にかかりました」

と、胸に掛けていた革文笥かわふばこを外しはず、自分は、院主のお使いで、この書面を、柳生までお届けにゆく途中であるが、おさしつかえなければ、ここで御披見ごひけんくだされまいかとて、それを手渡した。

「わしへか」

助九郎は、念を押して、手紙を披ひらいた。きのう会った胤舜ひらからの物で——読んでみると、月ヶ瀬にいる侍どものことについて、昨日申し上げた儀は、その後よく取とり糺ただしてみると、藤堂家の侍ではなく、浮浪の徒が冬籠りしていたものらしい。どうか拙僧の前言は誤聞として、取消していただきたい。念のために、取りあえず右まで。

といったような文意であった。

助九郎は、袂たもとに納めて、

「ご苦労。書面の趣は、当方でも取調べたところ誤聞と相分つて安心しておる程に、お案じないように——と、告げてくれい」

「では、道ばたで失礼でございましたが、てまえはこれで」

別れかけると、

「あ。待て待て」

助九郎は呼び止めて、やや言葉を改めていった。

「おぬし、いつ頃から、宝蔵院の下郎に住みこんだか」

「つい近頃の、新参でございます」

「名は」

「寅蔵とらぞうといひまする」

「はてな？」

じつと見すえて――

「將軍家御師範の小野治郎右衛門先生の高弟、浜田寅之助とらのすけどのはちがうかの？」

「えっ」

「それがしは、初めての御見ぎよけんだが、お城のうちに、薄々お顔を知った者があって、胤舜

御坊の草履取は、小野治郎右衛門が高弟の浜田寅之助じゃが？――どうもそうらしいが

？――と噂をしていたのをちらと承ったが」

「……は」

「お人ちがいか」

「………実は」

浜田寅之助は、真つ赤な顔してさし俯向いた。

「ちと……念願の筋がござりまして、宝蔵院の下郎に住み込みましたなれど、師家の面目、また、自分の恥。………どうか御内分に」

「いや何、さらさら御事情を伺おうなどとは存じも依らぬこと。………ただ日頃、もしやと思つていたので」

「疾くお聞き及びと存じますが、仔細あつて、師の治郎右衛門は道場を捨てて山へ隠れました。その原因は、この寅之助の不つつかにあつたことゆえ、自分も身を落し、薪を割り水を担うても、宝蔵院でひと修行せんものと、身許をかくして住み込んだわけ。——お恥かしゆう存じます」

「佐々木小次郎とやらのために、小野先生が敗れたということは、その小次郎が吹聴しつつ、豊前へ下つて参つたので、隠れもない天下の噂となつておるが、さては………師家の汚名を雪がんとための御決心とみえる」

「いずれ。………いずれまた」

心から赤面に堪えぬように、草履取の寅蔵は、そういうと、遽にわかに別れて、立ち去つてしまつた。

麻あさの胚たね子

一

「まだ帰らぬか」

柳生兵庫ひょうこは、表の中門まで出て、お通の身を案じていた。

お通が、丑之助の牛に乗つて何処かへ行つたまま、だいぶ時間が経つてからの騒ぎなのである——。

そのお通が、城内に見えないと気がついたきつかけも、江戸表から一通の飛脚状が兵庫の手に届いて、兵庫がそれをお通に見せようと姿を探し出したことからであつた。

「月ヶ瀬の方へは、誰と誰が見に行つたか」

兵庫の問いに、

「大丈夫です。七、八名駈けつて行きましたから」

と、側にいる家来たちが、等しく口をそろえて答えた。

「助九郎は」

「御城下へ出ております」

「探しにか」

「はい。般若野から、奈良まで見て来るといつて出られましたが」

「どうしたろう?」

少し間を措くと、兵庫は大きな息を吐いていう。

彼は、お通に対して、清廉なる恋を抱いていた。特に、清廉なる——と自覚しているのは、お通が、誰を愛しているか、お通の胸をよく知っているからである。

彼女の胸には、武蔵という者が住んでいる。しかも兵庫は、彼女がすぎだった。江戸の日ヶ窪から柳生までの間の長い旅路に——また、祖父の石舟斎が臨終のきわまで枕辺について世話してくれた間にも——兵庫はお通の性質を見とどけていた。

(かほどな女性に想われている男は、男の幸福の一つを持った者だ)  
と、武蔵を羨ましくさえ思っているのである。

だが、兵庫は、他人の幸福を密に奪おうなどという野心は抱けなかつた。彼の考えや行動のすべては、武士道の鉄則に拠つてなされていることなのである。恋をするにも、武士道を離れてはできなかつた。

まだ相見たことはないが、お通が選んだ男性というだけでも、兵庫は、武蔵の人物を、想像できる気がした。——そして何日かは、お通を無事に、彼の手に渡してやるのが、祖父の遺志でもあつたらうし、自分の武士——武士の仄かな恋の遣り場とも——独り考えていたところである。

ところで。

きよう彼の手に届いた飛脚状は、江戸表の沢庵から出た手紙で、日付は去年の十月末に出ているが、どうして遅れたのか、年を越えて、今日のたつた今、彼の手に届いたばかりなのだった。

それを見ると、

武蔵事、叔父御の但馬どの、矢来の北条どのなどの推挙により、愈、將軍家御師範座の一人に御登用と相極まり候て……云々。

の辞句が見える。

それのみか、武蔵も就任すれば、さっそく屋敷を持ち、身の周りまわの者もなくしてはかなわぬ——。お通一名だけでも、先へ早々と、江戸表へ下向あるよう、諸事また次便に——というようなことが、書きつらねてあるのだった。

(どんなに欣ぶか！)

と、兵庫が、わが事のように、その手紙を持って彼女の部屋へ訪れたところが、お通の姿が、何処にも見えなかつたという次第なのであつた。

## 二

そのお通は、ほどなく助九郎に伴われて、帰つて来た。

また、月ヶ瀬の方へ行つた侍たちは、丑之助と出会い、これも丑之助を連れて、やがて戻つて来た。

丑之助は、自分が罪でも犯したように、

「堪忍してくんなされ。済まねえことをしたで」

と、一人一人へ、謝つてばかりいる。

そして直ぐにまた、

「おつ母かあが案じるで、おら、荒木村へもう歸りてえ」

と、いい出したが、

「ばかを申せ。今から歸つたらまた途中で、月ヶ瀬の牢人どもに捕えられ、生命いのちはないぞ」

と、助九郎にも叱られ、侍たちにも、

「今夜は、御城内に泊めてやるから、明日歸れ、明日歸れ」

と、いわれて、小者と共に、外曲輪そとぐるわの薪倉まきぐらの方へ、追いやられた。

一室では、柳生兵庫が、江戸表からの便りをお通に示して、

「どう召さるか」

と、彼女の胸を問うている。

やがて四月の頃ともなれば、叔父の宗むねのり矩のりが、賜暇を得て、江戸表から歸国する。その

折を待つて叔父と共に江戸へ下るか——それとも、直ぐにも一人で立つ考えか。

そう訊ねるのだった。

沢庵の便りと聞くからにその墨の香さえ彼女にはなつかしい。

ましてや、その消息によれば、武蔵は近く幕府に仕え、一戸を江戸に構えることになる



うとある。

巡り会えぬ幾年よりも、そう便りの知れたからには、一日も千秋の思いである。どうして、四月まで待てよう。

彼女は、飛びたつような心地を、頬の色にも秘め切れず、

「……明日にも」

と、此所<sup>ここ</sup>を立ちたい希望を小声に洩らした。

兵庫も、また、

「さもあるう」

と、顔<sup>うなず</sup>くのだった。

自分も、永くはここに留まっていけない。年来、招かれている尾張の徳川義直公の聘<sup>へい</sup>に応じて、ともあれ一度、名古屋まで行くつもりである。

——だがそれも、帰国の叔父を待つて、祖父の本葬をした上でなければ去り難い。なるべく途中までも送つてやりたいが、そういう訳だから、其女<sup>そなた</sup>が先に立つとすれば、一人旅をせねばならぬが、それでも、よいか。

去年の十月末に出した江戸の便りが、年を越えて今頃やっと着くほど、道中の駅<sup>えき</sup>通も、

宿々の秩序も、表面は穏やかに見えながら、まだ完全でない社会である。女のひとり旅は、おぼつか 覚束ない気もするが、それも其女そなたに覚悟があることならば――

こう兵庫が、念を押すと、

「……はい」

お通は、彼の親身も及ばない好意を、しみじみ 沁々、胸に受け取って、

「旅には、馴れておりますし、世間の辛さにも、少しは覚えがございます。その辺のことは、どうぞお案じ下さいませぬよう」

さらば――と、その夜は彼女の身支度と、さや 小やかな別れの宴に送って翌る日の朝。

きょうも、うめびより 梅日和だった。

助九郎やら誰やら、なしみ 馴染の家臣たちは皆、彼女の旅立ちを見送るべく、中門の両側に立ち並んでいた。

三

「そうだ……」

と、つぶやいて、助九郎はお通のすがたを見ると共に、側の者へいった。

「せめて宇治あたりまで、牛の背で送つて進ぜよう。ちようど、ゆうべは丑之助も、御城内の薪倉まきぐらに泊つている筈——」

と、直ぐ呼びにやつた。

「それはよい所へ思いつかれた」

と人々もいつて、別れの辞ことばは交かわしたが、しばらくお通を引き止めて、中門のほとりに待たせておいた。

だが、やがて戻つて来た侍のことばには、

「丑之助は、見当りません。小者に訊くと、ゆうべのうち、あの闇夜を、月ヶ瀬を越えて荒木村へ帰つたということでございます」

「……えつ。ゆうべのうち帰つてしまつたと」

助九郎は、呆れた声を放つた。

きのうの事情を聞いた者は、誰もみな、丑之助の剛胆さに、驚かない者はなかつた。

「では、駒を曳け」

助九郎のいいつけに、小侍の一人はすぐ厩うまやへ飛んで行つた。

「いいえ、女の身で、お鞍などいただいては、勿体ない」

と、お通は辞退したが、兵庫も強いてすすめるので、

「では、おことばに甘えて」

と、小侍の曳いてきた一頭の月毛のうえに身を預けた。

駒は、お通を乗せて、中門から大手のゆるい坂を降り始めた。もちろん、宇治までは、一名の小侍が、口輪を把つて駒に従って行く。

お通は、駒の背から、人々の姿を振向いて、礼を返した。その顔に、崖から伸びている梅の横枝が触つた。二、三輪、匂つて散つた。

「……おさらば」

と、声には出さなかつたが、兵庫の眼はいつていた。坂の途中で散つた梅のおいが、その辺りまで微かにうごいて来た。兵庫はたまらない寂しさと——同時にその苦しい気持ちとは反対な彼女の幸とを祈っていた。

——見ているうちに、彼女のすがたは、城下の道へ小さくなって行つた。兵庫はいつまでも立っていたので、彼のみをそこに置いて、辺りの者はみな去ってしまった。

(武蔵とやらは羨ましい)

寂しい胸の裡で、われとも非ず<sup>つぶや</sup>眩<sup>つぶや</sup>いていた。——すると、彼のうしろに、いつの間にか、ゆうべ荒木村へ帰ったという丑之助が立っていた。

「——兵庫様」

「才……。童<sup>わっぼ</sup>か」

「はい」

「ゆうべ、帰ったのか」

「おつ母<sup>かあ</sup>が、案じますで」

「月ヶ瀬を通つて？」

「はあ。あそこを越えずにや村へ行かれねえで」

「恐くなかつたか」

「なんにも……」

「今朝は」

「けさも」

「牢人どもに見つからずに来たか」

「おかしいのだよ、兵庫様。山住<sup>やますまい</sup>居<sup>い</sup>していた牢人どもは、きのう悪戯<sup>わるさ</sup>をした女子が、後

で柳生様のお城にいるお女中と分つて、きつとこの後では、柳生衆が押しかけて来ると騒いで、夜のうちに、みんな山越えして何処へか行つてしまつたとさ」

「ははは、そうか。……して、童<sup>わっぱ</sup>。おまえは今朝、何しに来たな？」

「おらかい」

と、丑之助はやや羞恥<sup>はにか</sup>んで――

「きのう木村様が、おらつちの山の自然薯<sup>じねんじよ</sup>を賞<sup>ほ</sup>めてくれたで、けさ早く、おつ母にも手伝つてもらつて、山芋を掘つて持つて来たんさ」

と、いった。

#### 四

「そうか――」

兵庫は初めて、寂しさを顔から払つた。お通を失つた瞬間の空虚<sup>うつろ</sup>を、この純朴な山の少年に忘れ得たのである。

「ではきょうは、美味<sup>うま</sup>いところろ汁が喰えるといふものだな」

「兵庫様も好きなら、またいくらでも掘って来るが」

「はははは。そう気遣うには及ばん」

「きようは、お通様は」

「今し方、江戸へ立った」

「え。江戸へ。……じゃあ、きのう頼んでおいたこと、兵庫様にも木村様にも、話しておいてくれなかつたかなあ」

「何を頼んだのか」

「お城の仲ちゆうげん間に使ってもらいたいことを」

「仲間奉公をするには、まだ小さい。大きくなったら召使ってやる。どうして奉公したいのか」

「剣道が習いたいんだ」

「ふム……」

「教えて下さい。教えて下さい。おつ母が生きているうちに、上手になって見せなければ……」

「習いたいというが、そちはもう誰かに習まなんでおるだろう」

「木を相手にしたり、獣を撲つてみたり、独りで木刀を揮<sup>ふ</sup>つて見たりしているだけだ」

「それでいい」

「でも」

「そのうちに、尋ねて来い。わしのいる所へ」

「いる所つて何処」

「多分、名古屋に住むことになるだろう」

「名古屋。尾張の名古屋か。おつ母が生きているうちは、そんな遠くへは行けないおつ母、ということばを洩らすたびに、丑之助の眼には涙が見える。

兵庫も、何がなし、ひしと胸にこたえ、率然と、いった。

「来い」

「……?」

「道場へ通れ。兵法家として一人前になれる質<sup>たち</sup>か、なれない質か、見てつかわす」

「えっ?」

丑之助は、夢かと、疑うような顔をした。このお城にある道場の古い大屋根は、彼の幼いたましいが、生涯の憧<sup>あこがれ</sup>憬をもつて常に仰いでいる希望の殿堂なのだ。



——そこへ通れ、という。しかも柳生家の門下でも家臣でもない一族の人から。

丑之助は、欣うれしきに、ただ胸が膨ふくらんで口もきけなかった。兵庫はもう先に立っている。丑之助はちよこちよこ追いかけた。

「足を洗え」

「はい」

雨水の溜めてある池で、丑之助は足を洗った。爪についている土まで気をつけてこすり落した。——そして生れて初めて踏む、道場というものの床に立った。

床は鏡のようだった。自分の姿が映るかと思われる。——四面の逞たくましい板張、頑健な棟む木。彼は威圧をうけて竦すくんだ。

「木剣を持って」

兵庫の声までが、ここにはいると違うような気がした。正面脇の侍溜さむらいだまりに、木剣のかかっている壁が見える。そこへ行つて、丑之助は一筋の黒くろ櫛かじを選んだ。

兵庫も取る。

兵庫はそれを、垂直に下げて、床の真ん中へ出た。

「……よいか」

丑之助は、持った木剣を、腕と平行に上げて、

「はいっ」

と、いった。

## 五

兵庫は木剣を上げなかった。右の片手に提げたまま、少し体を斜めに開いたのみである。

「……………」

それに対し、丑之助は木剣を中段に向け、体じゆうを、針鼠のように膨ふくりました。そして、

（何を！）

ときかない顔に、眉をあげ、少年の血を漲みなぎらした。

——行くぞ！

と声ではない、瞳でくわつと、兵庫が気を示すと、丑之助はぎゅつと肩を緊しめて、

「うむっ」

と、唸うなった。

とたんに、兵庫の足が、だだだツと床を鳴らして、丑之助を追いつめ、片手の木剣は、丑之助の腰のあたりを、横よこ撲なぐりに払はった。

「まだツ」

丑之助は、呶うな鳴なった。

そして、彼の足からも、後ろの羽目板でも蹴くったような響ひびきを発はし、どんと、兵庫の肩を跳はり越こえた。

兵庫は、身を沈しめながら、左の手で、その足を軽かろく掬すくった。——丑之助は自己の迅はや業わざと自己の力で、竹とんぼみたいに旋まわったまま、兵庫の後ろへもんどりを打うった。

カラカラ——と、手から離れた木剣が、氷の上をすべるように、彼方へ飛とんでしまった。跳はね起きた丑之助は、なお屈ませず、木剣を追おいかけて、拾ひろい取とろうとした。

「もうよい！」

兵庫が、此方こなたからいうと、丑之助は振向むかいて、

「まだツ」

と、いった。

そして持ち直した木剣を振りかぶって、今度は鷲わしの子のような勢いで兵庫へ対むかつて来たが、兵庫が、ひたツと木剣の先を向けると、丑之助は、その姿勢のまま、途中で立ち竦すくんでしまった。

「……………」

くやし涙を眼に溜めているのである。兵庫はじつとその様子をながめ、心のうちで、

(これは、武魂がある)

と、見込んだ。

だが、わざと眼を怒らせて、

「童わっぱっ」

「はいっ」

「不埒ふちちな奴だ。この兵庫の肩を躍り越えたな」

「？ ……」

「土民の分際で、狎なれるにまかせて、不届きな仕方。——直れ。それへ坐れ」

丑之助は、坐った。

そして、何か理わけは分らないが、謝ろうと手をつかえかけると、その眼の前へ、兵庫は力

ラリと木剣を捨て、腰の刀を抜いて丑之助の顔へ、突き出していた。

「手討ちにする。噪ぐと、これを浴びせるぞ」

「あつ。おらを」

「首を伸べろ」

「……?」

「兵法者が、第一に重んじるのは礼儀作法である。土百姓の童わっばとはいえ、今の仕方は堪忍ならぬ」

「……じゃあ、おらを、無礼討ちにし召さるといふのけい」

「そうだ」

丑之助は、兵庫の顔を、しばらく見つめていたが、観念ていの体をあらわして、

「……おつ母。おらあお城の土になるそうな。後で嘆かつしやることだろうが、不孝者を持ったと思つて、堪忍してくんなされ」

と、兵庫へつく手を、荒木村の方へついて、さて、静かに、斬られる首をさし伸べた。

## 六

兵庫はニコと笑んだ。そしてすぐ刀を鞘におさめ、丑之助の背を叩いて、

「よし。よし」

といつて宥めた。

「今のはわしの戯れだ。なんでそちのような童を手討ちになどするものか」

「え。今のは、冗戯なのけ」

「もう、安心するがいい」

「礼儀を重んじなければいけないといったくせに、その兵法者が、今みたいな冗戯をしてもいいのけい」

「怒るな。おまえが、剣で立つほどな人間になれるかなれないか、試すためにいたしたのだから」

「だって、おら、ほんとだと思つた」

丑之助は初めてほつと息をついていった。同時に、腹が立つたらしいのである。無理もないと、兵庫も思い、宥め顔にまた訊ねた。

「そちは先刻、誰にも剣術は習わぬといったが、嘘であろう。——最初、わしがわざと羽

目板の際までおまえを追いつめたが、たいがいの大人でも、あのまま、板壁を背負って、参ったという所なのに、そちはバツとわしの肩を越えて跳ぼうとした。——あれは三年や四年木剣を持った者でも、できる技わざではない」

「でも……おいらは誰にも習ったことはないもの」

「嘘だ」

兵庫は信じない。

「いくら隠しても、誰か、そちには良い師匠があつたに違いない。なぜ、師の名を申せぬのか」

問い詰められて、丑之助はだまり込んでしまった。

「よく考えてみい。誰かに、手ほどきをしてもらった者があるだろう」

——すると、率然と、丑之助は顔を上げた。

「アア。あるある。そういわれれば、おらにも、教えてくれたものがあつたつけ」

「誰だ」

「人間じゃないんだ」

「人でなければ、天狗てんぐか」

「麻あさの実みだよ」

「何」

「麻の実さ。あの鳥の餌にもやるだろ。あの麻の胚たね子さ」

「ふしぎなことを申す奴。麻の実がどうしてそちの師か」

「おらの村にやいねえが、少し奥へ行くと、伊賀衆だの、甲賀衆だのつていう、忍にんじや者のやしきが幾らもあるで——その伊賀衆たちが、修行するのを見て、おらも真似して、修行したんだ」

「ふうむ？ ……麻の胚たね子までか」

「あ、春先、麻の胚ま子を蒔まくんだよ。すると、土から青い芽がそろって出て来るがな」

「それをどうするのか」

「跳ぶのさ——毎日毎日、麻の芽を跳ぶのが修行だよ。あたたかくなって、伸び出すと、麻ほど伸びの早いものはないだろ。それを朝に跳び、晩に跳びしてると——麻も一尺、二尺、三尺、四尺とぐんぐん伸びて行くから、怠けていたら、人間の勉強の方が負けて、しまいには跳び越えられないほど高くなってしまふ……」

「ほ！ 貴様は、それをやったのか」



「アア。おらあ、春から秋まで、去年もやったし、おととしも……」

「道理で」

兵庫が、膝を打って感じ入っていた時である。道場の外から木村助九郎が、  
 「兵庫様。また江戸表から、このような書状がとどきました……」  
 と、いいながら、手にそれを持つてはいつて来た。

## 七

書面は、やはり沢庵からで、

前便の件

にわかにわかもようがえもようがえ  
 遽に模様更あいなと相成なり

と、書き出してある通り、先に出した手紙の追いかかけの第二便だった。

「助九郎」

「はっ」

「まだお通は、いくらも道は扱はかどつておるまいな」

読み終ると、兵庫は何か、気の急せく面おももちで、急にいった。

「さ……。駒に乗つても、徒士かちども供の付き添い、まだ二里とも参つておりますまい」

「では、すぐ追おい着きこう。ちよつと行つて参る」

「あ。……何ぞにわかな御用でも」

「されば、この書面に依れば、將軍家でお召抱えの件は、何か、武蔵どのの身状に御不審とやらで取止めになつたとある」

「え。お取止め」

「——とも知らずに、江戸の空へ、あのように欣んで立つて行つたお通へ、聞かしようもないが、聞かせずにも措おかれまい」

「では、手前が追いかけて参りましょう。その御書面を拝借して」

「いや、わしが行く、……丑之助、急に用事ができたから、また参れよ」

「はい」

「時が来るまで、志を磨いておれ。よく母親に孝養をつくして」

兵庫の身はもう外に在る。厩うまやから一頭曳ひき出して、それへ乗ると、宇治のほうへまっしぐらに駆けていた。

だが――

彼はその途中で、ふと考え直した。

武蔵が、將軍家師範に成る成らないなどということは、彼女の恋にとっては何らの問題でもない。

彼女はただ、ひたむきに、武蔵と巡り会いたいのである――

ああして、四月も待たず、ひとりで立つたのを見ても。

書面を示して、

(一度、戻っては)

とすすめた所で、空しく戻るはずもない。ただ徒らに、彼女の心を、折角な旅を、暗

澹と、沈ませてしまふに過ぎまい。

「……待てよ」

兵庫は、駒を止めた。柳生城から小一里も来てからであつた。もう一里も駈ければ、或は、追いつきもしよう。――だが彼は、その無益を悟つた。

(武蔵と会つて、二人が会つた欣びのうちに語りあえば、こんなことは、些細な問題)

彼は、のどかに駒を柳生のほうへ引つ返した。

いや、路傍に芽ぐみ出した春の色はうららかだし、彼の姿ものどかには見えたが——彼のみが知る胸にはまた、纏綿てんめんたる後ろ髪を引くものがないではなかった。

(もう一目でも)

その未練があるからこそ、彼自身、駒をとばしてお通のあとを追ったのではなかったか。そう問う者があれば、

(否——)

と兵庫は潔く顔を横にふることはできなかつたに違いない。

さあれ兵庫の胸は、彼女の多幸を祈る気もちでいつぱいなのだ。武士にも未練はあり、また、愚痴がある。——だがそれは、武士道的に諦観ていかんしきってしまふまでのあいだの瞬間にすぎない。煩惱の境を、一步転じれば身は春風に軽く、柳の緑は眸ひとみを醒さまし、またべつな天地がある。——恋のみが青春を燃やすものか！——時代は今、偉おおきな潮うしおの手を挙げて、世の若者輩わかものばらを呼んでいるのだ。路傍の花に眼をくれるな！ 日を惜しめ、そしてこの潮に乗りおくれるな！ と。

くさほこり  
草 埃

お通が、柳生を去つてから、はや二十日の余も過ぎた。

去る者は、日々にうとく、萌<sup>も</sup>える春は、日々に濃くなる。

「だいぶ、人出だな」

「されば、今日あたりは、奈良にも稀<sup>ひ</sup>れな日和<sup>より</sup>ですから」

「遊山半分か」

「ま。左様なもので」

柳生兵庫と、木村助九郎とであつた。

兵庫は編笠をかぶり、助九郎は法師頭巾に似た物を顔に巻いている。元より微<sup>しの</sup>行<sup>び</sup>である。遊山半分か——といったのは、自分たちのことをさしたのか、道行く人々のことをいったのか、どつちにも聞えるが、二人の顔にはかるい苦笑がながれ去つた。

お供は荒木村の丑<sup>うし</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>。——近ごろ丑之助は、兵庫に愛されて、前よりも屢 《しばしば》 城へ見えるが、きようは二人の供について、背に弁当の包みを負い、兵庫の換え草

履一そく腰に挟んで、なりの小さい草履取——という恰好して後から歩いてゆく。

この主従も、往來の人々も、いい合せたように皆、やがて町中のひろい野原に流れこんだ。野のそばに興福寺の伽藍がらんがあり森が囲み、塔が聳そびえてみえる。

また、野から彼方の高たか 畠はたけには、坊舎や神官の住居がみえ、奈良の町屋は、その先の低地に昼間も霞かすんでいた。

「もう済んだのかな？」

「いや、食済みでございましょう」

「なるほど、法師輩ぼらも、弁当をつこうておる。——法師も飯を喰うものとみえる」

兵庫がいったので、助九郎はおかしくなつて笑い出した。

人はおよそ四、五百名もこの野に集まっていたが、野が広いので、まばらにしか見えな  
い。

ちようど、春日野かすがのの鹿のように、ある者は立ち、ある者は坐り、ある者はぶらぶら歩い  
ている。

だが、ここは春日野ではなく、旧平安三条の内侍ないしヶ原はらであつた。その内侍ヶ原には、き  
ようは何か興行があるらしい。

興行といつても、都会をのぞいたほかは、小屋掛などすることは稀れにもない。めずらしい幻術師が来ても、傀儡師くくつが来ても、賭弓かけゆみや賭剣術が催されても、野天のてんであった。

きよの催しは、そういうただの人寄せではなく、もつと真面目なものだった。宝蔵院の槍法師たちが集まって、年に一度、公開してみせる試合日なのだ。この試合に依つて、平常の宝蔵院の床ゆかに坐る席順がきめられるというので、大勢の法師や侍は、衆人の前でもあるし、ずいぶん烈しい戦鬪をするということだった。

けれど今は、からんとして、野づらの空気は、至つて長閑のどかであった。

ただ、野の一方に三、四カ所張つてある幕のあたりで、法衣短みじかに括からげあげた法師たちが柏かしわの葉でくるんだ弁当の飯を喰べたり、湯をのんだりしているだけである。悠長な——という言葉がそのまま当てはまる景色だった。

「助九郎」

「は」

「むしろも、何処かへ坐つて、弁当でも解こうか。……だいぶ間まがありそうだ」  
「お待ちください」

助九郎は、手頃な場所を見まわしていた。

——すると、丑之助が、

「兵庫様、これへお坐りなさいまし」

と、何処からか、早速に一枚のむしろを持って来て、程よい所へ敷いた。

(心利こころききたる奴)

何かにつけ、兵庫は彼の機敏なことに感心したが——また、その氣の利きくことが、将来の大成という上には、すこし懸念される点でもあった。

## 二

主従三人は、むしろの上に坐つて、竹の皮をひらいた。

玄米くろこめのにぎり飯。

梅漬と味噌うまが添えてある。

「美味うまい」

兵庫は、青空を喰うように、野天の弁当を楽しんだ。

「丑之助」



と、助九郎がいう。

「へい」

「兵庫様に、白湯さゆを一椀上げたいな」

「じゃ、貰つて来て上げようか。あそこの法師衆がいる溜りへ行つて」

「ム。もらつて来い……だが、宝蔵院衆へ、柳生家の者が来ているということは、黙つておれよ」

兵庫も、側から注意した。

「うるさいからなあ。挨拶にでもやつて来られると」

「はい」

丑之助は、むしろの端から起ちかけた。——すると。

先刻から、彼方で、

「オヤ？」

と、野の芝地を見まわして、

「むしろ蕙むしろがない。蕙むしろがない」

と、探している二人の旅の者があつた。兵庫たちのいる所から、十間ほど離れた場所で、

そこらには牢人者だの、女だの、町の者などが、まばらにいたが、旅の者が失くした蕙は、誰も敷いていなかった。

「伊織。もういい」

探しあぐねて、一人がいった。

がちりと、丸こい顔と固い筋肉をして、四尺二寸の櫛かしじょうの杖を提げている男だった。

伊織の連れとあれば、これはいうまでもなく、夢想むそうごんのすけ権之助。

「もうお止し。探さないでもいい」

重ねて、権之助はいったが、伊織はなお諦めきれぬ顔して、

「何奴どいつだろ。誰かがきつと、持つて行ったにちがいないよ」

「まあいいよ。たかが蕙むしろ一枚」

「蕙一枚でも、だまって持つて行った心根が憎いもの」

「……………」

権之助はもう忘れて、草の上に坐りこみ、矢立を出して、昼前の旅の小遣帳こづかいちようをつけていた。

彼が、旅の間にも、こういうことを克明に誌つけるようになったのも、伊織と旅をし、伊

織に感心してからのことである。伊織は、時には、子どもらしくな過ぎるほど、生活には用意がなかった。物を無駄にせず、几帳面な質で、自然、一碗の飯にも、毎日の天候にも、感謝を知っていた。

——だからまた、人にも、違ったことは、許さない潔癖がある。この潔癖は、武蔵の手を離れて、人中へ出るほど育てられて来た。——で、一枚の蕙といえど、ひとの迷惑を思わず、無断で持つて行った人間の心根を、伊織は憎んでやまないのであった。

「ア。——あいつらだな」

伊織は、遂に見つけた。

権之助が旅に持ち歩いている寝蕙を、平気で敷いて、弁当を喰べている三人の主従を。  
「もし。——おいつ」

伊織は、そこへ駈けて行つた。だが、十歩ほど手前で先ず立ち止まって、抗議の文句をまず考えていると、折ふし、湯を貰いに起つた丑之助が、出合いがしらに、胸を寄せて、  
「なんだい」

と、彼に答えた。

## 三

伊織は、明けて十四。丑之助は取つて十三だった。しかし丑之助の方が、ずっと年かさに見えた。

「何だいとは、何だい」

伊織は丑之助の不法法を咎めた。丑之助は、土地の者らしくないこの小さい旅人を鼻先で迎えて、

「そういったのが悪いか。汝てめえから呼んだから、何だと訊いたんだ」

「ひとの物を、黙つて持つて行けば、盗ぬすびと人だぞ」

「盗人。——こいつめ、おらを盗人だといったな」

「そうさ。おらの連れの人が、あそこへ置いた蕨むしろを黙つて持つて行ったじやないか」

「あの蕨か。あの蕨は、そこに落ちていたから持つて来たんだ。なんだ蕨の一枚ぐらい——」

「一枚の蕨でも、旅人の身にとれば、雨をしのいだり、夜の衾ふすまになる大事な物だ。返せ」  
「返してもいいが、いい方が癩しゃくさわに触るから返さねえ。盗人といった言葉を謝あやまれば返してく

れてやる」

「自分の物を取返すのに、謝るばかりがあるものか。返さなければ腕にかけても取るぞ」

「取ってみろ。荒木村の丑之助だぞ。汝てめえツちに、負けて堪たまるか」

「生意気いうな——」

と、伊織も負けていない。小さい肩を聳そびやかしていった。

「こう見えても、わしだつて兵法者の弟子だぞ」

「よし、後で彼方むこうへ来い。周りに人まわがいますと思つて大口を叩いても、人中を離れたら立たちむ

対かえまい」

「何を。その口を忘れるな」

「きつと来るか」

「何処へさ」

「興福寺の塔の下まで来い。助太刀など連れずに来い」

「いいとも」

「おれが手を挙げたら、来るんだぞ。いいか覚えてろ」

口喧嘩だけで、一時は別れた。丑之助はそのまま、湯を貰いに行ったのである。

何処からか彼が土瓶どびんの湯を提げて戻つて来た頃、野の真ん中には、草くさほこり埃いぼりが煙つていた。法師たちの試合が始まったのである。群衆は、大きな輪を作つて、それを見物に詰め寄つた。

輪のうしろを、土瓶を提げた丑之助が通つた。権之助と並んで見ていた伊織は、振向いて、丑之助のほうを見た。丑之助は、眼で挑いどんだ。

(後で来い！)

伊織も眼で答えた。

(行くとも。覚えてろ)

内侍ないしヶ原はらののどかな春も、試合がはじまると一変して、時々あがる黄色ほこりい埃ほこりに、群衆は、武者押しのような声を揚げた。

勝つか負けるか。

勝つ位置へ自己を躍り上げる。

試合はそれだ。

いや時代がそれなのだ。

少年の胸にもそれが反映している。時代の中に育てられた彼らである。たとえ生れ出て

も、生れながらの虚弱では一人前に成って行けないように、十三、十四の頃からして既に、  
 うなす  
 領けない屈伏はできない気骨に養われている。一枚の莖が問題なのではない。

だが伊織にも、丑之助にも、大人の連れがあるので、しばらくは、その人達の腰について、野試合のさまを見物していた。

#### 四

モチ竿のような長い槍を立てて、原の真ん中に先刻から立っている法師がある。

その法師にむかつて、幾人も幾人も、槍を合せに出たが、みんな勿ね飛ばされたり、叩  
 き伏せられたり、ほとんど手に合う者がなかった。

「出合いであい給たまえ」

法師は、後の者を、促うながしているのだ。

が、容易に出ない。

この際は、出ないことを賢明としているように、東の幕とばりでも、西の溜たまりでも、固唾かたすをのんで、ただ法師に物をいわせていた。

「——つづく者がなくば、野僧は退がり申すぞ。きょうの野試合において十輪院の南光坊が第一のこと御異存ないかな」

いい触らすように、西に向い、東へ向つて、法師は挑んでいる。

十輪院の南光坊は、宝蔵院の流れを先の初代胤栄から直かにうけて、いつか一派を興し、十輪院の槍と称え、今の二代胤舜とは、反目している者だった。

怖れてか、争いを避けてか、胤舜は、きょうは姿を見せていない。病気ということが理由になつていた。南光坊は存分に、宝蔵院の現門下を蹂躪し尽したかのように、やがて立てていた槍を横に直した。

「では、わしは退がろう。——もはや敵なしじゃ」  
すると、

「待った」

ぱつと、一僧が、槍を斜に持ったまま、躍り出した。

「胤舜の門下、陀雲」

「お」

「お相手に」



「いざれ！」

二人の踵かかとからぱつと土が煙る。跳び別れた途端、槍と槍は、もう生物のように睨ねめ合あっている。

(終りか)

と、失望していた見物は、歓呼をあげて狂った。

だが、群衆はすぐ、窒息ちっせきしたように黙った。カーンと強い音響を聞いた時、それは槍が槍の柄を打ったのかと思つたら、陀雲という法師の頭が、南光坊の槍で撲り飛ばされたのである。

風に打たれた案山子かかしのように陀雲の体は横に仆たおれていた。わらわらと、溜たまりから三、四名の法師が駈け出たので、さては喧嘩かと思つてみると、陀雲の体をひつ担いで退がつて行ったのである。

——後はまた、誇りに誇つた南光坊が、いよいよ肩を昂あげて立っている姿しかなかった。「健気けなげもの者が、まだ少しは、いるらしいな。——ござるならはやくござれよ。三人四人、束つかとなって蒐かかつても苦しゆうないが」

その時である。

溜の幕の陰に、笈をおろした山伏がある。身軽になって、宝蔵院衆の前に出て、「試合は、院中のお弟子方に限りましようか」

と訊ねた。

宝蔵院の者は、口を揃えて、然らず——と答えた。

東大寺前と、猿沢の池の畔ほとりに、高札を立ててある通り、道に志す武芸の道友とならば、何人なんびとといえど、手合せかまに関いはないことになっているが、往古いにしえの荒法師以上、槍修行の荒法師ぞろいと聞えている宝蔵院の野天行のてんぎように当って、

(われこそ)

などと自分から人前に恥をさらし、揚句に片輪者にされてすじすじ 悄悄すじすじ引つ込むような愚かなまねを——敢て自分からすすんで求めるような馬鹿者はいないので、という説明であつた。

山伏は、列座の法師輩ばらに、一応の辞儀をして、

「然らば、やつがれが一つその馬鹿者となつてみとうござるが、木太刀を御拝借願われましようか」

と、いった。

## 五

人の輪に紛れて、彼方の野試合を眺めながら、兵庫は、

「助九郎。おもしろくなつたな」と、顧みた。

「山伏が出て来たようで」

「されば。もう勝敗は見えたも同じだの」

「南光坊が優つておりましようか」

「いや、多分、南光坊は試合うまいよ。試合えば、彼も至らぬ奴じや」

「はて？ ……左様でございましようか」

助九郎には、解せない面持である。

南光坊の人物は、よく知っている兵庫の言ではあるが、なぜ、今出てきた山伏と試合え  
ば、至らぬ人間だろうか。

不審に思っていたが、ほどなく助九郎にも意味が分つた。

その時、彼方では――

山伏の男が、借り受けた木剣を手にひつ提げ、南光坊の前へ進んで行って、

(いざ)

と、挑んでいた。その体を見て、助九郎にも、初めて分つたのである。

大峰の者か、聖護院派か、見知らぬ山伏だが、年ごろ四十前後の男で、鉄のような五体は、修験の行に鍛えたというよりは、戦場で作ったものである。生死の達観のうえに出来上っている肉体なのである。

「お願いいたしましょうか」

山伏の言語は穏やかである。眼も柔和であった。だが、この男は生死の境から外の物だつた。

「他者か」

と、南光坊は、新手の敵を見直して、そういつた。

「は。飛入りではござるが」

と、会釈すると

「待たつしやれ」

南光坊は、槍を立ててしまった。これはいけないと悟つたらしいのだ。技では勝てるか

も知れないが、絶対に、勝てないものを、この新手に感じたのである。——それに当今の山伏には、氏素姓をかくして身を韜晦とうかいしている人間も多いし、避けたほうが賢明と、考えたのであろう。

「他よそも者とは立合わぬ」

と、南光坊は、首を振った。

「いや、今あちらで、掟おきてを伺ったところによれば」

と、山伏は、自分の出場が不当でない点を、穏やかにいって、なおも強しいたが、南光坊は、

「人は人、拙僧は拙僧。——拙僧が槍は、いたずらに、諸人に勝たんためではおざらぬ。槍の中に法ほっしん身を鍛錬しているこれは一つの仏行でござる。余人との試合は、好むところでおざらん」

「……ははあ?」

山伏は苦笑した。

何かまだ物いいたげであったが、人中でいうことを好まないふうで、然らばせひもないことと、溜たまりば場の法師に木剣を返し、素直に何処へか立ち去ってしまった。

それを機しおに、南光坊も退場した。彼の逃げ口上を、溜しよの法師たちも見物も、卑怯だとさ  
さやいたが、南光坊は気にもかけず、二、三の法弟をつれて、凱旋の勇将のように、帰っ  
てしまった。

「どうだ、助九郎」

「御明察の通りでしたな」

「その筈だ」

と、兵庫はいった。

「あの山伏は、おそらく九度山くどやまのなにかし一類だろう。兜巾とぎんや白衣びやくえをよろい鎧かぶと甲かぶとに着かえれば、何  
の某なにかしと、相当な名のある古強者ふるつわものにちがいない」

群衆は思い思いに、散らかりかけていた。——試合が終りを告げたからであろう。——  
助九郎は周まわりを見まわして、

「おや、何処へ行ったか？」

と、つぶやいた。

「何だ、助九郎」

「丑之助の姿が見当りませんので——」

童心地描ちびようず図

## 一

約束だ。ふたりだけで出合う約束だ。

連れの大人たちが皆、野試合に気をとられている隙に、丑之助から、

(来い！)

と、眼合図をすると、一方の伊織は、連れの権之助にも黙って、人ごみから抜け出した。同時に、丑之助もまた、兵庫や助九郎に悟られぬように、そこから駈け出して、興福寺の塔の下まで行った。

「やい」

「なんだ」

高い五重の塔の下に、小さい二人の兵法者が、睨み合った。

「生命いのちがなくなっても、後で恨むな」

伊織がいうと、丑之助は、

「生なまアいうな」

と棒を拾った。

刀を持たないからである。

伊織は、持っていた。その刀を抜くや否、伊織は、

「こいつめ！」

斬ってかかった。

丑之助は跳び退ひるいた。伊織は彼が怯ひるんだと思つて、ぶつかると同時にまた、追いかけて斬りつけた。

丑之助はその途端に、伊織を麻の胚子たねと思つて跳び上がった。そして足は、伊織の顔を、宙で蹴とばしていた。

「わっ」

伊織は、片手で耳を抑えた。転んだ勢いはすぐ起きた勢いだつた。

立ち直ると、刀を振りかぶった。丑之助も棒を振りかぶっていた。伊織は武蔵の教えも、平常、権之助から学んだことも忘れてしまった。こっちから打って行かなければ、彼から



打たれると思つた。

眼。眼——とあれほど武蔵からやかましくいわれたことなどはもう念頭にもなく、その眼をつぶつて、盲目的に、刀と共に相手へぶつかつて行つたのである。待ち構えていた丑之助は、身を避けて、ふたたび強かに、伊織を棒で、撲り伏せた。

「ウウム……」

伊織は、もう起てなかつた。刀を持ったまま地に俯つ伏してしまつた。

「勝つたぞ。おらが」

丑之助は、誇つていったが、伊織が動かなくなつたので、急に、恐いものに襲われたように、山門の方へ駈け出した。

「——こらっ！」

四方の木立が吼えたように、誰かが彼の背へ向つてそう呶鳴つた。また——声と一緒に四尺ばかりの杖が一本、風を切つてびゅツと泳いで行き、丑之助の腰の辺に杖の突端がコツンとあたつた。

「痛っ」

丑之助は、横に転んだ。

すぐ杖の後から駈けて来た人間がある。いうまでもなく、伊織を探しに来た夢想権之助である。

「待て」

声が近づくと、丑之助は、痛む腰を忘れて、脱兎だつとみたいに跳ね起きた。そして、十歩も駈けたかと思うと、その時、山門からはいつて来たべつな者に、正面からぶつかった。

「丑之助ではないか」

「……あつ？」

「どうした」

木村助九郎であつた。丑之助はあわてて、助九郎の後ろへかくれた。——で当然、彼を追つて来た権之助と助九郎とは、何の予告もなく、いきなり眼と眼をまず激突させて、とたんに対峙たいしの姿勢になつてしまった。

二

眼と。そして、眼と。

そう二人のあいだに、険しい一瞬が発したせつなは、どんな争闘を捲き起すかと思われた。

助九郎の手は刀へ。権之助の手は杖へ。双方とも、ぴたと。しかし――

しかしそれが事なく、次のような会話へ移って、この場の真相を知りあうことができたというのは、相手の人間を観てとる鋭い直観力を、幸いにも二人が持ち合せていたためだったといえよう。

「旅の者。――仔細は知らぬが、何でこのような童を、大人げもなく打ちのめそうといたすか」

「異なお訊ね。その前にあれなる――塔の下に仆れている連れの者を御覧じ。その童のために、強かに打たれ、気も失うて苦しんでおる」

「あの少年は、そちの連れの者か」

「されば――」

と、権之助はいってすぐ、言葉を抛り返すように、

「その小童は、おてまえの召使でござるか」

「召使ではないが、拙者の主人が目をかけておる丑之助という者。……これ丑之助。何で

あの旅の人の連れ衆を打ちすえたか」

背中へ廻つてさつきから黙つて佇たつている彼を顧みて、

「正直に申せ」

と、助九郎が詰問すると、その丑之助が口をあかぬうちに、塔の下に仆れていた伊織が首をもたげて、彼方から、

「試合だよつ。試合だよ！」

と、さげんだ。

伊織は痛そうな体を、その言葉とともに起して歩いて来ながら、

「試合して、おらが負けたんだから、その子が悪いんじゃない、おらが弱いんだ」と、いった。

助九郎は、伊織が負けたことを怯ひるまず負けたといった姿へ、感嘆でも浴びせたいような眼をみはつたが、

「おお。では約束のうえで尋常に打ち合ったのか」

微笑の眼をほそめ、一方の丑之助を顧みると、丑之助も今となつてはやや間まがわるそうに、

「おいらが、あの衆のむしろを、あの衆のものと知らねえで、黙って持って来たから悪かっただ」

と、事情を話した。

打たれた伊織ももう元気に回かえっている。訊いてみれば子どもらしい経緯いきざつだ。ほほ笑ましくさえなるものを、もし最前、権之助がここへ追ひ、助九郎が駈けつけて来た出合あたらいがしらに、大人と大人とが、一歩退くことなく、武器で物をいっただとしたら、可惜無用の血が、今頃はそこらを染めていたに違いなかつた。

「いや、失礼いたしました」

「お互いです。手前こそご無礼を」

「では、主人も彼処あちらで待つておるゆえ、ここで御免——」

「おさらば」

笑い合つて、山門を出た。助九郎は丑之助を伴い、権之助は伊織を連れて。

興福寺の門前から、右と左に別れかけたが、権之助はふと戻つて、

「あ。ちよつとお訊ねします。柳生ノ庄へは、どう参りましようか。この道を真つ直でよいでしようか」

助九郎は、振向いて、

「柳生の何処へ行かれるか」

「柳生城をおたずねつかまつ仕ります」

「えっ、お城へ？」

と、止めた足をまた、助九郎は、権之助のほうへ戻して来た。

### 三

こうしたことから、計らずもお互いの身分と、身の上が知れた。

べつな所で、助九郎、丑之助のふたりを待ちつつたたく佇んでいた柳生兵庫も、やがてここへ

来合せ、事情を聞くに及んで、

「さてさて、惜しいことを！」

と、嘆息した。

そして遙々はるばる——江戸からこの大和路まで来た権之助と伊織を、いたわ労りの眼でながめて、

「せめて、もう二十日も早く来たら」

と、何度となくいう。

助九郎も、頻りと、

「惜しい、惜しい」

を繰返して、今は何処やら知れぬ人の行方ゆくえを雲にながめるのだった。

もういうまでもないが、夢想権之助が伊織を連れてこれへ来たのは、柳生城にいと聞いたお通を訪ねて来たのである。

そのお通には自分の用向きではなく——先頃、北条安房守の宅で計らずも、伊織の姉なるものが話題にのぼり、それこそ実にお通という女性であると——同席の沢庵に教えられたから、思い立って来たことであつた。

ところが。

かけちがつて、そのお通は、およそ二十日ばかり前、武蔵を訪ねて、江戸へ立った。——悪い時にはぜひもないもので、今、権之助に江戸の消息を聞けば、武蔵その者もまた、権之助の立つ前に、すでに江戸を去つてしまい、知己身邊の者にすらその行方は知れていないという。

「迷うていような」

ふと、兵庫はつぶやく。

そして何日か、一度彼女を宇治の途中まで追って行きながら、呼び戻さずに帰ったことを——軽く悔いたりしながら、

「あわれ、どこまで不幸な」

と、わが淡い未練を人の恋に寄せて、何がなし物想わせられた。

——が。あわれはここにも一人いた。それらの話を、側で聞きながら、しよんぼり側に立っていた伊織。

（生れたつきり知らない姉）

と、観念していたうちは会いたくも淋しくもなかつたが、

（世にある人）

と、教えられ、

（大和の柳生にいる）

と聞いてからは、漂う海ただよに一つの陸くがを見つけたように、生れてから一遍に溢あふれわいた思慕と肉親への肌恋しさが——これは抑えるべくもなく、ずいぶん連れの権之助をも困らしたほど、きょうまでは楽しみにして、此処まで来たに違いないのである。



「……………」

今にも泣きたそうな顔しているが、伊織は泣かない。

泣くには何処か人のいない所へ行つて大声で泣きたいのだ。——権之助が兵庫から訊ねられて、いつまでも江戸の話をしているの——伊織は辺りの草の花など眼に拾いながら、大人の側からだんだん離れて行つた。

「何処へ行くだい」

丑之助も、後から来た。なぐさめ顔に、伊織の肩へ手を廻して、

「泣いてんのけ？」

伊織はつよく首を振つた。眼から涙が飛び散つた。

「泣くもんか。そら、泣いてなんかいないよ」

「オヤ。山芋やまいもの蔓つるがあるぜ。山芋掘る術すべ知つてるか」

「知つてらい。おらの故郷にだつて、芋はあら」

「掘り競くらしようか」

丑之助にいわれて、伊織も蔓つるを見つけて、蔓の根にしゃがみこんだ。

## 四

叔父宗矩むねのりの近状やら、武蔵の事ども。

それから、江戸の街々の変りようだとか、小野治郎右衛門じろうえもんが失蹤しつそうのうわさだとか。訊けば、限りもなく、語れば語り尽きない。

この大和の山里では、たまたま江戸から来た者とあれば、その者の一語一語が、すべて耳新しい社会の知識であつた。

——が、思わずも時を過ぎしたので、兵庫も助九郎も、陽脚ひあしに気がつき、

「ともあれ、城内へ来て、当分のうち逗とまり留りゆうなすつては」

と勧めたが、権之助は深く謝すのみで、

「お通さまがお在いでにならぬ上は——」

と、このまま、先の旅へ向むかいたい希望を告げる。

先の旅といつても、元より修行一筋の身ではあるが、実は、木曾の故郷で亡くした母の遺髪いはいと位牌いはいを今もなお肌身に持つていて、何かにつけ気がかり。この大和路やまとじまで来たのを幸いに、ついでといつては勿体ないが、紀州の高野山こうやさんか、河内の女人高野という金剛寺

か、いずれかへ行つて、位牌を預け、かたみ髪を仏塔へ納めなどして置きたいという。

「それもまた、名残惜しいことではあるが——」

強いて止めもならぬ気がして、さらばと別れを告げかけた時、ふと気がつく、側にいたはずの丑之助がいない。

「おや——」

と権之助も見直して、これも伊織を探している。

「才才、あんな所における。二人とも、何を掘っているのか、地へしやがみ込んで」

助九郎が指さす所を見遣ると——なるほど伊織と丑之助が、すこし間をへだてて、わき目もふらずに、土を掘っている。

大人たちは微笑んで、そつとその背後へ立つていた。

ふたりは気がつかない。先刻から蔓の根を掘り下げ、折れ易い自然薯を折らないように、芋のまわりを大事に庇つて、片腕が地へはいり込んでしまうほど、もう深い穴を作り合っていた。

「……あ」

そのうちに、背後でする人の気配に、丑之助は振向いた。伊織も笑い顔を向けた。

自分達の競争を大人達が見ていると意識すると、二人はよけい熱を出したが、すぐ丑之助が、

「抜けた」

と、長い芋を、地上へ抛り出した。

伊織は、肩先まで入れて、黙々とまだ土の穴を搔いている。果てしのない様子に、権之助が、

「まだか。行つてしまふぞ」

と、いうと、伊織は老人のように腰を叩いて立ちながら、

「だめだめ、この芋は。晩までかかるよ」

と、未練を土の中に残して着物の泥をはたいた。

丑之助が、覗いて見て、

「なんだ、こんなに掘れてるくせに。臆病な芋掘りだなあ。おらが抜いてやろうか」

手を出しかけると、

「いけないいけない。折れちまうよ」

と、伊織は拒んで、折角八分ぐらいまで掘り下げた穴へ、まわりの土を足で寄せ落し、

元のように埋けてしまった。

「あばよ！」

丑之助は、掘り採った自分の芋を、自慢して肩へ担いだ。だが、その芋の先は完全でなかった。折れ口が白い乳を出していた。

「丑之助。負けたな。——打ち合ではそちが勝ったそうだが、芋掘りではそちの負けだぞ」  
兵庫は、彼の頭を、ぐいと抑した。伸び過ぎる麦の育ちを踏んでやるように——ぐいと首根を抑していった。

だいにち  
大日

一

吉野の桜も褪せたらう。道の辺の薊も咲きほうけて、歩くには少し汗ばむほどだが、牛の糞の乾くにおいにも、寧楽のむかしや、流転の址が偲ばれたりして、歩き飽かないこの辺りの道だった。

「おじさん。おじさん……」

伊織はうしろを振向いて、権之助の袖を引きながら、頻りと気にかけて、

「また、尾ついて来たよ。ゆうべの山伏が」

と、ささやいた。

権之助は、わざと、彼の注意に従わず、真っ直に向いたまま、

「見るな、見るな。——知らん顔をしておれ」

「だって、変だよ」

「なぜ」

「きのう柳生兵庫様達と、興福寺の前で別れた時から、間もなく、後になったり先になつたり……」

「いいじゃないか。人間みな、思い思いに歩いているのだから」

「そんなら、宿屋なんか、べつな家へ泊ればいいのに、宿屋まで一つ所へ泊って」

「いくら尾行つられても、盗まれるほどな金も持っていないし、心配はない」

「でも、命という物を持つてるから、空身からみとはいえないよ」

「ははは。命の戸締りはわしもしている。伊織は確かかな」

「おらだつて」

見るな——と止められるほど、つい後ろが振向きたくなる。伊織は、左の手を、野差刀のざしの鐔つばの下から離さなかつた。

権之助にしても、余りいい気持はしない。山伏の顔には見覚えがある。それはきのう宝蔵院の試合興行の折に、飛入りを望んで出て断られたあの山伏なのだ。どう考えてもこつちには付き纏まとわれる覚えがない。

「おや、いつのまにか、消えちまつた」

また、伊織が振向いていう。権之助も振顧ふりかえる。

「多分、飽きてしまつたのだろう。やれやれ、さつぱりした」

その晩は、葛木村かつらぎむらの民家に泊めてもらう。翌日は早目に、南河内の天野郷あまのこうにはいり、

清流に沿っている門前町の低い軒ならびを覗き歩いて、

「木曾の奈良井から、この土地の酒醸さけづくりの杜氏とうじへお嫁に来ている、おあんさんという人の家を知りませんか」

と頼りない手がかりを頼りにして尋ね歩いた。

おあんさんというのは彼が故郷いなかで知っている人だつた。この天野山金剛寺の附近とつに嫁い

でいるというので、彼女が分つたら、亡母の位牌いはいとかたみ髪を金剛寺へ納めて供養して貰おうという考え。

もし分らなかつたら高野へ行こう。高野は貴人の供養所として、余り名だたる大家の霊が寄っているそうなので、旅人の貧賤では心もとない気もするが、ここが駄目だったらともかく高野山へ預けに行こう。

そう思っていたところ、

「ああ、おあんさんかね。おあんさんなら杜氏屋敷のお長屋にいるがな」と、案外早くそれが知れた。

門前町の何屋かの内儀かみさんである。親切に先へ立って、

「この門をおはいんなすつたら、右側の四軒目で、杜氏の藤六さんのお家かとお聞きなされ。おあんさんの御亭主じやげな」と、教えてくれた。



どこの寺でも、「葷酒山門ニ入ルヲ許サズ」は、法城の掟みたひになつてゐるが、この天野山金剛寺では、坊舎で酒を醸酒つつてゐる。

もちろん、世上へ出しているわけではないが、豊臣秀吉などが、この寺製りの酒を賞美して、諸侯のあいだにも「天野酒」といつて知れ渡つてゐるので、秀吉の亡き後は、その余風もだいにぶ廃すたつていたが、まだ年々製つくつて乞われる檀家だんかへ贈る慣ならわしは残つていた。「——そんなわけで、わしを始め十人ほどの職方が、お山に雇われて来ておりますのじゃ」おあんさんの御亭主である杜氏の藤六は、その夜、客の権之助の不審を解いて、そんなことも話した。

それから、権之助の頼みについては、

「お易やすいことじや。御孝心に依ることでもあれば、明日、僧正さまにおねがいして上げよう」

と、いつてくれた。

翌る日、その家の一間ひとまに起き出た頃は、もう藤六は見えなかつたが、やがて午少ひるし過ぎ姿を見せ、

「僧正さまにお願いしたら、さつそく承知して下された。わしに従ついてお出いでなされ」

と、いう。

案内されて、権之助は藤六の後ろに従い、伊織は権之助の腰にちよこちよこついて行つた。四方は幽翠な峰で、散り残つた山ざくらが白く、七堂伽藍は、天野川の溪流が繞るふところ谷にあり、山門へ渡る土橋から下をのぞくと、峰の桜が片々と流れにせかれて落ちてゆく。

伊織は、襟を合せた。

権之助も、身が緊まつた。何とはなく、山巒の気と、坊舎の莊嚴に打たれたのである。ところが、存外にも、

「お前様か。母御の供養をしてくれというのは」

と、本堂の上から気楽な調子でいった僧がある。

肥えて、背も高く、大きな足をした坊さんである。僧正というからには定めし金欄の袈裟に弘子を抱き、威儀作ろつた人かと思えば、これはこのまま破れ笠と杖をもたせて、世間の軒端に立たせても、恥かしくないそのままの人だった。

だが、藤六は、

「はい、お願いの儀は、この人でございます」

と、堂下の大地にぺたりと額ぬかずいて、権之助に代つて答えてるさま——やはりこの人が僧正だとみえる。

「……………」

権之助も、何か、あいさつをいって、藤六と同様に、ひざまずこうとすると、僧正はもう大きな足を、階段の下にありあわせた汚い藁草履わらぞうりへのせて、

「じゃあ、大日だいにちぎさま様のほうへお越し……」

と、数珠じゆずひとつ持つて、先へ歩いてゆく。

五仏堂だの、薬師堂だの、食堂じきどうだのの堂塔のあいだを繞めぐつて坊舎からすこし離れると、そこに金堂こんどうと多宝塔があつた。

遅れて、後ろから追いかけて来た弟子僧が、

「お開けいたしますか」

と訊ね、僧正のうなずいた眼をみると、大きな鍵をもつて、金堂の大扉をひらいた。

「お着座を」

と、促うながされて、権之助と伊織とは、二人きりでひろい伽藍がらんの中へ坐つた。仰ぐと、台座からなお一丈の余もある金色こんじきの大日だいにちにやらい如来が、天井で微笑をふくんでいた。

## 三

やがて内陣のうちから僧正は袈裟けさをつけ直して出て来た。そして台座たいざに坐つて朗々きようきようと経をあげた。

先には、藁草履の見すばらしい一山僧にしか見えなかつたが、そこに坐ると、運慶ののみの鑿ののみの力にも劣らない権威を背なかに示している。

「……………」

権之助は、掌てを胸にあわせ、亡き母の姿をまざまざと描いていた。

すると、一朵ただの白雲が、瞼まぶたを流れた。——そしてそこに塩尻峠の山や、高野の草が見えた。——武蔵は戦てぐ風をふんで、剣を抜いて立っている。自分は、杖じょうを取とつて、それに対してしている。

野中の一本杉の下に、地蔵様のように、ちよこなんと坐っている老母がある。

老母の眼のいかにも心配そうな——。そして今にも、剣と杖の間へ、跳びつきそうなの光。

子を案じる愛の眼。その時、母のすさまじい助言の一声から教えられた「導母の杖」の一手。

「……おつ母さん、今もあなたはあの時のような眼で、私の前途を案じて見ておいででございましょうな。だがご心配くださいますな。その折の武蔵どのは、幸いに私の乞いを容れて、お教えを下されているし、私もまだ一家を成す日は遠いかもしれませぬが、たとえ今がどんな乱世でも、子の道、世々の道は、踏み外すことはいたしません」

こう念じつめて息をもじつとひそめていると、身の前に高々と在る大日如来のお顔が、母の顔そっくりに思われ、その微笑までが、生ける日の母の笑いとなって胸に沁みてる。

「……お」

ふと気づいて、掌を解くと、僧正はもういない。読経は終わったのである。傍らにいる伊織も、ほかんと大日のお顔をふり仰いだまま起つのも忘れていた様子なので「伊織」と、呼び醒まし、

「なんでそんなに見慌れている」

と訊ねたところ、われに返ったような顔して、伊織がいうには、

「だって、この大日様は、おらの姉さんに似てるんだもの——」

権之助は思わず、からからと笑つて、まだ会つたこともないお通さんとかいう其方そちの姉の顔がどうして分る？ また、大日様のお顔は大日様のお顔で、こんな慈悲円満な具相をもつた人がこの世にあらうはずはない。これは独り運慶のような名匠の精しょうじん進が、たまたま、鑿のの先に現し得た奇蹟のようなもので、決して俗界にあるものではない。

いうと——伊織は「だって、だって」となお強くかぶりを振つて、

「おらは一度、江戸の柳生様のお邸へ使いに行つて、夜半よなかに途みちに迷つた時、そのお通様つていう人に会つてるもの。——あの時姉さんだと分つていたら、もつとよく見ておくんだつたけれど、今じや思い出せなくなつちまつた。……そう思つたら、今、僧正さんがお経を上げているうち、掌てを合すると、大日様が姉さんの顔になつたんだよ。ほんとに、何かおらへいったような顔をしたよ」

「……ふうむ」

権之助は、もう否定できなかつた。そして、いつまでも金堂の縁から離れ難がたいここちがした。

ふところ谷は日暮れが早い。峠のかけにもう陽は沈み、多宝塔の屋根の水煙すいえんだけが、

七宝の珠でちりばめたように、燦々きらきらと夕陽の端をうけている。

「ああ。死んだ母へ、及ばぬ回向えさうだが、きようは生きてる身にも、善根のよい一日を送つたなあ。……血臭い世間は嘘のようだ」

薄暮はくぼのあいろに向つて、二人はなお、その縁に腰かけていた。

#### 四

どこかでサラサラと落葉を掃くような音がする。権之助が、

「おや」

と、右の崖を仰ぐと、崖の中腹に、室町風の古雅な観月亭びようと廟びようがあつて、狭い石ころ道は苔こけむして見え、その辺を縫つてなお、幽翠ゆうすいな山の上へつづいてる。

ひとりは上品な尼あまとも見える年とつた婦人。

またひとりは、肉づき豊かな五十がらみの人物で、つましき木綿着物に、袖そで無羽織なしを着、小桜の革足袋かわたびに新しい藁草履わらぞうりをはき、鮫柄さめづかの小脇差を一つ横たえて、武士とも町人ともみえず、ただ何処ゆかやら床しげな風格のある人が、竹箒たけぼうきを持って——ふと、腰

をのばして立っている。

老尼のほうは、白練しろねりの絹の頭巾をかぶり、これも竹箒を手にして、

「……ほ。少しはきれいになったかのう」

と、掃いて来た山道や崖の其処そこここ此処を見まわしているらしい。

そこらは滅多に人も踏み入らなければ、かまう者もないとみえ、冬中の雪折れやら朽葉やらまた、鳥の空骸むくろやらが、農家の堆肥つみごえのように春とも見えず腐り積っているのであった。

「お母さん、だいぶおくれたびれでしょう。陽が暮れましたし、あとは私がやりますから、もうお休みなされませ」

肥えた人のほうがいう。

老尼は、五十にも近いその者の母とみえるが、息子のことばをかえって笑って、

「わしは家にいても、働きつけておるせいとか、つかれもせぬが、そなたこそ肥えてはいやるし、このようなことはしつけぬゆえ、土に手が荒れたであろう」

「はい。仰つしやる通り、一日箒を持っていたので、掌てにまめができました」

「ホ、ホ、ホ、ホ。……よい土産みやげのう」



「けれどお蔭で、きょう一日は、何ともいえぬ清々すがすがしい心で送りました。私たち母子おやこの貧しい御奉仕も、天地の御心になつたしるしでございましたよ」

「いずれ、こよいももう一夜、御本房に泊めていただくのじゃから、後はあしたにして、そろそろ戻りましょうかの」

「暗くなりかけました。足もとをお気をつけなさいまし……」

いいつつ、息子は、母の尼の手をとつて、観月亭の小道から、権之助と伊織のやすんでいる金堂の横へ降りて来た。

人もなしと思つていた黄昏たそがれの金堂の縁に、ふと、人影が起つたので、老尼もその息子も、

「……誰？」

と、驚いたように、立ちどまつたが——老尼はすぐ眼元にやさしい笑みをたたえ、

「御参籠でございますかの。今日も一日、よいお日でございましたの」

と、旅の者と見て、行きずりの挨拶をした。

権之助も、辞儀して、

「はい。母の供養にと詣もつでましたが、あまり静かな夕暮なので、何か、空虚うつろになっており

ました」

「それはそれは御孝心な」

と、いいながら老尼は、伊織のすがたへ眼を移して、

「よい坊ンち……弟御かの」

と、<sup>つむり</sup>頭を撫でて息子のほうを振顧つて、

「<sup>こうえつ</sup>光悦、山で喰べた麦菓子<sup>たもと</sup>が、まだ、そなたの袂に、すこし残っていたである。この子

にやつて下さらぬか」

と、いった。

古今道遥

一

光悦とよばれた老尼の息子は、紙につつんだ菓子を、袂から取出して、伊織に持たせ、  
「残り物で失礼だが、よかつたら喰べておくれ」

と、いった。

伊織は、掌てに乗せたまま、どうしていいか、分からない顔つきで、

「おじさん、これ、貰もらつといてもいいの」

権之助にたずねた。

「いただいております」

と、権之助が、伊織にかわつて、礼をのべると、老尼はまた、

「おことばの様子では、御兄弟でもないようじゃの。関東のお方らしいが、旅の道を、どこまでお越しなされるのか」

「果てない道を、果てなく旅しております。お察しの通り、ふたりは肉親ではござりませぬが、剣の道においては、年はちがいますが兄弟でし弟子の仲でござります」

「剣をお習いなされますか」

「はい」

「それは一方ひとかたならぬ御修行。師のお方は、どなたかの」

「宮本武蔵と仰おほつしやいます」

「え。……武蔵どの？」

「ご存じですか」

答えを忘れて、老尼は、

「ほう……」

と、ただ眼をみはり、何か思い出の中にいる様子、武蔵と知らぬ仲の人とは思われなかつた。

するとこの老尼の息子も、なつかしい人の名でも聞いたかのように寄り添って来て、

「武蔵どのは今、どこにおられますな。その後のご様子は……」

などと、いろいろ訊ねだし、権之助がそれについて、知る限りの消息を話して聞かせる  
と、いちいち母なる老尼と顔を見あわせて、うなずくのであった。

そこで、権之助から今度は、

「——して、貴方様は」

と、訊ねると、

「申しおくれました」

と詫びて、

「わたくしは京の本阿弥ほんあみの辻に住む光悦という者。また、これは母の妙みょうしゆう秀しゆうでして、武

蔵どのとは六、七年前に、ふとお親しくしていただいたこともあり、何かにつけ、日頃、おうわさ申し上げていますものですから」

と光悦は、その頃の思い出ばなし二つ三つ掻いつまんで話した。

光悦の名は、疾く、刀の上において権之助も知っている。また、武蔵との交渉は、その武蔵から草庵の炉べりで聞いたこともある。思いがけぬ所で、思いがけぬ人に会うもの哉。——と権之助も驚いた。

その驚きのうちには、京都でも然るべき家からの母堂といわれる妙秀尼やまた、本阿弥光悦ともある人の母子が、なんでこの山里の人も訪わぬ伽藍などに来て、しかも寺の雑人すら怠っている山の朽葉などを、竹箒を持って、こんな暗くなるまで掃除しているのだろうか？

その不審も、無意識のなかに、手伝っていたにちがいない。

——いつか朧な月が、多宝塔の水煙のあたりになさし昇っていた。行きずりの人でも人恋しい夜頃ではあるし、権之助は、去り難てな心地になって、

「おふた方には、この上の山や崖道を、終日、お掃除なされていた御様子。どなたか、御縁をひくお方の碑でもあるのですか。それとも御遊山のつれづれにでも……？」

と、訊ねてみた。

## 二

「なんの。なんの」

光悦は頭を振っていう。

「この巖かな聖地で、気まぐれなどと、勿体ない」

相手の権之助が、何も知らずにいったにせよ、その曲解を甚だ畏れるもののように、彼は、徒然の腹ごなしに箒など持っていたのではないことを弁明に努めて、

「あなたは、この金剛寺へは、初めてのお詣りか。そしてこの御山の歴史について、山僧から何もまだお聞きになっていないのか」

権之助は、ありのまま、

——然り。

そんなことの無智は、べつに武辺者の自己の恥辱とも考えず答えると、光悦は、

「では、烏澁な沙汰ですが、私が山僧にかわって聞きかじりの請売りを少しご案内いたし

ましようか」

と、四辺あたりを見まわし、

「よいあんばいに、朧おぼろな月つきがさし昇あつて来きましたから、ここに立つたままでも絵図をさすように、この上の院のお墓、御影堂みえいどう、観月亭くわんげつてい。——また彼方の求聞持堂ぐもんじどう、護摩堂ごまどう、大師堂だいしどう、食堂じきどう、丹生高野神社にうこうや、宝塔ほうたう、楼門ろうもんなど、ほぼ一望にすることができましよう」

ひとわたり指をさして、光悦も共に、寂土おぼろの朧おぼろに浸り入ひつた態ていで説くのであつた。

——御覽ごらんぜよ。あの松あの石。一木一草といえど皆、どこかにこの国の民くさと等しく、不屈な志操と伝統の優雅を姿にもち、また何かを訪う人に語らんとしているではありませんか。光悦は、草木の精に成り代つて、草木がいわんとすることを述じゆつかい懐くわいしてみたいと思おもうのでございます。

それは。

元弘、建武の頃から正平年間にわたる長い乱世にかけてこの御山みやまが、時には、大塔だいとうの宮みや護ご良りやう親王の戦勝祈願をこめらるる大炉たいろとなり帷幕いばくの密議所となり、また時には、楠くすの正成たちの忠誠が守るところとなるかと思えば、京六波羅ろくはらの賊軍が、大挙して攻め襲よせる目標となつたり、下つて足利あしかが氏が世を暴奪ぼうだつなし終つた乱麻らんまの時代となつては偲しのび上げ

るも畏れ多いことながら、後村上天皇は、男山御脱出以来、軍馬の間を彼方此方と御輦の漂泊を經られて、やがてこの金剛寺を行宮に年久しく、山僧の生活も同様な御不自由をしのんでお在で遊ばした。

なお、それより前には。

この御山には、光嚴、光明、崇光の三上皇も、御幸していらせられたので、一山には、守護の武士たちや、公卿たちも、夥しい数にのぼり、賊軍の襲来に備える兵馬兵糧の料はもとよりのこと、永い年月のうちには、供御の炊ぎに奉る朝夕のものにも事欠いて、当時の様を眼のあたりに見た禅恵法印の記したのを見れば、

坊舎山房皆切払イ

損亡申ス計リ無シ

と、嘆いております。

しかもその間、主上には寺の食堂を政庁に充てられ、寒日も火なく、炎日もお慰いなく、政務をおとり遊ばしていたとやら。

光悦は、そこでふと、声をのんで、

「この辺り、あの食堂といい、摩尼院と申し、皆そうした御遺跡でないものはございませ



ん。この上にある、院のお墓というのも、光嚴院こうごんいん法皇の御分骨をお奠さだめしてある霊地と  
いい伝えておりますが、足利の世このかた、御垣みかきは仆れ、朽葉くずもに埋れ、あまりに荒れはて  
ておりますので——今日はふと、朝から母といひあわせて、院のお墓のあたりからそここ  
ことなく、お掃除をさせて戴いていたわけなのです。——もつとも、それも徒然つれづれであろ  
うといわれれば、それまでのことですが」  
と、笑えみを含んでいった。

## 三

われ知らず権之助は、身のちぢまる思いをこうむり、襟えりを正して聞き入っていた。いや、  
彼よりも、伊織はもつともつと厳肅なものにひき緊しめられた顔して——語る人光悦おもての面おもて  
らわき目もふらない。

「——ですから北条氏から足利氏への長い長い乱世のあいだ、あの石、そこらの草木まで  
みな、一系の皇統を護るため戦った物でしょう。石は、護国とりでの砦とりでとなり、木々は、天皇の  
供御くごの薪くごとなり、草は兵の衾ふすまとなつて」

光悦もまた、真摯しんしに聞いてくれる語り相手を見出して、鬱うつ懐かいの至情を吐きつくすように——去るに忍びない面持おももちで夜空と寂土の万象を四顧しながら、

「——多分、その頃、賊軍と戦つて、ここで草の根を喰べながら立て籠こもつていた御親兵の一人か、或は、降魔げうまの剣を把とつて兵の中に働いていた僧兵のひとりかも知れません。……  
というの、きょう私たち母子おやこが、院のお墓のあたりから山道を掃除して参りますと、とある藪やぶ中の石に、誰が刻んだか、こんな歌が彫つてあつたのがふと見出されたのです。

……

百年ももとせの戦いくさもなさん春は来ぬ

世の民くさよ歌ごころあれ

と、いうのです。——これを見て私はなお胸を打たれました。何十年という戦いくさの中の春秋に、何というゆとりでしょうか。強い護国の信念でしょうか。七たび生れてこの国を護らんと仰つしやつた大楠公の御心みこころは、名もない一兵にまで沁しみ徹とおつていたものとみえまする。また、この優雅と、心のひろさがあつたので、遂に、百年の戦いくさを経ても、この堂塔は今もなお、皇土のうえに厳然と在るのでございます。有難いことではございませんかと、いいむすぶ。権之助は、ほつと、息づきをし直しながら、

「いや、ここの御山みやまが、そういう尊い戦の址あととは、はじめ承知しました。知らぬことと  
いいながら、先ほどは、卒爾そつじなおたずねを致しおゆるし下さい」

「いいや、もう……」

光悦は手をふって、

「実をいえば、手前こそ人恋しくいたところで、きょうもきのうも胸うっに鬱うっしていたものを、  
誰かに語りたくてならなかつた折なのです」

「また、つまらぬお訊ねをして、お笑いを受けるかも知れませぬが、光悦どのには、もう  
この寺に永くご逗留とちゅうでございますか」

「されば、今度は、七日ばかりになりまする」

「やはり御信仰で」

「いえ、母がこのあたりの旅が好きなのと、自分もこの寺に参ると、奈良、鎌倉以後の、  
画えやら仏像やら漆器しつきやら、いろいろ名匠の作品を見せていただけるので……」

朧おぼろな地に影を曳ひいて——光悦と妙秀尼、権之助と伊織、ふた組になって、いつか金堂か  
ら食堂のほうへ歩いていた。

「——ですが明日あしたの朝はもう立とうと存じます。武蔵どのお会いになったら、どうぞま

いちど、京の本阿弥ほんあみの辻へ立ち寄ってくださいるようお伝えおきを」

「承知いたしました。では、ごきげんよう」

「オ。おやすみ……」

山門の陰の月ささぬ闇を境にわかれて、光悦と妙秀尼は坊舎の方へ。——権之助は伊織と共に、山門の外へ出た。

土塀の外は、自然の濠ほりを繞めぐらしたような溪流であつた。その土橋へかかるや否、何か白いものが、物陰からさつと権之助のうしろへ襲いかかり——伊織はあツという間もあらず、土橋の外へ足を踏みはずしていた。

#### 四

——ざんぶ！

飛沫しぶきのなかに、伊織ははね起きていた。流れは迅はやいが、水は浅い。

(何だろ?)

咄嗟とっさなのだ。どうして墜ちたのか、自分でもわからない。

だが、土橋の上を仰ぐと、そこから自分を抛り飛ばした勢いのものが、何ものをも交えず、真空の一圈内を作つて対峙していた。

その一方は、権之助へふいに襲いかかった白いものだ。伊織がはね飛ばされて落ちたせつな——白いものと見えたのは、彼の白衣であつた。

「あつ、山伏？」

伊織は、さてこそ、来るものが遂に來たなど思った。何のゆえか、おとといから自分を尾けていたあの山伏なのだ。

山伏の杖。

権之助も手馴れの杖。

ふいに打つてかかったが、権之助がさはさせじと、とたんに身の位置を変えたため、山伏は土橋をはさんで往來側の口に立ちふさがり、権之助は山門を背なかにして、

「何者つ？」

と、一喝を発し、

「人ちがいすなつ」

と、声するどく、窘めていた。

「……………」

山伏は何もいわない。人ちがいなどするかといった体である。背には笈を負い、軽捷を欠いた扮装に見えるが、踏んまえている足は木が生えているように慥かである。

この敵、ただ者に非ず——と見ながら権之助は、満身を気に膨ませて、杖をうしろに扱きながらも一度、

「だれだつ。卑怯だつ。名を申せ。さもなくば、この夢想権之助へ、何の意趣で打つてかかるか、理由をいえ」

「……………」

山伏は、耳がないように、ただ眼だけにららんと、人を葬るような炎をたいている。

金剛わらんじの足の指が、百足の背みたいに、一縮一縮地をにじり詰めてくる。

「うぬ。もはや」

これは権之助が丹田で堪忍をやぶった呻きである。——彼の丸ツこい五体は、闘志に節くれだつて、詰めよる山伏に対して、彼のほうからも競りつめて行つた。

——がつつと、物音が発したとたん、山伏の杖は、彼の杖のために、真二つに折られて、宙へすつ飛んでいた。

だが山伏は、手に残った杖の半分を、権之助の面部へ向つてすばやく投げつけ、権之助が、顔をふと交わした一瞬、腰の戒かいとう刀を抜いて飛燕のように躍りかからんとするかに見えた。

その時、その山伏が、

「あつ」

といったのと、伊織が溪流の瀬で、畜生つとさげんだのと、同時であつて、山伏の足は五、六歩ほどそのまま、だだだどと土橋を往来のほうへ踏み退いた。

伊織の投げた石つぶてが、山伏の面部へ、したたかにあたったのである。悪くすれば左の眼であつたかもしれない。とにかく山伏としては、思わざる方角から、致命的な傷手をうけたため、しまったと思つたに違いない。崩れた体勢をそのまま一転、足を変えるが早いか、寺の土塀と溪流のながれに沿つて下町のほうへ征矢そやのごとく逃げ去ってしまった。

岸へ跳び上がった伊織は、

「待て」

と、手の中に、まだ石を握つていて、追いかけてさうにしたが、権之助に止められて、

「ごま、見ろ」

と、その石を、もう人影のない臙おぼろへ向つて遠く投げた。

## 五

杜どうじ氏屋敷の藤六の家へもどつてから、程なく、二人は寝どこへはいつたが、さて二人とも、なかなか眠れない。

ぐわうぐわうと、峰の夜あらしが、屋やの棟むねを繞めぐつて、更ふけるほど耳につくせいばかりでもない。

眠りと現うつの境で、権之助は、光悦の言葉を脳裡にくりかえし、建武、正平のむかしを思い、また、現在の世へ思い到つて、

（応仁の乱れから、室町幕府のくずれ、信長の統業、秀吉の出現と時勢は移り、——そしてその秀吉の亡い今は、関東大坂のふたつが、次の覇権を繞めぐつて、あしたも知れぬ風雲を孕はらんでいるが——憶おもえば、世の中は、建武、正平のむかしと、どれほどな相違があるう）  
そう考えるのだつた。

（北条、足利の徒が、国家の大本をかきみだした最も厭いむべき時代には、半面にまた、楠



氏一族のような、また諸国の尊王武族のような、真の日本やまともの武士があらわれたが——今は——今の武門は——また武士道は？)

これでいいのか。

民心は、天下の司権が、信長、秀吉、家康とあわただしく、争奪されるのをながめているまに、まことの主上の在おわすをすら、いつか思わぬようになり、民の帰一というものが、総じて、はぐれているような。

武士道も、町人道も、百姓道も——すべてが武家の覇権のためにあって、天皇の大おおみたからである臣民の自分を、見失つて来ているような。

気がつくど、彼は、

(社会は賑わしくなり、個々の生活は活潑になつて来たろうが、この国の根本のものは、建武、正平の頃から、大してよくなつて来てはいないのだ。大楠公の奉じた武士の道——抱いたであろう理想とは、まだまだ遠い世の中なのだ)

と、夜具の中に、横たえている身も熱くなり、河内かわちの峰々や、金剛寺の草木が、夜半よわを吠えたけぶも、何やら、心あるもののように夢へ聞えてくるのだった。

——伊織は伊織でまた、

(何だろ、さつきの山伏は?)

と、あの白い幻像が、まぶた瞼から消えないらしい。

そして、明日の旅が、何だかしきりと気づかわれ、

(こわ恐いなあ)

と、つぶやいて、峰のあらしにふとん蒲団の襟をひきかぶった。

そのため、夢に大日様のおほほえみ微笑も見ず、尋ねる姉の面影もあらわれず——朝もぱちり

とはやく眼がさめてしまった。

おあんさんと、藤六は、二人が今朝早く立つとのこと、暗いうちから朝めしや弁当の支度などしておいてくれて、いよいよ此家ここの門から立つとなると、

「喰べながらお歩き」

と、伊織へ、酒の糟かすの焼いたのを、紙につつんでべつにくれた。

「お世話になりました。御縁もあらばまた——」

立ち出いでると、峰には虹いろの朝雲がうごきかけ、天野川の流れからは、湯気のような水蒸気が立っていた。

その朝靄あさもやについて、ぴよいと、そこらの家から飛び出して来たひとりの身軽な旅商たびあき

人は、権之助と伊織のうしろから、

「よう。お早いお立ちで」

と、元気よく、いかにも朝らしい声で、ことばをかけた。

紐ひも

一

見も知らぬ男なので、権之助は、よい程にあいさつを返したのみ。伊織も、ゆうべのことがあるので、無言を守って歩いていると、

「お客さまは昨夜、ゆうべ藤六どんの所へお泊りでございましたな。藤六どんには、てまえも長年、お世話になっておりますよ。ご夫婦とも寢まことによくできたお人で」

などと旅商人の男は、もう連れになった気で、いよいよ馴なれなれ々々しくなる。それもよい加減に聞きながしていると、また、

「木村助九郎さまにも、ごひいきになりました、柳生のお城へも、時折には、御用を伺い

に出たりいたしますが」

と、しきりに話の糸をひく。

「——女人高野の金剛寺へお詣りになりました上は、ぜひ紀州高野山のほうへもお登りでございませうが、もう山道の雪はございませんし、道の雪崩もすつかり直っておりますから、お登りには今がよい季節。きようは天見、紀伊見などの峠をゆるゆる越えて、今夜は橋本か学文路でゆっくりお休みになるとちようどよい頃合で——」

いうことがいちいち、余りこちらの消息に通じ過ぎていたので、権之助は不審に思つて、  
「おぬし、何屋じゃな」

「てまえは、打紐の売子でございます。この荷の中に——」

と、背に負っている小さい包みに首を曲げ、

「組紐の見本を持ちまして、近国遠国を注文を取つて歩いておりますもので」

「ははあ、紐屋か」

「藤六どんの手づるで、金剛寺のお檀家なども、たくさんお世話していただきましてな。きのうも実は、例に依つて、藤六どんの家へ泊めて貰うつもりでお寄りしました所が——  
こん夜はよんどころないお客が二人あるから、御近所の家で厄介になつてくれと申され、

同じ杜氏長屋の一軒で寝かして貰いましたわけ。……いえいえべつに貴方方のせいじやございませんが、藤六どんとこへ泊ると、いつもよい酒をのませて貰えるので、寝るより実は、それが楽しみなんです……。はははは」

そう聞いてみれば、べつに不審に思う筋はない。権之助はむしろこの男が、附近の地理や風俗に詳しいのを幸いに、後学のため耳袋を養っておこうとするらしく、歩きながらの道々を、なにかと訊ねたり探ってみたり、いつか相手になつてゐる。

すると天見の高原にかかつて、紀伊見の峠から高野大峰のすがたが正面に見えてきた頃である。——おおウい、と後ろのほうから呼ばれる者がある。振り顧ると、連れの紐売りと同じような恰好をした旅商人の者がまたひとり、駈けて来て、

「杉蔵。ひどいじゃないか」

追いついて来るなり、息を喘いでいう。

「——今朝立つ時誘つてくれるというで、天野村の口で待っていたに、何で黙って行つちまうだ」

「アア源助か。……いや、すまないすまない。藤六どんとこのお客と連れになったもんで、うっかり声をかけるの忘れちもうた。はははは」

と、頭を搔いて、

「あまり旦那と、話がもててしまったもんで——」

と、権之助の顔を見て、また笑った。

やはり打紐うちひもの売子仲間とみえ、その男と、旅先の売上だの、糸の相場のことなど、頻

りと喋舌しゃべり合っていたが、そのうちに、

「ア。あぶねえ」

と、二人とも立ち止まった。

太古の大地震で割れた痕あとのような断層きの断れ目めに、無造作な丸木が二本渡してあった。

二

「どうしたのか？」

と、二人の後ろへ寄つて、権之助もそこに立つ。

旅商人の杉蔵と源助は、

「旦那、ちよつとお待ちなさいまし。ここの丸木橋が壊れていて、ぐらつきますで」

「崖崩れか」

「それ程でもありませんが、雪解ゆきげに石ころが落ち込んだまま、直してもないので。往來人のため、ちよつと、動かないようにしますから、少し休んでいてください」

と、ふたりは早速、断層の崖ぎわへ身を屈かがめ、架け渡してある二本の朽木橋くちきばしの土台へ、石を嘯ませたり、土を築いたりしている様子。

——奇特な心がけよ。

と、権之助は心のうちで感じていた。およそ旅の困苦は、常に旅をしている者ほど分っている筈だが、その旅馴かえりれている者ほど、他の旅人の困苦などは顧みもせぬのが多い。

「おじさん達、もつと石ころを持って来てやろうか」

と、伊織も、二人の善行に手伝いを申し出て、せつせと、そこらの石など抱えて来たりしている。

断層の谷は、かなり深い。覗のぞいてみると二丈の余もありそうだ。高原なので、水は流れていないで、岩石や灌木かんぼくで底は埋まっている。

そのうちに、

「よさそうだ」

と、旅商人の源助は、朽木橋の端にのつて、足踏みして試みている。そして権之助へ、「——ではお先に」

といい残し、ひよいひよいと身振りしながら、体の中心を取って向うへ素早く渡つて見せた。

「さ。どうぞ」

残つた杉蔵に促うながされて、次に権之助が歩み、その腰について、伊織も渡つて行つた。

そして——朽木橋のうえ足数にして——三步か五歩も出たかと思うと、ちょうど断層の谷の真上のあたりで、

「あッ？」

「きやつ！」

と伊織と権之助は突然、絶叫して、お互いの身を抱きあいながら立ち竦すくんでしまった。

——何となれば、先に渡つて行つた源助は、かねて備えておいたものらしく、その草くさむら叢のうちから一本の槍を取り出し、それを持つたと思うと、何げなく越えて来た権之助の方へ向けて、ぴたと白い穂先を突きつけていたのである。

——さては野盜か。



と、とむねを衝たれて、振りかえると、後になつた杉蔵も、いつのまにどこから持ち出したか、同様に素槍を持って、伊織と権之助の背後を脅かしているのだった。

「しまった！」

さしもの権之助も悔いの唇を噛みしめて、刹那の当惑に、髪の毛をもそそげだてた顔色だった。

前にも槍。

うしろにも槍。

二本の朽木は、からくも愕きに顫く身を、断層の宙に支えているに過ぎない。

「おじさん！ おじさん！」

無理もないが、伊織は絶叫をしつづけて、権之助の腰につかまっている。権之助はその伊織を庇いながら、瞬間、眼をとじて、一命を天意にまかせてしまい、さて、いった。

「鼠賊ども！ 謀つたなつ」

すると何処かで――

「だまれつ、旅の者」

と、太い声でいった者がある。それは彼をはさんで槍を向けている源助でも杉蔵でもな

かった。

「……やつ？」

権之助がふと仰ぐと、向いの崖の上に、左の眼の上に腫れ上がった青痣のある山伏の顔が見えた。その痣は、ゆうべ金剛寺の溪川たにがわから、伊織の投げた石つぶてを、直ぐ二人に思い起させた。

三

「慌あわてるでない」

伊織へそういつて、その優しさとは、別人のように、権之助は、

「くそつ！」

すさまじい敵意を吐いて、橋の左右へ、ぎらぎら眼をくばりながら、

「さては、昨夜の山伏の詭計きげいだったか。浅ましくもまた、卑劣な賊めら。人を見損のうて、可あたら惜一命をむだにするな」

——彼と伊織を、左右から挟んでいる槍の持手は、その穂に気をこめて、狙いすました

まま、あぶない朽木橋の上へは、一步も出て来ないし、先刻から口もきかないのである。絶体絶命、身うごきのつかない谷間の空の朽木橋に置かれた権之助が、怒髪天を衝いて、死地から叫ぶすがたを、山伏は一方の崖から冷ややかに眺めて、

「賊とは何」

と、するどく咎めた。

「程の知れた汝らの路銀などに目をくるる徒輩と思うか。さような浅い眼では、敵地へ隠密に来る資格はないぞ」

「なにつ、隠密だと」

「関東者つ」

山伏は、大喝して、

「谷へ、その棒を捨てろ。次に腰の大小を捨てろ。そして両手を後ろへまわし、おとなしく縄目にかかつてわれわれの住居までついて来い」

「——ああ」

権之助は大きな息をついて、とたんに闘志の大半を失ったように、

「待て、待てつ。今の一言で初めて解けた。——何かの間違い事だろう。わしは関東から

来た者に相違ないが、決して、隠密などではない。夢想流の一杖を一道として、諸国を修行しあるく夢想権之助という者」

「いうな、くどくどとそんない抜け。どこに、自分は隠密なりと名のつて歩く隠密があるろうか」

「いや、まったく」

「耳は仮かさん。この期ごになつて」

「では、あくまでも」

「ひツ縛くくつた上で、訊きくことは訊く」

「益もない殺生したくない。もう一言申せ。何でわしが隠密か、その理由を」

「怪しげなる男、童子一名つれて、江戸城の軍学家北条安房あわの密命をうけて上方へ潜行す

——と、関東の味方の者から疾とく通つうちょう牒だのあつたことだ。しかもここへ来る前、柳生兵ひ

庫よづこや家臣の者とも、忍びやかに謀しめし合せて来たことまで見届けてある」

「すべて、根から間違いだ」

「有無うむはいわさん。行く先へ行つてから、いくらでも申せ」

「打く先とは？」

「行けばわかる」

「わしの意志だ。行かなかつたら……?」

——すると。

橋の左右を塞いでいた旅商人たびあきんどの杉蔵、源助と称するふたりが、槍の穂先へ、キラと陽ひを吸って、

「突き殺すまでだつ」

と、にじり寄つた。

「何を」

いうとすぐ、権之助は、側へかかえよせていた伊織の背なかを、平手でどんと突いた。わずかにやつと、足を乗せて渡れるだけの幅しかない二本の丸木から、伊織は身をのめらしたので、

「——アツ」

声もろとも、二丈の余もある断層の底へ、自分から飛んだように、墜ちて行つた。

咄嗟とつさに、また、

「わうっ」

吠えた権之助は、翳かげし上げた杖から風を起して、一方の槍へ、われとわが五体を、たたきつけるように、飛びかかつて行つた。

## 四

槍が槍の働きを十分に示すには、秒間の時と、尺地の距離とが要る。

構えてはいたが――

また、せつなを外さず、繰くり手を伸ばしはしたが。

「しえつツ――」

と、喉のどでわめいたのみで、完全に、杉蔵は空を突いてしまった。そして途端に、体ぐるみ自分へぶつかつて来た権之助と、折り重なつたまま、

――どさつ

と崖へ尻もちついた。

転がり合つたせつな、権之助の杖は左手にあつた。杉蔵が跳ね起きようとする時、彼の右手の拳は、杉蔵の顔の真ん中を、一撃で突きへこました。

ぐわっ

面部のどこからか血をふいて、歯ぐきを剥いて見せた顔は、実際、凹んだように見えた。権之助は、その顔を踏みつけ、一跳躍して、高原の平地へ立った。

そして、髪を逆立てて、

「来いっ」

と、杖を、次の者へ備えたが、死者の運命を打開したと思ったその瞬間こそ、実は、彼を待っていたほんとの死地だったのであった。

そこらの草むらから二筋三筋——ひゅつと、さなだ虫のような紐が、草を撫でて飛んで来たのである。一筋の紐の先には、刀の鍔が結びつけてあった。また一筋の紐には、鞆ぐるみの脇差がしぼりつけてあった。分銅の代りに用いたのであろう。勢いよく走って来たそれは、権之助の足元だの、首のあたりへ絡みついた。

仲間の杉蔵が不覚を取ったと見て、すぐ断層の橋を渡って来た源助と山伏のほうへ向けて、咄嗟に構えていた杖とその手元へも、一筋、くるくるつと、蔓のように巻きついた。

「あッ」

蜘蛛の糸から脱れようとする昆虫のように、権之助の全身は、本能的に暴れたが、わら

つと寄り集<sup>たか</sup>つて来た五、六名の人間は、完全に彼のもがく姿を、蔽<sup>おほ</sup>い隠してしまった。手取り足取りである。——その人々が彼の体から離れて、

「さすがに手強<sup>ていごわ</sup>い」

と、ひと汗、拭き合つた時には、もう、権之助は鞆<sup>まり</sup>のように縛<sup>くく</sup>られて、どうでもしろと  
いうように大地に委<sup>まか</sup>せられていた。

その両手と胴とを幾重にも巻いた縛<sup>いまし</sup>めの紐<sup>ひも</sup>は、この近郷で——いや近頃はかなり遠国まで知れて来た丈夫な木綿の平打紐<sup>ひらうちひも</sup>で、九度山紐<sup>くじやま</sup>とも、真田紐<sup>さなだ</sup>ともよばれ、製品の販路を  
拡げて歩く売子も、何処へ行つても見かけるほど手びろく売り出されている紐<sup>ひも</sup>だった。

今、草むらから不意に起つて、権之助を陥<sup>かんせい</sup>穽<sup>せい</sup>に落して顔見あわせている、六、七名も、  
すべてその紐売りの旅<sup>たび</sup>商<sup>あきんど</sup>人<sup>ごしら</sup>拵<sup>しら</sup>えの者ばかりで、ただひとり山伏扮装<sup>いでたち</sup>の男のみが、違  
つているだけだった。

「馬はないか、馬は」

山伏はすぐこう気を配つて、

「九度山まで、引つ立てて歩くのも、途中がわずらわしい。馬の背に縛<sup>くく</sup>りつけて、蓆<sup>むしろ</sup>でも  
引つかぶせて行くとしては？」



と諮ると、

「それがいい」

「この先の天見村まで行けば」

と、一同異議なく、権之助を追い立て追い立て、真っ黒にかたまって、雲と草の彼方へ、急いで行ってしまった。

——だがその後。

地の底から、冷たい風のふき上がるたびに人の声が、この高原の空をながれていた。断層の谷へ墜ちこんだ伊織のさけびであることはいうまでもない。

## 春・雨を帯ぶ

### 一

鳥の啼く音も、啼くところ聴くところによって異う。また、人の心によってもちがう。高野の奥の高野杉には、天上の鳥という頻伽の音が、澄みぬいている。ここでは、下界

でいうもずも、ひよどりも、あらゆる雑鳥も一様に迦陵頻伽のさえずりであつた。

「縫殿介」

「はあ」

「……無常だなあ」

迷悟の橋とかいう反り橋の上に佇んで、老武士は、供の縫殿介という若党を顧みた。

どこの田舎の老い武士。——一応はそうとしか見えない手織木綿のごつい羽織に野

袴という旅拵え。——けれど大小が図ぬけていい。立派な差料である。それか

ら供人の縫殿介なる若党の骨がらもよく、いわゆる雑人ずれのした渡り奉公人とはちが

つて、子飼からの躰がみえる。

「——見たか。織田信長公のお墓、明智光秀どのお墓、また石田三成どのや、金吾中

納言様や、苔むした古い石には、源家の人々から平家の輩まで。……ああ数知れぬ苔の

人間が」

「ここでは、敵も味方もございませぬな」

「一様に皆、寂たる一つの石でしかない。さしもの上杉、武田の名も夢のような」

「変な気がいたしまする」

「どういふ心地がするの？」

「何だか、世間のことがすべて、ありえない嘘のような」

「ここが嘘か。世間が嘘か」

「わかりません」

「誰がつけたか、奥の院と外院げいんとの、ここを境を、迷悟の橋とは」

「うまくつけましたな」

「迷いも実。悟りも真。わしはそう思う。嘘と観みたら、この世はないからな。——いや御主君に一命をさし上げている侍奉公の身には、かりそめにも虚無観があつてはなるまい。

わしの禪ぜんは、ゆえに、活禪かつぜんだ。娑婆しやば禪だ、地獄禪だ。無常におののき、世を厭いとう心があつて、侍の奉公が成ろうか」

と、いって、老武士は、

「わしはこつちへ渡る——さあ、元の世間へ急ごうぞ」

足を早めて先に立つ。

年のわりに足が慥たしかである。襟えりくびに兜かぶとの鍔しころずれらしい痕あともみえる。山上の名所や堂塔の美もすでに一巡し、奥の院の参詣もすまし終つたものとみえ、その足どりはもう真つ直

に下山口へかかる。

「よう、出ておるな」

下山口の大門まで来ると、老武士は遠くからつぶやいて、ふと迷惑そうな眉をひそめた。そこには、本山青巖寺の房頭から学寮の若僧たちが二十名以上も、列を左右に割って、待ちうけていた。

老武士の見送りにである。老武士はそんな手数を煩わすことを避けるために、すでに今朝立つ時、金剛峰寺で一同にわかれの辞を尽して出たのであるから、重ねてまた、ここで大勢の見送りをうけたことは、好意には感謝しても、かえって微行の身には、有難迷惑と思つたにちがひなかつた。

——が、その儀礼やあいさつの取り遣りも済まして、九十九谷という谷間谷間を眼下に、降り道を急いで来ると、やっと、気もらくになりました、彼のいわゆる娑婆禅や地獄禅も必要とする——下界のにおいや、その身自身の人間くさい心の垢も、心にいつか戻つていた。

「あつ。あなた様は？」

とある山道の曲りかど。

出あいがしらに、体つきの大きな色の白い——といって美少年では決してないが——卑いやしくない若侍が眼をみはって立ちどまった。

## 二

や、あなた様は？

と声をかけられて、老武士と若党の縫ぬい殿のすけ介も、はっと足をとめ、

「どなたでござるか」

訊たずねると、

「九度山の父から申しつかつて、使いに参りました者にござりますが」

と、その若侍は、いんぎんに礼儀をした後、

「もし、間違いましたら、おゆるし下さいまし。道みちの辺べで失礼にございますが、尊台はもしや、豊前小倉ぶげんよりお越しの、細川忠利公ただとしの老臣長岡佐渡様ではござりませうまいか」

「え。わしを佐渡と——」

老武士は、さも愕おどろいたらしく、

「かような所で、ご存じの其許は、いったい誰じや。——わしはその長岡佐渡にちがいないが」

「ではやはり、佐渡様でございましたか。申しおくれましたが、わたくしは、この麓の九度山に住居しておる隠士月叟の一子、大助めにござります」

「月叟。……はて？」

思い出せない顔すると、大助は佐渡のその眉を仰いで、

「もはや父が、疾くに捨て去りました名にござりますが、関ヶ原の戦いまでは、真田左衛門佐と名乗りおりました者で」

「やあ？」

と、愕然、

「では真田殿——あの幸村殿のことか」

「はい」

「其許は御子息か」

「はい……」

と、大助は、その逞しい体に似合わず、はじらい顔に、

「けさほど、父の住居へ、ふと立寄りました青巖寺の坊さまのおうわさに、ご登山のよしを知り、ご微行とは伺いましたなれど、他ならぬお方のたまたまなご通過——それに道でもこの麓のお通りがかり、何も、おもてなしはござりませぬが柴の門前で、粗茶一ぷく、さし上げたいと父が申します。そのためお迎えに参じましたので——」

「ほ。それはそれは」

と、佐渡は眼を細めて見せたが、供の縫殿介をふり顧つて、

「——せっかくなご好意であるし、どうしたものか」

と、諮つた。

「さようで」

と、縫殿介も、うかとは答え兼ねていた。大助は重ねて、

「なお、およろしければ、まだちと陽は高うござりますが、一夜お泊りでも下されば、願うてもない仕合せ。父もさだめし欣ぶかと存じますが」

——考えこんでいた佐渡は、何やら心をきめたように、われとわが身へ領いて、

「では、ご厄介に相なろう。泊めていただくか否かは、その時として。——のう縫、ともあれ、お茶をひとつ」

「はい。お供いたしましたよう」

主従は、それとなく、眼を見あわせて、大助の案内に従って行った。

ほどなく九度山の里だった。その里の民家からは少し離れて、小高い山の瀬に倚り、土止めの石垣をたたみあげて柴垣をめぐらした一構えがある。

ちようど土豪の山屋敷といったふうな作りだった。しかし、柴垣も門造りも、背が低く、風雅を失っていない。隠士の家と聞けば、なるほどと、どこか床しい閑雅があつた。

「門前に、父が出て、お待ちしております。——あの茅屋でございます」

大助は指さした。そしてそこから客を先に立て、自分は後に尾いて、わが家の前へ近づいた。

### 三

土塀の囲いのうちには、朝夕の汁へ摘み入れるほどの菜だとか、葱などの野菜が畑に栽培してある。

母屋は、崖を負い、座しきから九度山の民家の屋根や学文路宿が低い彼方に見える。曲



り縁の横は青々と竹林が水のせせらぎを抱き——その竹林の向うにも、住居があるとみえて、二棟ほどな家が透すいてみえた。

佐渡は、通されて、閑雅な一室に坐り、供の縫ぬい殿のすけ介は、縁の板の間に、端居はしして畏かしこまっていた。

「おしずかだのう」

佐渡はつぶやいて、室内の隈くまにまで眼をやった。——主あるじの幸村とは、土堀の門を潜くぐる時もう会っている。

しかし、案内をうけて、ここに坐ったきりで、挨拶はまだ交わしていない。改めて、客の前に出直して来るのであろう。茶は、息子の太助の嫁らしい婦人が今、しとやかに置いて退さがった。

だいぶ待つ……

しかし、飽かなかった。

ここの客間の、何くれとない物すべてが、主の席にない間も、客をなぐさめている。庭ごしの遠い眺め、水の姿は見えないが水のせせらぎ、茅かやぶき葺屋根の廂ひさし先さきから咲いている苔草こけくさの花。

また、客の身近には、これとて綺羅きらな調度は何一つないが、さすがに上田城三万八千石の城主真田昌幸まさゆきが次男の果て——そこはかたなく燻くんじる香木のおいも民間にない種類の名木らしい。柱は細く、天井は低めに、佗わびたる荒壁の小床には、蕎麦そばの一輪ざしに、梨の花が一枝、投げてあつた。

梨花りか一枝し 春帯雨はるあめを

「……………」

客の佐渡は、白楽天の一句を想い起し、そして長恨歌ちやうごんかにうたわれた楊貴妃やうきひと漢王との恋など、声なき嗚咽おえつを聞く心地がしていたが——ふと、眼はそこに懸けてある一聯の書に、はつと打たれた。

五字の一行物である。筆太に、濃い墨で、とつぷりと大胆に——が、どこか無邪気で、稚おきないところをみせ、一気に、

豊国ほうこく大明神だいみょうじん

と書きくだしてあるのである。そしてその大字のわきに小さく「秀頼八歳書」としてあつた。

——道理で。

佐渡は、それへ背を向けて坐っている身を畏れて、すこし座の位置を横へ移した。名木を焚きこめてあるのも、客のために今遽かに焚いたのではなく、朝暮に、ここを淨め、これへ神酒を捧げる時のものが、いつか襖にも壁にも沁みているのであろう。

「……ははあ、さてはやはり、噂にたがわぬ幸村の心がけよな」

すぐ佐渡は、そこへ思い当つたのである。九度山の伝心月叟事——真田幸村こそは油断のならぬ漢である。あれをこそ、まことの曲者とはいうべきだろう。いつ風雲によつて、どう変じるかも知れぬ惑星だ。深淵の龍だ。——と世間の噂はなかなか喧しく、よく耳にすることなのである。

「……その幸村が」

と、佐渡は、主の肚を悟りかねていた。本来、努めて、隠すべきことを、客の目にふれるような所へ、何で懸けておくのだろうか。——ほかになんぞ大徳寺物の墨跡でも懸けておいたらよかりそうなものなのに。

——その時、板縁をふんでくる人のけはいに、佐渡はさり気ない眼をそらしていた。さつき門前で、無言のまま出迎えた、体の小兵な、肉づきも痩せ形な人物が、袖無羽織に、短い前差ひとこしを差して、至極、腰ひくく、

「失礼いたしました。せがれ奴をさし出して、お旅先を心なきお引留め、おゆるしを」と、詫ぶるのであった。

#### 四

ここは隠士の閑宅。主は牢人。

元より、社会的の地位は取りのけられている主客の間とはいえ、客の長岡佐渡は、細川藩の家老である。陪臣である。

伝心月叟でんしんげつそうと今は名まで変えたりとはいえ、主の幸村は、真田昌幸が直子ちよくし、その実兄の信幸のぶゆきは、現に、徳川系の諸侯のひとり。

その幸村が、あまりに腰ひくい挨拶に、佐渡は甚だしく恐縮して、  
「お手を。……お手をお上げくだされて」

と、頻りに辞儀を返し、

「——さてもきようは、計らざるお目もじ。お噂を耳にするは常々ながら、ご健勝のていを見て、よろこばしゆうござる」

佐渡がいえば、

「御老台にも、愈」

と、幸村は、客の恐縮がるままに寛くつろぎを示して、

「御主人、忠利公には、おつつがもなく、先頃は江戸表より御帰国とのこと。よそながら祝着のいたりと存じおりました」

「されば、今年はちようど、忠利様の祖父の君にあたる幽齋公ゆうさいさまが、三条車町の御別邸でおかれ遊ばしてより三年の忌きのお迎えと相成るので」

「もうそうなりますか」

「かたがた御帰国。この佐渡も、幽齋公、三齋公、ただ今の忠利公と——三代の君にお仕えもうす骨董物こつどうものとなりおつてござる」

この辺まで、話がくだけて来たところで、主客一緒に、ははははと笑い合つて、どうやらお互いに、世事を離れた閑居の主客らしくうち溶とけてくる。迎えに出た大助は初めて知つた客であつたが、幸村と佐渡とは、きようが、初対面ではないらしい。四方山よもやまのはなしのうちに、

「近ごろは、和尚にお会いなされますかな。花園の妙心寺の愚堂和尚に」

幸村が訊くと、

「いや、さっぱり、御不音をつづけておる。……そうそう、幸村どのを初めてお見かけ申したのは愚堂和尚の禅室でござったな。お父上昌幸どのに侍かれて。——てまえは妙心寺地内の春浦院を建立の主命で、あのころは絶えず訪れておったもので。……いや、だいぶ以前のことじゃ。あなたもまだ、お若かった」

と、佐渡の追懐が、なつかしい思い出として語られるし、幸村も、

「あの頃はよく、暴れ者が、角を撓めるために、愚堂和尚の室にあつまりましたなあ。和尚もまた、諸侯と牢人、長者と若輩のさべつなく、相手になつてくださされた」

「わけて世の牢人と、若い者を愛された。——和尚がよくいったことでおぎった。——浮浪の徒は、あれは浪人じゃ。真の牢人とは、心に牢愁のなやみを抱き、意志の牢固な節操をもった者じゃ。……真の牢人は名利を求めず、権に媚びず、世に臨んでは、政治を私に曲げず、義にのぞんでは私心なく、白雲のごとく身は縹渺、雨のごとく行動は急、そして貧に自樂することを知つて、的を得ざるも不平を病まずなどと……」

「よう御記憶ですな」

「だが、そうした真の牢人は、蒼海の珠のように少ないともよく嘆かれておった。しか

しました、かつての史をふみ閲すれば、国難の大事に当って、私心なく、身を救国の捨て草にした無名の牢人は、どれほどあるか知れぬ。じゃに依って、この国の土中には、無数の名なき牢人の白骨が、国柱となっておるが……さて、今の牢人は如何に、などとも仰っしゃった」

佐渡は、語りながら、幸村の顔を、敢て直視した。だが幸村はその眼を感じないもののように、

「左様。そのおはなしでふと思い出しましたが、あの頃、愚堂和尚の膝下しつかにいたひとりで、作州牢人の宮本なにがしという年少の者がおりましたが、御老台には、御記憶はございませぬか」

## 五

「作州牢人の宮本といえは？ ……」

と佐渡は、幸村の訊たずねを、そのままつぶやき返して、

「武蔵のことじゃないかな」

「そうそう。宮本武蔵。——武蔵と申しました」

「それがどうしたので」

「当時まだ二十歳に満たない年少でしたがどこか重厚な風があり、いつも垢汚れたあか服装して愚堂和尚の禅室の端に来ておりましたが」

「ほ。あの武蔵がの」

「では、お覚えでございましたかな」

「いや、いや」

佐渡は、かぶりを振って、

「てまえが心に止めたのは、つい近年で——それも江戸在府中のこと」

「江戸におりますか今は」

「実は、御主命もあって、それとなく尋ねてはおるが、どうも居所が知れぬのでおさる」

「あれは見所がある。あれの禅は物になろうと、愚堂和尚が申されたことがあるので、それとなく、私も見ておりましたが、そのうち忽然こつぜんと去つてから幾年いくとせもなく——一乗寺下り松の試合に、彼の名を、うわさに伝え聞き、やはり和尚のお眼はたしかなものと、思い合せていました」



「てまえはまた、そういう武名とは異ことなつて、江戸在府のころ、下しも総うぎの法典ケ原と申す土地で、土民を育成し、荒蕪こうぶの地を開墾しておるめずらしい心がけの牢人があると耳にして、会つてみたいと、探してみたところ、もう土地におらぬ。——それが後で聞けば、宮本武蔵という者と聞き、いまだに心に留めていたのでござる」

「何せい、私の知るうちでは、あの漢おとしなどが、和尚の申す、真の牢人。いわゆる蒼海の珠だつたかもしれませぬ」

「主あるじ殿どのも、そう思われるか」

「愚堂和尚のお噂に、ふと思ひ起したのですが、どこか心の隅に残るだけのものはある漢おとしでしょう」

「実はその後、手前から主君忠利公に御推挙はしてあるのじやが、蒼海の珠はなかなか会い難うて」

「武蔵なら、私も、御推挙申してもよいと思ひまする」

「——とはいえ、そういう人物となると、仕官の先にも、ただ禄ろくばかりでなく、自身の目ざす働くじやまきばえに、望みを抱いているにちがいない。——案外、細川家よりの迎えよりも、九度山くじやまからのお迎えを、待つておろうも知れませぬぞ」

「え？」

「ははは」

佐渡はすぐ笑い消した。

だが今、不用意のうちに、幸村へいった佐渡のことばは、必ずしも、不用意な言とはいえない。

悪くいえば主の肚をさぐるうとして鋭鋒の先を、ちらと見せたものと取れる。

「……お戯れを」

と、幸村も、笑い顔だけでは反らしかねて、

「なかなか、若党ひとり、今では召抱えられる身ではなし——何で名だたる牢人衆などを、九度山へ迎え取りましょうぞ。もつとも、先でも来もいたしますまいが」

言い訳に落ちるとは知りながらも、ついいい足してしまったのである。佐渡は、この機と、

「いやいや、お包みあるな。関ヶ原の合戦に、細川家は東軍に御加勢、徳川方と旗幟はすでに鮮明でおざるし——また、其許そこもとにおかれては、故太閤さまの遺孤秀頼君ぎのみが、唯一の味方とお頼みの人とは世上にかくれもないことよ。……最前もふと、床しこのお懸物かけものを拝す

につけ、ふだんのお心がけも床ゆかしゆう覚えていましたわえ」

と、壁の秀頼の書を顧みながら、戦場は戦場、ここはここと、胸をひらいていったのであつた。

## 六

「そう仰つしやられると、この幸村、穴にも入りたい心地がいたす」

と彼は、佐渡のことばを、思いのほか迷惑ていそうな態で、

「秀頼公のその御書ごしよは、太閤さまの御影みえいと思えとて、大坂城のあるお方より、わざわざ下された物とて、粗末にもならず、懸かげてはおきますが……すでに太閤さまも亡き今日では」

と、さし俯うつむ向いたまましばし声をのんでまた、

「——遷うつりゆく世はぜひもござらぬ。大坂の御運がどうなるか。関東の勢威がどこまでゆくか。賢者でのうても、今は誰の目にも見えて来た時勢。——というて、にわかには節を曲げて、二君に仕えもならず——というのが幸村のあわれな末路。おわらい下されい」

「いや、御自身でそういわれても、世間は承知いたしますまい。あけすけに申そうなら、淀殿よどののや秀頼君より、年々莫大ばくだいなお手当もひそかに貢みつがれ、この九度山を中心に、其そこも許が手ひとつ挙げれば、五千六千の牢人は物の具とつてすぐ馳せあつまるだけの手飼の衆もあるとやら——」

「ははは、根もないことを……。佐渡どの、人間、自分以上に、自分を買われている程、辛いものはございませぬ」

「じやが、世間のそう思う方がむりもない。お若い頃から、太閤さまにも、側近くおかれて、人一倍お目をかけられた其許。その御恩顧やらまた、真田昌幸が次男幸村こそは当代の楠くすのきか孔明かと、囁しよくもく目されておられるだけに」

「おやめ下さい。そう聞くほど身が縮みまする」

「では、誤聞かな？」

「願わくは法の御山のふもとに余生の骨を埋め、風流は身にないことながら、せめては田でも殖ふやし、子の孫を見、秋は新蕎麦しんそば、春は若菜のひたし物を膳にのせ、血ぐさい修羅ばなしや戦いくさのことは松吹く風と聞いて長命をしとう存じまする」

「はて。御本心で」

「近ごろ、老荘の書物など、暇にあかして読みかじるにつけても、この世は、楽しんでこそ人生。楽しまずして何の人生ぞや、などと悟りめかしております。……お蔑みではあらうなれど」

「……ほほう」

真にはうけないが、佐渡は真にうけた顔して、わざと呆れ顔をつくって見せる。

——かかるうちもう半刻。

主客の間には、幾たびか茶がつき代えられ、そのたび大助の嫁らしい女性が見えて、何くれとはなく気をくぼぼって退がってゆく。

佐渡は、菓子台の麦落雁をひとつ摘んで、

「だいぶ、いらざるお喋べりをして、おもてなしにあずかった。……縫殿介、ぼつぼつお暇しようか」

板縁を顧みていうと、

「あいや、もうしばらく」

と、幸村はひきとめた。

「——嫁とせがれどもが、あちらで今、蕎麦など打って、何やら支度しておるそうな。山

家<sup>まが</sup>とて、ろくなおかまいもなりませぬが、まだ陽は高いし、学<sup>か</sup>文<sup>む</sup>路<sup>ろ</sup>へお泊りとすれば御<sup>ご</sup>悠<sup>ゆる</sup>りでよい筈。まず、暫<sup>さん</sup>時<sup>じ</sup>は」

そこへ大助が、

「父上。どうぞお越しを」

「できたのか」

「はい」

「座敷も」

「あちらへ設<sup>しつら</sup>えておきました」

「そうか。では……」

と、客<sup>うな</sup>を促<sup>なが</sup>して、幸村は、縁づたいに、先へ立った。

せつかくの好意、佐渡もこころよく後について行つたが、その時ふと、不審な物音を、裏の竹林の彼<sup>む</sup>方<sup>こう</sup>に聞いた。

その音は、機はたを織る音かとも思えたが、機よりも大きな音で、調子もちがう。

竹林を前にした裏座敷に、主人と客に供える蕎麦そばが出ていた。

酒の瓶子へいしも添えてある。

「不出来でございませうが」

大助がいつて、箸はしをすすめる。まだ人馴れない嫁が、

「おひとつ」

と、瓶子を向ける。

「酒は」

と、佐渡は杯を伏せて、

「こちらがよい」

と、蕎麦そばに向う。

強しいてはすすめず、大助も嫁もほどよく退さがる。——その間も、竹林の彼方から、機はたに

似た音がしきりに耳につくので、佐渡は、

「あれは何の物音で」

と、訊ねた。

幸村は、客にきかれて、客の耳ざわりになつてゐることを、初めて気づいたように、

「お。あの音でおざるか。あれはお恥かしいが、生活たつきの援たすけに、家族どもや子飼いの召使どもにやらせておる組くみ紐ひも打ちの細工場で、紐打ちの木車もくしやを掛けてゐる音でござります。

……自分たちは、職業でもあり、朝夕耳に馴なれていますが、お客には、おうるさかろう。

……早速、申し遣つかわして、木車の機はたを、止めさせましょう」

手をたたいて、大助の嫁をよびかける容ようす子こに、

「いや、それには及ばぬこと。お職所さまたの邪よこしまけしては、かえつて居辛ひらうおざる。平ひらに、平ひらに」と、佐渡は止めた。

ここの裏座敷は、母屋の家族たちがゐる所に間近いとみえて、出入りの者の声や、厨くりやの音や、どこかで銭をかぞえる音や——前の離室はなれとはだいぶ空気がちがっている。

(はて? ……。こうもしなければ食えないほどな境遇きんごだろうか)

佐渡は怪訝いぶかつたが、まったく大坂城からの貢みつぎがないとすれば、落魄おちぶれた大名の末路はこうもあろうかと思わぬでもない。家族が多い、農事には馴なれない、ある限りの品は、売喰うけいしていつかは尽きてしまう。

あれこれ、思いすぎたり、惑まどつたりしながら、佐渡は、蕎麦そばをすすった。だが蕎麦の味



から、幸村の人間を、嘯みわけることはできなかつた。総じて、

(漠ぼくとした漢おとこ——)

という感じであつた。十年ほど前、愚堂和尚の膝下しつかで知つた頃の印象とは、どこか勝手がちがつていた。

しかし、こつちで独り角力ずもうを取つている間に、幸村は、自分を通して、細川家の意志なり、近状なりを、雑談の端からでも、嗅かぎ取つているかも知れない。

——探りがましいことは、彼の口からは、塵ちりほども、訊かれていないが。

訊かないといえ、第一、自分が何の用務を帯びて、高野山へ来たのか。——それすら幸村は訊ねようとはしない。

佐渡の登山は、もとより主命なのである。故人の細川幽齋公は、太閤在世中にも、侍して青巖寺へ来たことがあるし、山上に長くいて、歌書の著述などを書いていた一夏もある。青巖寺にはその折のままになつている幽齋公の直筆の書物や文房の遺物かたみやらが何かと置いてある。その整理と、受取の打合せに、ことし三年の忌会きえを前に、豊前の小倉からわざと身軽で来たわけだつた。

——そんなことも、幸村は糺ただそうともしない。迎えの大助がいったとおりに、門前を通り

すがりの客へ茶一つの饗応をするのが、裏も表もない彼の真意でありまた、好意としか思えなかった。

## 八

供の縫殿介ぬいのすけは、先ほどから縁端に畏まったままでいたが、奥へ通された主人の身が、不安でならなかった。

いくら表面は歓待しているようでも、ここは、敵方の家である。徳川家にとっては、油断のならない大物として、注意人物の第一に視みている人間の家。

紀州の領主浅野長晟ながあきらは、そのために徳川家から特に九度山の監視をいつつけられているとも聞えている。相手が大物だし、つかみよのない幸村という人物なので、手古摺てこずっているといううわさもかねがね聞くところだし、

「……よいほどに、お帰りなさればよいのに」

と、縫殿介は、気を揉もむのだった。

この家にどんな詭計きげいがないとも限らないし、またそんなことはないとしても目付役の浅

野家から、徳川の方へ、細川家の藩老が微行しのびの途次に立寄ったと報告されるだけでも徳川の心証を悪くしよう。

関東と大坂のあいだは、事実、それほど険悪なのである。そんなことにお気づきなさらぬ佐渡様でもないのに。

——などと縫殿介は、奥のほうばかり窺うかがつて、案じていたが、ふと、縁の傍らの連れんぎよ翹うや山吹の花が、ゆさと大きく揺れたかと思うと、いつか墨をながしていた空から、板いた廂びさしをかすめて、ポツリと雨が落ちて来た。

彼はふと、

「よい機しお——」

と、思いついて、縁を下り、佐渡が響応しおされている部屋の方へ庭づたいに歩み、そこから、

「雨が来そうでございます。御主人様、お立ちなれば、今のうちにと存じます」

声をかけると、先刻さつきから話にとらわれて起ちかねていた佐渡は、心ききたる奴やつと、直ぐ応じて、

「や、縫ぬいか。……何、降つて参つたと。今のうちなら濡れもしまい。どれどれ、早速お暇

しよう」

幸村へあいさつして、きみじか気短に立ちかけると、幸村も、せめて一夜はお泊りをとある所だったが、主従の気もちを察してか、強いてともいわず、大助と嫁を呼んで、

「お客に、みの蓑をさしあげい。そして大助は、かむろ学文路までお送り申しあげて——」  
といいつけた。

「はい」

大助は、蓑を持つてくる。それを借りうけて、佐渡は、門を辞した。

はや迅い足の雲が千丈ヶ谷のふところや、高野の峰々から空を翔かけてくるが、雨はさしたることもない。

「ご機嫌よう」

幸村とその家族たちは、門の辺りまで、客を送っていった。

佐渡も、いんぎんに礼を返し、そして幸村へは、

「いずれまた、雨の日か、風の日か、お目もじいたす日もおざろう。ご健勝に——」  
と、いった。

幸村は、ニコとうなずいた。

やがてまた。

やがてまた。

お互いに馬上長槍の姿を、その時ふと描いて胸につぶやき合つたであろう。だが、塀ごしの杏あんずの花は、しとどに散つて、送る主あるじと、去る客の蓑を、惜しむ行く春の斑ふにしらじらと彩いろどつた。

大助は、送つて行きながら、その途みち々々、

「さしたる降りはありません。晩春の空そら癡くせで、山には一日一度ずつ、きつとこんな疾はやて風雲ぐもが通るのです」

と、いった。

だが雲脚に追われて、おのずと足も急いで来ると、やがて学文路かむろの宿の入口あたりで、彼方から駈けて来る一駄の馬と、白衣びやくえの山伏に行きあつた。

## 九

荷駄の背には荒菰あらごもを蔽おほいかけてある。そしてがんじがらみにした男の体を鞍の上にく

くしつけ、両側から柴の薪束まきたばを抱き合せてある。

山伏は、先に駈け、旅商人たびあきゆうどていの男が二人、ひとりか手綱を持ち、ひとりは細竹を持つて、馬の尻を打ちたたきながら、急ぎに急いで来たのだった。

——と。その出合いがしら。

大助のほうは、はつと眼を反らし、わざと連れの長岡佐渡へ、何か話しかけたが、その眼に気づかず、山伏のほうは、

「おうつ、大助様つ」

と、弾み声はずで、呼びかけた。

にも関わらず、大助はなお、聞えぬふりをしていたが、佐渡と縫殿ぬいのすけ介とは、異なる顔を  
して、すぐ足を止め、

「大助どの、誰か呼んでおりますぞ」  
と教えつつもそれへ眼そそを注ぐ。

ぜひなく、彼は、

「おお、林鐘坊りんしょうぼうどの。何処へ」

さりげなくいい寄ると、山伏は、

「紀見峠からいっさんに——これから山のお屋敷へ直ぐ参ろうと思つて」と、声高に立話をし始め、

「先頃、知らせを受けていた怪しげな関東者を、奈良で見つけ、やつと紀見の上で、生擒いけんどつたのでござる。人なみ優すくれて、面つらだましいの剛気なやつ、月げつそう叟様の前にひきすえて、泥を吐かせたなら、関東方の反間はんかんの機密などが、或はこの者の口から……」

黙つていれば、問わぬことまで、立板に水のような調子で誇り顔に喋しゃべり出すので、大助も遂に、

「これこれ、林鐘御坊、何をいうのか。わしにはいっこう分らぬが」

「ご覧ごらんませ。馬の背を。——その馬の背に引く縛くつてある奴こそ、関東者の隠密で」

「ええ。ばかな」

堪たまらなくなつて、もう眼や顔つきでは、間に合わなくなつたように、大助は一喝かつした。

「往来わらいばたで——しかも、わしのお供いたしておるお客を誰ぞと思う。——豊前小倉の細川家の御老臣、長岡佐渡様。滅多なことを……いや戯れも、ほどにいたしたがい」

「えっ?」

林鐘坊は、はじめて、眼をべつな方へ遣やつた。

佐渡と、縫殿介とは、耳のないような顔して、彼方あち此方こち、眺めていたが、その間も、迅い雲脚は頭のうえを越えて行き、雨まじりの風の落ちて来るたび、佐渡の着ている蓑みのは、鷺さぎの毛のように、風に膨ふくらんだ。

——あれが細川家の？

と、林鐘坊は、口をつぐむと、さも意外らしく愕おどろきと怪しみを湛えた横目づかいで見えていたが、

「……どうして？」

と小声で、そつと大助へ、訊ねていた。

ふた言三言。何か囁ささやいて、大助はすぐこつちへ戻つて来たが、それを機しおに長岡佐渡は、「もうここで、お引取りください。これ以上は、かえつて恐縮」

と、強いて大助と袂たもとをわかち、会釈もそこそこ立ち去つた。

大助は、是非なげに、なお佇たたずんだまま見送つていたが、その眼を荷駄馬と山伏のほうへ返すと、

「迂濶うかつな」

と、たしなめて、



「場所がら、人がら、よう眼をあいて、物はいうものぞ。お父上のお耳へでもはいつたら、ただ事には措おかれまいぞ」

「はつ。……よもやと存じて」

山伏は面目なげに謝った。あれよ真田さなだの郎党とろうだん鳥海とりうみ弁蔵べんぞうと、この辺では知らぬ者もなかつたが。

## 港

### 一

（——おらは、気が狂ちがつたのかな？）

伊織はときどき、そんな恐怖に襲われた。水溜みずたまりを見ると、自分の顔を映うつして、

（顔はわかる）

と、いくらか心を安めた。

きのうから歩いている。——どう歩いているのか、見当もつかない。

あの断層の底を這い上がってからずつとのことなのだ。

「来いっ」

発作的に、いきなり空へ向って、唳鳴ったり、

「畜生ッ」

と、地を睨んで、その氣力が抜けると、肱ひじを曲げて、涙を拭いたりした。

「——おじさあん」

権之助を呼んでみる。

やはりこの世にはもういないのだと思う。謀はかられて殺されたのだと考える。あの附近に散らばっていた権之助の遺品を見てから、伊織はそう思いこんでしまった。

「……おじさあん。おじさーん」

多感な少年のたましいは、むだと知りながらも、呼ばずにいられなかった。きのうから歩きつづけている足のつかれも知らない。その足にも、耳の辺へも、手にも血がついている。着物が裂けている。しかし、何も顧かえりみようとしない。

「どこだろう？」

ときどき、われに戻る時は、胃の腑ふから空腹を訴えられる時だった。何かは喰べていた

が、何を喰べて来たか、よく覚えてないのである。

おとといの晩泊った金剛寺へなり、或は、その前の柳生ノ庄なりを思い出せば、歩む<sup>め</sup>目<sup>め</sup>のもつくわけだが、伊織の頭には、断層以前の記憶は、まだ何もよみがえって来ないらしい。

漠<sup>はく</sup>として、

(生きている——)

身を感じ、急に独りぼっちになった身の、生きる道を、探り歩いている形だった。

バタバタと虹のように眼を遮<sup>さえぎ</sup>った物がある。雉<sup>き</sup>子<sup>じ</sup>だった。山藤の香りがする。伊織は坐りこんで、

(何処<sup>どこ</sup>だろ?)

もいちど、考えた。

ふと彼は縋<sup>すが</sup>るものを見つけた。大日様の微笑<sup>ほほえみ</sup>である。大日様は、雲の彼方にも、峰にも谷にも、何処にでもいるものと彼には思われたので、山芝の上にぺたんと坐ると、

(わたしの行く先を教えてください——)

と、掌<sup>て</sup>を合せた。

眼をつぶっていた。

そしてしばらくして、顔を上げると、山と山のあいだに、遠く海が見えた。薄ッすらと、碧い靄のように見えた。

「……坊んち」

さつきから彼の背後に立つて怪訝しげに眺めていた婦人がある。娘と母であろう、二人とも軽い旅装いはしているが身綺麗にして、男の供も連れていない様子。近国に住む良家の者の、神詣でか仏参か。徒然の春の旅か。そんなふうに見うけられる。

「……何？」

伊織は、振向いて、御寮人と娘の顔をじつと見た。まだどこか、眼がうつろなのだった。

娘は、母を見——

「どうしたんでしよう？」

と、ささやいている。

御寮人は、首をかしげていたが、伊織のそばへ寄って来て、手や顔の血に、眉をひそめながら、

「痛くないのかえ」

と、訊いた。

伊織が、顔を横にふると、御寮人は娘のほうを顧みて、

「分ることは、分るらしいよ」

二

どっちから来たのかえ。

生れは何処。

名は何というのか。

そして一体、こんな所に坐つて、何を拝んでいるのか——などと御寮人とその娘に訊ねられて、伊織はようやく、われとわが身を取り戻し、平常の彼にも近くなつた容子ようすで、

「はい、紀見の峠で、連れの者が殺されました。そしておらは、山の割れ目から這い上がつて、昨日からどっちへ行こうかと迷つてしまい、思い出して大日様を拜んでたら彼方むこうに海が見えて来た——」

初めは、不気味がついていた娘のほうも、伊織の話を知ると、かえって母らしい御寮人の上に、同情をよせ、

「まあ、可哀そうな子。おつ母さん、堺<sup>さかい</sup>まで連れて行ってやりましょうよ。もしかしたら、ちようど年頃だし、お店で使つてやつてもいいじゃありませんか」

「それはいいけれど、この子が来るかしらね」

「来るだろ。……ねえ？」

伊織が、うんというど、

「じゃあお出で。その代りこのお荷物を持つてくれるかえ」

「……うん」

まだどこか、肌馴れない気がするとみえ、連れになつて歩いてても当分のうち伊織は何をいわれてもただ、うんとのみしかいわなかつた。

だが、それも長いあいだではない。山を降り、村の道が尽きると、やがて岸和田<sup>きしわだ</sup>の町へついた。さつき、伊織が山から見た海は、和泉<sup>いずみ</sup>の浦であつたのだ。人間の多い町中を歩くうち、伊織は、母娘<sup>おやこ</sup>の連れにも馴れて、

「お婆さん、お婆さん家は何処<sup>ち</sup>だえ」

「堺さかいだよ」

「堺さかいって、この辺」

「いいえ、大坂の近く」

「大坂はどの辺」

「岸和田から、船に乗って帰るんですよ」

「え。船に？」

これは伊織に取って、思いがけない喜びらしかった。その喜びにはしやいで、問わず語りに彼が喋しゃべ舌しやべるには——江戸から大和まで来る間、川の渡船わたしに幾たびも乗ったが、海の船にはまだ乗ったことがない。おらの生れた下総しもつぎには海はあるけれど船には乗ったことがない。——それに乗れるんならほんとに欣うれしいなあ。と他愛うれもなくいいつつける。

「伊織や」

と、娘はもう名を覚えて、

「おばさん、おばさんって、呼ぶのは、おかしいから、お母さんのことは、御寮人ごりょうにんさまとお呼び。わたしのことは、お嬢さんと呼ぶですよ。——今から癖をつけておかないといけないからね」

「うん」

と、うなずくと、

「うん……もおかしいよ。うんなんていう返辞はありませんよ。はいと仰っしゃい。これからは」

「はい」

「そうそう、お前なかなか良い子だね。お店で辛抱してよく働けば、手代に取立てて上げますよ」

「おばさん家は……あ、そうじゃない、御寮人さまの家は、いったい何屋なの」

「堺さかいの廻船問屋さ」

「廻船問屋って」

「おまえには、分るまいが、船をたくさん持って、中国、四国、九州のお大名方の御用をしたり、荷物を積んで、港々に寄つたりする……商人あきんどなのさ」

「なアんだ。——商人あきんどか」

伊織は急に、御寮人さまやお嬢様を、下に見るように眩つぶやいた。



「なアんだ、商人かつて？——。まあこの子は、生意気な口をきいて！」

と娘は、母と顔を見あわせ、そして拾ってやったつもりでいる伊織の小さい体を、少し小憎らしいように見直した。

「ホ、ホ、ホ、ホ、商人といえは餅売りか、そこらの呉服商（びふくあきない）が、精々みたいと考えているからだよ」

御寮人は、聞き流して、むしろ愛嬌に取っていたが、娘は、堺商人の誇りをもって、一応いつて措（お）かなければ気がすまないような容（よう）子（す）——

その自慢ばなしに依ると。

廻船問屋の店は、堺（さかい）の唐人町（とうじんまち）の海岸にあつて、三戸前（みとまえ）の蔵と、何十艘（そとう）の持船がある。

また店は、堺のみでなく、長門（ながと）の赤間ケ関（あかま せき）にもあるし、讃岐（さぬき）の丸亀にも、山陽の飾磨（しかま）の港にも出店がある。

わけて小倉の細川家からは、特に藩の御用も仰せつかつているので、お船手印（ふなてじるし）もゆるされ、苗字（みょうじ）帯刀もいただいで、赤間ケ関の小林太郎左衛門（たろうざえもん）といえは、中国九州きつて知

らない者はない。

等々々、ならべたてて、

「商人あきんどといつてもお前、ぴんからきりまであるよ。廻船問屋というものは、いざ天下の大戦とでもなつてごらん。薩摩様さつまでも細川様でも、藩のお手船だけでは足りはしない。だからふだんは凡ただの問屋でも、いざとなれば、御合戦の一役をするのですからね」

と、その小林太郎左衛門の娘であるお鶴は、口惜しがって、頻りと説く。

御寮人は、お鶴の母であり、太郎左衛門の妻でもあつて、名はお勢様せいという——ことなども、やがて伊織に分つて、伊織もすこしい過ぎたと思つたか、

「お嬢さん。怒つたの」

と、機げんをうかがう。

お鶴も、お勢も、笑つてしまひながら、

「怒りはしないけれども、おまえみたいな井の中の蛙の子が、あまり小癩こしゃくな口を、きくからですよ」

「すみません」

「お店には、手代だの若い者だの、それから船がつくと、水夫かこや軽子かるこがたくさんに入入り

するから、生意気なことをいうと、懲らしめられますよ」

「はい」

「ホホホホ。生意気かと思うと、素直なところもあるね、おまえは」

と、よい玩具おもちゃにして扱う。

町を曲がると、海のおいが直しかに面おもてに打つて来た。岸和田の船着場である。この地方の産物を積んだ五百石船がそこについていた。

お鶴は、指さして、

「あれへ乗って帰るんだよ」

と、伊織へ教え、

「あの船だつて、うちの持船なんだからね」

と、誇る。

そこらの磯茶屋から、その時彼女たちの姿を見かけて、駈けて来る三、四人があつた。船頭や小林屋の手代らしく、

「お帰りなさいまし」

「お待ちしておりました」

と、挙つて出迎え、

「生憎と積荷が沢山で、お席も広く取れませんが、彼方へ支度もして置きましたから直ぐにどうぞ」

先に立つて、船の内へ導いて行つたが、見れば、艫寄りの一劃に幕をめぐらし、緋毛氈をしき、桃山蒔絵の銚子だの、料理のお重だの、水の上とも思われない、豪華な小座敷が拵えてある。

#### 四

船は滞りなく、その晩、堺の浦につき、小林の御寮人とお鶴様とは、船が着いた川尻のすぐ向いにある大きな間口の軒へ、

「お帰りなさいませ」

「ようお早く」

「きようはまた、お日和もよくて」

などと老番頭から、若い者にいたるまで、出迎える中を、奥へ通りながら、

「そうそう、お帳場どん」

と、店と奥の中仕切なかじきりで、御察人は、老番頭の佐兵衛を顧みていった。

「そこへ立っている子だが」

「へいへい。お連れになった汚い童わっばでございませうか」

「岸和田へ出る途中で拾って来た子なんだけれど、氣転がききそうだからお店で使ってみてごらん」

「道理で、変な者が、くツついて来たと思いましたが、道で拾っておいでになったんで？」  
「しらみでもたかっているといけないから、誰かの、着物をやって、一度、井戸端で水をかぶせてから寝かしてやっておくれ」

中仕切の内緒ないしよのれん暖簾から先は、ちようど武家の奥向と表のような区別があつて、番頭でもゆるしがなければはいれない。いわんや拾われて来た風来の子に過ぎない伊織においては、その晩から、店の片隅に置かれたのみで、御察人とお鶴様の顔を見ることも、それきり幾日もなく日は経たつた。

「いやな家だな」

助けられた恩よりも、伊織には商家のしきたりが、事々に窮屈だし、不満だった。

丁稚<sup>でっち</sup>丁稚と、ひとを呼ぶ。

あれをしろ、これをしろ。

若い者から老番頭まで、犬ころのように追い使う。

それらの人間がまた、奥の者とかお客とかいうと、額<sup>ひたい</sup>がつかえる程、頭ばかりぺこぺこ下げる。

そういう大人達はまた、明けても暮れても、金々々と、金のことばかりいつてるし、仕事仕事と、人間のくせに仕事にばかり追われている。

「いやだ、逃げ出そうか」

伊織は、何度も思った。

青空が恋しい。土に寝た日の草のにおいが懐かしい。

## 五

いやだ。逃げ出そうか。

そう考える日は、伊織の胸に、武蔵のはなしや、心を磨く道の語らいをしてくれた、師

の武蔵の姿や、別れた権之助のことが、ひしひし慕われていた。

そして、自分の実の姉と聞きながら、まだ行き会えぬお通の面影だのが——  
けれど。

そう思い募る日もあり、夜もありつつも、少年の一面には、この泉州堺という港場のもつ絢爛な文化だの、異国的な街だの、船舶の彩だの、そこに住む人たちの豪華な生活だのにも、ただならぬ目をみはつて、

(こんな世界もあるのか)と、心から驚いた。

また、憧憬や、夢や、意欲をも抱いて、いつとはなく日を送っていた。

「おいつ、伊お！」

帳場で、老番頭の佐兵衛がよんでいた。伊織は、広い土間と納屋蔵の露地を掃いていた。

「伊お！」

返辞をしないので佐兵衛は帳場から立つて来て、櫂の角材が、漆で塗ったように黒くなっている店先の框まで出て来て、呶鳴りつけた。

「新参の丁稚つ。呼んでるのになぜ来ないのか」

伊織は、振向いて、

「は。おらか」

「おらという奴があるかつ。わたくしといえ」

「はあ」

「はあじゃない。へいというのだ。腰をひくく」

「へーい」

「おまえ、耳がないのか」

「耳はある」

「なぜ、返辞しない」

「だって、伊お伊おと呼ぶから、自分のことじゃないと思つたんだ。おらは——わたくし

は、伊織という名ですから」

「伊織なんて、でっち丁稚の名らしくないから、伊おでいい」

「そうですか」

「こないだも、あれほどわしが禁じておいたのに、また、変な物を持ちだして、腰に差し  
ているな。……そのまき薪ぎツぼうのような刀を」

「へい」



「そんな物、差してはいけないぞ。商家の小僧が、刀など差すなんて。——ばかつ」

「……………」

「こつちへ出せ」

「……………」

「何をふくれている」

「これは、お父っさんの遺物かたみだから、離せません」

「こいつめ。よこせというのに」

「わたしは、商人あきんどなんかに、成れなくてもいいから」

「商人なんか——だと。これ、商人がなかったら、世の中は立ちはしないぞ。信長公が  
偉いの、太閤様がどうだのといつても、もし商人がなかったら、聚楽じゅうらくも桃山も、築けは  
しない。異国からいろんな物もはいりはない。わけても堺商人さかいはな、南蛮なんぼん、呂宋ルソン、福  
州、厦門アモイ。大きな肚あきなで商いあきなをしているのだ」

「わかつてます」

「どう分つてる」

「——町を見ますと綾町、絹町、錦町などには、大きな織屋はたやがありますし、高台には、呂

宋屋のお城みたいな別室があるし、浜には、納屋衆なやしゅうというお大尽だいじんのやしきや蔵がならんでいます。——それを思うと、奥の御寮人さまやお鶴様が、自慢たらたらこのお店も、物の数でもありません」

「この野郎」

佐兵衛は、土間へ、跳んで降りた。伊織は箒ほうきを捨てて、逃げ出した。

## 六

「若い衆つ。その丁稚てつちをつかまえろ。つかまえてくれっ」

佐兵衛は、軒から呶鳴ななめった。

河岸で荷揚の軽子かるこをさしずしていた店の者たちが、

「あ。伊お公だな」

追っ取りまいて、すぐ伊織を捉えとらえ、店の前へ引きずって来た。

「手におえん奴じや。悪たいはいうし、わし達を小馬鹿にはするし。きようはうんと、懲こらしてやってくれ」

佐兵衛は、足を拭いて、帳場へ坐つたが、またすぐ、

「それから、伊おが差しているその薪ぎツぼうを、こつちへ奪り上げておきなさい」と、いいつけた。

店の若い衆たちは、伊織の腰からまず刀を取上げた。それから後ろ手に縛つて、店先に幾山も積んである荷にこうり梱の一つへ、飼猿みたいに縛しつけ、

「少し人様に笑われろ」

と笑いながら、立ち去つた。

恥は、伊織がもつとも尊ぶところだし、武蔵からも、権之助からも恥を知れとは、常々聞かされていたことである。

——恥はじさら曝しだ。

と自分を思うと、伊織は、少年の烈しい血を狂的にたかぶらせて、

「解いてくれっ」

と、さげび、

「もう為しない」

と、謝り、それでも許されないと、今度は悪たいに代つて、

「ばか番頭。くそ番頭。こんな家なんかにおいてやらないから、縄を解けつ。刀を返せ」と、喚わめいた。

佐兵衛はまた、降りて来て、

「やかましい」

と、伊織の口へ、布をまるめて押しこんだ。伊織が、その指へ噛みついたので、佐兵衛はまた、若い者を呼びたてて、

「口を縛つてしまえ」

と、いった。

もう何も呼べなかった。

往来の者が皆、見て通る。

わけてこの川尻と、唐人町の河岸すじは、便船に乗る旅客だの、商人の荷駄だの、物売り女だのと、往来が繁はげしかった。

「……く。く。……くつ」

猿ぐつわの口のなかで、伊織は声をもらしていた。そして身をもがき、首をふり、やがては、ぼろぼろ泣いている。

その側で、荷を積んだ馬が、とうとうと尿いばりをしていた。尿の泡が、伊織のほうにながれて来る。

刀も差さない、生意気もいわないから、もう縛いましめだけ解いてもらいたい、と伊織は心から思ったが、その訴えも叫べない。

——すると。

もう真夏に近い炎天を、市女笠いちめがさに陽を除けながら、細竹を杖に、麻の旅衣を裾短すそみじかにくくりあげて——ふと、荷馬の向う側を通り抜けた女性がある。

(……あつ。おやつ?)

伊織の眼は飛びつきそうに、その人の白い横顔へ耀かがやいた。

どきん！ と胸が鳴って、体じゆうがくわつと熱くなつて、気もみだれてしまいかけた刹那に、その人の白い横顔は、わき目もせず、店の前を過ぎて、後ろ姿になってしまった。

「ね、ねえ様だつ。——姉様ねえのお通さんだつ……」

首を伸ばして、伊織は、絶叫した。いや、彼だけは、絶叫をもって、その人の背後へ呼びかけたつもりであろうが、声は誰にも、聞えてはいなかった。

## 七

泣きぬいた後は、声も出ない。ただ肩で嗚咽おえつしているきりだった。

伊織は、喚わめけど声も出ない猿ぐつわを、涙でぬらしながら、

——今行ったのは、姉さんのお通さまに違いない！

——会えたのに。会えもしない。おらがここにいるのも、知らずに行ってしまった。

——何処へ。どっちへ？

と、思いみだれ、胸の中で、泣き躁さわいでいたが、誰ひとり顧みる者もない。

店頭みせさきは、荷揚げの船がついて、いよいよ混雑ひるして来るし、午ひるさがりの往来は、暑いのと埃ほこりで、人の足も早かった。

「おいおい。佐兵衛どん。何だつてこの丁稚でっちを、熊の子の見世物みたいに、こんな所へ縛むすっておくのだ。無慈悲な人づかいするようで、見ツともないじゃないか」

主人の小林太郎左衛門は堺の店にはいなかったが、その従兄弟いとことかいう南蛮屋なんばんやの某——黒あばたがあつて怖こわらしい顔をしているが、いつも遊びに来ると、伊織に、菓子などくれる気のいい人物があつて——その南蛮屋が、怒つていった。

「こんな往来先へ、こんな小さい者を、いくら懲らしめにせよ、小林の外間にもさわる。はやく解いてやんなさい」

帳場の佐兵衛は、伊織が、箸にも、棒にもかからないことを、

「はい。はい」

と、服従しながらも、一方でくどくど告げ口していたが、南蛮屋は、

「そんな持て余す小僧なら、わしの家へもらつて帰るよ。きようは一つ、御寮人やお鶴にも、話してみよう」

と、耳にもかけず、奥へ通つてしまった。御寮人に聞えてはと、佐兵衛はひどく惧れていた。そのせいか、にわかには伊織へ当りがよくなつたが、伊織の泣きじやくりは、縛めを解かれても、小半日は止まなかつた。

大戸が卸りて——

店も閉まつた黄昏頃。南蛮屋は、奥で馳走になつたらしく、微酔をおびて、いい機げんで帰りかけたが、ふと伊織を土間の隅に見つけて、

「わしがお前を、貰つてゆこうと、掛合つたところがな、御寮人もお鶴も、何といつてもいやだという。やはり可愛いのだよ。だから辛抱せい。……その代りにな、明日からはも

う、あんな目には、会わしやあせんで。……よいか、おい、大将。はははは」

彼のあたまを撫なでて、そういつて、帰つてしまった。

嘘うそではなかつた。南蛮屋がいつてくれた効きき目めであろう。その翌日から、伊織は店から近所の寺子屋へ通つて勉強することを許された。

また、寺子屋へ通う間だけ、刀を差すことも、奥からの言葉で、免許になった。——佐兵衛もほかの者も、それから余り辛く当らない。

だが。だが。

伊織はそれ以来、どうも眼まなざしが落着いていなかつた。店にいても、往来ばかり見ているのだ。

そしてふと、心にある人の面影に似ているらしい女性でも通ると、はつと、顔のいろまで変えるのだつた。時には、往来まで飛び出して、見送つていたりする——

それは八月も過ぎて、九月の初めだつた。

寺子屋から帰つて来た伊織は、何気なく、店さきへ立つと同時に、

「おやつ?」

と、そこへ竦すくんでしまった。その時も、彼の顔いろは、凡ただならず変つていた。



## 熱湯

一

ちようどその日は。

朝から小林太郎左衛門の店と河岸の前には、おびただしい行旅こうりよの荷物やら梱こうりやらが、淀川から廻送され、それをまた、門司もじヶ関せきへ行く便船に積みこむので、ひどく混雑していた。

荷物には、どれにも、

豊前ぶぜん細川家内某。

とか或は、

豊前小倉藩何組。

とかいう木札が見られて、そのほとんどが、細川家の家士の行李こうりなのであった。

——ところへ今、伊織が外から戻って来て、軒先に立つと共に、あつ？ といつて血相

を変えた、というわけは、広い大土間から軒先の床几しやうぎにまで溢あふれて、麦湯を飲んだり、扇おうちぎづかいしたりしている大勢の旅装の武士たちのなかに、佐々木小次郎の顔がちらと見えただからであつた。

「店の者」

と小次郎は、梱こくりの一つに腰かけて、帳場の佐兵衛をふり顧りながら、扇を胸にうごかしていた。

「船が出るまで、ここに待つておるのでは、暑うてかなわぬが——便船はまだ着いていないのか」

「いえ、いえ」

と、送り状に忙せわしい筆をうごかしていた佐兵衛は、帳場ごしに川尻を指して、

「お召たつみまるしになる 巽丸たつみまるは、あれに着いておりますが、積荷よりは、お客様方のお越しのほうほうが、滅めつそ相おはやく見えられましたので、船方衆にいつつけて、ただ今あわててお坐り場所を先に整えさせておりますので」

「同じ待つにも、水の上はいくらか涼しかろう。はやく船へ行って休息したいものだが」

「はいはい。もういちど手前が行つて急がせて参りましょう。しばらく、御辛抱を」

佐兵衛は汗をふく暇もない顔つきして、すぐ土間から往来へ駈け出したが、その物陰たたずに佇たたずんでいた伊織のすがたを横目で見ると、

「伊おじやないか。この忙しいのに、棒を呑んだように、そんな所に突っ立っている奴があるか。お客様たちへ、麦湯でも上げたり、冷たい水でも汲んで来てさしあげろ」

と叱り捨てて行つた。

「へい」

と、答える振りはしたが、伊織はついとそこから駈けて、土蔵のわきの露地口にある湯わか沸し場の陰へ来てまた、佇たたずんでいた。

そして眼は——大土間の中にいる佐々木小次郎の姿から放ちもやらずに、

(おのれ)

と、睨ねめつけて。

だが小次郎のほうでは、一向気づかない容ようす子こらしかつた。

細川家に召抱えられて、豊前の小倉に居を定めてから、彼の恰かつぶく幅はくや容ようす子こには、一倍と尾ヒレがついて来たように見られた。わずかな間だが、牢人時代のようなすどい眼まなざしざしも、落着きをもつた深い眸まなこにかわり、元から色の小白おもとい面おもてには豊かな肉もついて、触れ

ば触れるものを舌刀で斬り返すような皮肉もあまりいわなくなつた。総じて重々しい風采となり、その裡うちに養うわられて来た劍の氣稟きひんというものが、ようやく人格化して来たものと見てよからう。

そのせいもあるう、今も、彼のまわりにいる円満の家士はみな、

(巖がんりゅう流様——)

とか、

(先生)

とか、敬うやまつて、新参の師範とはいえ、軽んじるふうは誰にも見えなかつた。

小次郎という名は廃したわけではないが、その重い役目と、風俗とに、漸くふさわしくない年配にもなつたためか、細川家へ行つてからは、名も巖流と称していた。

二

汗をふきふき、佐兵衛は船から戻つて来て、

「お待たせいたしました。胴の間のお席はまだ片づきませぬので、もうしばらくお待ちね

がいますが、舳みよしにお坐りの組は、どうか船へお移り下さいまし」

と、舳みよしれた。

舳みよしへ乗る組は、輕輩と若侍たちであつた。各の荷や、身支度を見まわして、

「では、お先に」

「巖流先生。お先へ」

ぞろぞろと、一群れは店口から立つて行く。

巖流佐々木小次郎と、そのほか六、七名が後に残っていた。

「佐渡どのが、まだお見えなさらぬの」

「もう追ツつけ、着かれようが」

残つた組は、みな年配で、服装から見ても、藩の然るべき要職にある者ばかりらしい。

この細川家家中の一行は、先月、陸路を小倉から立つて、京都に入り、三条車町の旧藩邸に逗留して、そこで病歿された故幽齋公の三年忌いとなの営みやら、生前幽齋公と親しかつた公卿くげたちや知己へのあいさつやら、また、故人の文庫や遺物の整理など悉しつかい皆すまして、きのう淀川船で下り、きょうは海路の旅へ、初めての夜を送ろうという旅程にある人々であつた。

今思い合せると、この晩春ごろ、高野を下り九度山へ立寄つて去つた長岡佐渡の主従は、その八月の営みの準備のため、あれから京都へ廻つて、その経歴と顔の古い関係からも、一切の奉行を勤め了わし、今日まで同地に止まつていたものであろう。

「——西陽がさしこんでまいりました。皆様、巖流様にも、どうぞ、まちつと奥のほうでお休みくださいませ」

佐兵衛は、帳場へ返つても、のべつ気を遣つて愛想をいつていた。巖流は西陽を背にしなから、

「ひどい蠅はえ」

と、扇で身を払いながら、

「口ばかり渴かわく、最後の熱い麦湯を、もう一碗、所望したいが」と、いう。

「はいはい。熱い湯では、なおなおお暑うございませう。唯今、冷たい井水せいすいを汲ませます」

「いや、道中、水は一切飲まぬことにしておる。湯が結構だ」

「これよ——」

と、佐兵衛は坐つたまま首を伸ばして、湯沸し場のほうを覗き、

「そこにいるのは、伊おじやないか。何をしている。巖流様へ、お湯をさしあげい。各様にも」

と、どなつた。

それなり佐兵衛はまた、送り状やら何やらに眼を忙しげに俯向うつむけていたが、返辞のなかつたのに気づいて、もう一度呶鳴るつもりで顔を上げると——伊織は盆に五ツ六ツの茶碗をのせて、眼をそれに注そそいで、おずおずと大土間の一方からはいつて来た様子。

で——佐兵衛はまた、それには無関心になつて、送り状を書いていた。

「お湯を」

と、伊織は、ひとりの武家の前でお辞儀をし、順に、

「どうぞ」

と、またお辞儀をして行つた。

「いや、わしはいらぬ」

という武家もあつて、彼の捧げている盆には、まだ二ツの茶碗が熱い麦湯を湛たえて残つていた。

「お取り下さいまし」

伊織は、最後に、巖流のまえに立つて、盆を向けた。巖流はまだ気づかず、何気なく手をのびしかけた。

三

——はツと、巖流は手をひいた。

触れかけた熱湯の茶碗が熱かったためにはない。

手が、そこまでゆかない間に、盆を捧げている伊織の眼と、彼の眼とが、かちつと、火<sup>ひ</sup>華<sup>ばな</sup>を発したように、出会ったのであった。

「あつ。そちは——」

巖流の唇<sup>くち</sup>が、こ<sup>お</sup>う愕<sup>おどろ</sup>きを洩らすと、伊織はそれとは反対に、噛んでいた唇をやや弛<sup>ゆる</sup>めて、

「おじさん。この前会ったのは、武蔵野の原でしたっけね」

にと笑って見せたのである。——稚<sup>おさな</sup>い、まだ小粒な歯を見せて。

その、小癩<sup>こしやく</sup>な不敵さに、



「何！」

巖流が、思わず、大人げもない声を釣り出されて、何か、次のことばでも吐こうとしたらしく見えたせつな、

「覚えているかつ！」

と、手に捧げていた盆を——それに乗せてある茶碗も熱湯も共に——がらつと、巖流の顔を目にかけて抛りつけた。

「——あつ」

巖流は、腰かけたまま、顔をかわし、途端に、伊織の腕くびを引っつかんでから——

「ア熱！……」

片目をつぶりながら、憤然と、突つ立った。

茶碗も盆も、うしろへ飛んで、土間の隅柱に当って一箇は砕けたが、こぼれた熱湯のしぶきが、顔、胸、袴にまでかかったのであった。

「ちイツ」

「この童めが」

時ならぬ二人のさげびと、茶碗の砕けたひびきとが、一つになって、居合す人々の耳を

愕おどろかした時、伊織の体は、巖流の脚きゃつか下へ、叩きつけられた小猫のように、もんどり打つて投げられていた。

起き上がろうとすると、

「うぬ」

と、巖流は、伊織の背を、手間ひまなくふみつけて、

「店の者っ」

と、どなった。

片目をおさえながらである。

「この童わっぱは、当家の小僧か。子どもとはいえ、免ゆるし難いやつ。——番頭っ、ひっ捕えろ」  
仰天した佐兵衛が、飛び下りて来て抑いえる違いとまもなかった。巖流の脚の下に這いいつくばっていた伊織は、

「なにを」

どう抜いたか——いつもその佐兵衛から禁物にされている刀を抜き払って、下から巖流の肱ひじを狙い上げた。

巖流は、またも、

「あ、こやつ」

と、鞆まりのように、伊織の体を大土間へ蹴転がして、身を一步、うしろへ退ひいた。

佐兵衛が、そこへ、

「阿呆あほうツ」

絶叫して、飛びついて来たのと、伊織が跳ね起きたのと、同時であつたが、伊織は、狂せるもののように、

「なにをツ」

と、なおいいつづけ、佐兵衛の手が、自分の体にふれると、振りほどいて、

「ざまア見ろ！ ばかつ」

巖流の面おもてへ、そう罵ののしつたかと思うと、ぱつと戸外おもてへ向つて逃げ出して行つた。

——だが。

軒先から二間も駈けると、伊織はすぐ前へのめつて仆れていた。巖流が土間の中から、有り合う天秤てんびんを取つて、その脚もとへ投げつけたからであつた。

#### 四

佐兵衛は、若い衆と協力して、伊織の両手を捉え、土蔵露地のわきにある湯沸し場の方へ、引摺つて来た。

巖流がそこへ出て来て、濡れた袴や肩を、仲間ちゅうげんに拭かせていたからである。

「とんでもない御無礼を」

「何とお詫び致しましょうやら」

「何とぞ、御寛大に……」

などと口を揃えながら、伊織をそこにひき据えて、佐兵衛を初め店の若い衆たちは、あらゆる謝罪の辞ことばをならべたが——巖流は耳がないように、見向きもせず、仲間ちゅうげんに絞しぼらせた手拭で、顔など拭いて平然としていた。

若い衆たちに、両の手をねじ上げられて、地へ顔をこすりつけられている伊織は、そのわずかな間も、苦しがつて、

「離せつ。離してくれつ」

と、もがき叫び、

「逃げはしないよつ。逃げるもんかつ。おらだつて、さむらいの子だ。覚悟でしたこと、

逃げなんかするか！ ……」

と、いった。

髪をなで、衣紋えもんまで直してから、巖流はこつちを見て、

「——離してやれ」

穏やかにいった。

むしろ意外にして、

「……えっ？」

と、佐兵衛たちが、その寛大な面おもてを仰ぎ合つて、

「離しても、よろしゅうございましょうか」

「だが」

と、そこへ釘を打ちこむように、巖流はいい足した。

「どんなことを致しても、詫びれば免ゆるされるものと考えさせては、却つて、この少年の将来のためにならぬ」

「へい」

「元より、取るに足らぬ童わっぱのしたこと。巖流は手を下さぬが、そち達がこのままにもいた

し難いと思うなら、糾きゆうめい明として、その湯柄杓ゆびしやくで釜の煮え湯をいっぱい頭からかぶせてやれ。——命にはかかわるまい」

「……ア。その湯柄杓で」

「それとも、このまま、放してよいと、其方どもが思うなら、それでもよし……」

「……………」

さすがに佐兵衛も若い衆たちも、顔見合せてためらっていたが、

「どうしてこのままに済まされましょう。自体、日頃からよくない餓鬼がき。お手討となつてもせんない所を、それくらいなお仕置で御勘弁ねがえるものなら有難い仕合せ。……野郎、誰のせいでもないぞ。おれ達を怨むなよ」

と口々にいう。

暴れ狂うにちがいない。その素縄を持つて来い。両手を縛れ、膝を縛れ——などと大おおぎょう仰おぎょうにさわぎだすと、伊織は、それらの手を振り払って、

「何するんだいッ」

と、いった。

そして地面に坐り直し、

「覚悟してしたことだから逃げないといってるじゃないか。おらはその侍に、湯をかけてやる理<sup>わけ</sup>があるからかけてやったんだ。その返報に、おらにも煮え湯をかぶせるなら、かぶせてごらん。町人なら謝るだろうが、おらは謝る筋もないぞ。侍の子が、そればかりのことに、泣きなんかするものか」

「いったな！」

佐兵衛は、腕を捲<sup>まく</sup>つて、大釜の熱湯を柄杓<sup>ひしゃく</sup>いっぱい汲んで、伊織の頭の上へ徐々に持つて来た。

(……むウ！)

と、唇をむすんだまま、伊織は両眼をくわつと開いて、それを待っていた。

——すると、何処かで、

「眼をふさげ。伊織！ 眼をふさいでいないと、眼がつぶれる！」  
と、注意する者があつた。

## 五

誰か？ と声のほうを見る違いとまもなく伊織は、注意された通り、眼をふさいだ。

そして、頭の上から注ぎかけられる熱湯を待ちながら——その意識も払いのけて——いつしか武蔵の草庵で、ひと夜、武蔵から聞いたはなしの、快かい川せん和尚のことをふと思いだしていた。

甲州武士がふかく帰依きえしていた禅僧で、織田徳川の聯合軍が、峡きょう中ちゆうへ討入つて、山門へ火をかけた時、その楼上でしずかに炎に体を焼かせながら、

——心頭ヲ滅却スレバ火モ亦マタスズシ

と、いつて死んだという人。

眼をつぶりながら、伊織は、

(なんだ、柄ひしやく杓やくいっぱいの熱湯ぐらい)

と、思ったが、またすぐ、

(あ。そう思うのが、もういけないんだ)

と気づいて、頭のしんから体じゆうを、しーんと虚きよにして、形はあれど、迷妄も惱のう悶もんもない、無我の影になろうとした。

だが。駄目であった。



伊織には、そうなれない。いつそ伊織が、もう少し年がゆかなかつたら、或はなれよう。でなくば、もつともつと年をとつていたら、或はそこに到達されよう。彼ももう、あまりに物ごころがありすぎていた。

——今か。……今か。

ひたい額からだらりと落ちる汗も湯玉かと思えた。わずかな一瞬が、百年のように長いのだ。

伊織は、眼を開きたくなつた。

——すると、巖流の聲が、

「おお。御老台か」

と、後ろでいった。

ゆびしゃく湯柄杓を持つて、伊織の頭の上から、浴びせかけようとしていた佐兵衛も、まわ周りの若

い衆達も、往來の彼方から、

(伊織、眼をふさげ！)

と、注意した者のほうへ——思わず眼をやつて——そして一瞬、伊織へかぶせる熱湯を、ためらっていたのだった。

「えらいことが始まつたのう」

御老台と呼ばれた人物は——道の向う側から足をうつして来ていた。若党の縫殿介ひとり召連れて、茶地の麻の小袖に、夏も冬も同じ物かと思えるような野袴のばかまをはき、汗だけは、人いちばい汗あせしやう性せいらしい顔をした藩老の長岡佐渡であった。

「これは、とんだ所を、お目にかけてしもうた。はははは、懲こらしめております」  
大人げないと思われはしまいか。——巖流は藩の先輩にそう自分ですぐ斟しんしゃく酌やくしたも  
のか、紛まぎらすように笑つていった。

佐渡は、伊織の顔ばかりじつと見て、

「ふむ。懲こらしめにな。……理由のあることなら、仕置もよかろう。サササ。やりなさい。  
佐渡も見物しよう」

熱湯の柄杓ひしやくを持ち泳こらえたまま、佐兵衛は、巖流の顔を横目に見た。巖流は、相手が少年であるばかりに、自分の立場が、不利に見えていることを直ぐ覺つて、

「もうよい。これで童わっぱも懲こりたであろう。——佐兵衛、湯柄杓わっぱを退ひけ」

すると、伊織は、さつきから開くともなく開けたまま、空虚うつろに見つめていた人の顔へ向  
つて、

「あつ。おらは、お武家様を知つていら。お武家様は、下しも総そうの徳願寺へ、よく馬に騎のつ

て、来たことがあるだろ！」

と、<sup>すが</sup>縫りつきそうにして叫んだ。

「伊織。覚えていたか」

「アア！ ……忘れるもんか。徳願寺で、おらにお菓子を下さった」

「今日は、お前の先生の武蔵とやらはどうしたな。 ……この頃は、あの先生の側にはいないのか」

問われると、伊織は突然、シユクと鼻をすすって、鼻と拳<sup>こぶし</sup>の間から、ぽろぽろと涙をこぼした。

## 六

佐渡が、伊織を知っていたのは、巖流にも、意外であつた。

けれどその長岡佐渡は、自分が細川家へ仕官する前から、自分の今の位置へ、宮本武蔵を推挙していた者であり、なおその後も、君公とつがえた約を果さねばならぬとかいつて

——折あるごとに、武蔵の居所<sup>いどころ</sup>を心がけているとも聞いているので、

(何かの時、伊織を通じて武蔵と知ったか、武蔵をさがすために、伊織を知ったか。とにかく、そんな縁故だろう)

と巖流は、察した。

けれど巖流は、

(この少年を、どうしてご存じか?)

とは、強<sup>し</sup>いて訊いてみる気がしなかった。そんな緒<sup>いとぐち</sup>口から、佐渡とのあいだに、武蔵の名が話に出ることは、好ましくない。

だが、好むと好まないとに<sup>かかわ</sup>関らず、いつか一度は、武蔵と相会う日がきつと来るに違いないことは、巖流もひそかに<sup>かかわ</sup>予期していた。——それはまた、自分と武蔵との従来<sup>たどと</sup>の経歴が、何となくそうして来たばかりでなく、君公の忠<sup>ただと</sup>利も予期し、藩老の長岡佐渡も予期しているところである。いや、彼が<sup>ぶぜん</sup>豊前小倉へ着任してみると、そういう期待は、果然、中国、九州の民間にも、各藩の剣人たちのうちにも持たれていたのが、意外なくらいであった。

郷土的な関係もあろう。武蔵の生地も自分の生れた土地も共に中国だし、また、武蔵の名声も自分の名も、江戸にあつて考えるのとは想像以上に、郷土や西国一帯には話題とな

つていたのである。

なお必然、細川家の本藩支藩を通じても、伝え聞く武蔵を高く評価する者と、新任の巖流佐々木小次郎を偉なりとする者とは、何とはなく対立していた。

その一方に、巖流を細川家へ斡旋あつせんした同じ藩老の岩間角兵衛がある。だからこの空気は、大きくは天下の剣人達の興味から起つてもいるが、その真因は、藩老の岩間派と、藩老の長岡派との対立が醸かもしたものだと観みるものもあつた。

で。いずれにせよ――

巖流が佐渡に或る感じを持ち、佐渡が巖流に好意をもっていないことも明白なのだ。

「お支度ができました。胴の間まのお席のかたも、どうぞいつでも、船へお越しく下さいまし」

その時。

巖流にとつては、折もよく、巽たつみまる丸まるの水夫頭かこがしらが迎えに来たので、

「御老台、ひと足お先へ」

と、佐渡へいい、他の家中の者をも誘つて、あわただしげに、船の方へぞろぞろ立去つた。

佐渡は、後に残つて、

「船出は、たそがれ黄昏だの」

「へい。左様で」

と、番頭の佐兵衛はまだ、この場の始末が着ききらないようなおそ懼れを抱いて、店の大土間にうろうろしながらいった。

「ではまだ——休息して参つても、間に合おうな」

「間に合いまするとも。どうぞお茶など一ぷく」

「湯柄杓ゆびしやくでか」

「ど、どういたしまして」

と、佐兵衛はひどく、痛い皮肉を浴びた顔して、頭を搔いたが、その時、店と奥との仕し切きり暖のれん簾のあいだから、お鶴が顔を出して、

「佐兵衛。ちよつと……」

と、小声で呼んだ。

店先では、あまり端はしぢか。お手間はとらせませぬゆえ、住居の庭門から奥の数寄屋まで——と、佐兵衛に導かれて、

「では、ことばに甘えよう。わしに会いたいたとは、この家の御寮人ごりょうにんか」

「お礼を申したいとかで」

「何の礼じや」

「多分……」

と佐兵衛は、そこでも頭を搔いて、恐縮しながら、

「伊織のことを、無事にお扱い下さいましたので、主人に代ってそのご挨拶を申すんでございましょう」

「オ。伊織といえは、あれにも話がある。こつちへ呼んでくれい」

「かしこまりました」

庭はさすがに堺町さかいちょうにん人の数寄すきをこらしたものの、土蔵一側の隔てだが、店先の暑さや

騒さわぎは別天地のようだ。泉石も、樹々も打水に濡れ、微かすかな水のせせらぎが耳を洗う。

数寄屋の一間に、毛氈もうせんを敷きのべ、茶菓、煙草をととのえ、火入れには練香ねりこうをしの

ばせて、御寮人のお勢と、娘のお鶴は、客を迎えたが、長岡佐渡は、

「この埃ほこりまみれに、草鞋わらじがけじや。ゆるされい」

とそこに腰のみ掛けて、茶を喫した。

お勢からは、改めて、

「ただ今は、何とも——」

と、雇人たちの無考な仕方だの伊織についても、詫びやら礼をのべたが、佐渡は、

「いや何。あの子供は仔細あつてわしが以前に見かけたことのある者。来合せたのが倅しあわであつた。それよりは、どうして当家の厄介になつておるか、それはまだ伊織からも聞いてはおらぬが……」

と、訊ねた。

御寮人は、大和詣りの途中、ふと見かけて拾つて来たわけを話し、佐渡はまた、伊織の師宮本武蔵という者を、年来捜しているところじやが——などと種々くさくさの物語も出て、

「——最前、彼が熱湯を浴びせられそうになつて、大勢の中に、坐つたところを、往来をへだててじつと見ておつたが、なかなか自若じじやくとして、悪びれぬていには、密ひそかに感服した。ああいう性根しょうねの児を、商家に飼つておいては、かえつてその性根を歪ゆがめてしまふか



もしれぬ。いつそのこと、わしにくれぬか。わしが小倉へ連れ帰って、手飼の者として育ててみたいが」

佐渡から、望まれると、

「願うでもない……」

と、お勢も同意し、お鶴もよろこんで、早速、伊織を呼んで来ようと席を立つと、その伊織は、さつきから近くの木陰に佇たたずんで、その相談をのこらず聞いていたらしい。

「厭いやか」

皆に、意志を訊かれると、もちろん厭どころではない。ぜひぜひ小倉とやらへ連れて行ってくれという。

船出は間もない——

お鶴は、佐渡がそこでお茶を喫のんでいる間に、着物よ袴はかまよ、笠よ脚絆きゃはんよと、自分の弟でも旅立たせるようにいそいそした。生れて初めて、袴という物を穿はき、歴乎れつきとした武家の隨身になつて、伊織は、やがてお供をして船へ移った。

夕焼け雲に、黒い帆の翼を張りきつて、船は潮路を豊前ぶぜんの小倉へ立った。

お鶴さんの顔——

御寮人の白い顔――

佐兵衛の顔。たくさん見送人の顔。堺さかいの町の顔――

伊織は、笠を振っていた。

無可むかせんせい先生

一

岡崎の魚屋横ととやちよう。

その一つの露地口どうもに、板の打つてあるのを見れば、  
佗牢人わびろうにんの生活たつきとみえ、  
童蒙どうも道場

よみかきしなん

無可むか

と、ある。

寺子屋であろう。

だが、その先生の自筆らしい看板の文字からして、はなはだうまくない。横目にみて、

苦笑して通る識者もあるだろう。けれど、無可先生は、敢て恥としていない。問う者があれば、

(わしも、まだ子どもで、修行中だからな)

と、いうそうである。

露地の突当りは、竹やぶだ。竹やぶの彼方は馬場で、天気だと、のべつ埃が立っている。いわゆる三河武士の精鋭、本多家の家中が、騎馬の練磨に日を暮しているのだった。

で、埃がくる。

無可先生は、そのためか、いつもそちの折角明るい軒へ、一簾をかけているので、いとど狭い室内は、よけいに薄暗い。

もとより独り者。

今しがた、昼寝からさめたとき、井戸の釣瓶が鳴っていたが、そのうちに、

ばーん！

と竹藪の中で、大きな音がした。竹を伐った音である。

叢竹の中の本が、ゆさつと仆れた。しばらくすると、無可先生は、尺八にするには太すぎるし、みじかくもある一節を切つて、藪から出て来た。

鼠頭巾ねずみずきんに、鼠無地の単衣ひとえを着、脇差ひと腰。それでいて、年は若い。そんな地味ではあるが、まだ三十とは思われない。

一節切ひとよぎりの竹を、井戸端で洗い、文字どおりな裏店うらだなの室内へ上がって来ると、床の間はない——ただ壁の隅へ、一枚の板をおいて、そこへ誰の筆か、祖師像を描いたのを懸けてあるだけの——その置床おきどこの板へ、竹の節を据えた。

花挿はないけになつている。

雑草にからんだ昼顔の花を、ぽんと投げてあるのだった。

——悪くない。と、自分でも見ているらしい。

それから机に坐つて、無可先生は、習字をし始めた。褚遂良ちよすいりょうの楷書かいしよの手本と、大師流たきほんの拓本たくほんが載つている。

「……………」

ここへ住んでからでも、一年の余になる。日課を務めたせいだろう。看板の文字よりは、はるかに上達していた。

「お隣のお師匠さん」

「はこ」

筆を措いて、

「——隣のお婆さんか。暑いもう、今日も。お上がりなされ」

「いえいえ。上がつてはいられないが……何じやる？ 今大きな音がしたようだが」

「ははは。私の悪戯ですよ」

「子ども衆をあずかる先生、悪戯しては困ったものじゃ」

「ほんにな……」

「何をなされたのじゃ」

「竹を伐つてみたのでござる」

「そんならよいがわたしはまた——何かあつたのじやないかと、胸がどきつとした。うちの良人がひということだから、そうあてにはならないけれど、どうもこの辺をよく牢人衆がうろついているのは、お前さんの生命いのちでも狙っているらしい……などと聞かされているものだからね」

「だいじょうぶです。私の首など三文の値もしませんから」

「そんな暢気のんきをいってても、自分に覚えのない恨みで殺される人だつてあるからね。……  
気をつけるがいいよ。わたしはいいけれど、近所の娘さん達が、泣くからね」

## 二

隣家とよりは筆職人であつた。

亭主も女房も、親切者で、わけておかみさんは、独り者の無可先生のために、時には炊事煮物の法を教え、時には縫いもの洗濯ものの労まで取つてくれる。

それはいいが、無可先生を、ややもすると、困らせる一事は、

(いいお嫁さんがあるのだが——)  
である。

毎度毎度、やたらにそのお嫁に來たい口を持つて來ては、

(いったい、どうして女房を持たないのさ。まさか女嫌いでもあるまいに)  
と、問いつめて、時には無可先生をして殆ど、答こたえに窮きゆうさせてしまう。

だが、これは彼女の罪ばかりでなく、無可先生自身も悪いので、

(自分は、播州ばんしゅう牢人、係けい累るいもなく少しばかり學問をこころぎして、京都や江戸に學んだから、この土地で行く末は、良い塾でも持つて落着きたいと思う)

などとお座なりをいったことがあるので、年頃も年頃、人品もよし、第一に真面目でおとなしいし……と隣の夫婦がすぐ鍋釜なべかまの次に女房を考えたのも無理ではないしました、時折出歩く無可先生の姿を見かけ、嫁に行きたい、嫁に遣りやりたいと筆職人の夫婦へ洩らして口ききをすが継る向きも多いのである。

そのほか。

何の祭礼まつり。何の踊り。やれ彼岸ひがんの盆のと——小さな生活を忙しく派手に——悲しみの葬式や病人の世話事までも、寄り合世帯のように賑やかに送っている——裏町住居のおもしろさ。

その中に、寂じやくとして住んで、

(おもしろいな)

無可先生は、一脚の小机から、世間をながめ、世間に学んでいるらしかった。

しかし、こういう世間には、ひとり無可先生ばかりでなく、どんな人間が住んでいるか知れなかった。時節が時節でもある。

先頃まで、大坂の柳の馬場の裏町で、幽夢ゆうむという頭つむりを丸めた手習師匠が住んでおったが、徳川家の手で身元を洗つてみると、何ぞしらん、これが前の土佐守さき 長會ちよう我部わが宮内少輔盛しょう

親りちかの成れの果て——とわかり、大騒ぎしたが、近所に知れた時には、一夜で彼の姿はどこにも見えなかつたという噂。

また。名古屋の辻で、売ばいばくトをしていた男を、不審と見て、これも徳川家の手筋が、さぐつてみると、関ヶ原の残党毛利勝永の臣竹田永えいおう翁であつたとやら。

九度山の幸ゆきむら村、漂泊の豪士後藤基もとつぐ次、徳川家に取つて、神経にさわる人間は皆、世のなかを韜とう晦かいして、そして努めて、人目につかない暮しを、法則としてゐる。

もちろんそういう大物ばかりが世間に隠れているわけではなく、くだらない物もそれ以上、ごろついているのが世間であり、その真ほんもの物とくだらない物とが、渾こんぜん然と、見分けてもつかず隣り合っている所に、裏町の神秘がある。

無可先生についても、近ごろ、誰がいい出したともなく、無可と呼ばずに、武蔵とよぶ者が、ちらちらあつて、

「あの若い方は、宮本武蔵といつて、寺子屋などは、何かの都合でしていることで、ほんとは一乗寺下り松で、吉岡一門を相手にして勝ちぬいた、劍の名人であらつしやる」と、頼まれもせぬことを、触れてあるく者もあつた。

「まさか？」



と、いつたり、

「そうかしら……?」

と、いつたりして、無可先生むかを見ているのが、今の近所の衆の眼で、時折、夜に紛まぎれて裏の竹藪だの、露地の口だのを、密ひそかに窺うかがっているのが、隣家のおかみさんがよく彼に注意する——彼の生命を狙っている何者かの眼であつた。

### 三

そういう危険が、絶えず身を窺うかがっているのを、無可先生自身は、

(知れたもの——)

と、およそ多寡たかをくくつてもいるのか、今日も、隣家の内儀に注意されたばかりなのに、晩になると、

「お隣のご夫婦、またちよつと留守にいたすが、頼みまする」

声をかけて、出て行つた。

筆屋の夫婦は、開け放して、晩飯をたべていたので、その姿が、軒先をよぎる時ちらと

見えた。

鼠無地の単衣ねずみひとえに、編笠をかぶり、出て行く時は、大小を横たえてはいるが、袴はかまもつけず、着流しの素服。

袈裟けさ、掛絡からをまよえば、そのまま、虚無僧こむそうといった風采である。

筆屋のかみさんは、舌打ちして、つぶやいた。

「いったい何処へ行くんだろうね、あの先生はさ。子供たちの指南は、お午前ひるにすんでしまし、午からは昼寝だし、晩になると、蝙蝠こうもりみたいにな、出かけて行く……」

亭主は、笑って、

「独り者だ。仕方がないさ。他人の夜遊びまで、妬やいてたら、限きりがないぞ」

露地を出ると、宵の岡崎は、夕風ゆうなぎのむし暑いほどぼりが冷め切れないうちにも、夏の夜の灯が戦そよぎ立って、人影の流れの中に、尺八が聞え、虫籠の虫の音が聞え、座頭の節をつけた喚わめきだの、西瓜売りや鮎すし売りの呼び声や、また、夜歩きに出た旅人の浴衣ゆかたの群れなど——さすがに江戸のような新開地的なあわただしさと違って、落ち着いた中に城下町風情がある。

「あら。先生が行く」

「無可先生」

「すまして行くこと」

町の娘達が、眼顔して、囁きあう。中には、お辞儀する娘がある。無可先生の行く先は、そこらでも、話題であった。

だが、彼の行く足は、真つ直だった。遠い王朝のむかしから、ここの辺りは、矢矧やはぎの宿の浮うかれ女めたちから脂粉しふんの流れをひいて、今も岡崎女郎衆の名は、海道の一名物であったが、その辻を曲がる様子もない。

ほどなく、城下の西端にしはすれまで行つてしまう。すると、広い闇に、どうしようと、瀬せにしぶく水音が聞かれ、暑さもいちどに袂たもとを払つて、橋の長さ二百八間という、その橋はし桁げたの第一柱に、

矢矧やはぎばし

と星明りに読める。

すると、約束したように、そこに待っていた一個の瘦やせ法師ほうしが、

「武蔵どのか」

と、いった。

無可先生は、

「おう。又八か」

近づいて、笑顔を見合う。

まさしく一方の者は、本位田又八である。江戸町奉行所の前で、百の笞むちに打叩かれた果て、罪の莛むしろから放逐ほうちくされた——あの時の姿のままの又八である。

無可とは、武蔵が、仮の名であった。

矢矧やはぎの橋のうえ。

星の下。

ふたりの間には、かつての旧怨もなく、

「禅師は？」

武蔵が問うと、

「まだ旅よりお帰りもなし、お便りもない様子」

と、又八がいう。

「お長いなあ」

眩つぶやきながら、ふたりは、背をならべて、矢矧やはぎの大橋を睦むつまじそうに、渡って行った。

## 四

対岸の松の丘に、古い禅刹ぜんさつがあった。その辺りを八帖山はちじょうざんというせい、八帖寺と寺の名も称よばれている。

「どうだな又八。禅寺の修行というものは、なかなか辛いものだろう」

その山門へ向って、暗い坂道を登って行きながら、武蔵がいうと、

「辛い——」

又八は、正直に、青い頭つむりを垂れて答えた。

「何度も、逃げ出そうと思ったり、こんなにも、辛い思いをしなければ、人間になれないなら、いつそ首でも縊くろうかとさえ考える時もある」

「まだまだおぬしは、禅師へおすがりして、入門の許しを得た弟子ではないから、そこらはほんの修行の初歩だ」

「しかし——お蔭でこの頃は、弱い気持が出ると、これではならぬと、自分で自分を、鞭むち打つことができるようになった」

「それだけでも、修行のかが目に見えて来たわけだな」

「苦しい時には、いつもおぬしを思い出すのだ。おぬしでさえ、やり越えて来たこと、おれに出来ぬわけはないと」

「そうだ。わしがしたこと。おぬしに出来ぬことはない」

「それと、一度死ぬところを——沢庵坊に救われた生命と思ひ、また、江戸町奉行所で、百叩きにされた——あの時の苦しみを思い出しては——何を、何をと、今の修行の辛さと朝夕闘っている」

「艱苦かんくに克かつたすぐ後には、艱苦以上の快感がある。苦と快と、生きてゆく人間には、朝に夕に刻々に、たえず二つの波が相搏あいうつている。その一方に狡ずるく扱よつて、ただ安閑だけを愉ぬすもうとすれば、人生はない、生きてゆく快も味もない」

「……少し分りかけて来た」

「欠伸あくび一つしてもだ——苦の中に潜心した人間のあくびと、懶惰らんだな人間のそれとはまったく違う。数ある人間のうちには、この世に生を得ながら、ほんとの欠伸あくびの味すら知らずに、虫のように、死んで行くのがたくさんいる」

「寺にいと、周まわりの人たちからも、いろいろな話を聞く。それが楽しみだ」

「はやく、禪師に会って、おぬしの身も頼みたいし、わしも何かと、道について、禪師にただ糺ただしたいこともあるのだが……」

「一体、いつお帰りなのだろう？ 一年も便りが無いといっているが」

「一年はおろか、二年も三年も、ひようひよう飄々ひようひようと、白雲のように、居所も知れぬ例は、禪家には珍しくないことだ。——折角、この土地に足を留めたのだから四年でも五年でもお帰りを待つ覚悟でいてくれい」

「その間、おぬしも、岡崎にいてくれるか」

「いるとも。裏町に住んで、世間の底の、雑多な生活くらしに触れてみるのも、ひとつの修行。

——空しく禪師のお帰りのみを待っているわけではない。わしも修行と思って、町住居しているのだから」

山門さんもんといっても何の金きん碧へきもない茅葺門かやぶきもん。本堂も貧しい寺だった。

又八道心は、そのの庫裡くりのわきにある寝小屋の内へ友を導いた。

まだ彼は、正式にここの寺籍にはいつていないので、禪師の帰るまでそこにねぐら厠ねぐらを与えられていた。

武蔵は、時々、彼をここへ訪れて、夜更けまで話しては、帰って行った。もちろん二人

が、旧交を取りもどし、又八も一切を捨てて、こうなるまでには、——そこに、江戸の地を離れてから以後の話も残つてはいるが。

無為の殻

一

話は、以前になるが。

去年。——柳 營りゆうえいに仕官の望みを絶つて、伝奏でんそうやしきの半双はんそうの屏風びょうぶに、武蔵野之図を一掃そうに描き残したまま、江戸の地を去つた武蔵は、あれからどう道どりを取つて来たか。

時には、忽然こつぜんとすがたを見せ、時には飄然ひょうぜんとすがたを消し、峰のふところに遊ぶ白雲のように、武蔵の足跡は、近ごろ殊に定まらなかつた。

彼の歩みには、確とした一つの目的と、一定の法則があるようであつてまた、ないものようでもあつた。



彼自身は、ひたすら一筋の道をば、脇目もふらず歩いているかに思われるが、傍から眺めると、自由無碍むげな、いかにも気ままな道を歩いたり、止まったりしているように観みえるのだった。

武蔵野の西郊を相模川さがみがわの果てまで行くと、厚木あつきの宿しゆくから、大山、丹沢などの山々が面おもてに迫つて来る。

彼の姿は、そこから先、しばらくのあいだ、どこでどう暮していたか分らない。

文字どおりな蓬頭垢面ほうとうくめんを持つた彼が、約ふた月ほど後、山から里へ下りて来た。何か或る一つの迷いを解くために、山へ籠こもつたらしかつたが、冬山の雪に追われて下りて来た彼のその顔には、山に入る前より苦しげな迷いが刻みこまれていた。

解けないものが次々に彼の心を虐さいなむ。一つ解くとまた一つの迷いに逢ほうちやく着する。そしてまったく、剣も心も、空虚うつろになる。

「だめだ」

自分で自分を、時にはまったく、嘆たんせい声のもとに、見捨てかける時すらあった。そして、「いっそ……?」

と、人なみな安逸を想像した。

お通は？　すぐ思う。

彼女と共に、安逸をたのしむ心になれば、すぐにでも出来そうな気がするのだ。また、百石や二百石の、身過ぎみすのためのの食禄をさがす気になれば、それも何処にでもあると考える。

けれど。顧みて、

——それで不足はないか。

と、自身に問うてみると、彼は決して、そんな生涯の約束を、甘受できなかつた。反対に、

「懦夫だふ！　何を迷う」

と、身を罵ののつて、攀よじ難き峰を仰いで、よけいに踉もがいた。

時には、さもしい、浅ましい、餓鬼のように煩惱の中に。また時には、澄み返つた、峰の月のように、孤高を独り楽しむほど潔いさぎよい気もちになつたり——朝に夕に、濁つては澄み、澄んでは濁り、彼の心は、その若い血は、あまりに多情であり、また、多恨であり、また、躁さわがし過ぎた。

そういう心の中の明暗不断な妄もうぞう像と同じように、形に現れる彼の剣も、まだまだ彼が

自分で、

「よし」

と、思う域には達していないのだった。その道の遠さ、未熟さが、自分には、余りに分りすぎているので、時折の迷いと、苦悶とが、烈しく襲ってくるのだった。

山に入つて、心が澄めば澄むほど里を恋い、女を思い、いたずらに若い血が狂いそうになる。木の実を喰べても、滝水を浴びて、いかに肉体を苦しめてみても、お通を夢みて、うなされる。

ふた月ばかりで、彼は山を降りてしまったのである。そして藤沢の遊行寺ゆぎようじに、数日足を留め、鎌倉へまわつて来た所、その禅寺で、はからずも自分以上に苦しみがいている男と出会つた。それが旧友の又八であつた。

二

又八は、江戸を追われてから、鎌倉へ来ていた。鎌倉には、寺が多いと聞いていたからである。

彼もまた、べつな意味で、苦悩していたところだった。もう二度と、自分が歩いて来た  
懶惰らんだな生活へ、戻ろうという意志はなかった。

武蔵は、彼にいつて、

「遅くはない。今からでも、自分を鍛きたえ直して、世に出ればいいではないか。——自分で  
自分を、だめだと見限ったなら、もう人生はそれまでのものだ」

と、励ましたが一しかし、と付け加えて、

「とはいえ、かくいう武蔵も、実は今、何かまったく、壁のような行止りと、ともすれば、  
おれは駄目かな？ ——と疑いたいような、虚無とらに囚とらわれて、何をやる気も失うせているの  
だ。そういう無為むいの病やまいに、自分は三年に一度か、二年に一度ずつは、きつと罹かかるのだが、  
その時、駄目と思う自分を鞭打むちって励まし、無為むいの殻かを蹴かやぶって、殻かから出ると、また  
新しい行いくくてが展ひらけてくる。そして驀まっしぐらに一つの道を突き進む。——するとまた、三  
年目か四年目に、行止りの壁につき当あって、無為の病にかかってしまう。……」

正直に、武蔵は告白して、さてまた、又八へ向むかってということには、

「ところが、今度の無為の病は、すこし重い。いつまでも、打開できぬ。殻の中と、殻の  
外との、境の闇に、もがいている無為から無為の日がづくづく苦しき……。で、ふと思ひ出

したお方がある。そのお方の力をお借りするほかはないと——実は山を下りて、この鎌倉へ、そのお人の消息をさぐりに来た次第だが」

と、話した。

武蔵がいう、思い出した人というのは、彼がまだ十九か二十歳の向う見ずに道を求めてさまよっていた時代——京都の妙心寺の禅室へ足しげく通っていたことがあって——その頃、啓蒙の師事をうけた前さき法山の住、愚堂和尚、べつの名を東とうしよく寔ともいう禅師だった。聞くと、又八は、

「そういう和尚ならば、ぜひおれを紹介ひきあわせてくれ。そしておれを、弟子にしてくれるように、頼んでみてくれ」  
と、いった。

果たして又八が、そういう本心になったのか否かを、武蔵も初めは疑ったが、又八が、江戸へ出てから会った憂うれき目の数々を聞くと。——そうか、それほどな目に会ったなら、さもあるう。心得た。きつと弟子入りのことはお願いしてみよう。——と武蔵も誓って、ともども、鎌倉の禅門をさがし歩いてみたところ、誰も知っている者がない。

なぜならば、愚堂和尚は、数年前に妙心寺を去って、東国から奥羽の方を旅していると

は聞えていたが、至つて、飄々たる存在で、時には、主上しゅじょう後水尾天皇の御座ちかく召され、清涼の法ほう庭えんに、禪を講じているかと思えば、ある日は、弟子僧ひとり連れず、片田舎の道に行き暮れて、夜の一飯に当惑していたりしているといった風な人だからである。「岡崎在の、八帖寺はちじょうじへ行つて、訊いてごらんなされ。そこへはよく、脚を留められるから」

こう、さる寺で教えられて、ではそこへと、武蔵と又八は、岡崎へ来たが、愚堂和尚はやはりいなかった。けれど、一昨年ぶらりとお姿を見せ、陸奥みちのくの戻りにはまた、立ち寄るようなことをいわれていたという話に、

「では、何年でも、お帰りまで待とうではないか」

と、武蔵は町に仮の家をさがして住み、又八は庫裡裏くりうらの寝小屋を借りて、共に、和尚の見える日を、もう半年以上も、待ち暮して来たのだった。

## 三

「小屋の中は、蚊かが多くて」

又八は蚊やりを焚たきつづけていたが、耐えられない眼をしていった。

「武蔵どの、外へ出ようか。蚊は外にもいるが、少しは……」

と、いう間も、眼をこすっていた。

「うむ、どこでも」

武蔵は先に出た。こうして訪れるたびに、少しでも、又八の心に何か不足を足して行ければ、彼の心もちは済むのだった。

「本堂の前へ行こう」

深夜なので、そこは誰もいなかった。大扉おおとも閉まっている。風もよく通る。

「……七宝寺を思い出すなあ」

階段に足を投げ出し、縁に腰をかけながら、又八はつぶやいた。二人が顔をあわせた時、何ぞといえ、木の実や草の話からでも、すぐ故郷ふるさとの思い出が口に出るのだった。

「……うむ」

と武蔵にも同じ思い出がわいていた。けれど、それからは、二人とも、黙って、思いを口に出さなかった。

何時ものことである。

故郷のはなしが出れば、それにつれて、お通のことが、二人の念頭に<sup>うか</sup>泛んでくる。また、又八の母のことやら、苦い数々の記憶が、今の友情をみだして来る。

今では、又八も、それを<sup>おそ</sup>惧れるふうであった。武蔵も、いわず語らず、避けていた。

——だが、その晩にかぎって、又八は、もつとそれについて話したいような顔つきで、  
「七宝寺のある山は、ここよりも高かったな。ちようど麓には、<sup>やはぎがわ</sup>矢知川と同じように、  
吉野川が流れていた。……ただここには、千年杉がない」

武蔵の横顔を、そういいながら見つめていたが、突然、

「なあ、武蔵どの。いつかいおう、いつか頼もうと思っていたが、つい、いい出しかねて  
いたが、おぬしにぜひ承知してもらいたいことがあるのだ。肯<sup>き</sup>いてくれるか」

「わしに？ ……はて。何をだ？ ……。いつてみい」

「お通のことだが」

「え」

「お通をつ……」

という先に、感情のほうか、舌に絡<sup>から</sup>んでしまった。そして眼は、泣きそうになっていた。  
武蔵の顔いろも動いていた。お互いに触れまいとしていたものを、又八から急にいい出



されて、咄嗟とつさ、その意志を測りかねたのだった。

「おれとおぬしとは、心も溶け合うて、こうして一つ夜を語り合ったりしているが、あのお通は、どうしてるだろう。——いやどうなつて行くだろう。この頃、ときどき思い出している、済まないと心で詫びているのだ」

「……………」

「よくもおれは、長年の間、お通を苦しめたものだった。——頃は、鬼のように追い廻し、江戸では一つ家においたこともあるが、決しておれに心はゆるさない。……考えてみれば、関ヶ原の戦へ出た後から、お通は、おれという枝から離れて地へ落ちた花だ。今のお通は、べつな土から、べつな枝に咲いている花だ」

「……………」

「おい武蔵たけぞうつ。いや武蔵どの。……頼むから、お通を娶もらつてやってくれ。お通を救つてやるものはおぬししかないぞ。……それも、以前の又八もとだったら、金輪際こんなことはいもしないが、おれはこれから今までの取返しを、沙門しゃもんの弟子になつてやろうと思ひ定めた所だ。もうきれいに諦あきらめた。……だがまた、気がかりにもなるのだ。……頼むから、お通をさがし出して、お通の望みをかなえてやってください」

## 四

その晩。——もう夜も更けきつた丑満の頃。

黙々と、松風の闇を、八帖の山門から、麓へ降りて行く武蔵の姿が見られる。

腕を拱いて。

俯向いて。

彼が自分でいうところの無為と空虚の悩みが足もとにも纏っているような歩みで——。

今、本堂で別れて来た又八の言葉が、松かぜに洗われても、いつまでも、耳から離れなかつた。

——頼むから、お通の身を。

と、真剣でいった又八のあの声である、顔つきである。

自分へそういった又八も、いい出すまでには、幾夜となく、悶えたであろう。苦しかったであろう。——と思いやられる。

だが、より以上、見苦しい迷いと、苦悶とは、かえって自分にあることを、武蔵は否め

なかつた。

……頼むから！

掌てを合ささないばかりにいつてしまった又八は、それまでの、日夜の焰から遁のがれて、後は却げつて、解脫げだつの身のすずしきに、泣きぬれて、悲しみと法悦との、二つのふしぎな疼うずきのなかに、ほかの生き効がいを、胎児たいじのように、今は索さぐっている気もちであろう。

又八が、面と向つて、それをいい出した時、武蔵は、

(それは出来ない！)

ともいい切れなかつた。

(お通を、妻にもつ気はない。以前は、おぬしの許いいなすけ嫁よめだ。懺悔ざんげと、真心を示して、おぬしこそ、お通との仲を取りもどせ！)

とは、なおさら、いわれなかつた。

では、何といつたか。

武蔵は、始終、何もいわなかつたのであつた。

何をいおうとしても、自分のことばは、嘘になるからだつた。

といつて胸の底に蟠わだかまっている本当らしいことは、自分に顧みて、いえもしなかつたから

である。

それにひきかえて、今夜の又八は、必死だった。

お通のことからして、解決しておかなければ、沙門しゃもんの弟子になっても、ほかの修行を求めても、一切、むだなものになるから。

——というのだった。

そしてまた、

（おぬしがおれに修行をすすめたのではないか。それほど、おれを友達と想ってくれら、お通も救ってやってくれ。それはおれを救ってくれることにもなるんじゃないか）

と、七宝寺時代の幼な友達の頃の口調そのままになって、果てはおいおいと泣いていたのである。

武蔵は、彼のその姿に、

（四ツか、五ツの頃から見ているが、こんな純情な男とは思わなかった——）

と、心のうちで、その必死な言に打たれると共に、

（おのれの醜さ。おのれの迷い……）

とわが身をさえ恥かしく思つて別れてしまったのであった。

別れる時、又八が、袂たもとをつかんで最後のようになおいった折——武蔵は初めて、

(……考えておく)

といったが、又八がなお、すぐ返辞をと求めてやまないので遂に、

(考えさせてくれ)

と、辛くも、一時のがれをいい残して、山門を出て来たのだった。

——卑怯もの！

武蔵は自分へ罵ののりながら、しかもいよいよ、無為の闇から脱けられない、この日頃の自分をあわれに眺めた。

## 五

無為の苦しきは、無為を悶もだえる者でなければ分らない。安樂は皆人の願うところだが、安樂安心の境地とは大いにちがう。

なさんとして、何もできないのである。血みどろに躑もがきながらも、頭も眸めもうつろに呆ぼけたこころである。病やまいかというに、肉体にはかわりはない。

壁へ頭をぶつけ、退くに退けず、進むに進めない。にっちもさっちも行かない空間に縛られて、果てもないここちがする。その果てに、われを疑い、われを蔑み、われに泣く。

——浅ましや己れ。

武蔵は、憤怒してみる。あらゆる反省を自己へそそいでみる。

が、どうにもならないのだ。

武蔵野から、伊織を捨て、権之助にわかれ、また、江戸の知己すべてと袂別して、風のように去つたのも、薄々、この前駆的症狀を自分でも感じていたので、

——これではならじ。

と、驀しぐらに、その殻を蹴やぶつて出たつもりではなかったか。

そして半年以上。気がついてみれば、破つた筈の殻は、依然として空虚の自分を包んでいる。あらゆる信念を喪失しかけて空蟬にも似た自分の影が、今宵もふわふわと暗い風の中を歩いていく。

お通のこと。

又八のいったことば。

そんなことすら、今の彼には、解決がつかないのだ。考えても、考えても、纏まらない

のであった。

矢矧川やはぎの水が広く見えて来た。ここへ出ると、夜明けのように仄明ほのあかるかった。編笠編笠のふちに、川風がびゅつと鳴って行く。

その強い川風のなかに紛まぎれて、何か、ぴゆるウン——と唸かすって掠めたものがあつた。武蔵のからだを、五尺とは去らない空間をつき貫いて行つたのであつたが、武蔵の影は、より迅はやかつたと思われるほど、すでにその辺の地上には見えなかつた。

ぐわうん、と矢矧川が同時に鳴つた。鉄砲の音波に相違なかつた。よほど火力のある強ご薬うやくで遠方から撃つたものだという証拠は、弾たまうなりと音響のあいだに、息を二つ吸うほどの時間があつたのも分つた。

武蔵は？ ——と、見れば、矢矧の橋はしげた桁の陰へと、逸いちはやく跳んで、蝙蝠こうもりがとまつたように、ぺたと身を屈かがめていたのである。

「……？」

隣の筆屋の夫婦が、いつも気に病んでいつている言葉が思い出された。——しかし武蔵には、この岡崎に、自分を敵視する者があることさえ不思議だった。何者なのか、思い出せないのである。

そうだ。

今夜はそれを一つ見届けてやろうか。身を橋はし桁げたへ貼りつけた途端に、彼は考えていたことだった。——で、いつまでも、息をこらしてじっとしていた。

だいぶ間があつた。そのうちに、二、三人の男が八帖の丘の方から松まつの実みみたいに風に吹かれて駈けて来た。そして案のじよう、武蔵が最前立っていた辺の地上をしきりに見廻している様子なのだ。

「はてな」

「見えんなあ」

「も少し、橋寄りの方ではなかつたらうか」

すでに、狙撃そげきの的まとは、死骸になつて仆れているものと考えて、火縄も投げ捨て、鉄砲てつぽうだけを持って、やつて来たらしいのである。

鉄砲の真鍮しんちゆう巻まきが、ピカピカ光つて見える。それは戦場に持ち出しても立派な物だった。抱えこんでいる男も、他のふたりの侍も、黒いでたちをして眼元だけしか出していなかった。



おだまき  
苧環

一

何者か？

そこに見えている二、三人の人影には、思い当りもなかったが、いつ何時なんどきでも、自分の生命に対する敵への心構えは、武蔵にあった。

武蔵ばかりでなく、およそ今の時勢に生きている人間には、すべてに、日常に、その要心があつた。

殺伐さつぱつな無秩序な、乱国の余風は決してまだ治まり切つているとはいえない。人は詭謀きぼうや反間はんかんの中に生きていたので、要心すぎて疑いぶかく、妻にさえ油断せず、骨肉の間さえ破壊されかけた一頃ひところの——社会悪はなお人間のなかに澱よどんでいた。

まして。

きょうまでにも、刃やいばと刃のあいだに、武蔵の手にかかった者、或は、彼のために、社会からも敗北して去つた者は、かなりな数にのぼっている。そうした敗者の係累けいらい一門、そ

の家族らまでを合せればどれほどな数かわからない。

もとより、正当な試合、または非は彼にあつて、武蔵にない場合の結果でも——およそ、討たれた者の側からいえば、あくまで、武蔵は敵と視よう。たとえば、又八の母などが、そのもつともよい例である。

だから、このような時勢に、斯道にこころざす者には、たえまなく、生命の危険が伴つた。為に、一つの危険を斬り払うと、さらにそれが次の危険を生み、敵を作つたが——しかし、修行する身には、危険はまたとなき砥石であり、敵は不断の師であるともいえるのだ。

寝る間も油断のならない危険に研がれ、絶え間もなく生命を窺う敵を師として、しかも剣の道は、人をも活かし、世をも治め、自己をも菩提の安きに到つて、悠久の生ける悦びを、諸人と共に汲み頷とうという願いにほかならないのである。——その至難の道の途中で、たまたま、つかれ果て、虚無に襲われ、無為に閉じ籠められる時——卒然として、撓めていた敵は、影を躡して来るものとみえた。

矢矧の橋桁に——

武蔵は今、ひたと、身を寄せて屈みこんでいたが、その一瞬に、彼のこの日頃の惰気も

迷いも、毛穴からサツと吹き消されていた。

素裸になつて、目の前の危険に曝さらされた生命のすずしきである。

「……はて？」

わざと、敵を近よせて、敵の何者であるかを確かめようと思ひ、息をこらしていると、その影は、期していた武蔵の死骸がそこらに見当らないので、はつと気づいたらしく、彼らもまた、物陰へかくれて、人なき往来と橋の袂たもとを、かえつて気味わるく窺うかがい直している様子だった。

その動作に。

武蔵が、はて？ ——と感じたわけは、怖ろしく敏びんしょう捷たつなのと、黒扮装いでたちとはいへ、差さ刀しものの鐙こじりや足あし拵しらえなど浮浪の徒や、ただの野武士とは、見えなかつたからである。

この辺の藩士とすれば、岡崎の本多家、名古屋の徳川家であるが、そういう方面から、危害を向けられる理由が考えられなかつた。——不審だ。人違いかも知れない。

いや人違いにしては、先頃来から露地口を覗のぞき見したり、裏うら敷やぶから眼を光らしたりする者があると隣の筆屋の夫婦までが感づいていた事実がおかしい。やはり武蔵を武蔵と知つて、機うかがを窺うかがっている者に相違はない。

「ははあ……橋向うにも仲間がいるな」

武蔵が見ていると、物陰の暗がりへ潜ひそんだ三名は、そこで火縄をつけ直し、河の対岸へ向つて、その火縄を振つていた。

## 二

そこにも、飛び道具を持つて潜んでいるし、橋向うにも敵の仲間がいるとすると、敵は相当、備えを立てて、

(今宵こそは)

と、手具脛てぐすねひいているものと思われた。

武蔵の八帖寺通いも幾夜となく、この橋を通ることもしげしげであつたから、敵は、それを確かめ、地の利と配置とを、十分に用意しておく余裕もあつたにちがいない。

で——橋はしげた桁の陰から、武蔵は、うかと離れられない。

跳おどり出るとたんに、ドンと弾たまが飛んでくることは知れきっている。その敵を捨てて、一散に橋を駈け渡つてしまうのはなおさら危険きわまるといっていい。——といって、い

つまで、じつと屈かがんでいるのも策を得たものであるまい。なぜなら、敵は、対岸の仲間と、火縄で合図を交かわしているから、事態は、時の移るほど、彼の不利になって迫って来るものと見なければならぬからだ。

が武蔵には、間かんはつ髪はつのまに、処はする方法が立っていた。兵法によらず、すべての理は、それを理論するのは、平常のことで、実際にあたる場合は、いつも瞬間の断決を要するのであるから、それは理論立てて考えてすることではない。ひとつの「勘」であつた。

平常の理論は「勘」の織せんい維いをなしてはいるが、その知性は緩慢であるから、事実の急場には、まにあわない知性であり、ために、敗れることが往々ある。

「勘」は、無知な動物にもあるから、無知性の靈能と混同され易い。智と訓練みかに研みかかれた者のそれは、理論をこえて、理論の窮極へ、一瞬に達し、当面の判断をつかみ取あやまつて過あやまらないのである。

殊に、劍においては。

今の武蔵のような立場に立った時においては。

武蔵は、身を屈かがめたまま、そこから大きな声で、敵へいった。

「潜ひそんでも、火縄が見えるぞ。益ないことだ。この武蔵に用事あらば、ここまで歩け。武

蔵はここだつ。ここにゐるツ」

川風が烈しいので、声は届いたか届かなかつたか疑われだが、その返辞に代えて、すぐ鉄砲の第二弾が、武蔵の声をした辺りを狙つて撃つて来た。

もとより武蔵はもうそこに身を置いていなかった。橋桁に添つて、九尺もゐる所をかえていたが、弾と行き交ちがいに、彼の体はそこから敵のかくれている暗がりへ向つて一躍した。次の弾をこめて、火繩の火を強ごうやく薬へ点じてゐる間などなかつたので、敵の三名は狼狽を極め、

「や。や」

「う。うぬ」

刀を払つて、おどつて来た武蔵を、三方から迎えたが、それさえ辛からくも間に合つた姿勢なので、味方と味方の聯れんけい繫は取れていない。

武蔵は、三名のなかへ割つて入ると、真まつ向こうの者を、大刀で一颯さつの下に断ち伏せ、左側の男を、左手で抜いた脇差で、横なに薙ないだ。

一人は逃げ出したが、よほど慌あわてたとみえて、橋はしげた桁たもとの袂たもとへ、盲めくらとんぼのようにぶつかり、そのまま矢矧やはぎの大橋を、のめるように駆けて行つた。

## 三

——それから、武蔵も、常の足どりで、ただ欄干に身を添いながら、大橋を渡って行つたが、何の事も起つて来ない。

しばらくの間、来る者あれば待つように、身を佇ませ<sup>た</sup>せていたが、かわつたこともなかつた。

家に帰つて彼は眠つた。

すると、翌々日。

無可先生として、手習い子の中に交<sup>ま</sup>じつて、自分も一脚の机に倚<sup>よ</sup>り、筆を持って習字している、

「ごめん——」

軒端からさし覗<sup>のぞ</sup>いて、訪れた侍がある。二人づれだ。狭い土間口は、子供の穿<sup>はきもの</sup>物だらけなので、そういつてから、木戸もない裏の方へ廻つて来て、縁先へ立った。

「——無<sup>むか</sup>可殿は御在宅だろうか。<sup>それがし</sup>某どもは、本多家の家中で、さるお人の使いとして参つ

たのだが」

子供らの中から、武蔵は、顔をあげて、

「無可は、私ですが」

「尊公が、無可と仮名しおる、宮本武蔵どのか」

「え」

「お隠しあるな」

「いかにも武蔵に相違ござらぬが、お使いの趣は」  
おもむき

「藩の侍頭、巨志摩さむらいがしらどのをご存じあろうが」  
わたりしま

「はて。存じ寄らぬお人でござるが」

「先様では、よう知つておいでられる。其許そこもとには二、三度ほど、当岡崎で俳諧はいかいの席へ

顔を出されたであろうが」

「人に誘われて、俳諧の寄合へ参りました。無可は、仮名に非ず、俳諧の席でふと思ひ寄つてつけた俳号でござる」

「あ。俳名か。——それはまあ何でもよろしいが、巨殿も、俳諧を好まれ、家中の吟友ぎんゆうも多い。一夜、静かにおはなし申したいと仰せでござるが、お越し賜わろうか」



「俳諧のお招きなれば、他にふさわしい風流者がござろう。気まぐれに、当地の俳<sup>はい</sup>庭<sup>えん</sup>へ、誘われたことはあるものの、生来、雅事を解さぬ野人でござれば」

「あいや。何も、俳庭を開いて句をひねろうというのではない。巨殿には、仔細あつて、其許を知っておられる。——で会いたいというのが趣旨。また、武辺ばなしなど、聞きもし、話もしたし——というのであろうと存ぜられる」

手習子たちは皆、手を休めて、先生の顔と庭に立っている二人の侍の顔を、心配そうに見較べていた。

武蔵は、黙つて、そこから縁先の使いを、正視していたが、考えを決めたものとみえ、「よろしゅうござる。お招きに甘えて参堂いたそう。して、日は」

「おさしつかえなくば、今夕にでも」

「巨<sup>わたりどの</sup>殿のおやしきは、どの辺？」

「いや、お越し下さるとあれば、その時刻に、駕<sup>かご</sup>を向けて、お迎えに参ろう」

「然らば、お待ちする」

「では——」と、使いの二人は、顔を見あわせて、領<sup>うなず</sup>きを交わしながら、

「お暇しよう。——武蔵どの、御授業の中、失礼した。では相違なくその時刻までにお支

度おきを」

と、帰って行った。

筆屋の女房は、隣の台所から、顔を出して、不安そうに覗<sup>のぞ</sup>いていた。

武蔵は客が帰ると、

「これこれ、人のはなしに氣をとられて、手を休めてはいはいかな。さ、勉強せい。先生もやるぞ。人のはなしも、蟬<sup>せみ</sup>の声も、耳にはいらぬまでやるのだ。小さい時に怠<sup>なま</sup>けると、この先生みたいに、大きくなっても手習していなければならんぞ」  
墨だらけな、子供たちの手や顔を、見まわして笑いながらいった。

#### 四

たそがれ  
黄昏——

武蔵は身支度していた。

袴<sup>はかま</sup>を着けて。

「よしたがよい。何とかいうて、断りなされた方が……」

その間、隣のかみさんは、縁先へ来て止めていた。果ては、泣かぬばかりに。

だが、ほどなく、迎えの駕は露地口へ来てしまった。もっこのような町駕ではない。輿こしに似た塗籠ぬりかごである。それにけさの侍二名、小者三人ほど付いて。

何事やらん——と近所界隈かいわいは眼をそばだてた。駕のまわりに人立ちがした。武蔵が侍たちに迎えられてそれへ乗ると、寺子屋のお師匠さんはえらい出世をなさったと、まことしやかにもう噂する者がある。

子供らは子供らを呼び集めて、

「先生はえらいんだぞ」

「あんなお駕は、えらい人でなければ、乗れないよ」

「どこへ行くんだろ」

「もう帰らないのかしら」

駕戸をおろすと、侍は、

「こら、退どけ退どけ」

先を払って、

「いそげ」

と、駕仲間へいった。

空が赤かった。町のうわさは夕焼に染められている。人が散った後へ、隣のかみさんは、瓜の種やら、ふやけた飯つぶの交じっている汚水を撒きちらした。

ところへ。

若い弟子を連れられた坊さんがそこへ来た。法衣を見てもすぐ分る通り禅家の雲水さんである。油蟬みたいな黒い皮膚をし、かなつぽ眼というのか、眼のくぼが凹んでいて、高い眉骨の下から、眸がぴかぴかしている。四十から五十ぐらいな間の年齢であろう。こういう禅家の人の年齢は、凡眼ではよく分らない。

体は、小づくりで、贅肉が少しもない。痩せッぽちなのだ。しかし、声が太い。

「おい。おい」

連れている白瓜みたいな弟子を振顧つて、

「又八とやら。おい又八坊」

「はい、はい」

そこらの軒並びを覗き歩いて、うろついていた又八坊は、蒼惶として、油蟬のような顔した雲水さんの前へ来て、頭を下げた。

「分らないのかい」

「ただ今、さがしております」

「おまえ、一度も、来たことはないのか」

「はい。いつも、山へ足を運んでくれますのでつい」

「訊いてみなさい。その辺で」

「は。そう致しましょう」

又八坊は、歩きかけると直ぐ、戻って来て、

「愚堂さま。愚堂さま」

「おい」

「分りました」

「分ったか」

「ついそのの、眼の前の露地口に、看板の板が打ってございました。——童蒙道場、て  
ならしいなん、無可と」

「ウむ。そこか」

「おとずれてみましょう。愚堂さまには、ここでお待ち下さいますか」

「何。わしも参ろうよ」

おとといの夜、武蔵とあんな話をして別れたので、きのうも今日も、どうしたかと気にかけていた又八に、きようは大きな歓びが降つて来た。

待ちかねていた——二人して蜀しよくを望むように待つていた東とうしよく寔しよく愚堂和尚が、ふらりと、旅よこれのまま、八帖寺へ見えたのである。

さつそく、又八から、武蔵のことを伝えると、和尚はよく記憶していて、

「会つてやろう。呼んで来い。いや彼ももうひとかどの男。こちらから出向いて行こう」と、八帖寺では、わずかの休息をしたきりで、直ぐ又八を案内に、町へ下りて来たのだつた。

## 五

亘わたりしま志摩は、岡崎の本多家の内でも、重臣の列にあることは、分つていた。けれどその人物については、武蔵は、少しも知る所がなかった。

——一体、何で自分を、迎えによこしたのか？

それについても、彼には思い寄りもなかった。強いて求めれば、ゆうべ矢矧の辺りで家中らしい黒扮装の卑怯者を、二人も斬り捨てたので、それを取り上げて、何か難題を迫るのではなからうか。

または。——日頃から自分をつけ狙っている何者かが、手にもてあまして、遂に、巨志摩という背後の黒幕を切つて落し、正面からものいおうという陥穽か。

いずれにしても、吉い事であろうとは考えられない。にも関わらず、身を迎えに委ねて行くからには、武蔵にも覚悟はあるのであろう。

その覚悟とは？

もし問う者があれば、彼は、

臨機。

と一語で答えるだろう。行つてみななければ分らないことなのだ。生兵法の推理はこの場合禁物である。機にのぞんで、咄嗟の肚を決めるほかに兵法はないのである。

その変が、行く途中で起るか、行つた先で起るか。

敵が、柔をよそおってくるか、剛をあらわして来るか。

それも未知数である。

海の中を揺れて行くように、駕の外は暗く、そして松風の音だった。岡崎城の北郭から外郭の一带は松が多い。さては、その辺をいま通って行くな――

「……………」

武蔵は覚悟の人とも見えない姿だった。目を半眼に閉じ、うとうとと、駕の中で眠っていた。

ギイ、と門の開く音。

駕をになう小者の足幅はゆるやかになり、そして、家人らの声は微かそけく、そこここに映さす灯影はやわらかい。

「……………着いたのかな」

武蔵は駕を出てみる。いんぎんに迎える家従らは、黙々、彼を広い客間へ通した。簾れんは捲かれ、四方は開け放たれ、ここも濤なみおと音のような松風のなかに在あって、夏もわすれる涼しさのかわりに、燭の明滅ははなはだしい。

「巨わた志摩りしまでござる」

主あるしは、直ぐ対した。

五十がらみの人。見るからに剛健で、軽薄の風がない。典型的な三河武士だ。



「——武蔵です」

礼を執<sup>と</sup>る。

「……お楽に」

志摩は、会釈して、さて——という顔をしていった。

「一昨夜、家中の若侍二人、矢矧<sup>やはぎ</sup>の大橋で、斬つて捨てられたそうなの。……事実でおざらうか」

ぶつけである。

思慮<sup>いしよ</sup>の違<sup>ちが</sup>いもない。また、武蔵はそれをつつむ気持も毛頭ない。

「事実でござります」

さて。——それからどう出て来るか。武蔵は、志摩の眸<sup>ひとみ</sup>を、凝視<sup>ぎようし</sup>した。澄み合つた二人の面<sup>おもて</sup>に、燭の明滅がしきりとはためく。

「それについて」

と、志摩は口重く、

「——お詫<sup>わ</sup>びせねばならぬ。武蔵どの、まず許されいと、少し頭<sup>ず</sup>を下げた。」

しかし、武蔵は、その挨拶を、まだそのままには受け取れなかった。

## 六

今日、自分の耳にはいったばかりであるが——と亘志摩わたししまは、前提して、

「藩へ、死亡届が出た。矢矧やはぎの辺で斬られたのだとある。調べさせると相手方は貴公との事。貴公の名は、疾く承とつつていたが、当御城下にお住いとは、それで、初めて知ったのでござる」

と、話しました。

嘘は、見えない。武蔵も、信じて、聞き出した。

「——で、何が故に、貴公を闇討ちにしようとしたか、嚴重に、調査いたしてみた所、御当家のお客分に、東軍流の兵法家で三宅軍兵衛みやけぐんべえといわるる仁じんがあるが、その門人と、藩の者四、五名が、謀はかつてやったことが相分った」

「……ははあ？」

なお、武蔵は解げせない顔。

だが、次第にそれも解けた。巨志摩の話によって明確になった。

三宅軍兵衛の直弟子じきてしのうちに、以前、京都の吉岡家にいた者があり、また、本多家の子弟のうちにも吉岡門流の者が何十人となくある。

そうした人々の間に、

(近頃、御城下で、無可むかと変名している牢人は、京都の蓮台寺野、三十三間堂、一乗寺村などで、相次いで吉岡一族の者を葬りほうむ、遂に、吉岡家そのものを、断絶にまで導いてしまった宮本武蔵だというわさだが)

と、伝えられ出したことから、今なお、武蔵に深い怨恨を抱いている者の口火から、

(眼障めざわりだ)

となり、

(討てぬものか)

と、囁かれ出し、遂に、

「殺やれ」

と、なつてしまつて、かなり根気よく機を測はかつていたが、一昨夜のような失敗に帰してしまつた理わけだといふのであつた。

吉岡拳法の名は、今もなお、慕われている。諸国行く先々で聞かぬ所はない。いかにその盛んであった時代には、多くの門下を、諸国に持つていたかも知知できる。

本多家だけでも、その刀流を汲くんだ者が、何十人もあるというのは本当だろう。——武蔵は、事の真相にうなずくと共に、自分を恨んでいる人々の気持もわかる気がした。しかし、それは武門の上でなく、人間の単なる感情としてのみである。

「——で、その不心得と、恥ずべき卑劣は、きよう御城内で、その者どもへ、きつく叱りおいた。ところが、お客分の三宅軍兵衛殿には、自身の門人も交じっていたことゆえ、いたく恐縮されて、ぜひ其そのもと許へ会つて、一言、お詫びしたいとある。……どうじゃな、ご迷惑でなくば、これへ呼んで、お紹介ひきあわせいたすが」

「軍兵衛殿には、ご存じない儀とあれば、それには及びませぬ。兵法者の身に取れば、前夜の事ども路傍ままあること」

「いや、それにせよ」

「謝罪の何のとうのでなく、ただ道を語る人としてなら、かねてお名まえを聞いておる三宅殿、お目にかかることに異存もござりませぬが」

「実は、軍兵衛殿も、それを望んでおるのじゃ、——さらば、早速にも」

巨志摩わたりしまは、すぐ家臣に、その旨を伝えさせた。

三宅軍兵衛は、先に来て、別の間に待つていたものとみえ、弟子四、五名連れて、ほどなくはいって来た。弟子というのも、勿論、歴乎れっきとした本多家の家中なのである。

## 七

危惧きぐは去った。——とにかく一応そう見えた。

巨志摩から、三宅軍兵衛とその他の者を、紹介ひきあわせると、軍兵衛も、

「どうか、一昨夜のことは、水に流して」

と、門人の非を謝し、それからは隔意もなく、武辺ばなしや、世間ばなしに、座は賑わった。

武蔵が、

「東軍流という御流名は、めつたに、世間にも、同流を見かけぬように存ずるが貴方の御創始か」

と、問うと、

「いや、てまえの創始ではござらぬ」

と、軍兵衛がいう。

かわさきかぎのすけ

「てまえの師は、越前の人、川崎鑰之助と申し、上州白雲山に籠こもつて、一機軸を開いたと、伝書にはあるなれど、実は天台僧の東軍坊なる人から、技を習まなんだものらしゅうござる」

と、武蔵の姿を、改めて、しげしげ見直しながら、

「かねて、お名前だけを聞いておつた感じでは、もつと、御年配かと存じていたが、お若いので、意外でござった。——これを御縁にぜひ一手、御指南にあずかりたいが」

と、迫った。

武蔵は、

「いずれ折もあらば……」

と、軽くかわし、

「道不案内ゆえ」

と、志摩へ挨拶しかけると、いやいやまだお早い、帰りは誰か、町の口までお送りさせる——と引き止めて、軍兵衛がまた、

「実は其許そのもとのために、門人ふたりが矢矧やはぎの橋もとで、斬られたと聞いた時、てまえも駈けつけて、その死骸を見たのであったが——二つの死骸の位置と、二人のうけた刀痕とうこんとに、どうも合致せぬ不審があつたのでござる。……で、逃げ帰つた門人のひとりに糺ただすと、よくは見えなかつたが、確かに、其許には両の手に、同時に刀を把とられたらしいとの申し立て。さすれば、世にもめずらしい御流儀じゃ。二刀流とでもいうのでござるかな？」

武蔵は、微笑していう。自分はまだかつて、意識して二刀を用いたことはない。いつも一体一刀のつもりである。いわんや、二刀流などと自分から称とえたことなどは、今日までないことである。

しかし、軍兵衛たちは、

「いや、御謙遜ごけんそんを」

と、承知しない。

そして、二刀の法について、いろいろな質問を出し、いったいどういう習練をし、どれほどな力量があつたら、二刀を自由に使いこなせるものか——などと幼稚なことを臆面もなく訊いてくる。

武蔵は、帰りたくて堪らなかつたが、こういう人たちに限って、その質問に満足を得な

いと、帰しそうもないので、ふと、床の間に立てかけてある二挺の鉄砲ちように目をとめて、あれを御拝借できようかと、主の巨志摩あるじ わたりしまへいった。

## 八

主の許しを得て、武蔵は、床の間から二挺の鉄砲を取って、座の中央にすすんだ。

「……はて？」

何をするのかと、人々は怪しみながら見まもった。二刀についての質問を、二挺の鉄砲で、どう答えるつもりかと。

武蔵は、鉄砲の筒のほうを、左右の手に、持ちながら、片膝を立て、

「二刀も一刀。一刀も二刀。左右の手はあるも体は一体。すべてにおいて、道理にふたつなく、理の窮極においては、何流何派といえど変りのある訳はござらぬ。——それを眼にお見せ申そうならば」

と、両手に握った鉄砲を示し、

「御免」



といったかと思うと、遽にわかに、矢声をかけて、その二挺をぶんぶんと振り廻した。凄まじい風が座に起つて、武蔵の肱ひじが描く二挺の鉄砲の渦は、さながら苧環おだまきの旋めぐるように見えた。

「……………」

何がなし人々は、気をのまれて、面おもても白け渡つてしまった。

武蔵は、やがて直ぐ、肱ひじを収おさめて、鉄砲を元の位置へもどすと、その機に、

「失礼いたしました」

と、微笑を見せたのみで、二刀の法については、何も説明らしい説明もせず、そのまま席を辞して、帰つてしまった。

呆あけけつ氣けに取られたまま忘れてしまったものか、お帰りには誰か付けて送らせる——といった筈だが彼が門を去つても、送つて来る者はない。

その門を、振り向くと——

颯々さつさつと墨のような松風の中に、何やら無念を遺のこしているような、客間の燈ひが微かすかに瞬またたいていた。

「……………」

武蔵は、何やらほつとした。白刃の囲みを脱したよりも、こよいの門は虎口だった。形のない、底意の知れない相手だけに、彼も実は、用意する策もなかったのであった。

それにしても人々に武蔵と知られ、また、事件を醸かもしたからには、もう岡崎にも長居はならない。こよいのうちにも立退のくのが賢明だが――

「又八との、約束もあるし、どうしたものか？」

独り案じながら、松風の闇を、歩いて来ると、岡崎の町の灯が、街道の突当りに、ちらと見え出して来た頃、路傍の辻堂から、

「おお武蔵どの。――又八だ。心配しながら、待っていたのだ」

思いがけなく、その又八が、声をかけて、無事を喜んだ。――が、

「どうして、此処へ」

と、武蔵は疑う。

しかしふと、辻堂の縁に、腰かけている人影に気づくと、彼は又八から仔細を聞いている違いとまもなく身を進めて、

「禪師ぜんじではございませぬか」

と、その脚下ねかに額ぬかずいた。

愚堂は、彼の背に、眼をそそいで、ややしばらくの間を措いてから、

「久しいのう」

といった。

武蔵も、面を上げ、

「お久しゅうござりました」

と、同じことをいった。

だが、その簡単な言葉のなかに、万感がこもっていた。

武蔵に取っては、自分が近来、突当っている無為から自分を救ってくれる者は、沢庵か、この人しかないと、待ちに待っていたその愚堂和尚であったから、あたかも、闇夜に月を仰いだように、愚堂の姿を仰いだのであった。

## 九

又八も愚堂も、武蔵がこよい、無事で帰るかどうかは、不安に思っていたのである。悪くしたら武蔵は、巨志摩の邸から帰らぬ者になるのではないか——などと憂いながら、

それを確かめるべく、これまで来た途中だった。

夕方。

行き交い<sup>ちが</sup>に、武蔵が出た後を訪ねたところ、隣家の筆職人の女房が、常々、武蔵の身辺に、案じられる節のあったことや、きょう侍の使者が見えたことなど——つぶさに聞かせてくれたので、

さては。

と、そこで帰りを待つ気にもなれず、何か取る策もあろうかと、巨志摩の邸附近を心あてに、これまで来たわけである——と又八は話した。

武蔵は、聞いて、

「そんな心配を煩<sup>わづら</sup>わしていたとは思わなかった。かたじけない」

と、彼の親切気には、深く謝したが、なお、愚堂の脚下にひざまずいた身はいつまで、起そうともせず、じつと地に坐っていた。

そして、やがて、

「和上<sup>わじょう</sup>上<sup>じょう</sup>」

と、強く呼んだ。愚堂の眸を、きつと見上げたままにである。

「なにか」

愚堂は、武蔵の眼が、自分に何を求めているか、母が子の眼を読むように、すぐ覺つていたが、

「何か」

かさねて訊ねた。

武蔵はひたと、両手をつかえ、

「妙心寺の床ゆかに参禅して、初めてお目にかかりました頃から、はや十年に近くなりました」

「そうなるかのう」

「月日は十年を歩みましたが、自分は何尺の地を這ったか。顧みて、自分でも疑われて参りました」

「相変らず、乳くさいことをいう。知れたことじゃ」

「残念でござります」

「何が」

「いつまで修行の至らぬことが」

「修行、修行と、口に行っているうちはまだ駄目じやろうて」

「といつて、離れたら？」

「すぐ縫よりが戻ろう。そして、初めから物を弁わきまえぬ無知の者より、もつと始末のわるい、人間の層くずができる」

「離せば、迂すべり落ち、登ろうとすれど攀よじ切れぬ、絶壁の中途に、私は今、あがいております。——劍についても。また、一身についても」

「そこだな」

「和上つ。——お目にかかる今日の目を、どれ程、お待ちしていたか知れませぬ。どうしたらいいでしょう。如何にせば、今の迷いと無為から脱し切れましょうか」

「そんなこと、わしは知らぬ。自力しかあるまい」

「もいちど、私を、又八と共に、御膝下へおいて、お叱り下さい。さもなれば、一喝かつ、虚無の醒さめるような痛棒をお与え下さい。……和上つ。お願いでござります」

ほとんど、顔へ土のつくばかり、武蔵は地に伏して叫んだ。涙こそ流さないが、声は咽むせんでいた。苦悶の咽びが悲痛に人の耳を打った。

だが、愚堂の感情は、ちつとも動いたとは見えない。黙って、辻堂の縁を離れたかと思うと、

「又八。来い」

と、のみいって、先へ歩き出した。

十

「和上わじょうつ」

武蔵は起つて、追すいが継つつた。そして愚堂ぐだうの杖たもとをおさえ、なおも一言の答えを求めた。

すると——

愚堂は黙つて、かぶりを振つて見せた。けれどなお、武蔵が手を離さないのので、こういつた。

「無一物」

と。——そこで語ことばを切つて、

「何かあらん。施せよ与よまた、他に何をか加くうあらん。——あるは、喝かつつ」  
拳こぶしを振りあげた。

ほんとに撲なぐりなそうな顔かほをした。

「……………」  
武蔵は、袂たもとを離して何かいおうとしたが、愚堂の脚はすたすたと先へ急いで振向きも  
ない。

「……………」

茫然、武蔵が、その背を見送っていると、後に残った又八が、早口に彼をなぐさめてい  
った。

「禪師は、うるさいことが嫌いらしい。寺に見えた時、おれがおぬしのことや、自分の気  
持を述べて、弟子入りを頼むと、よくも聞かないで、——そうか、では当分、わしの草鞋わらじ  
の紐ひもでも結んでみる、といった。……だからおぬしも、くどいことをいわずと、黙って後  
に尾ついて来ることだ。そして機嫌のいいところを見てよ、何かと、何遍でも訊いてみたら  
いい」

——と、彼方で。

愚堂は足を止めて、又八を呼んでいた。又八は、はいつと大きく答えながら、

「いいか。そうしろよ」

いい残すと、あわてて愚堂の後を追いかけて行った。



愚堂は又八が気に入つたらしい。弟子として許されている彼が、武蔵には、羨ましかつた。——そして又八のような単純さと、素直さのない自分が顧みられた。

「——そうだ。たとい何と仰つしやられようと」

武蔵は、くわつと、体が燃えるように思つた。——怒つて振り上げたあの鉄拳を横顔に受くるまでも、一言の教えをここで乞わずにまたいつの日会う折があるう。何万年とも知れぬ悠久な天地の流れのうちに、六十年や七十年の人生は、さながら電瞬のような短い時でしかない。その短い一生のあいだに、会い難き人に会うというほど尊いものはない。

「——その尊い機縁を」

と、武蔵は、まなじり眦に熱涙をためて、愚堂和尚の去りゆく影を見つめた。そしてその機縁を、やわか今、逸してなろうかと思つた。

どこまでも！

一言の答を得るまでは。

武蔵はやにわに追いかけた。そして愚堂が歩く方へ、彼も足を早めて、尾ついて行つた。知つてか。知らずか。

愚堂は、八帖の方へは、帰らなかつた。恐らくその足は、ふたたび八帖の寺へ帰る意志

はなく、もう水と雲とを住居としている心なのであろう。東海道へ出て、京へさして行くのであった。

愚堂が、木賃に泊れば、武蔵は木賃の軒端に寝た。

朝、又八が、師の草鞋の紐をむすんで立つ姿を見て、武蔵は、友人のために欣うれしかったが、愚堂は武蔵のすがたを見ても、言葉もかけてくれなかった。

しかし、武蔵は、もうそれに心を屈しなかった。むしろ愚堂の眼ざわりにならぬよう遠く離れて、日ごとに慕い歩いて行つた。——その夜そのまま、岡崎に残して来た裏町の一庵も、その机も、一節切ひとよぎりの竹花生たけはないけも、また、隣のかみさんやら、近所の娘の眼やら、藩の人々の恨みや縫もつれやらも、今は一切、すべてを忘れ果てて。

まる  
円

一

京へ、京へ、道は近くなる。

察するに愚堂は、京へさして歩いてるのであろう。花園妙心寺は、その総本山でもあ  
るし——。

だが。

その京都へはいつ着くことやら、禪師ぜんじの旅は気まかせだった。雨に降りこめられて木賃  
から出て来ない日、武蔵ぶさうが窺うかがつてみると、又八やちに灸きゆうをすえさせていた。

美濃みのまで来た。

その大仙寺には七日もいた。彦根の禪寺にも幾日か泊った。

禪師が木賃に泊れば、附近の木賃へ。寺ならば寺の山門へ、武蔵はどこにでも寝た。そ  
してひたすら、禪師の口から一言の教えを授けられる機会を待った。いやそれを追いつめ  
て行つたのだつた。

湖畔の寺の山門に寝た晩、武蔵は、今年の秋を知った。いつか秋だった。

顧みると、わが身のすがたは、まるで乞食のようになっていた。蓬々ぼうぼうと伸びた髪の毛  
も、禪師の心の解ける日までは、櫛くしを入れまいとしていたし、風呂にも入らず、髯ひげも剃そ  
らず、雨露にまかせた衣服はつづれ、腕も胸もかさかさど、松皮のような撫で心地がする。

吹き落ちるような星、秋の声。

一枚の蕙むしろを、宿として、武蔵はふと、

「何の愚ぐぞ」

と、自分の狂的な今の気持を、冷ややかに嘲笑あざわらった。

一体、何を知らうとするのだ。何を禪師に求めるのだ。

こんなにまで、追求しなければ人間は生きられないものか。

憐あわれになる。

愚かな身に住む半風子しらみまでが不愠ふびんになる。

禪師はいった。求める自分へ対して、はつきり断っている。

無一物。——と。

その人へ向つて、無い物を強いて求めるのが無理だ。いくら尾ついて来ても、禪師が、路傍の犬ほども顧みてくれないからとて恨うらむ筋もない。

「……………」

武蔵は、髻の中から、月を見た。山門の上は、いつか秋の月だった。

まだ蚊がいる。

彼の皮膚は、もう蚊の針さえ感じない。しかし、喰われた後は血になって、それが無数

に、胡麻粒ごまつぶほどの腫物できものになっていた。

「ああ、分らない」

たつた一つ、何かしら、分らないものがある。——それさえ解とければ、凝結している剣も、すべても、刮かつぜん然と、解けそうな気がするのであったが、どうにもならない。

もし、自分の道業も、ここで終つてしまうなら、むしろ死したがましだと思ふ。生きて来たかが見出せないのだ。寝ても眠られないのだ。

では。

その分らない物とは何、剣の工夫か、それのみではない。処世の方角か。そんなことにも止まらない。お通の問題か。否とよ、恋のみで、男がこんなにまで瘦せ細ろうか。

すべてをつつんだ大きな問題だ。しかしまた、天地の大から観みたら、ケシ一粒の小さい事かもしれない。

武蔵は、蕤むしろを身に巻いて、蓑みのむし虫のように石の上に寝ころんだ。——又八はどう寝ているだろう。苦しみを苦しまない又八と、苦しむために苦しみを追っているような自分と——思いくらべて、ふと羨うらやましかった。

「……?」

何を見たか、そのうちに武蔵は起き上がって、山門の柱を見つめていた。

## 二

山門の柱に懸っている長い聯れんの文字に、武蔵の眼はじつと対むかっていた。月明りに読まれるその二柱の字句を辿たどってみると、

汝等請ソノモトウ其本ヲ務メヨ

白雲八百丈ノ大功ヲ感ジ

虎丘ハ白雲ノ遺訓ヲ歎ズ

先規カク茲カクノ如シ

誤ツツテ葉ヲ摘ツミ

枝ヲ尋ヌルコト莫ナクンバ好シ

「……………」

これは開山大燈の遺誠いかいの文にあつた言葉かと思う。

——誤ツツテ葉ヲ摘ツミ枝ヲ尋ヌルコト莫ナクンバ好シ。

とあるそこだけを、心に沁みて読み返していた。

枝葉――

そうだ。いかに、葉や枝先にのみ、わずら煩いを繁茂させている人間の多いことか。

(自分も)

と、そこに顧みて、彼は、急に一身が軽くなった。

その一身にたい体している一剣になぜ成りきらないか。なぜわき傍を見るか。なぜそこに澄みきらないか。

あの事は？

この事は？

要いらざる右顧左眄うごさべんだ。一道をつきぬくの何の傍見。

――とは思うが、その一道に行詰つていればこそ、右顧左眄が生じるのだった。葉を摘つみ枝を尋ねる愚かな焦しょうそう躁そうに責められ惑わされてくるのである。

どうして、その行詰りを打開するか。核に入って核を破るか。

みずからみずからわろうじゅうねんあんぎゃのこと  
自笑 十年 行脚 事

そうとうはりゆうぜんびをたたく  
瘦藤 破笠 扣禅 扉

がんらいぶつぼうたしなきなり  
一元来仏法無多子

きつばんきつさまたちやくい  
喫飯喫茶又著衣

これは愚堂和尚が自嘲の作という一偈であつた。武蔵は今、それを思いだした。自分もちようどその年齢の頃であつた。初めて妙心寺に愚堂の名を慕つて訪ねてゆくと、愚堂はいきなり、

(汝、そも何の見地かあつて、愚堂門の客たらんとするか)

と、足蹴にかけないばかり大喝だいかつで追い払われた。その後、愚堂の心になう所を認められたか、許されて室に参じたが、或る折、前の一詩を示して、

(修行修行といつてゐるうちは、まあ駄目じやろう)

と、嗤わらわれたものであつた。

自笑十年行脚事——

と、愚堂は疾とくに——十年も前に自分に教えていた。しかもそれから十年後の今もまだ、道にさまよつてゐる自分を見ては、

(救い難い愚物)

と、あいそも尽き果ててしまわれたに違いない。



果然、武蔵は立っていた。寝もやらず、山門のまわりを巡って——  
すると、よみか にわか 遽に。

この夜半を、寺から立つて行く者があつた。山門を出て行く時、ふと見ると、又八を連れた愚堂である。

いつになく早い脚で。

何か、本山に急用でも起つて京へ急ぐのか。寺の人々の見送りも断つて、瀬田の大橋を真つ直に。

武蔵は、もちろん、

「——遅れては」

と、白い月の下の影を追つて、果てなく慕つて行つた。

### 三

軒並び寝しずまっていた。昼見る大津絵屋も、混雑な旅籠屋はたごやも、薬の看板も、戸が閉つて、人なき深夜の往来は、ただ月ばかりが恐ろしく白い。

大津の町。

そこも、またたく間に過ぎて。

道は、のぼりになる。三井寺や世喜寺せきでらの山には、ひっそり夜霧がかぶっていた。逢う人も稀だ。ほとんどない。

やがて、峠の上へ出た。

「……………」

先の愚堂は立ちどまっている。又八坊に何か話しかけ、月を仰いで一息ついている姿だった。

もう、京は眼の下。振返れば、琵琶びわの湖うみもひとめの高さ。けれど、一輪の月以外は、一色である。雲母きんらび光りの夜霧の海である。

武蔵は、一足遅れて、そこへ登って来た。計らずも、愚堂と又八が、足を止めていたのだ、その影を間近に見もし——先からも見られて、何がなし、ぎくとした。

愚堂も無言。

武蔵も無言だった。

しかし、こう眸を向け合ったのは実に何十日目か。

武蔵は、咄嗟に、

「今——」

と、思った。

京都はもうそこだ。妙心寺の禪洞ぜんどうふかくかくれてしまわれたら、再びまた、幾十日を待ったら禪師に接する折があるかわからない。

「……もしっ！」

彼は、遂に叫んだ。

だが、余りに思いつめていたので、その思いに、肋骨あばらはふくらみ、声はつまって、子が親に、いい出し難いにくことをいおうとする怖れにも似て、おずおずと、前へ出るにも、足は竦すくみがちだった。

「……?」

何だ——。とも訊いてくれないのだ。

まるで乾漆かんしつで出来てるような愚堂の顔から、眼だけが白く、それを憎むかのようにするどく、武蔵の影を見つめるだけだった。

「もしっ。和上っ……」

二度目にさげんだ時は、武蔵はもう前後も弁えなかつた。ただ燃え苦しむ火のかたまりのように駈け転んで行つて、愚堂の聲もとへ、

「一言つ。一言を！……」

とのみいつたきりで、大地へ面を伏せていた。

そしてじつと——武蔵は全身でその人の一言を待つていたが、いつまでも、実にいつまでも、答えはなかつた。

武蔵は待ちきれず、こよいこそは、抱懷の疑義を糺そうものと、いいかけると、

「聞いておる」

愚堂は初めて、口を開いて、

「又八坊から、毎晩のように、聞いておるので万承知じや。……女子のことも」

終りの一句に、武蔵は、水をかけられたここちだつた。面も上げ得ずにいた。

「又八、棒切れを貸せ」

愚堂はいつて、彼の拾つた棒切れをうけ取つた。武蔵は、頭上に下る三十棒を観念して、眼をふさいでいたが、棒は彼の頭には来ないで、彼の坐している外を、ぐるりと駈けて廻つた。

愚堂は、棒の先で、地へ大きな円を描いたのである。——その円の中に、武蔵の姿は在った。

#### 四

「行こう」

と、棒を捨てた。

そして愚堂は、又八をうながして、すたすた歩み去った。

武蔵はまたも、取り残された。岡崎の場合とちがって、ここに至ると、彼も憤然とした。数十日のあいだ、真心と、惨憺さんたんたる苦行をこめて、教えを乞おうとする末輩に、余りにも、慈悲がない。無情酷薄だ。いや、ひとを弄もてあそびすぎる！

「……くそ坊主め」

彼方をにらんで、武蔵は、唇を喰いしばった。いつか、無一物などといったのは、絶無の頭脳あたまを——真から空ツぼの頭脳を、さも何かありそうに見せかける坊主常習の似非えせのこ  
とばなのだ。

「ようし、みておれ」

もう恃たのまぬと思つた。世に恃む師があると思つたのが不覚と悔まれもする。自力——以外に道はないのだ。さもあらばあれ、彼も人、自分も人、無数の先哲もみな人間。——もう恃むまい。

ぬツと立つた。怒りが立たせたように突つ立つた。

「……………」

そしてなお、月の彼方を、睨ねめつけていたが、ようやく、眸ほのおの焰おが冷さめてくると、眼はおのずから、自分の姿と足もとへ戻つて来る。

「……………や?」

彼は、その位置のまま、身を巡めぐらした。

円い筋のまん中に、立っている自分を見出したのである。

——棒を。

と、先刻さつき、愚堂がいつていたのが思い出された。その棒の先を地にあてて、何か、自分の周囲に迫つたと思つたが、この円い線を描いていたのか——と初めて今、気がつく。

「何の円?」

武蔵は、その位置から、一寸も動かさず考えた。

まる

円——

円——

いくら見ても、円い線はどこまでも円い。果てなく、屈折なく、窮極なく、迷いなく円い。

この円を、乾坤けんこんにひろげると、そのまま天地。この円を縮めてみると、そこに自己の一点がある。

自己也円、天地も円。ふたつの物ではあり得ない。一つである。

——ばっ！

と、武蔵は、右の手に一刀を払い、円の中に立つて凝視した。影法師は、片仮名の才の字のような象かたちに地へ映ったが、天地の円えんは、厳として、円を崩してはいない。二つの異ことなつた物でないからには、自己の体も同じ理であるが——ただ影法師が違った形として映る。

「影だ——」

武蔵は、そう見た。影は自己の実体でない。

行き詰ったと感じている道業の壁もまた、影であった。行き詰ったと迷う心の影だった。

「えいッ——」

と、空を「いっさつ」

左手に、短剣を払った影の形は変つて見えるが、天地の象はかわらない。二刀も一刀——  
—そして円である。

「ああ……」

眼が開けたようだった。仰ぐと、月がある。大円満の月の輪は、そのまま剣の相とも、  
世を歩む心の体としても見る事ができた。

「才オ！……。和上ッ！」

武蔵はふいに、疾風のように駈け出した。愚堂の後を追いかけて。

だがもう何を、愚堂に求める気もなかった。ただ、一時でも、恨んだ詫びをいいたか  
つたのだ。

——しかし、思い止まった。

「それも、枝葉……」

と。そして、蹴上の辺りに、茫乎として佇んでいる間に、京の町々の屋根、加茂の水は、  
霧の底から薄つすらと暁けかけて来た。



飾磨染しかまぞめ

## 一

武蔵、又八などが、岡崎を去つて、立つ秋と共に、京都のほうへ移っていた頃、伊織は長岡佐渡ともなに伴われて、海路を豊前ぶぜんへ向い、佐々木小次郎もまた、その便船で、小倉へ帰藩の途についていた。

お杉ばばは、昨年、その小次郎が江戸から小倉へおもむく際、途中まで行を共にして、家事整理ほうえと法会のため、一度、美作みまさかの郷里へ戻つた。

沢庵たくあんも、江戸を去り、近頃は、但馬たじまの郷里ではないかという噂。

かくて、その人々の足跡と所在とは、この秋、以上のようにほぼ分つていたが、今なお、杳ようとして分らない者は、奈良井の大蔵の逃亡と前後して、消息を絶つてしまった城太郎。

朱実あけみもどうしたか。

これまた、風の便りもない。

それと、さし当つて、生命さえ案じられるのは、九度山へ引つ立てられて行つた夢想權之助の身の上であるが、これは伊織の口から、長岡佐渡に洩らせば、佐渡の交渉ひとつで、何とか救いの道はつこうというもの。

もつとも、その前に「関東の謀者ちようじゃ」という疑惑の下に、九度山衆の手で殺められてしまえば、これはもはや救いも交渉の余地もないことだが、聡明なる幸村父子の目にとまれば、そんな嫌疑は、立ちどころに晴れ、或は今頃、すでに自由の身になつて、かえつて伊織の身を、案じ探しているかも知れない。

——むしろ。ここにひとり。

身は無事でも、憂うべき運命の人がある。以上の誰をさし措おいても、ひとまずそれを語るべきであろう。いうまでもなく、それはお通つう。武蔵あるがゆえに、生きもし、希望もし、ひたすら女の道を、女たらんとしながら、柳生の城を離れてからまた、嫁ぐ妙齡としごろもはや過ぎかける片鴛鴦かたおしどりの独り身を、旅人の眼に不審いぶかられながら、むなしく旅に朽ちんとはして——いったい彼女は、この秋を、どこに武蔵の見た月を見ているのだろうか。

「お通さん、いるかの」

「はい。——おりますが、どなた様ですか」

「万兵衛じゃが」

と、その万兵衛が、蠟殼かきがらの白くついている柴垣越しに、顔を伸びあげた。

「オ。麻屋あさやの旦那さままでいらつしやいますか」

「いつも、ようお働きのう。——せっかく、働いているところを、邪魔してはわるいが、ちよつと話があるで……」

「どうぞ、おはいり下さいませ。その木戸を押して」

と、お通は、髪にかけていた手拭を、藍あゐに染まった青い手で、抓つまむようにそつと取る。

ここは播州ばんしゅうの飾磨しかもの浦で、志賀磨川しかまがわの水が海へ注そそぎ出る所、三角形になっている河口の漁村。

だが、お通が今いる所は、漁師りょうしの家ではなく、そこらの松の枝や干し竿ざおに、かけ渡してある藍染あゐぞめの布を見ても直ぐ知れるように、飾磨染しかもぞめと世間でよぶ紺染こんぞめを業とする小さい染屋の庭にいたのだった。

そうした小さい紺染屋は、この海辺の部落に、何軒もあった。

染法は、搗染つぎぞめといつて、何度も染料にかけた藍の布を、白うすに入れては、杵きねで搗つくのだつた。

だから、ここの紺染は、糸がつづれるまで着ても褪あせないといわれて、諸国の需要がある。

杵きねを持つて、紺の布を、白うすで搗つく仕事は、若い娘たちの仕事として、染屋の垣の内から、どこかの浜へ聞えてゆく。——若い船頭衆のなかに、想う人をもつ娘は、その唄の声でも知れると——里の者はよくいう。

だが。お通は唄わない。

彼女が、ここへ来たのは、夏の頃で、杵をもつ仕事にも、まだ馴れなかった。今思うと——この夏、暑い日盛りを、泉州さかい堺の小林太郎左衛門の店先を、脇目もせず、港の方へ歩いて行つた旅の女は——あの折、伊織が後ろ姿をチラと見た女性は——やはり彼女であつたかも知れないのである。

ちようどその頃。お通は、堺さかいの港から赤間ヶ関へゆく便船に乗つて、その船が、飾磨しかまへ

寄港した折この土地へ下りたのであったから。

——とすれば、何という惜しさ。

運命に盲目な人間のあわれさ。

彼女が乗って来たその船は、廻船問屋の太郎左衛門の持船であったにちがいない。

日こそ違うが、同じ堺港さかいを出た太郎左衛門船には、その後細川家の家士らがこぞって乗船した。

そして、その潮路うしおじを、長岡佐渡も、伊織も、巖流佐々木小次郎も通った。

巖流や佐渡とは、よしや顔見あわせても知らずに過ぎようとも、どうして伊織と会えなかつたろう。いつの船でも、飾磨しかまの浦うらには寄るものを。

実の姉！ と、あれほど探している伊織に——。ひとつ浦辺に寄りながら。

いやいや会えなかつた筈ともいえるのだ。細川家の家中が乗船したので、胴どうの間まや艦ともの席には幕を張り繞めぐらし、ふつうの町人、百姓、道者、僧侶、芸人など一般の者はみな、箱のような船底へ区切られ、覗き見もできなかつたし、飾磨しかまへ寄って、彼女が船を下りたのも、夜明けのまだ暗いうちであつたから、伊織がそれを知るよしもなかつた。

飾磨は、乳母うばの里だつた。

彼女がここへ来たことから察すると、春、柳生を立ち、江戸へ行った頃には、もう武蔵も沢庵もいなかった後で、わずかに、柳生家や北条家を訪ねて、武蔵の消息ぐらいを聞き、ふたたびその人に会わばやの一心から——旅へ、旅へ、春から夏を歩き過し、遂に、ここまで来たものと思われる。

ここは姫路の城下に近く、同時に、彼女が育った郷里——美作みまさかの吉野郷よしのごうへも、そう遠くない。

七宝寺で育てられた頃の、乳母はこの飾磨の染屋の妻だった。思い出して、身を寄せたものの、故郷こきやうに近いので、外を出歩いたこともない。

乳母はもう五十近いのに子もなかった。それに貧乏でもあるし、ただ遊んでいるのも心苦しく、白搗うすつきの仕事を手伝いながら、ここから遠くない中国街道の頻繁なうわさから、もし武蔵の便りでも知れようかと、唄もない多年の「会えざる恋」を秘めて、染屋の庭の秋の陽ひの下に、黙々と、毎日杵きねを持って想い搗ついていたのであった。

そこへ。何か折入って、話があると訪ねて来た万兵衛。近所の麻屋の主人である。

(何である?)

お通は、藍あゐの手を、流れで洗って、ついでに、美しく汗ばんだ額ひたいも拭いた。

三

「折わるく、小母さんもお留守でございませうが、どうぞおかけ遊ばして」  
母屋の縁の方へ、誘うと、万兵衛は手を振って、

「いやいや。長居はせぬ、わしも忙しい体じや」  
と、そのまま、立話に、

「お通さんの郷里さとは、作州の吉野郷じやそうな」

「はい」

「わしは長年、竹山城の御城下宮本村から、下ノ庄しもしやうの辺りへは、よう麻あさの買い出しに行くが、近頃、さる所でふと、噂を聞いてな」

「うわさ。それは、誰の？ ……」

「おまえのさ」

「ま。 ……」

「それから」

と万兵衛は、にやにやしなから、

「宮本村の武蔵という者のはなしも出たりして」

「え。武蔵さまの」

「顔いろを変えたな。はははは」

秋の陽が、万兵衛の頭に、てらてら遊んでいる。暑いとみえて、万兵衛は脳天へ、手拭の畳んだのを乗せて、

「お吟<sup>ぎん</sup>どのを知ってじやろ」

と、地へしやがみ込んだ。

お通も、藍に染まった布桶のそばへ、身を屈<sup>かが</sup>めて、

「お吟さまとは、あの……武蔵様のお姉上にあたる？」

「そうじや」

大きく頷<sup>うなず</sup>いて、

「そのお吟どのに佐用の三日月村で会った所、お前の話が出てな、びっくりしてござったわい」

「わたくしがこの家<sup>や</sup>にいと、お告げなされたのでございますか」



「そうじやが、何も悪いことはあるまいて。いつだったか、此家ここの染屋の小母御からも頼まれた——もし、宮本村辺へんへ行つて、武蔵どのの噂でも聞いたたら、何なりと耳に入れて欲しいと。……で、よいお方に会うたわいと道ばたであつたが、こちらから話しかけたのじや」

「お吟さまには、今、どこにお在いでなされますか」

「平田某とやら、名はわすれたが、三日月村の郷土の家にいるそうな」

「ご縁家でございまするか」

「たぶん……そんなことじやろう。それはともかく、お吟どのがいわつしやるには、何かと、種々くくさくさのはなしも積つている。秘かに告げたいこともある。いや何よりは、恋しい、会いたいと、道ばたもわすれて、泣かぬばかり……」

お通もふと、瞼まぶたを赤らめた。想う人の姉と聞くからに懐かしいのに、故郷ふるさとの日の憶い出や何や、急に胸へこみ上げて来たのであろう。

「——が生憎あいにく、往來中わいらいちゆうでな、手紙も書けぬが、ぜひ近いうち、三日月村の平田と尋ねて訪れてくれまいか。此方こちらから行きたいのは山々だがそうもならぬ事情があるので——といわつしやるのだが」

「では、私に？」

「おう、詳しゅうはいわぬが、武蔵どのからは、時折、便りも来ているそうなの」

お通は、そう聞くと、一も二もなく、今からでもと、もう胸にきめていたが、ここへ身を寄せてからは、何かと案じもし、相談相手にもなってくれている乳母へ黙って答えてはと、

「行くか、行けないか、晩までに、ご返辞に伺います」

と、万兵衛には返辞した。

万兵衛は、ぜひ行ってくれとすすめ、明日ならば、自分も佐用まで行く商用があるから殊に都合がいいが——という。

柴朶垣しだがきの外には、秋の昼を、油のような海が、気懶けだるい波音を繰り返していた。

と、垣を背に、海を前に、膝をかかえて先刻さつきから、ぽつねんと黙想していた若い侍があった。

#### 四

若い侍は、十八、九。まだ二十歳を出たとはみえない。

凛々しい服装をしている。

ここから、わずか一里半しかない姫路の人であろう。池田家の藩士の子息といったら間違いはあるまい。

釣にでも来たか。

しかし、魚籠びくや竿などは携たずえてはいない。染屋の柴朶垣にもたれて先刻から、砂の多い崖に坐り、ときどき、砂をつかんで弄もてあそんでいる……。そんなところは、どこか子供ツボい。

「——じゃあ、お通さん」

垣の中で、万兵衛の声だった。

「夕方、返辞してくれないか。行くとすれば、わしは朝、早立ちじゃ。都合もあるから」  
どぶり、どぶりと、砂浜に打つ波音のほかは、からんと静かな真昼である。万兵衛の声は、大きく聞える。

「はい。夕方までには。……ご親切に、ありがとうございました」

低い、お通の声でさえも。

木戸を開けて、万兵衛が出て行くと、それまで、垣の裏に坐っていた若い侍は、ついと身を起して、万兵衛の姿を、見送っていた。

——何か、見届けるような、確乎しかとした眼まなざしで。

だが、その顔は、銀杏いちじょうがた型の藁わら編あみ笠がさでかくしているので、その面おもてに、どんな感情をひそめているかまでは、傍はたから窺うかがうよしもない。

ただ。

不審なのは、万兵衛を見送ってから、今度はまた、頻りと垣の内をのぞいていたことだった。

「……………」

ごとん、ごとん——杵きねの音がもうしていた。お通は、何も知らぬ様子で、万兵衛が帰ってゆくとふたたび杵を持って、臼うすの中の紺染の布を搗ついていた。

よその染屋の庭から、同じような杵の音と、染屋娘の唄が、のどかに流れていた。

お通の杵にも、先刻さつきよりは、力があつた。

わが恋は

あひそめてこそ

まさりけれ

飾磨しかまの布ぬいの

色ならねども

唄われないお通は、詞花集しかしゅうか何かにあつた、そんな歌など胸につぶやいていた。

便りもそこへ来ているとあるから、お吟様ぎんに会えば、恋う人の消息もきつと知れよう。

女は女同士。お吟様へなら自分の気もちを語ることもできる。——武蔵様の実の姉、き

つと、妹とも思つて、聞いて下さるにもちがいない。

搗つく杵きねはうつつ——

しかし、久しぶり心は明るく、堀川ほりかわ百首のうちの、

播磨はりまなだ

うらみてのみぞ

すぎしかど

こよひ泊りぬ

あふの松原

の歌主うたぬしの心と同じように、いつも果てなく悲しい波なみ騒ざいとのみ見る海の色までが、き

ようは明るくて、燦々さんさんと睫毛まつげにかがやいて、希望そのものを波打つかに思われる。

搗ついた布を、彼女は、高い竿の上へかけ渡して、ふと独り心を慰みながら、万兵衛が開け放しに出て行つた木戸の扉から、何気なく外へ出て、浜を見ていた。

——と。

彼方の波打際を編笠の影が、急ぎもせぬ足で歩いて行つた。白い潮風を、横ざまに受けながら。

「……？」

何がなし、お通は、見まもっていた。けれどべつに、何と思つたわけでもない。ほかに眼をやる鳥一羽見えない海だったからである。

## 五

染屋の小母とも計り、万兵衛へも約束をつがえたとみえ、次の日朝まだき。

「では。どうぞご厄介でも」

お通は、麻屋の軒へ、万兵衛を誘いあわせ、その万兵衛にともな伴われて、飾磨しかまの漁村から旅

立った。

旅といつても、飾磨から佐用郷さようごうの三日月村までのこと。女の足でも一夜泊りで悠ゆるりと着けよう。

姫路の城を、北の空に遠くながめ、龍野街道たつのへ。

「お通さん」

「はい」

「脚は達者のようだな」

「ええ。旅には、わりあい馴れておりますから」

「江戸表まで行きなすつたそうなの。よくもまあ、女ひとりで、思い切って」

「そんなことまで、染屋の小母が話しましたか」

「何もかも、聞いているわさ。宮本村でも、うわさしているし」

「お恥かしゅうございます」

「恥かしいことがあるものか。好きな人を、そうやって、慕あこがっていないさる心根こころねは不慙ふびんとも優しいともいいようがねえ。だがお通さん、お前のまえだが武蔵殿も少し薄情うすじやうだのう」

「そんなことはございませぬ」

「恨みとも思わないのかえ。やれやれ、よけいに可憐いじらしい」

「あのお方はただもう御修行の道にひたむきなのでございます。……それを想い切れない私の方が」

「悪いというのかい」

「すまないと思っております」

「ふうむ……。家の嬪かかあにも、聞かしてやりたいのう。女は、そうありたいもの」

「お吟さまは、まだ他家よそへ、お嫁かたづきにならないで、御親類にいらつしやるのでございませうか」

「さ。……どうだろう」

万兵衛は、話の穂を折って、

「あれに茶店がある。ひと休みしようか」

街道の茶店へはいつて、茶をのみ、弁当など開いていると、

「よう飾磨しかまの」

と、通りかけた馬子や荷持の雑人たちが馴々しく言葉をかけて、

「きようは半田の賭場へは寄んねえのか。こないだは麻あさまん方に攫さらわれたと、みんな口惜し



がつていたぞい」

などと万兵衛へいった。

「きようは、馬はいらないよ」

万兵衛は辻つじ棲つまの合わない言葉を押しつけて、急にあわてながら、

「お通さん、行こうか」

と、軒を出た。

囃はすように、馬子たちが、

「いやに、素ツ気ねえがと思つたら、ばかに綺麗きれいな女子おなごときようは道づれだ」

「野郎、お嬢かかにいいつけるぞよ」

「ははは。返辞もしねえわい」

と、うしろでいった。

飾磨しからまの麻屋万兵衛の家は、店を取るに足らない小店だが、近郷から麻を買い集め、それを漁師りようしの娘や女房たちの手内職に出して、帆綱ほづなや、綱の製品とし、ともかく一戸の旦那といわれている者なのに、その万兵衛が、街道ばたの人足たちと、友達のように馴々しくいわれるのは、怪訝いぶかしかつた。

万兵衛も気がさしたか、二、三町歩いてから、お通の疑いへ答えるともなく、  
「しようのない奴らだ。いつも山出しの荷駄に雇ってやるものだから人にじょうだんぐち冗戯口ばか  
り叩きおつて」

と、つぶやいた。

しかし、その馬子達よりも、彼に取つて、もつと注意すべき人間が、今休んだ茶店のあ  
たりから尾ついて来たのを、万兵衛も見遁みのがしていた。

きのう浜にいた——荒編笠あらかみがさの若い侍である。

## 風便り

### 一

ゆうべは、龍野たつの泊り。万兵衛の親切気にも、途中にも、何の変りはなかった。

そして、今日。

佐用さよの三日月へ着いたのは、もう山の瀬に陽うすずも春すき、何となく、秋の夕べの身に迫おそる頃

だった。

「万兵衛さま」

疲れたのか、無口に、先へ歩いてゆく連れを、呼びかけて、

「ここはもう三日月ではございませぬか。——あの山を越えればすぐ、讚甘さぬもの宮本村」

お通が、後ろで、独り託かこつと、

「おいのう」

万兵衛も、足を止めて、

「宮本村も、七宝寺も、あの山のすぐ彼方むこうじゃ。懐なつかしかろうが」

「……………」

お通は、領うなずかなかつた。夕づく空に、黒々と連なっている山の波を、ただ、見まもつて。

そこに、いるべき人のいない山河は、あまりに寂しい。あまりにもただ、自然でありすぎぬ。

「もすこしじゃ。お通さん。草臥くたびれたろうが」

万兵衛は、歩き出す。お通も従ついて、

「どういたしまして。貴方あなたさまこそ」

「何さ、わしは始終、商用で通っている道」

「お吟ぎん様のいらっしやる、郷土のお宅とかは？」

「あれに」

と、指さして、

「お吟様も、待つているに違いない。ともあれ、もう一息」

足は早くなる。

やがて、山の瀬に行きあたると、そこ此処に、家があつた。

ここは龍野街道の一宿場なので、町というほどの戸数もないが、一膳めし屋、馬子の溜たまり、安旅籠やすはたごなどの、幾軒かが両側に見える。

そこも通り抜けて、

「ちと、登りになるぞ」

万兵衛は、山の方へ向つて、石段を上がり出した。

杉に囲まれた村社の境内ではないか、お通は、寒げに叫ぶ小禽こどりの声に、ふと、何か自分が危険な線おかを冒している気がして、

「万兵衛さま。道をお間違えなされはしませぬか。この辺りには、家も見当りませぬが」

「いや、お吟様へ告げて来るあいだ、寂しかろうが、御堂みどうの縁で、休んでいて貰いたいのだ」

「呼んで来ると仰つしやるのは……？」

「いい忘れていたが、お吟様がいうには、訪ねて来る時は、家に都合のわるい客でも来合せているといけないから……ということだった。お住居すまいは、この林を抜けた彼方むこうの畑地。すぐご案内して来るから、しばらく待つているがいい」

もう杉林の中は暗い。

万兵衛の影は、そこを縫って細道を、急ぎ足に行ってしまった。

人を疑うという性情の乏しい彼女は、それでもまだ、万兵衛の挙動について、疑つてみることを知らなかった。

正直に、山神の祠ほこらの縁に、腰をかけて、夕空を見まもっていた。

「……………」

空は暮れてゆく。

ふと、身の辺りに、眼を落すと、暗い秋風が繞めぐっていた。御堂の縁を這う落葉が、ふわりと舞って、二つ三つ膝に乗る。

その一葉を、指に持つて、廻しながら、彼女はなお、根気よく待っていた。愚<sup>おろ</sup>かというか、純<sup>まこと</sup>というか、まるで少女のような彼女のそうした姿を、その時、誰か御堂のうしろで、げらげら<sup>わら</sup>嗤<sup>わら</sup>つた者があつた。

## 二

「——？」

びっくりして、お通は、御堂の縁から跳びのいた。

めつたに、物事を疑つてみることをしない彼女だけに、事の意外に打たれると、驚き方も、人よりはひどく、そして脅<sup>おび</sup>えやすかつた。

「お通つ。動くでない！」

堂のうしろの笑い声が消えた次の一瞬——同じ場所からこう鋭い——何ともいえない凄<sup>す</sup>味<sup>ごみ</sup>をもつた老婆のしやがれ声がしたのであつた。

「……アツ」

お通は、思わず、両手で耳を<sup>お</sup>掩<sup>お</sup>つた。

それほど、何事かに恐れたのなら、逃げればよいのに、そうはしないで、立ち竦んだまま雷鳴にでも痺れたように、そそけ立つて震えていた。

その時——祠のうしろからは、もう数名の人影が出て来て、御堂の前に立っていた。眼をふさいでも、耳を抑えても、彼女にはその中の、たった一人が、怖ろしく巨きく見えた。悪夢の中でよく見る髪の毛の白い婆だった。

「万兵衛。ご苦労じやったのう。礼は後でしますぞよ。そこで——皆の衆よ。あやつが、悲鳴を揚げぬうち、猿ぐつわを嚙ませて下ノ庄の屋敷まで、はよう引っ担いで行つてくだされ」

お杉ばばは、お通を指さして、断獄を命じる閻王のようにいった。

他の四、五名は、みな郷士ふうの男であり、ばばの一族らしかった。ばばの一言に、おうつと高く答えると、餌を争う、狼のように、お通の身へ跳びかかり、型のごとく鞠縛りにくくつて、

「——近道を」

「それっ」

とばかり、走り出したのであった。

お杉ばばは、にやりと見送つたまま、一足後に残っていた。万兵衛へ約束の駄賃を与え、  
るためであろう、帯のあいだに、用意してきたかねを与えて、

「よう連れ出したのう。巧く行くやら、どうやらと案じていたが」

と、賞め称え、

「他言しやるな」

と、釘をさした。

万兵衛は、貰つた金を改めて、これも満足顔に、

「なあに、わしの手功てからじやございません。御老婆様のはかりごとが、巧く凶にあつたの  
でございますよ。……それと、貴女様が、御郷里に帰つているとは、お通めも、夢にも知  
らずにいたもんですから……」

「小気味のよかつたことわいな。見たか、今のお通の愕おどろき様を」

「余りのことに、逃げることもできず、竦すくんじまつた様子でしたな。はははは……だが、  
考えると、罪ッぽいことをした」

「なんの。何が罪ッぽいことがあるうぞ。わしに取れば」

「いやもう、そのお恨みばなしは先日も」



「そうじゃ。わしも、こうしてはおられぬ……いずれまた、程経て、下ノ庄の屋敷へ遊びに来やい」

「では、御老婆様。そこからの間道は、道が悪うございます。お氣をつけて」

「そなたも、人中へ出たら、口に氣をつけやい」

「はいはい。口は至つて堅い万兵衛、その辺はどうぞご安心を……」

いいながら、別れて、足さぐりに暗い石段へかかったと思うと直ぐ、ぎゃツ——とそれ限りなひと声をあげて、地へ仆れた。

お杉ばばは、振り向いて、

「どうしやつた？ 万兵衛ではないか。万兵衛……」

と、地を透かして呼んだ。

三

——答える筈もない。万兵衛はすでに、この世の息をしていないのだ。

「……ア、あ？」

ばばは、息を嚙んで、その万兵衛の横たわっている側に、ぬっと見えた人影に眼をこらした。

刃やいば——血ぬられたその太刀。ぎらりと引つ提げている。

「……た、たれじゃ？」

「……………」

「誰じゃ。……名を、名を吐ぬかしおろう」

ばばは、乾いた声を無理に張っていった。

このばばの、年がない虚勢と、恫喝どうかつする病やまいは、今なお止やまないものとみえる。——  
——が相手はその手に馴れているものらしく、闇をうごかして、微かに肩をゆすぶった。

「わしだよ。……おばば」

「え」

「わからないか」

「分らぬ。聞いたこともない声。物盗ものどりであるが」

「ふ、ふ、ふ。物盗りなら、おぬしのような、貧乏婆に眼はつけぬ」

「なんじゃと。……では、わしに眼をつけて来たとか」

「そうだ」

「——わしに？」

「くだい。万兵衛ごときを斬るために、わざわざこの三日月まで追つては来ぬ。おぬしに思い知らせるためだ」

「ひえっ」 喉<sup>のど</sup>笛<sup>ふえ</sup>の破れたような声を洩らして、ばばは蹠<sup>よろ</sup>めきながら、

「人違いじやろが。おぬしは誰じや。わしは、本位田家の後家、お杉という者」

「おう、そう聞くだに、なつかしや俺の恨み、今はらしてやろうぞ。おばば！ おれを誰と思う。この城太郎を見わすれたか」

「……げっ？ ……城……城太郎じやと」

「三年たてば、嬰兒<sup>あかご</sup>も三つになる。おぬしは老木、おれは若木。気のどくだが、もうおばばに、凜<sup>はな</sup>たらし扱いにはなつておらぬぞ」

「……おう、おう。ほんにお汝<sup>こと</sup>は、城太郎よのう」

「よくも、長の年月、お師匠さまを苦しめたの。師の武蔵さまは、おぬしを年寄と思えばこそ、相手にならず、逃げまわっていた。——それをよいことにして、諸国、江戸表にまで出て、悪<sup>あし</sup>さまに世へいい触らし、仇<sup>かたき</sup>呼<sup>よ</sup>ばわりをするのみか、御出世の道<sup>さまた</sup>を邪<sup>よこしま</sup>げおつた

な」

「……………」

「まだある。——その執念で、お通さままでを、折あるごとに、追い苦しめた。もうよい程に、非を覚<sup>さと</sup>つて、故郷へ引籠<sup>とこ</sup>つたかと思うていたら——なおも、麻屋の万兵衛を手先に、あのお方を、どうかしよう<sup>たくら</sup>と企<sup>たくら</sup>んでおる」

「……………」

「憎んでも飽きたらぬばばめ。一太刀に斬るのは易<sup>やす</sup>いが、この城太郎も、今では浪々の青木丹左が子ではない。父の丹左も、ようやく元の姫路城へ、帰参かなって、この春からは、以前のとおり池田家の藩士。……またぞろ、父の名に、累<sup>るい</sup>を及ぼしてはならぬゆえ、生命だけは助けておくが」

城太郎は、前へ出て来た。

助けておくが——とはいったが右<sup>みぎ</sup>手に提<sup>ひ</sup>げている白い刃は、まだ鞘<sup>さや</sup>に返<sup>かえ</sup>つてはいないのである。

「……………」

ばばは、一歩一歩後へ退<sup>さ</sup>がりながら、逃げ出す虚<sup>うかが</sup>を窺<sup>うかが</sup>っていた。

## 四

隙すきを見たか、ばばは、杉林の小道へと、さっと走りかけたが、やらじと追う城太郎の一  
跳びに、

「何処へ」

と、その首の根を抑えられ、くわつと口を開くと、

「何しやるっ」

年こそ寄れ、きかない気性が、弾はずみに出て、振り向きざま、脇差の抜打ちに、城太郎の  
脾腹を横に払った。

城太郎も、もう以前の子どもではない。身を退けながら、ばばの体を前へ突き返してい  
た。

「わ、童わっばッ。やりおつたの」

草むらの中へ、首を突っこみながら、彼女は喚おめいた。頭を土にぶつけても、彼女の頭の  
なかにある、小童こわっばの城太郎という観念は脱けなかった。

「何を」

と、城太郎も喚わめいた。そして踏めば折れもしそうな、ばばの背ぼねへ、足を乗せ懸け、じたばたする手を苦もなく逆に捻ねじ上げてしまう。

彼もまた、彼である。そのばばが齒がみを、憐あわれと見ている勘弁などはないのだ。小童こわっの時代を抜けて、身なりこそ大きくなったけれど、体の大きくなったという事実だけで、大人になつたとは誰にでも許せるものではない。

もう十八か九。よい若者にはちがいないが、気持は多分にまだ乳くさい。それに積年のうらみともいえる憎悪が積り積つてのことである。

「どうしてくれよう」

引摺つて来て、山神の御堂の前にたたきつけ、なお、鬪志を亡なくさない細い体を踏まえながら、殺してはまずいし、生かしておくのも癪しゃくなこのばばの始末にちよつと当惑した。いや、それよりは、先におばばの指図で、下ノ庄の屋敷とかへ、手取り足取りして連れ去つた——お通の身がなお、そうしている間も案じられるのだ。

そもそも——といえ、余りに由来でもありそうだが、お通が飾磨しかまの染屋にいたことを、たまたま彼が知つたわけは、彼が父の丹左衛門と共に、近くの姫路へ定住していたおかげ

であつて、この秋、浜奉行まで使いに来ることが繁く、その数度の往復のうちに、ふと垣間見て、

(よく似た人——)

と、注意していたことから、こういう彼女にも、危急にも、偶然、出会つたわけだつた。神の導きと、城太郎は思いがけない機縁に感謝した。同時に、お通に対しての、飽くなきおぼばが迫害を、骨髄こつずいから憎んで、忘れかけていた数々の口惜しさまでを新たに思い出した。

(このぼばを除かぬうちは、お通さんは、安心しては生きてゆかれない)

と考へ、一時は殺意をさえ起したが、折角、父の丹左が城下に帰参したばかりでもあるし——元来うるさい山郷士の一族などと、事を構えてはと——その程度には大人らしくも思慮して、とに角うんと彼女を懲らしめ、そしてお通を無事に救えばよいと決めているのだつた。

「ウウム。いい隠居所がある。おぼば、こう来い」

城太郎は、彼女の襟えりがみをつかんで起たせようとしたが、ぼばがべたりと地を抱いて起たないので、

「面倒」

と、引つ抱えて、御堂の裏へ駈けて行つた。

そこに、この祠ほくらを建てる時に、断きり削そいだ崖の断面があり、その下に、やっと人間が這つて出入りできるくらいな洞ほらあな穴があつた。

## 五

佐用の部落であろう、彼方むこうに、灯が一つ、ポチと見える。

山も、桑畑も、河原も、ただ広い闇だつた。——そして、今越えて来たうしろの三日月の峠も。

足に、石ころを踏み、耳に佐用川の水音を聞くと、

「おい。待てよ」

と、うしろの一人は、前へ行く二人を呼びとめた。

その二人は、素縄で後ろ手に縛からげたお通を、囚人のように、引つ立てていた。

「どうしたか、後から直ぐ行くといつたおばばが、まだやって来ぬ」



「ウム、そういえば、もう追いついて来そうなものだが」

「きかぬ気でも、ばばの脚では、間道の上りが、ちと骨なのだろう。手間取っているに違いない」

「ここらで一休みしてはいかがか。——それとも佐用まで行って、二軒茶屋でも叩いて待つとするか」

「どうせ待つなら、二軒茶屋で一杯やっていようじゃないか。……こういうお荷物を曳っぱっていることだし」

で、その三名が水明りを探って、浅瀬を越えかけた時である。

「おおおいっ」

と、遠い闇から声がした。

振り向き合って、

——はて？

と耳を澄ましていると、二度めの声は、より近く、オオーイとまた聞えた。

「おばばかな？」

「……いや、違う」

「誰だろう」

「男の声だ」

「でも、おれ達を呼んだのじやあるまいが」

「そうだ。おれ達を呼ぶ者はない筈だ。おぼが、あんな声を出す筈もなし」

秋の水は、刃物のように冷たい。ざぶ、ざぶと、水へ追いつて立てられるお通の足には、その冷たさがなおさら沁む。

と。うしろから。

タタタと迅い躰音あしおとだった。耳にそれが分つた時は、もう、追つて来た何者かの影は、

その三名の直ぐ側をいきなり、

「お通さん！——」

と、叫びながら、水煙を浴びせて、ざざざッと、向う岸まで一気に駆け渡つてしまったのである。

「——あつ？」

浴びた飛沫しぶきに身振りいしながら、三名の郷土は、お通を囲んで、浅い河の瀬に立竦たちすくんでしまった。

先に駈けて、河を越えた城太郎は、彼らの上がろうとする河原の水際みずぎわに立ちふさがつて、

「待てっ」

と、両手を拵げていた。

「や。何やつだ。おのれ汝は」

「何者でもよい。お通さんを、何処へ連れてゆくか」

「さては、お通を取り返しに来たな」

「いかにも」

「つまらぬ所へしやばると、命がないぞ」

「おぬしらは、お杉ばばの一族の者であろう。おばばの吩咐いっつけだ。お通さんをわしの手に

渡せ」

「何。おばばの吩咐だと」

「おお」

「嘘をいえ」

郷士たちは、嘲笑あざわらった。

## 六

「嘘ではない。これを見よ」

城太郎は、立ち塞ふさがったまま、漣はな紙がみに書いてある、ばばの手蹟しゆせきをつきつけた。

不首尾、今更せんもなし

お通の身、ひとまず

じよう太郎の手にかえし

わが身を連れに引つ返さ

るべく候。

「? ……。何だこれは」

読み合つて、眉をひそめた郷士たちは、城太郎の姿を、足もとから見上げ、その間に、濡れた足を水から揚げて、河原の岸にかたまつた。

「見たら分るであろう。文字が読めぬのか」

「だまれ。この中にある、城太郎とは、汝おのれとみえるな」

「そうだ。拙者は、青木城太郎」

というと――

「あつ……城太さん！」

とつぜん、お通が、絶叫して、前へのめりかけた。

先刻さつきから、彼女の眼は、彼の姿を凝視していた。半ばなかは疑い、半ばおどろは愕きに打たれ、身みもがきをしていたが、城太郎自身が、城太郎と名乗ったので、はつと、われを忘れた絶叫が出たのであった。

「ア。猿ぐつわが弛ゆるんだぞ。締め直しておけ」

と、城太郎と応対していた郷士は、うしろへいつてまた、

「なるほど、これはおぼばの筆蹟てにはちがいないが、そのおぼばが、わが身を連れに引つ返さるべく候――と書いているのは、どうした次第か」

血相を研といで詰めよると、城太郎は、

「人質ひとじちに取つてある」

と、澄まして、

「お通さんを渡せば、おぼばの居場所も教えてやる。否か応か」

と、いった。

さてこそ、いくらおばばを待つていても後から来ない筈——と、三名は目顔を見合せていたが、そういう城太郎のまだ乳くさい年頃を見縊<sup>みくび</sup>つて、

「ふざけたことを申すな。どこの青二才か知らぬが、おれたちを、何だと思う。下ノ庄の本位田といえ、姫路の藩士なら一応は知っている筈」

「面倒。否か応か、それだけ聞こう。否というなら、おばばの身は、抛<sup>ほう</sup>つておくまでのこと。山で飢え死させるがよい」

「こいつ」

跳びかかつて、一人は城太郎の腕くびを振<sup>ね</sup>じ取り、一人は柄<sup>つか</sup>をにぎって、斬る構えを見せた。

「たわごと申すと、首の根をたたき落すぞ。おばばの身を、どこへ隠した？」

「お通さんを渡すか」

「渡さんつ」

「では、拙者もいわん」

「どうしても」

「だから、お通さんを、返せ。そうすれば、双方怪我なく事はすむ」

「ちッ。この青二才」

振ねじあげた手をそのまま、足あし搦がらみに懸けて、前へ仆そうとすると、

「何を」

城太郎は、反対に、彼の力を利用して、その男を肩越しに投げつけた。

しかし、途端に、

「あッ……」

と城太郎も尻もちついて、右の太股を抑えた。

投げつけた男から、抜打ちに一太刀、ぴゅつと刎はねられたのである。

## 七

城太郎は、人を投げる技わざを知っていたが、まだ、人を投げる法わきまを弁わえていない。

投げられる相手も、生き物であるからには、ただ投げられたままではない。途端に、刀も抜こうし、無手でも脚へしがみついて来る可能性がある。

敵を投げるには、投げる前にまずその考慮がなければならぬのに、蛙でも叩きつけるように、脚下へ投げつけ、しかも身を退くことをしなかつたので、

(してやった)

と、思つた瞬間に、太股のあたりを薙ぎ払われて、彼もまた、相仆れに、負傷を抑えたまま、腰をついてしまった。

しかし、幸いに傷は浅かつたとみえ、城太郎も跳ね起き、相手も立ち上がると、

「斬るな」

「手捕にしろ」

と、他の郷士が呶鳴つて正面の相手と力を協せ三方から城太郎の体一つへ組みついて来た。

城太郎を斬つてしまえば、お杉ばばを何処へどうして人質にしてあるか、それを知る道がなくなるからであろう。

同様に、城太郎もまた、ここでうるさい郷士らと、血を見ることは避ける考えだつた。藩の聞えを思い、父に累を及ぼすまいとするために。

けれど、物の弾みは、そんな常の思慮で支えのつかない所にある。一人と三人との格闘



では、当然、一人の方から、憤怒の堰せきを切つてしまふし、城太郎の血はまた、多分に血氣一途でもあつた。

相手の三人に、

「この生なまぞうめ」

「小癩こしやくな」

「これでもかつ」

撲なぐられ、突かれ、足蹴にされてそれへ振ねじ伏ふせられそうになると、

「何をっ」

今度は、彼が、先刻うけた不意打の逆を行つて、いきなり脇差を抜くなり、乗しかかつている男の腹部へ突きとおした。

「……うツ。ちー！」

梅酢うめずの樽へでも手を突つこんだように、柄手つかでから肩半分まで、朱あけになると、城太郎の頭には、もう何も無い。

「くそつ、貴様もか」

起き上がるなり、また一名の真つ向へ撲なぐり下ろした。骨にぶつかった刀の刃は、横に寝

て、斜はすかに削そげたので、魚の切身ぐらいな肉片が、切つ先から素つ飛んだ。

「わ。や、やったな」

喚おめいたが、相手は、抜き合すのも間に合わないのである。余りに自分ら三名の力を信じ過ぎていただけに、狼ろうばい狽ばいの度もひどい。

「こいつら。こいつらっ」

城太郎は、呪じゆもん文もんのように、一刀ごとに喚おめきながら、残る二人を敵にまわして斬りむすぶ。

彼に刀法はない。伊織のように武蔵から正しい刀法の基本を授けられていなかったためである。しかし、血を浴びて愕おどろかないことと、刃ものを把とつて、年に似げない度胸と無茶のあることは、恐らく、彼が二、三年の間、共に暗黒で行動していた奈良井の大蔵の訓練に依るところであろう。

郷士たちの方は、二人といつても、すでに一人は傷てを負っているので、まったく逆あ上あつていた。城太郎の太ふ股ももの辺から、鮮血はそこらへ散るし、文字どおり斬りつ斬られるの修羅図であった。

抛ほうつておけば、相あ打うか、悪くすれば、城太郎は撫なで斬りになる。——お通はわれを忘

れて、河原を駈け、縛めのため利かぬ両手をもがきながら、闇へ向って、神の救援をさけ  
んでいた。

「来て下さい。どなたでも、援けて下さい。あそこに斬り合っている年若いお侍の方  
を！」

## 八

——が、叫んでも、駈けめぐっても、十方の闇、河の水音と、虚空をゆく風の声しか、  
彼女に答えるものはない。

そうした時、気の弱い彼女も、自力に気がついた。

人の救いを呼ぶまえに、なぜ自分の力を出してみないかに、はっと気づいたのである。

「——ちイツ」

河原に坐つて、岩のかどで、身の縛めをこすった。それは郷士らが路傍で拾った藁の素  
縄にすぎなかつたので、忽ちぶつと摺り切れた。

と——お通は、両手に小石をつかみ、慕しぐらに、城太郎と二人の郷士が斬り合ってい

る方へ飛び出して行つた。

「城太さん！」

と、さけびながら、その城太郎の相手の面部へ、一つ投げつけた。

「わたしもいる！　もう大丈夫つ！　……」

と、また一つ。

「……ちイッ。城太さんツ、慥しつかり乎かりして！」

びゆつと、さらに一つ。

だが、石は、三つとも相手のどこにもあたらず、皆それてしまった。

彼女は急いで、また次の小石を拾つた。——すると、郷士のひとりが、

「あつ、この阿女あま」

城太郎から、ふた跳びほど躍つて、彼女の背へ、刀のみね打ちを振り下ろそうとした。

——やッては！

と、城太郎も追つた。

そして、その郷士の男が、頭上から刀を下ろす間かん髪はつに、

「こいつめ」

城太郎の拳が、彼の背なかへ直かにぶつかっていた。真つ直に向けて行った脇差が、相手の背から腹へ突きぬけて、鐔と拳で止まったのである。

それは凄まじい働きだったが、城太郎の脇差は、屍肉から抜けなくなってしまう。彼があわてている間に、もう一名の郷士が、跳びついて来たらどうなるか。

結果は明白である。

だが、残った郷士の一人は、先に傷を負っていたし、力と恃む方が、悲惨な最期をとげたので、それも狼狽していた。

——見れば、彼方を、脚の折れた蠅螂のように、その男はよろよろ逃げてゆくのだ。

城太郎は、それを見て、自分の狼狽から泛びあがった。足をふんがけて、脇差をひき抜いた。

「待てッ」

当然な勢いである。

それにもう破れかぶれな気もちもある。追いかげぎま一打ちと駆け出しかけたのだった。すると、お通が、むしゃ振りついて叫んだ。

「およしなさいっ。……およしなさい。逃げて行く者を！ ……あんなに傷を負っている

者を！」

その声の、骨肉を庇うかばような真剣さに、城太郎はびっくりした。ここまで自分を苦しめて来た者をなぜ庇うかばのか、心理を疑った。

「それよりも、種々くさくさと、その後のはなしが聞きたい。わたしも話したい。……城太さん、一刻もはやく、ここから逃げて」

——そうだ。

城太郎も、それには異議がない。ここはもう讚甘さぬもと山一重だ。もし変事ありと、下ノ庄にでも聞えたら、本位田家の縁類たちが、野を呼び、里を挙げて、襲撃して来ることは知れきっている。

「駈けられるかい。お通さん」

「ええ。だいじょうぶ！」

二人は、ずっと以前の、小娘と小童頃こわっばを思い出しながら、闇から闇へ、息のきれるまで駈けた。

## 九

もう三日月の宿で、起きている家は、一軒か二軒。

その一つの灯は、宿場にたつた一軒の旅籠はたごしだった。

鉞かなやま山ががよいの金商人かねあきんどだの、但馬越えの糸屋たじまだの行脚僧あんぎやそうなどだが、ひとしきり母屋もやでさわいでいたが、思い思いに寝入つたらしく、燈ともしは母屋を離れた狭苦しい一棟にしか残つていかなかった。

年下の男をつれた駈落ち者かけおちもの——とでも間違われたに違いない。そこは旅籠の年寄が、繭まゆを煮る鍋や紡ぎ車つむぎくるまをおいて、ひとり住んでいる所だったがお通と城太郎のためにわざわざ空あけてくれたのだつた。

「……城太さん、それでは、お前も江戸表で、武蔵様にはお会いすることができなかつたのですね」

その後のはなしを、彼から逐ちくいち一聞いちきいて、お通は、うら悲しそうにいう。

城太郎は、彼女も、木曾路でちりぢりになって以来、今もつてその人に巡めぐり会わないでいる——という傷いたましい述懐じゆわいを聞いて、何だか語るにも堪えないような気持めいがするのだつた。

「——が、お通さん、そう嘆くことはないよ。風の便りだけれど、近頃、姫路にこんな噂がある」

「え。……どんな？」

藁わらでも噂でも彼女の今の気もちでは、つかまずにいられなかった。

「武蔵様が、近いうちに、姫路へ来るかも知れないのだ」

「姫路へ……。それは、ほんとでしようか」

「噂だから、どの程度まで、信じていいかわからないが、藩ではもっぱら本当らしくいわれている。——細川家の師範佐々木小次郎と試合する約束を果すために、近く、小倉へ下るだろうと」

「そんな噂は、私もちらと聞いたことがありますが、誰が一体いい出したことやら、糺ただしてみれば、武蔵様の消息を——いる所すら、知っている人はありません」

「いや。藩で流布るふされているはなしには、もう少し、真実らしい根拠がある。……というのは、細川家とも縁故のふかい、京の花園妙心寺から、武蔵様の所在が知れて、細川家の家老、長岡佐渡どのの取次で小次郎からの試合状が武蔵様の手に届いているというのだが」

「では、その日は、もう近々でございまするか」



「さ。その辺のことになると、何日のことやら、何処でやるのか。とんと分つてはいない。——しかし、京都の近くにいるものなら、豊前の小倉へ下るには、きつと姫路の城下はお通りになる筈だ」

「でも、船路もありますもの」

「いや、恐らくは」

と、城太郎は、首を振って、

「船では行かれまい。なぜならば姫路でも岡山でも、山陽の各藩では武蔵様が通過の節はぜひ一泊を引き留めよう。そして、人物を見よう。またはそれとなく、仕官の望みがあるかないか、肚を訊こう。……などと種々な考えで、待ちうけている。現に姫路の池田家でも、沢庵坊へ御書面したり、妙心寺へ問合わせたり、また、城下口の駅伝問屋に命じて、もし武蔵らしい者が通つたらすぐ知らせよと、達してあるそうだから」

そう聞くと、お通はかえつて、ああと嘆いて、

「では、なおさらです。武蔵様が、陸路を下つていらつしやる筈はない。武蔵様のなによりもお嫌いな、そんな躁ぎが、城下城下で待ちうけているようでは——」

と、絶望していった。

## 十

うわさの程度でも、欣よろこぶであろうと、城太郎は話したのであつたが、彼女にいわれてみれば、武蔵が姫路へ立ち寄るだろうなどという期待は、儂はかない、こつちだけの空想にすぎない。

「——では城太さん。京都の花園妙心寺へゆけば、確かなことが、知れましようね」

「それは、知れるかもしれないが、うわさだからなあ」

「まるで、根なし草でもないでしょうから」

「もう、行く気？」

「ええ。そう聞いたら、あしたにでも、立ちとうございます」

「いや、待てよ」

城太郎は、以前とちがつて、彼女についても、今では一ぱしの意見を持った。

「お通さんが、武蔵様と行き会えないのは、そういう風に、何かちらと、噂でも、影でもさすと、直ぐ一途に、それを的あてに行くからじゃないかな。時ほととぎす鳥の姿を見ようなら、声

のした先へ眼をやらなければ見えないのに、お通さんののは、後へ後へと行つては、行き迷はぐれているように思えるが……」

「それは、そうかも知れませんが、理窟のように、心のもてないのが恋でしょう」

お通は、城太郎になら、何でもいい得た。

けれど今、恋ということばをつい洩らして、城太郎の姿を見直すと、はつと思つた。城太郎の顔いろも紅あかくうごいた。

もう城太郎は恋ということばを、手鞠てまりのように、受取ったり返したりしていられる相手でなかつた。人の恋より、彼自身が、それに悩む年配になっていた。

で。遽にわかに、

「ありがとうございます。私も、よく考えてからにいたします」

お通が、穂そを外らすと、

「そうなさい。そしてとにかく一度、姫路へ帰つて」

「ええ」

「ぜひ、屋敷へは来てください。父と拙者のいる屋敷へ」

「……………」

「父の丹左も、話してみると、お通さんのことは、七宝寺にいた頃のことまで、よく知っていました。……何か知らないが、いちど会いたい、話もしたい、などと申していますから」

お通は、答えなかった。

消えかかる燈とうしん芯しんに、ふと、振顧つて、破れ廂やびさしから夜空を見上げながら、

「……ア。雨が」

「雨ですつて。——あしたは姫路まで歩くのに」

「いいえ、蓑笠みのかささえあれば、秋の雨ぐらいは」

「たとと来なければいいが」

「……オオ、風が」

「閉めましょう」

城太郎は立つて、雨戸を引寄せた。急にむし暑く、そしてお通のもつ、女の香が籠る気がした。

「お通さん、よいように、寝て下さい。拙者はこのまま——」

と、木枕を取つて、窓の下に、壁へ向つて横になった。

「……………」

お通は、まだ起きて、独り雨の音を聞いていた。

「寝ておかないといけないぞ。お通さん、まだ眠らないのか」

眠りつけないらしく、後ろ向きのまま、城太郎はそういつて、薄い寝具を、顔まで引つかぶった。

## 観音

### 一

雨は蕭々しょうしょうと、破れ廂やびさしを打ちつづけている。

風も強くなつた。

山村のことである。それに秋の空そらくせ癖、朝までに霽あがるかもしれない。

お通は、そんなことを思いつつ、まだ帯も解かず坐っていた。

ちよつと、寝つきが悪そうに、夜具の中で、もずもずしていた城太郎も、いつの間にか、

眠り入っている。

ポト、ポト……と、どこかに雨の漏る音がする。雨のしぶきが、がたがたと戸を打つ。

「城太さん」

お通は、ふと、呼びかけた。

「——ちよつと眼をさましてくださいな。城太さん」

何度呼んでも、眼を醒さましそうな様子もない。強しいて起すのも——と彼女はすぐ躊躇ためらってしまう。

ふと、彼を起して、訊ねたいと思つたのは、お杉ばばのことである。

ばばの味方の者へ、河原でもいつていたし、途中でも、ちらと聞いたが、このひどい雨に、城太郎が、ばばへ与えた懲罰しわざは、余りといえば、酷むじい。可哀そうである。

（この雨風に、濡れもしよう。冷えもしよう。年をとっている体、悪くしたら朝までに死んでしまうかも知れぬ。——いやいや、幾日も、人に気づかれずにいれば、それでなくても餓死がしするにきまつている）

苦勞性な生れつきか。ばばの身までを案じ出して、彼女は、仇とも思わず、憎いとも考えず、雨の音、風の音のひどくなるほど、独りで胸を傷いためてしまう。

(あのばば様も、根から悪いお方では決してないのに)

と、天地へ向つて、ばばの代りに庇かばつてみたり、

「こちらが真まことをもつて尽せば、いつか真はどんな人へも通じるといふこと。……そうだ、城太郎さんに後で怒られるかも知れないけれど」

彼女は遂に、何事かを、思いきめた様子で、雨戸を開けて外へ出た。

天地は暗かつた。雨ばかりが白くしぶいている。

土間のわらじを、足につけ、壁の竹の子笠を、頭にかぶつて、お通は裾すそを折つた。

蓑みのを着て――

ザ、ザ、ザ……と軒端の雨だけに打たれて出て行つた。ここからは、そう遠くもない、宿場の横の、山神堂さんじんどうがあるあの高い石段の山へである。

夕方、麻屋の万兵衛と一緒に登つた、覚えのある石段は雨で滝津瀬たきつせになつていた。登りきると、杉林はごうごうと吠えている。下の宿場よりは、遙かに風の当りが強い。

「何処どこだろ？ おばばさんは」

くわしくは聞いていなかったのである。ただ、どこかこの辺に、懲罰こらしめにかけてあるのだと、城太郎はいつていたが――

「もしや？」

と、御堂の中を覗いてみた。また、床下ではないかと、呼んでみた。

答えもない。姿もない。

祠の裏へ廻った。——そして、荒海の潮のような樹々の唸りに体を吹かれて佇んでいと、

「おうーいつ。誰方ぞ来て下されようつ。……誰ぞその辺に人はないか。……ううむ、

ううむ」

唸きとも喚きともつかない声が——それも雨風の途断れ途断れに聞えて来た。

「おお、ばばさんに違いはない。——ばば様あ、ばば様あ」

彼女も、此方から、風へ向って声を張った。

二

呼ぶ声は、雨風に攫われて、暗い虚空へ、消えて去ったが、彼女の心は、見えぬ闇の人へ、通じて行ったものか、



「おうつ、おうつ。誰ぞそこらにお出でたお人やある。助けてくださいよの。ここじゃあ、ここじゃがのう。——助けて賜もようつ」

ばばの声が、彼女のそれに答えるように、途断れ途断れに何処からか聞えてくる。

元よりそれも、怒濤のような杉林の雨風に掻きみだされ、纏まった言葉には響いて来ないが、ばばが必死の叫びに違いないことは、お通の耳にすぐ知れた。

探り呼ぶ声も嘎れ果てて、

「……何処ですかあ？ 何処ですか？ ……ばばさんつ、ばば様あ」

お通は、堂を駈け巡った。

そのうちに——

御堂から杉の樹蔭を曲がって二十歩ほど先、奥の院の登り口となる崖道の断削いだ一方に、熊の穴みたいな洞穴が見出された。

「あつ……ここに？」

近づいて、中を覗くと、おばばの声は、確かに、その洞穴の奥から洩れて来るのだった。けれど窟の口には、彼女の力ぐらいでは、動きそうもない大きな岩が、三つ四つ積み重ねてあり、出入りを封鎖してあるのだった。

「どなたじや！ …… それへ来たのはどなた様じや！ もしやこのばばが日頃信仰する観世音菩薩かんぜおんぼさつの化身けしんではお在わさぬか。あわれ、お助けなされませ。——外道げどうのために、この難儀な目に遭おうた不愍ふびんなばばを！」

ばばは、外の人影を、岩と岩の隙間からひと目見ると、こう狂喜して叫び出した。

半なかば、泣くように、半ば、訴えるように、そして、生死の闇に、日頃信仰する観音の幻覚を描いて、それへ生きたい一心を禱いのりつづけた。

「——欣うれしや、欣うれしや。ばばの善心を、日頃から憐あわれと思おもひ給い、この大難へ、仮みすがの御姿たして、救いにお降り下されましたか。大慈大悲、南無、観世音菩薩かんぜおんぼさつ——南無、観世

音菩薩」

それなり——

はたと、ばばの声は、もうしなくなつた。善哉よいかな。

思うに、ばばは、一家の長おやとしてまた、子の母として、人間として、自分は善人無欠の人間と信じているのだ。自分の行為はすべて善なりとしているのだ。自分を守らぬ神仏があれば、神仏のほうが悪あく邪神であるとするであろうほど、彼女にとって、彼女は善ごの権ご化んげだつた。

——だからこの風雨に、観音菩薩かんのんぼさつの化身けしんが救いに降りて来ても、彼女にはすこしの不思議でも何でもない。当然こうあらねばならぬ気持であった。

しかし、その幻覚が、幻覚でなく、実際に誰か窟いわあなの外へ近づいて来たので、ばばは、途端に気がゆるんで、ああ、と失心してしまったのではなからうか。

「……?」

窟いわあなの外にあるお通も、あれほど物狂わしかつたばばの声が急に絶えたので、もしやと、気が気ではなくなった。早く窟の口を開こうものと、必死の力を出していたけれど、彼女の力では、その岩の一つすら動かなかつた。竹の子笠の紐ひもはちぎれて飛び、黒髪は、蓑みのと一緒に、雨風に吹きちらされた。

### 三

どうして、こんな大きな岩を、城太さんは独りで動かしたろう、と思う。

体で押してみたり、両手をかけてありつたけの力をこめてみたが、窟いわあなの口は一寸も開かない。

お通は、精を疲らして、

(城太さんも、あんまり酷い)

と、恨みに思った。

自分が来たからよいようなものの、もしこのままにしておけば、ばばは中で狂い死してしまう。それはそうと、急に声がしなくなったのは、もう半分死んでしまったようになっていたのであるまいか。

「ばば様。お待ちなさいよ。……気を慥乎して！ 今！ もう直ぐにお助けいたしますから」

岩と岩のあいだに顔を寄せていったが、それでも返辞はなかった。

もちろん、窟の中は、洞然たる暗黒で、ばばの影もみえない。

——が、微かに。

わくくうあくらせつ  
或遇悪羅刹

毒龍諸鬼等

ねんびかんのんりき  
念彼観音力

じしつふかんがい  
時悉不敢害

若悪獸圍繞  
じやくあくじゆうういによう

利牙爪可怖  
りげそうかふ

念彼観音力

ばばの唱える観音経かんのんぎようの聲がそこにする。ばばの眼や耳には、お通の聲も姿もなかつ

た。ただ、観音が見える。菩薩ぼさつの御聲みこえが聞えている。

ばばは、合掌し、安心しきつて、今は涙を垂れながら、ふるえる唇から、観音経を唱えていたのであつた。

けれどお通に神通力もなかつた。積み重ねてある三つの岩の一つも動かせなかつた。雨はやまず、風は休まず、彼女の蓑みのもやがて千断ちぎれ果てて手も胸も肩も、ただ雨と泥にまみれるばかりだつた。

#### 四

そのうちに、ばばも、ふと不審に思い出したのであろう、隙間に顔を寄せて、外を窺うかがいながら、

「誰じゃ？ 誰じゃ？」

と、どなった。

力も尽き、精も尽き、途方に暮れた顔して、風雨の中に、身を萎すばめていたお通は、「おお、ばば様か。——お通でございます。まだ、そのお声では、お元氣のような「何？」

と、疑うように、

「お通じやと」

「はい」

「……………」

間を措おいて、また、

「お通じやと？」

「はい……………お通でございまする」

ばばは、初めて愕がくぜん然と、ものに打たれたように、自己の幻覚から抛ほうり出されて、「ど、どうして、汝われが此処へは来たぞよ。……ああ、さては城太郎めが、後を追って」「今、お助けいたします。ばば様、城太さんのことは、宥ゆるしておあげなされませ」

「わしを、救いに来た……？」

「はい」

「汝われが……わしを」

「ばば様。何もかも、来し方のことは、どうぞ水に流して、おわすれ下さいませ。わたくしも、幼い頃に、お世話になったことこそ覚えておりますが、その後の、お憎しみやご折せ檻つかんは、決して、お怨みには思っておりませぬ。——元々、わたくしのわがままもあつたことと」

「では、眼がさめて、前非を悔い元のように、本位田家の嫁として戻りたいというか」

「いえ、いえ」

「では、何しにここへ」

「ただ、ばば様が、お可哀そうでなりませぬゆえ」

「それを恩に着せて、以前のことは水に流せといやるか」

「……………」

「頼むまい。誰がそなたに助けてくれと頼んだか。——もし、このばばに、恩でも着せたら、怨うらみを解くか、などと考えたのなら、大間違いじゃぞ。たとえば、憂き目の底におろう

とも、ばばは、生命欲しさに意気地は曲げぬ」

「でもばば様。どうしてお年をとったあなた様が、こんな目に遭うているのを見ておられましよう」

「上手をいうて、汝も城太めと、同腹ではないか。ばばを謀って、こうしやったのは、汝と城太めじや。もし、この窟から出たら、きつときつと、この仕返しは直ぐしてみせるぞよ」

「今に——今に——わたくしの気持が、きつとばば様に、分つていただける日もございましょう。ともあれ、そんな所にては、またお体を病みましよう」

「よけいな戯れ口。うぬ。城太といひ合せて、わしを擲揄いに來おつたの」

「いえ、いえ、見ていてください。わたくしの一心でも、きつとお怒りを解いてみせまする」

彼女はまた、起ち上がつて、岩を押しした。動かない岩を、泣きながら押しした。

だが、力では、絶対に動かなかつた岩が、その時、涙では動いた。三つの岩の一つが、どさつと先ず地へ落ちた。

それからまた、後ろの岩も、思いのほか軽く揺ぎ出して、窟の口はやつと開いた。



彼女の涙の力のみではなく、ばばの力も中から加わっていたためである。——で、ばばは自分の力のみでそこを衝き破ったような血相を湛え、同時に窟の外へおどり出した。

## 五

一心がとどいた。

岩が除かれた。

うれしや！

お通は、押した岩と共に、蹠めきながら心でさげんだ。

だが。

ばばは、窟から飛び出ると、いきなりお通の襟がみへ跳びかかって行った。この世へ生きて出直した目的の第一がそれであつたように。

「あれッ——ばば様っ」

「やかましい」

「な、なんで」

「知れたこと」

ばばは、力まかせに、お通を大地にひきすえた。

そうだった。知れきつたことではあった。けれどお通には、こういう結果は、考えられなかった。人へ贈る真心は、真心をもつて返されるものと誰に対しても、一様に信じて疑えない彼女に取って、この結果は、やはり意外な愕おどろきに違ちがいなかったのである。

「さあ、おじやい！」

ばばは、お通の襟えりがみを持つたまま、雨の流れる地上を引摺ひきずった。

雨は少し小やみになったが、なお、ばばの白髪さくさんに燦さん々と光ひかりって降り注そそいだ。お通は、引摺ひきずられながら、掌てを合せて、

「ばば様、ばば様、堪忍こらなさいませ。お腹の癒いえるまで、御折檻ごせきはうけますが、この雨に打たれては、ばば様のお体も、後で御持病ごもちびょうの因もとになりまする」

「なんじやと。いけ凶とら々しい。こうされても、まだ、ひとを泣き落しにする気かいな」

「逃げませぬ。どこへでも参りますから、お手を……ああ……苦しい」

「あたりまえじや」

「は、離して。くく……」

喉くびが詰つたのである。

お通は思わず、ばばの手をもぎ払つて、起ちかけたが、

「逃がそうか」

とその手は、またすぐ、黒髪の根をつかむ。

かくと、宙を向いた白い顔に、雨が注いだ。お通は、眼を閉じていた。

「ええ、わが身のために、どれほど、多年の間、艱苦を嘗めさせられたことか」

ばばは、罵つて、彼女が何かいえばいふほど、もがけばもがくほど、黒髪を引摺りまわし、踏んだり打擲したりした。

が——そのうちに、ばばは、しまった！ というような顔して、急に、手を離した。ばたと、仆れたまま、お通はもう虫の息もしていない。

さすがに、狼狽えて、

「お通つ。お通やあ」

ばばは、彼女の白い顔をのぞいて呼んだ。雨に洗われた顔は、死魚のように冷たかった。「……死んでしもうた」

ばばは、ひと事みたいに茫然とつぶやいた。殺す意志はなかった。あくまで、彼女を免

す気もないが、こうまでする気もなかったのである。

「……そうじゃ。ともあれ、一度やしきへ戻って」

ばばは、そのまま去りかけたが、またふと返って来て、お通の冷たい体を、窟いわあなの中へ抱かかえ入れた。

入口は狭いが、なかは思いのほか広い。遠い昔、求道の行者が、跌坐ふざしていた跡かのような所も見える。

「才酷ひどや……」

ふたたび、ばばがそこから這い出ようとした頃、窟の口はまるで滝だった。そして奥のほうまで真っ白に飛沫しぶきが吹きこんで来た。

## 六

出ようとすれば、いつでも出られる身になってみると、この豪雨しに、何も強いいて、濡れに出て行くことはない。――

「やがて、夜も明けように」

そう考えて、ばばは、窟の中につぐなんだまま、暴風雨のやむのを待っていた。が、その間、真の闇のなかに、お通の冷たい体と、一つにるのが、ばばは、恐ろしかった。

白い冷たい顔が、責めるように始終、自分を見ている気がする。

「何事も、約束事じゃ。成仏してたもよ……怨むなよ」

ばばは、眼をつぶって、小声に経を誦し始めた。経を誦している間は、苛責も忘れ、恐さもまぎれた。幾刻もそうしていた。

チチ、チチ、と小禽ことりの声がふと耳に沁む。

ばばは、眼を開いた。

洞窟が見えた。外から射す白い光が、鮮らかに、荒い土の肌を見せている。

夜明け頃から、雨も風も、はたとやんでいたらしい。窟いわなの口には、金色の朝の陽ひが、跳ね返ってかがやいていた。

「なんじやろ？」

起とうとしながら、ばばはふと、顔の前に泛うき出している文字に気をとられた。それは、洞窟の壁に彫りこんである何人なんびとかの願文だった。

てんもん十三ねん、天神山城の御かつせんに、浦上うらがみどこののぐん勢に、森金作という十六の子を立たせて、ふた目とも見ざるかなしさのあまりに、諸所の御仏をたずねさまよい、今ここに一体のかん音菩薩ぼさつをすえ奉ること、母の身にはらくるいのたねともなり、きん作がためには後生をねがいまつるに侍はべる

幾世の後、ふと訪うひともあらば、あわれと念ぶつなしたまわれ、ことしきん作が二十一ねんのくようなり

施主せしゆ 英田あいたむら きん作が母

所々、風化して、読めない所もある。天文永祿の頃といえは、ばばにも古い憶い出しかない。

その頃、この近郷一帯の、英田あいたや讚甘さぬもや勝田の諸郡は、尼子あまこ氏の侵略をうけて、浦上一族は諸城から敗退の運命を辿たどっていた。ばばの幼い頃の記憶にも、明けても暮れても、城の焼ける煙で空は晦くらく、畑や道ばたや、農家のある近くにまで、兵馬の死骸が幾日も捨てられてあつた。

きん作とかいう十六歳の子をその合戦に立たせて、そのまま、ふた目とも会わなかつた母親は、二十一年も経つた後まで、そのかなしみを忘れかねて、子の後生を祈りつつ、諸

所をさまよつて、亡き子の供養を心がけていたものとみえる。

「……さもあろう」

又八という子を持つばばには、同じ母なるその親の気もちが、ひしと分る。

「南無……」

ばばは、岩の壁へ向つて、掌を合せ、嗚咽おえつしないばかり、落涙していた。——そしてや  
やしばし、泣き暮れていたが、われに回ると、その涙の合掌かえの下に、お通の顔があった。  
すでにこの世の朝の光も知らず、冷たい人となつて、横たわっていた。

## 七

「お通つ……。わるかった。このばばが悪かったぞよ。ゆるしてたも。ゆるして……。ゆるしてたも」

——どう思つたのか。

ばばは、いきなりお通の体を抱きあげてさげんだ。悔悟かいごのいろが、ばばの面おもてには溢れていた。

「恐ろしや、恐ろしやの。子ゆえの闇とは、このことか。わが子可愛さにひとの子には、鬼となっていたか……お通よ、其方そなたにも、親はあったもののう。親御から見たらこのばばは、子のかたきじや、羅刹らせつじや、……。ああわしのすがたは夜叉やしやともみえていたであらう」

洞窟の中なので、彼女の声はいんいと籠こもつて、彼女自身の耳へ応こたえてくる。

ここには、人もいない、世間の目もない。また、見得みえもない。  
あるのは闇、いや菩提ぼだいの光だけである。

「——その羅刹とも夜叉とも見えようわしを、思えば、其女そなたは長のあいだ、ようまあ、怨みもせぬのみか、この窟いわあなへまで、ばばを救おうとて。……おう、今思えば、其女の心は真実じやつた。それを、邪よこしまに、悪推量して、恩をあだに憎んだのも、皆このばばの心がねじていたためじや……。ゆるしてくれよ。お通」

そして果ては、抱きあげたお通の顔へ、わが顔を、ひたとつけて、

「このような優しい女子おみなしが、わが子にもあるか。……お通よ、まいちど眼をあいて、ばばが詫びを、見ておくれやれ。まいちどものをいうて、ばばを、口の限り、罵ののつて気をはらしたも。お通よ」



そうお通へ向つて悔悟する胸には、またきようまでのあらゆる場合の自己の相が、すべて懺悔の対象になつてまざまざと悔いの胸を嚙んで来る。身も世もなく、

「ゆるしてたべ。ゆるしてたも」

ばばは、お通の背へ泣きぬれたまま、このまま、共に死なんもの時まで、思いつめたが、「いや、嘆いているまに、はよう手当したら、まいちど、生きぬ限りもない。——生きてあれば、まだ若い春の永いお通じやに」

ばばは、お通の体を、膝から下ろすと、蹠這いながら、窟の外へとび出した。

「あつ」

急に、朝の陽を浴びて、眼が眩んだのであろう。両手で、顔を掩いながら、

「——里の衆つ」

と呼んだ。

呼びながら、駈け出した。

「里の衆つ。里の衆——。来てくだされや」

すると、杉林の彼方から、誰かがやがやと人声がして、やがて、

「いたぞうつ。——おばばが無事で、あれにおるぞつ」

と、呶鳴る者があつた。

見ると、本位田家の一族——身寄りの誰や彼が十名近く。

ゆうべ、佐用川の河原から、血にまみれて帰つた郷士のひとりから急を告げたので、夜来の豪雨を冒し、わかばばの居所と安否をさがしに出た人々とみえ、みの蓑笠を着け、誰も彼も、水から上がったように濡れていた。

「おお、ばば殿」

「ご無事じやつたか」

駈け寄つて来た人々が、ほつと、あんど安堵のいろを浮かべ、そして左右からいたわ労りぬくの、  
ばばは殆どよろこぶ様子もなく、

「わしじやない。わしはどうなとかま関わぬ。はよう、あの窟のうちにいる女子をおなご手当したも。助けてたも。……もう氣を失うてから、ときた刻経っている程に、早うせねば……早う薬なとやらねば……」

まるで、うつつかのように彼方を指さし、もつる舌に、顔じゆうに、異様な悲涙を湛えていった。

## 世の潮路

一

翌年のことだった。詳しくいえばその歳は、慶長十七年、四月にはいったばかりの頃である。

泉州の堺港からは、その日も、赤間ヶ関へ通う船が、旅客や荷を容れていた。

廻船問屋の小林太郎左衛門の店にやすんでいた武蔵は、やがて船が出るとの報らせに、床几を立て、

「――では」

と、見送りの人々へ、挨拶をして、軒を出た。

「ご機嫌よう」

齊しく、そういいながら、見送り人たちは、武蔵を囲んで、船着きの浜まで歩いて行った。

本阿弥光悦の顔が見えた。

灰屋 紹由しやうゆうは病やまいのよしで来られなかつたが、息子の紹益しやうえきが来ていた。紹益は美しい新妻を連れていた。その新妻の麗しさは、人目をそばだたせるものがあつた。

「あれは、吉野やないか」

「柳町の？」

「そうじゃ、扇屋おうぎやの吉野太夫」

と、袖ひきおおうて囁ささやいた。

武蔵は、紹益しやうえきから、

(わたくしの妻で……)

とは引き会わされたけれど、前の吉野太夫であるとは紹介されなかつた。

また、顔にも、覚えがない。扇屋の吉野太夫ならば雪の夜、牡丹ぼたんを焚たきいてもてなされたことがある。彼女の琵琶びわにも耳澄みみすみました覚えがある。

が、武蔵の知っているその人は初代吉野であつて、紹益の妻なる女性は二代吉野なのであつた。

花散り花開く。——廓さとの年月はいとど流れが早い。

あの夜の雪も、あの牡丹の薪まきの炎も、今は夢かのようにである。その時の初代吉野のすがたも、今はどこに、人妻になつてゐるやら、孤独やら、うわさもないし、知る人も絶えてない。

「はやいものですね。初めてお目にかかった頃から思うと、もう七、八年は経つてゐる」  
光悦も、船まで歩きながら、ふと呟いたことだった。

「……八年」

武蔵も、うたた転、歳月の思いにたえなかつた。——今日の船出が、何となく、人生の一期きかく劃のように思われもして。

さてまた。

その日、彼をここに見送つた人々の中には、以上ふたりの旧知を始め、妙心寺の愚堂門下にずっとゐる本位田又八。京都三条車町の細川邸の侍たち二、三名。

また、烏丸光広卿の名代として供連れの公卿侍くげざむらいの一行。

それから、半年ほどの京都滞在中に、何かと知り合いになつた者や、彼が拒こぼんでも拒んでも、彼の人間と剣を慕つて、彼を師とよぶ者たちが、それは無慮むりよ二、三十名以上もあるうか——何しろ武蔵にとつてはやや迷惑すぎるほどな同勢をもつて、見送りに加わつてい

る一団もあつた。

で――

送らるる武蔵は、語りたいた者とは却つて語りあう間もなく独り船に移つてしまつたのであつた。

行き先は、豊前ぶぜんの小倉。

そして彼の使命は、細川家の長岡佐渡の鞞あつせん旋せんで、佐々木小次郎と、積年の宿題たる試合の約を、果すにあつた。

もちろん、このはなしが、具体的にきまるまでには、藩老長岡佐渡の奔走や文書の交渉がかなりあつて、武蔵が、昨秋以来、京の本阿弥ほんあみ光悦の長屋にいるということが分つてからでも、約半年もかかつて、ようやく、まとまつたことなのであつた。

## 二

巖流佐々木小次郎と、いつかは一度、一期いちごの面接は避け難いであろうとは、武蔵も疾とく期していたことだつた。

——遂に、その日が来た。

だが。

武蔵は、こんな晴がましい人気を負つてその場へ臨もうなどとは露だにも予期していなかつた。

きょうの立出にしても然りである。こういう大仰な見送りなど、心の裡ではもつてのほかなと思う。

思いつつ、拒み得ないのは、世間の人々の好意である。

武蔵は恐いのである。理解ある人の好意には、襟を正すが、その衆望が浮薄化して、人氣というような波に乗せられることを、恐ろしいと思つた。

ふとすれば、自分も凡夫だし、思い上がらないものでもない。

いったい今度の試合にしてもそうである。誰が、こういう切迫の日を持って来たか。考えてみると、小次郎でも、自分でもない気がする。むしろ周囲だと思ふ。いつとはなく、二人を対峙させ、二人を試合させてみることに、世間が先に、興味や期待を大きく醸して、(やるそうだ)

と、いい、

(やる)

と、断じ、遂に、

(いつの何日)

と、まだうわさのうちから、日まで取沙汰されて来たのだった。

こういう世評の対象になったことを、武蔵はひそかに悔いている。かくては自分の名聲とやらは喧けん伝でんされるにきまつているが、彼は今、決してそんなものを求めていなかった。むしろ、もつと独りの沈ちん潜せんと、独りの黙もく思しとを必要としている。——というて、それは拗すね者のすねた心ではさらさらない。行と工夫との合致のために。——そして愚堂和尚の啓蒙をうけてから後は、なおさら、道業の生涯の遠いことを、彼は痛感しているのであった。

(——さはいえ)

と、彼はまた、思うのである。

世間の恩というものを。

生きていること、それはすでに、世間の恩であつた。

今日。



この船出に、身に纏まとうている黒い小袖は、光悦の母が自ら針を持って縫まうてくれたものである。

手に持つ新しい笠かさや草鞋わらじ。その他一物たりとも何か世間の人の情けの籠かごつた物でない物はない。

いわんや、碌ろくろく々々、米も作らず布も織おらず、百姓のたがやす粟あわを喰くっている身は——まさしく世間の恩で生なきている。

(何をもつて酬むくいようか)

心をそこにおく時、彼は、世間に対して慎つつしむ心こそあれ、迷惑めいわくがる気もちなど起すのは勿もつた体たいないと知るのだった——しかし、その好意こういが余りに、自分の真価まかに対して過あ大だいであり過ぎる時、彼は、世間を恐れずおそにいられなかつた。

とつこうつ。

別辞。

また、海上無事の祈り。

旗はたやら、会あ釈しやくやら。

送る者、送らるる者の間に、眼まなこにみえぬ時はながれて、

「——おさらば」

「おさらば」

船は、ともづな纜を解き、武蔵は船に、人々は岸に残つて、呼び交う間に、大きな帆は青空に翼を張つた。

すると、一足おくれて、

「しまった」

と、船出の後へ、駈けつけて来た旅の者があつた。

### 三

港を出たばかりの船は、彼方かなたに見えているのに、わずかな遅刻で、それに間に合わなかつた若者は、返す返す地だんだを踏んで、

「ああ、遅かつた。こんなことなら眠らずにでも来るのだつたのに」

及ばぬ船の影を見送っている眼には、ただ乗遅れただけではない、もっと切実な恨みがみえた。

「もしや、権之助のではありませぬかな」

同じように、船が出ても、なお佇たたくんでいた人々の中から、光悦がその姿を見かけて、近づきながら声をかけた。

夢想権之助むそうごんのすけは、その手についていた杖じょうを、小脇へすくって、

「お。あなたは」

「いつか河内かわちの金剛寺でお目にかかった……」

「そう。忘れてはいませぬ。本阿弥光悦ほんあみどの」

「ご無事でお在いでられたとは、さてさてめでたい。実は、仄ほのかに、おうわさを聞き、生死のほども案じておりましたが」

「誰に聞きましたか」

「武蔵どのから」

「え。先生のお口から？ ……はて、どうしてであろう」

「あなたが、九度山衆に捕まって、どうやら隠密の疑いで、害されたかも知れぬという消息は、小倉の方から聞えて来たのです。——細川家の御家老、長岡佐渡様のお手紙などから」

「それにしても、先生がご存じの仔細は」

「今朝お立ちになる昨日まで、武蔵殿は、てまえの門内の長屋にお住居でした。その居所が小倉へ聞えたので、小倉からも度々、書面の通ううち、お連れの伊織殿も今では長岡家にいるとやらで」

「えつ。……では伊織は、無事におりまするか」

権之助は、今日の今、初めてそれを知ったらしく、そしてむしろ、茫然たる面持だった。

「ともあれ、ここでは」

と光悦に誘われて、近くの磯茶屋の床几しょうぎを借り、こもごもに語りあってみると、権之助が意外としたのもむりはない。

月叟げっそう伝心——九度山の幸村ゆきむらは、あの時、権之助を一見すると、遠さすにすぐ、権之助の人となりを知ってくれた。

で、彼の縄目なわめは、

(部下の過失)

と、即座に、幸村の謝罪と共に解かれ、禍わざわいはかえって、ひとりの知己を得る幸いにな

った。

それから、紀伊越えの山の割れ目に墜ちた伊織の身を、幸村の配下の者も、力を協せて探してくれたが、杳として、きようまで、生死も知れなかった。

断層の谷間に、死骸は見あたらなないので、

(生きている)

とは、確信していたものの、それだけでは、やがて、師の武蔵にあわせる顔もない。

以来、権之助は、近畿をたずね歩いてきた。

たまたま、巷間には、近く武蔵と細川家の巖流とが、一戦の約を果すとか、もつぱら噂もあつて、武蔵が京あたりにいるらしいことも察したが、何しろ、合せる顔もないとして、権之助はそう聞くほどさらに、伊織を尋ねることに焦心ついていたのだった。

——と。その武蔵が、愈 《いよいよ》、小倉へ向つて立つということを、きのう九度山で聞いた。

(かくては何日か)

と、意を決し、面を冒して会うつもりで、早々、道を急いで来たのだったが、船の時刻が確としないため、一足ちがいとなり、何とも残念至極——と、繰り返して、権之助はい

うのだった。

#### 四

光悦は、なぐさめて、

「いや、そうお悔みなさるには当るまい。次の便船までには数日の間があろうが、陸路くがじを追って行かれれば、小倉表で武蔵殿に会うなり、長岡家を訪れて、伊織殿とご一緒になるなりすれば——」

いうと、権之助は、

「もとより、すぐ陸路を参るつもりではございますが、小倉へ着くまでの間でも、先生とひとつにいて、お身廻りのことでも勤めたかったのでござります」

と、ちゆうじょう衷情を述べ、

「それに、今度の御発足は、怖らく先生にとつても、生涯の御浮沈かと思われます。平常、御修行にひたむきな武蔵様の事ゆえ、万が一つにも、巖流に敗れをとるような儀はあるまいとは思われますが——勝敗はわかりません。あながち、修行を積んだ者が勝ち、きようし驕きようし

者は負けるとも限りません。——そこに人間力を超えたものも加わるのが、勝負の運、また、兵家の常ですから」

「けれど、あの沈着ぶりなら、自信がありそうです。お案じには及びますまい」

「と、思いはしますが、聞くところに依ると、佐々木巖流というものは、さすが遠に稀れな天才らしゅうございます。殊に、細川家に召抱えられてからは、朝暮ちようぼの自戒鍛錬たんれんは一通りでないとも聞き及びました」

「驕慢な天才と、凡質をしし孜々と研みがいた人と、いずれが勝つかの試合ですな」

「武蔵様も、凡質とは思われませんが」

「いや決して、天稟てんびんの才質ではありませんまい。その才分を自ら恃たのんでいる風がない。あの人は、自分の凡質を知っているから、絶えまなく、研みがこうとしている。人に見えない苦しみをしている。それが、何かの時、鏘しょうぜん然と光つて出ると、人はすぐ天稟の才能だという。——勉つとめない人が自ら懶惰らんだをなくさめてそういうのですよ」

「……いや、おおきに」

権之助は、自分がいわれている気がした。そしてそういう光悦の、のどかで間の広い横顔をながめながら、

(この人も)

と、思い合されるところがあつた。見るからに悠閑の逸人らしい。何の険も針もない眸も、ひとたび彼の生む芸術へかかつた時の光はこうではあるまいと思われた。汀にさざ波一つない日の湖と山雨を孕んだ時の湖とぐらいな相違があるのではなかるうかと。

「光悦どの。まだお帰りになりませんか」

その時、若い身を法衣につつんでいる男が、茶屋をのぞいていった。

「才。又八さんか」

光悦は、床几を離れ、

「——では、連れが待つていますから」

と、権之助へ、挨拶を残すと、権之助も共に起つて、

「いずれ、大坂まで」

「そうです。間に合えば、夜船でも、淀川から帰りたいと思ひますが」

「——では、大坂まで、ご一緒に参りましょう」

権之助は、そのまま陸路を豊前の小倉まで行くつもりらしい。

若い妻を連れした灰屋の息子や、細川藩の留守居や、他の人々も、それぞれ一組になって、



同じ道を、先へ行くもあり、後から来る者もあつた。

又八の現在やら、以前の身の上ばなしなど、その途々みちみち、何かと語り種かたぐさになつた。

「どうか、武蔵どのが、首尾よくやればよいが、あれで、佐々木小次郎も、喰えぬ男だし、凄腕を持つているからな……」

又八は、時々、憂わしげに呟つぶやいた。小次郎の恐るべきことを、彼はよく知っていたからである。

黄昏たそがれ——

三人はもう大坂の人混みを歩いてしたが、気がつくといつのか、又八が、連れの中から見えなくなっていた。

## 五

「どこへ行つたのやら？」

光悦と権之助とは、道をもどつて、連れのを、夕方の往来にさがした。

又八は、と或る橋の袂たもとに、ぼんやり立っていた。

「何を見て？ ……」

と、怪しみながら、彼の様子を二人が遠くから見まもっている、又八の眼は、河原にあつて、夕方の仕掛に忙しい鍋釜だの、野菜物だの、玄米だのを洗っているこの附近の長屋女房のかしましい群れに、じつと注いでいるらしいのである。

「はての、あの容子は」

凡事ただごとでないその面持おももちを遠方からも察したので、わざと二人は、しばらく彼の意のままに措おいて、言葉をかけずに待つていた。

「……ああ、朱実あけみだ。……朱実にちがいない」

又八は、独り、そこに佇たたずんでうめくように唇から洩はらした。

河原の女房たちの中に、その朱実のすがたを、彼は見出していたのだった。

偶然——という気もしたが、偶然でない気も一層強くした。

かりそめにも、江戸表の芝の長屋では、女房とよんだ女である。その時は、宿世すくせのふかい縁などとは元より思いもなかったが、時経て、まして黒衣に身をつつんで後は、そうした戯れ事ざざごとに似たことも、戯れ事とはなし限きれない、罪業を胸に詫わびていた。

——が、朱実の姿は、はなはだしく変つていた。

その変つた姿を、通りすがりの橋の上からひと目見て、すぐ、

(あつ、朱実)

と、胸打つほどのものは、恐らく自分だけしかあるまいと思う。偶然ではない、生命との交流は、同じ土に息づいている以上、いつかこうあるのが本当である。

それはさて措き。

変り果てた朱実には、つい一年余ほど前の色も姿態もなかった。汚い負紐で、背なかには、二歳ばかりの嬰兒を背負っていた。

朱実の産んだ児！

又八の胸には、まずそれがどきつと響いたにちがいない。

朱実の面も、見ちがえるほど、痩せている。それに、髪も埃のままの束ね髪で、木綿筒袖の、見得も風もないのを裾短に着、腕には重たげな手籠をかけ、口達者な長屋女房の押掬半分な囁りのなかに、物売りの腰を低めているのだった。

手籠の中には、海草だの、蛤や鮑などが売れ残っていた。背なかの児が、時々泣くので、籠を下へ置いては、子をあやし、子が泣きやむと、女房たちへ向って、商いをせがんでいくふうだった。

(……あ。あの児は?)

又八は、両手で、自分の頬をぎゅつと抑えた。胸の裡で、歳月をかぞえた。二歳としたら? ああ江戸の時分になる。

——と、すれば。

数寄屋橋の原で、奉行所衆の割竹の下に、むしろ蕨をならべて、共に百叩きに会ったあげく、西と東に放たれたあの時は——もう彼女の肉体に、今の子どもは胎内たいないにあつたわけである。

「……………」

夕方の薄ら陽が、河原の河水から又八の顔に揺らいで、顔じゅうが溢れる涙みたいに見えた。

うしろを忙しい往来が流れているのも彼は忘れていた。やがて、何も知らない朱実が、売れない手籠の物を腕にかけて、また、とぼとぼと、河原の先へ歩き出してゆくのを見ると、彼は、何もかも打ち忘れて、

「おういつ」

手を揚げて、走りかけた。

光悦と権之助とは、そこで初めて、駈け寄りながら、  
「又八どの。何じゃ。どうなすつたのだ？」  
と、呼びかけた。

## 六

又八は、はつと振向いて、連れの人に、心配をかけていたことを、初めて気づいたかの如く、

「あつ。すみませんでした。……実はその」

実は——といったものの、その実をひとに伝えるには、急場の言葉では分つて貰えそうもない。

殊に、今ふと、胸によび起した彼の<sup>ほっしん</sup>発心は、彼自身でも、説明にむずかしかった。

勢い、いうことは、そこで唐突にならないわけにゆかない。又八は、喉<sup>のど</sup>につかえることもな感情の中から、最も手つとり早いことだけいった。

「——すこしその、理<sup>わけ</sup>がありまして、急に私は、還<sup>げんぞく</sup>俗しようと思ひ立ちました。もつと

も、まだ、和上わじょうから、ほんとの得度とくどもうけていない身ですから、還俗するといつても、いわなくても、元々、ありのままなんですが」

「え……還俗する？」

又八は、辻褄つじつま合っているつもりだが、平静に聞く者には、ひどく辻褄が合わなすぎた。「それはまた、どういう仔細かな。どうもご容子ようすがちと変だが」

「詳しいことは、いえませんし、いつても、他人には馬鹿げていますが、以前、一緒に暮していた女にそこで会いました」

「ははあ。昔なじんだ女子おなじに」

呆れ顔する二人に、しかも彼は生真面目きまじめであった。

「そうです。その女子おなじが、嬰兒あかじを負ぶつていたので――。年月を繰ってみると、どうも自分の生ませた子に違いありません」

「ほんとですか」

「ほんとに子を負ぶつて、河原を物売りして歩いていたんで」

「いやいや、落着いて、よく考えてごらんなさい。いつ別れた女子か知らぬが、ほんとに、自分の子かどうか」

「疑つてみるまでもありません。いつの間にか、てまえは父おやになつていたのです。……知らなかつた。濟まなかつた。……急に今、胸を責めつけられました。てまえはあの女に、あんな惨みじめな物売りはさせては置かれません。また、子に対しても、父らしい務めをしななければなりません」

「……………」

光悦は、権之助と、顔を見合わせて、多少の不安を覚えながらも、

「……では、浮いたはなしではないのじやなあ」

と、つぶやいた。

又八は、法衣ころもを解き、数珠ずずと共に、光悦の手に託して、

「まことに、憚はばかりですが、これを妙心寺の愚堂様に、ご返上申してください。そして恐れ入りますが、今のように仰つしやつて、又八は大坂でひとまず父おやになつて、働くと伝えて下さいませぬか」

「いいのかな。そんなことで、これをお返し申して」

「和上様は、常々てまえにいつていました。町へ歸りたかつたらいつでも去れよと」

「ふうむ……」

「また。修行は寺でもできぬことはないが、世間の修行が難事。汚いもの、穢けがれたものを忌み厭いとうて、寺にはいつて淨きよいとする者より、嘘、穢けがれ、惑い、争い、あらゆる醜しゆう悪おのなかに住んでも、穢けがれぬ修行こそ、真の行であるともいわれました」

「むむ、いかさまの」

「で、もう一年の余も、お側におりますが、てまえにもまだ、法名も下さいません。きょうまで、又八、又八で済ましていました。——後でまた、いつでも、自分でわからないことができたら、和上様の御門へ駈かけこみます。どうぞ、そうお伝え置きくださいまし」  
いい終ると、又八は河原へ駈かけ下り、もう夕霧に仄ほの暗くらい人影を、あれかそこかと追つて行つた。

まつよいぶね  
待宵舟

一

旗のような、紅い夕雲がひときれ飛んでいる。風ないだ海の底を、蛸たこの這うのも見えるほ



ど、水も空も、この夕方は澄んでいた。

その飾磨しかまの浦うらの川尻ひるに、午ごろから小舟をつないで、やがて迫る黄昏たそがれに、佗わびしい炊煙すいえんをあげている一艘いっそうの世帯がある。

「寒うはないかの。……風が冷とうなつて来たが」

七厘の火に、柴を折り燻くべながら、お杉ばばは、舟底へいう。

その苦とまの陰には、船頭の妻とも見えぬ嫺なよやかな病人が、つかね髪を木枕にあてて、白い面おもてをなかば、夜具の襟えりにかくして寝ていた。

「……いいえ」

病人は、微かに頭を振る。

そして、少し身を擡もたげ、粥かゆを煮る米を洗って七厘へ仕掛けているばばの姿をそこから伏拝ひたひたむように、

「ばば様、あなたこそ、先頃からお風邪かぜぎみではございませんか。——もう余り、わたしのことでご心配なさらないで……」

と、いう。

「なんの」

ばばは、振顧ふりかえって、

「そなたこそ、そのようにいちいち気がねしてたもるな。……のうお通よ。やがて待つ人の船も見えようほどに、粥かゆなと食かべ、力をつけて、待ったがよい」

「ありがとう存じまする」

お通は、ふと、涙をうるませ、苦とまの陰から、沖をながめた。

蛸釣たこつり舟や、荷舟や、幾つかの舟影は見えたが、彼女の待つ堺港さかいみなとから立った豊前通いの

便船は、まだ帆影すら見えて来ない。

「……………」

ばばは、鍋なべをかけ、火口をのぞいている。粥はやがてくたくたと煮えて来た。

徐々に、雲は暗くなる——

「はて、遅いのう。遅くも夕方までには着こうとのことじゃったが」

波の障さわり、風の障りもない海なのに——と、ばばも、待つ船を、頻りと待ちあぐねて、

沖を見てはつぶやいた。

いうまでもなく。

この夕方、ここに寄る予定の便船というのは、つい昨日、堺港を出た太郎左衛門船たろうざえもんぶねのこ

とで、それには、小倉へ下る宮本武蔵が便乗したと——早くも山陽の街道筋には知れ渡っていた。

うわさを、聞くと同時。

姫路藩の青木丹左衛門の子息城太郎は、すぐ使いを走らせて、讃甘さぬもの本位田家へ知らせた。

知らせをうけたばばは、その吉報をたずさえて、またすぐ、村の七宝寺へ駈けた。お通は、そこに病やまいを養っていた。

去年の秋の末頃、暴風雨あらしの夜、佐用山の窟いわあなへ、おばばを救いに行つて、却つておばばの酷ひどい打擲ちようちやくにあい、気を失つてしまつたあの時の明け方から——ずっと続いて、意識は元よみがに蘇よみがえつても、体のぐあいは、前のようにすぐれなかつた。

（ゆるして下されや。腹の癒いゆるるまで、このばばをどんなにもして——）  
その後のばばは、彼女の顔を見るごとに、懺悔ざんげの涙をながしていう。

お通はまた、

（勿体ない）

と、それをしも、かえつて苦痛にして、自分の体には、以前からどことなく、こうした

持病の芽があつたので、決して、ばば様のせいではないとなくさめる。

事実。お通には、そうした病の経歴がなくはない。数年前、京都の烏丸光広の館にいた頃も、幾月かを病に臥したことがあり、その折と今度と、朝夕の容態も、よく似ていた。夕方になると、微熱が出て、軽い咳がともなつた。目に見えぬほどずつ、体は痩せてゆき、その麗しい容貌は、よけい麗しさを増し、むしろその美はあまりに研がれ過ぎて来て、対語する者をして、ふと憂えしめるほどだった。

## 二

しかし——

彼女のひとみは、いつも欣びと希望にみちていた。

欣びとしては。

（おば様が、自分の心を分つて下さつたのみか、同時に、武蔵様やすべての人達へも、御自身の過ちへお気がついて、生れ変つたような、優しいばば様になつて下された——）  
と、いう事実を眼に見、また、生きている希望としては、

(近いうちに)

と、何がなし、心待ちの人と会う日も、近い心地を、覚えていた。

ばばもまた、あれ以来は、

(きょうまでの、わしが罪と、心得違いより、そなたを不幸にした償いには、きつと、武蔵どのへ、ばばが両手をつけて詫びても、そなたの身を、よいように頼んで進ぜるぞよ)

そういつて、一族の者はもとより村の誰彼へも、お通と又八との、かつての古証文は、きれいに破棄して、やがてお通の良人たる人は、武蔵でなくてはならないと、自分の口からいうほどに変わっていた。

武蔵の姉のお吟は、ばばがまだこういう気持ちにならない前には、彼女を呼び出すために嘘をいつて、佐用村の附近にいるようなことをいつたが、事實は、武蔵が出奔後、播磨の縁類へ一時身を寄せ、そこから他家へかたづいたとかいうのみで、その後の消息は、伝わっていないかった。

で——。七宝寺に戻つて、以前からの知辺といえは、やはり誰よりもおばばとが濃い仲間だった。そのおばばはまた、朝晩に七宝寺を見舞つて、

(薬は服んだか。——食べ物。——きょうの気分は?)

と、真心のありたけを傾けた、看護みとりの世話をしてくれたり、また、心を力づけてくれるのだった。

また、ある時はしみじみと、

(もし、いつか窟いわあなで、そなたがあのまま、蘇よみがえらんだら、わしもその場で、死ぬ気であった)

ともいった。

偽いつわりの多い人だったから、彼女も初めは、ばばの懺悔ざんげに、またいつ、変化が来まいものでもないと思っていたが、日がたつほど、かえってばばの真情は、濃く厚く、細やかになるばかりだった。

時には、

(こんなにも好いお方とは思わなかった)

と、お通ですら、以前のばばと今のお杉とが、同一に考えられない程だったから、本位田家の親しい者も、村の人々も、

(どうして、あんなに変りなさったか)

と、皆いい合った。

その中に、誰よりも、幸福を知つて来たのは、おばば自身であつた。

会う者、ことばを交<sup>か</sup>わす者、身近の者——すべてが、自分に対して、以前とは、まるで變つて来たからである。にこやかに迎え、にこやかに迎えられ、よい老<sup>としより</sup>婆<sup>うやま</sup>と敬<sup>うやま</sup>われる幸福を、六十を越えて、彼女ははじめて知つたのである。

ある者は、ぶつつけに、

(おばさんはこの頃、お顔までよいお顔になんなすつたのう)

と、正直にいつた。

(そうかも知れぬ)

と、おばはそつと、鏡を取り出して、自分の相<sup>すがた</sup>を見入つた。

しみじみ、歳月を覚えた。故郷を立つた頃には、まだまだ半分以上も、交じつていた黒い髪も、一毛のこらず真つ白になつていた。

心<sup>すがた</sup>の相<sup>すがた</sup>も。

顔かたちも。

純一で、白いものに、立ち回<sup>かえ</sup>つているように、自分の眼にも見えた。

(堺港さかいを出る朔日ついたちの太郎左衛門船で、武蔵どのは、小倉へ赴おもむくそうな)

かねて、武蔵が通過する節はすぐ知らせるといつていた姫路の城太郎から、斯かくとの知らせに、

(どうしやる?)

問うまでもないが、お通へ心を訊くと、お通は、元より、

(行きます)

と、いう。

夕方はいつも、微熱が出て、大事に夜具へ身を容いれているが、歩けぬほどな病気ではない。

(さらば)

と、直ぐ七宝寺を立ち、途中はお杉がわが子のように見まもつて、一夜を、青木丹左衛門の屋敷に休み、

(豊前ぶぜん通いの便船なら、飾磨しかまへは必ず寄る筈。一夜は、積荷を下ろすため、泊りとなろう。



藩の人々も、出迎えに行くが、そなた達は、人目につかぬように、川尻の小舟にいたがよい。——会う機は、わしら父子が、よいように作つて進ぜる)

と、丹左衛門のことばに、

(なにぶん)

と、その日、午ごろ飾磨の浦につき、川尻の舟に、お通をやすめ、以前、お通の乳母なる人の家から、何かと物など運ばせて、太郎左衛門船がはいるのを、今か今かと待ちかねていたのだった。

ちようど、その乳母なる人の染屋の垣の近くには、べつに、武蔵の通過を、かねてから待つて、彼のために、壮途を祝し、一夕の宴をもうけて、また、彼の間をも見ようとする姫路藩の人々が、二十余名も、駕籠までもつて、迎えに出ていた。

その中に、青木丹左衛門もい、青木城太郎もいた。

姫路の池田家と武蔵とは、その郷土的にも、また、武蔵が若年時代の記憶にも浅からぬ縁がある。

(当然、彼は光栄とするだろう)

迎えに出ている池田家の藩士たちは、皆、そう意識していた。

丹左衛門も、城太郎も、その見解に変わりはなかつた。

けれどただ、お通の姿をその人たちに見せて、誤解を招いてはいけけない。武蔵も迷惑とするかもしれない。——そう考えたので、わざと彼女とお杉だけは川尻の小舟へ遠のけておいたのだった。

——が。どうしたのか。

海は暮れ、夕雲の茜あかねはうすれ、いつとはなく宵明りが青黒くただよって来るのに、まだ、船の影は見えても来ない——

「遅れたのかな？」

誰かが、一同を顧かえりみる。

「——そんな筈はないが」

と、自分の責任のように答えたのは、京都の藩邸にいて、武蔵が船便で朔ついたち日に立つと聞くと共に早馬で知らせて来た藩士だった。

「船の出る前、堺さかいの小林へ使いをやり、朔ついたち日立ちと、確かめても来たのだから」

「風もないきょうの凧なぎ、そう遅れるわけではないからやがて見えよう」

「その風がないから、帆走りはよほどちがう。遅れたのは、そのせいじゃよ」

立ちくたびれて、砂に坐る者もある。白い夕星が、いつか、播磨灘はりまなだの空をつつんでいた。

「ア！ 見えた」

「見えたか」

「——あの帆影らしい」

「おお。なるほど」

ようやく、人々は、騒さわめき立って、浜の船着きのほうへ、そろそろ歩いて行つた。

城太郎は、その群れを、そつと走りぬけて、川尻へ駈けて行き、下の苦舟くまふねへ向つて大声で告げた。

「——お通さん。ばば殿。見えたぞ。武蔵様の乗っている船の影が」

#### 四

こよい寄る堺の太郎左衛門船。待ちかねていた武蔵の乗っている便船。それらしいのが今沖から見えて来たとの知らせに小舟の苦くまは、

「えつ。……見えてか」

と、揺れうごいて、

「何処に」

と、ばばも起つ。

お通もわれを忘れていう。

「——あぶない」

ばばはあわてて、ふなべりすが舷へ縋り立とうとするお通を、抱き支えた。

そして共に、身を伸ばし、

「おお、あれかの？」

息をのんで見まもつた。

よいなぎ宵風の海づらを、星明りに黒い翼を張つて、一艘そとうの大きな帆船が——見まもる二人の  
ひとみの中へすべ入り込んで来るように、見ている間に、近づいてくる。

城太郎は、岸に立つて、指さしながら、

「あれだ……あれだ」

「城太どの」

ばばは、確しかと。——離せば萎なえて、そのままほろりと、小舟の縁へりから落ちてしまいそう  
な、お通の体を抱きしめて、

「済まぬが、急いで、この小舟の櫓ろを把とつて、あの便船の下へ漕ぎ寄せてたもらぬか。——  
少しも早う、会わせたい。ものいわせたい。お通を連れて武蔵どのへ」

「いや、ばば殿。そう急せいたところで、致し方はない。今、藩の方々が、彼方の浜に立ち  
並んで待ちうけておられるし、早速に、船手の者が一名、早舟を漕ぎ出して、武蔵様を迎  
えに行つた」

「ではなおさらのこと。そう人目をはばかってばかりいては、お通を会いわせる違いとまもあるま  
いに。——わしがどうなど、人前はいい繕つくろおう。家中の衆に囲まれて、お客として持つて  
行かれぬまに、一目でも先に会わせてやりたい」

「困りましたなあ」

「だから、染屋の家に、待つていた方が好かつたに、おぬしが、藩の衆の人目ばかり恐れ  
るので、このような小舟に潜ひそみ、かえつてどうもならぬではないか」

「いやいや、そんなことはありません。世上の口はうるさいもの、大事な場所へ赴ゆかれる  
矢先に、あらぬ噂でも流れてはと、父の丹左衛門が案じるので、取計らつたまででござる。

……ですから、父とも計らい、後刻、隙を見て、武蔵様をここへお連れ申して参りますゆえ、それまで、窮屈でもここに待つていて下さい」

「ではきつと、これへ武蔵どのを、案内して来て下さるかの」

「迎えの小舟から、武蔵様が上がりましたら、ひとまず、染屋の縁を借りて、家中どももご一緒に休息となりましょう。……その間に、ちよつとお連れ申します」

「待つていますぞよ。固くたのんだぞ」

「そうして下さい。……お通どのも、その間、そつと寝やすんでおられたがよい」

いい捨てて、城太郎は遽にわかに気も忙せわしげに、元の浜辺のほうへ駈け去った。

ばばは、お通をそつと、苦とまの陰の臥床ふしどへ抱えて、

「寝ていやい」

と、労いたわった。

木枕おもとに、面を伏せると、お通はしばらく咽むせているのだった。今、急激に身を動かしたのが悪かったか、あまりに潮の香が強いためか――

「また咳せきが出るのう」

ばばは、彼女の薄い背をさすつて与えながら、その病苦まぎを紛れさせようとしてか、頻り

に、武蔵がここに見えるのも、もうわずかな間と、うわさした。

「ばば様。もう何ともございませぬ。ありがとうございます。勿体ない、どうぞお手を休めて」

咳がやむと、彼女は、髪のみだれを撫であげて、ふと、わが姿を顧みた。

## 五

かなり時が経った。だが、待つ人はなかなか来なかった。

ばばは、お通ひとり舟に残して、岸へ上がった。城太郎が案内して来る筈の武蔵の影を、そこに佇んで待ちあぐねている様子——

お通は。

やがて、武蔵がここへ来るかと思うと、人知れず動悸が打って、静かに身を横たえてもいられないらしい。

木枕や臥床を、苦の隅へ押しやって、襟をあわせたり帯の結びを直したりした。恋を覚えそめた十七、八の年頃の動悸も、今の動悸も、彼女には少しも変って来たふうがない。

小舟の舳へさきには、篝火かがりが吊つてあつた。夜の江口にその火は照りはえて、お通の胸にも赤々と燃えさかつた。

彼女は今、病やまいを忘れていた。小舟の縁へりから白い手をのばし、櫛くしをぬらして髪を撫であげた。そして掌てのひらに少しの白粉おしろいを溶き、それとも知れぬほど淡うすく顔を粧よそおつた。

彼女は人にも聞いてゐる。

侍ですら、深い眠りをとつた直ぐ後とか、体のすぐれぬ時などに、やむなく君前きんまへに出たり人と会う時は、手水ちようずをつかう間にそつと手早く、頬ほに隠し紅べにを粧よそおつて、はればれしく対語するとか——いう心がけを。

「……だが、何といおう」

お通はまた、武蔵と会つた上うへのことが心配になつた。

語れば、生涯はなしても、尽きないほどなものはある。

けれど、いつもいつも、会えば何もいえなかつた。

何のために！

と、かの人ひとはまた怒るかもしれないと惧おそれる。

折も折である。



世上にも聞え渡つて、天下の衆目の中を今、佐々木小次郎との試合にゆく途中とあれば、彼の気性、彼の信念、おそらく自分と会うことなど、楽しいこととは思つてもくれまい。

が——それだけに、彼女にとつては、なおさら一期いちごしの折であつた。相手の小次郎に武蔵が敗れるとは思えなかつたが、不測ふそくな敗北がないとはまた、いえない気もする。いやいや、いずれが勝つか、という世評では、武蔵が強しとする者、小次郎が優すぐれたりという者、相なかばしているのである。

もし、きょうという折を措おいて、万が一にも、このままふたたびこの世で相見ることができないような不幸が——かりにもあつたとしたら、悔いは百年の後も消すことができないであろう。

天にあつては比翼ひよくの鳥、地に在つては連理れんりの枝とならん——と来世を願つた漢帝の悔恨を、胸に歌に繰り返して、泣き死んでも追いつかないことである。

——何と叱られても。

と、彼女は病苦を人へは軽く見せてまで、強い気持でここへは来たのであつたが、こうして愈、その人と会う時が迫つてみると、胸は痛いほどときめき、心は武蔵がどう思ふかを懼おそれ案じて、会うての上のことばすら、見つからなかつた。

岸へ上がつて佇たたずんでいるおばばはまたおばばで、こよい武蔵と会つたら、先ず何よりも積年の怨みや誤解を水に流して、心の重荷を解きほぐしたい。また、その証あかしとして、彼が何といおうと、お通の生涯は、彼に託されなければならぬ。手をつけて頼んでも、そうしてやらねばお通にもすまない――

などと独り、胸に誓いながら、水明りの宵闇を見まもっていると、

「――おばば殿か」

駈けて来た城太郎の影が、近づきながら呼びかけた。

## 六

「待ちかねていた。城太どのよ。――して、武蔵どのには、直ぐこれへ見えますかの」

「おばば殿。残念だ」

「え。残念とは」

「聞いてくれ。仔細はこうだ」

「仔細などは、後でよい。いったい武蔵どのには、これへ来るのか、来ないのか」

「来ぬ」

「なに、来ぬと」

ばばは茫然、そういつて、お通と共に、昼から待ちぬいていた心の張りを崩して、見るにたえない失望の色を顔にあらわした。

——で、いい難そうに、城太郎がやがて説明するというには。

実はあれから、ややしばし、同藩の人々と共に、便船から上がって来る武蔵の輕舸を待つていたところ、いつになつても、沙汰もなし、輕舸も来ない。

でも、太郎左衛門船の影は、遠浅の沖に泊つて、見えているので、何かの都合で、遅れたのであろうかと、噂しながら、一同なお浜辺に立ち並んでいたが、やがて沖へ迎えに行つたお船手の輕舸の者が、漕ぎ戻つて来る様子。

やれ、見えた——

と思つたのも束の間、見れば輕舸の上には、武蔵の姿も見えぬ。どうした理か、と訊ねると、

（こんどの船都合は、この飾磨に上がる旅客もなし、少しの積荷は、沖待ちの船頭から受取つたので、船はすぐここから室の津へ廻し、先を急ぐので）

という便船の者の言葉だとある。

そこで、はしけ軽舸の者はまた、

（この便船には、宮本武蔵と申さるるお人が乗り合せておるはず。姫路藩の家中の者でござるが、一夜はお泊りと存じ、他の者も大勢、浜までお迎えに参っております。わずかな間でも、ちよつとこの軽舸でお上がりくださるまいか）

そう申し入れたところ、船頭の取次を聞いて、やがて武蔵の姿がともふなべり艫の舷にあらわれ、下の軽舸へ向つていうには、

（せつかくの御好意なれど、このたびは、御承知のとおり大事のいちぎ一儀にて、小倉におもむく途中のかたがた、便船もこよいのうち室の津へまわる由。あしからず御一同へお伝えを）  
との事に已やむなく引き返して来ると、その軽舸が浜へ戻つて報告している間に、太郎左衛門船はふたたび帆を張り、今、飾磨しかまの浦から立つたばかり——というのであつた。

城太郎は、こう仔細を告げ、

「是非もない儀と、家中の者も一同立ち去つた。——だが、ばば殿、此方こちらは何としたものだろう」

と彼も失望の底に落ちたように力なくいうと、

「なんじや、ではもう、太郎左衛門船は、この浦を出て、室の津へ向うたというか」

「そうだ。……あれ、ばば殿には見えぬか。今、洲すの先の松原を交かわして、西へ行く船が、太郎左衛門船。……あの艦ともには武蔵様が立っているかも知れぬ」

「おう……あの船影か」

「……残念ながら」

「これ城太どの。自体、そなたが落度であろうが。なぜ、迎えの軽舸はしけへ自分も乗って」

「いまさら何を申しても」

「ええまあ、みすみす船の影をそこに見ながら、口惜しいことわいな。……お通に、何と  
いうて聞かそうぞ。城太どの、わしにはいえぬ。……そなたから仔細を告げてたも。……  
したが、よう落着かせてから話さぬと、一層、病気を悪うするかもしれぬぞよ」

## 七

城太郎が告げに行かなくても、ばばが辛い心を忍んで伝えなくても、そこでの二人の話  
し声は、小舟の苦こまの陰かげにいて、耳澄ましているお通へはもう聞えていた。

どぶり……どぶり……

舷ふなべりをたたく川口の静かな夜波に胸を衝かれて、あふれ出る涙をどうしようもなかった。

さはいえ。

彼女はこよいの薄縁を、城太郎のように、ばばのように、遣やる方なき残念とはしなかつた。

(こよい会えなければ他の日に、ここで語れねばまたよその渚なぎさで)

と、独りしている十年の誓いに少しも変りはない。

むしろ武蔵様が、降りて途中の土を踏まない気持に、

(さもあろう)

とすら、同じ心が持てるのであった。

聞説きくならく。——巖流佐々木小次郎という者は、今では中国九州に亘わたって人もゆるす達人、

その道の覇者はしや。

武蔵を迎えて、雌雄しゆうを決しようというからには、人のみか、彼自身、必勝の信念ができて  
いるに違いはない。

いかに武蔵でも、こんどの九州きゆうしゅう行は、決して平安な浪路ではないであろう。——

お通は自分を怨む前に、そう思う。——そう思つてはまた、とめどない涙の中に沈むのだつた。

「……あの船に、あの船に武蔵様は」

今、松原の洲先すさきから西へゆく帆影を見まもりながら、滂沱ぼうたと流るる涙に顔をまかせ、彼女は小舟の縁へりに身も世もなかつた。

——ふと。

彼女は涙の底から、彼女自身も気づかない烈しい力呼び起していた。

それは、病やまいをも、あらゆる困難をも、また、長い年月をも、衝つき貫いて来た強い一筋の意志だつた。

弱い——肉体も、情にも、姿も見るからに弱々しい、彼女のどこに、そんな強固なものが潜ひそんでいるのかと怪しまれる程、それは今、屹きつと胸を衝いて彼女の頬にほの紅く血を上のぼせて来たのだつた。

「ばば様。——城太さん」

ふいに、彼女は舟から呼んだ。

二人は、岸のすぐ上へ、近づいて来て、

「お通どの」

何と話そう。思い惑つて、くもり声で城太郎が答えた。

「聞きました。船のご都合で、武蔵様がお見えにならないことは、今、お二人のおはなしで……」

「聞かれたか」

「はい。嘆いても及びませぬ。また、いたずらに悲しんでいる時でもございません。この上は、いつそのこと、小倉表まで参りとう存じます。そして、試合のご様子を見届けたいと思います。——もしものが全くないとは、どうしていい切れましょう。その時にはお骨を拾うて戻る覚悟でございまする」

「——でも、その病体では」

「<sup>やまい</sup>病……」

お通はその時まったく、自分が病人であることは忘れていた。しかし城太郎にそう注意されても彼女の意志は肉体を超えて、はるかに高い健康な信念の中に呼吸していた。

「お案じくださいますな。……もう何ともございませぬ。いいえ、少しぐらいなことはあつても、試合の御先途を、見届けるまでは……」



死にはしません！

いいかけた終りの一言は、胸に抑えて、すぐ懸命に身づくろいを直し、舟の小縁こべりに継すがりながら、這うように岸へ自分で上がって来た。

「……………」

城太郎は、両手で顔を抑えたまま、後ろを向いてしまい、ばばは、声をもらして、泣いていた。

たかおんな  
鷹と女と

一

以前、慶長五年の乱までは、勝野城といい、毛利いきのかみかつのぶ 壱岐守勝信の居城だった小倉には、その後、新城の白壁や櫓やぐらが増築されて、城の威容は、ずっと整ととのって来た。

細川忠興ただおき、忠利ただとしと、もう小倉城も二代にわたる国主こくしゆの府となっていた。

巖流佐々木小次郎は、ほとんど隔日に登城して、忠利公をはじめ、一藩の者に指南して

いた。——富田勢源せいげんの富田流から出て、鐘巻かねまき自齋じさいを経、彼に至つて、自己の創意と、二祖の工夫とを合一して成つた——巖流とよぶ一派の剣法は、彼が豊前へ来てから、幾年ともたたぬまに、藩の上下に行われ、九州一円を風靡ふうびし、遠くは四国中国からも、風を慕つて、城下に来て一年も二年も遊学し、彼の門に師礼を執とつて印可いんかを得て帰国しようとする者がずいぶんと多かつた。

彼の肩に、衆望があつまると共に、主君の忠利も、

「よい者を召抱えた」

と、よろこんでいる。

また、家中の上下が、挙こぞつて、

「人物だ」

といった。

定評となつてきた。

氏家うじいえ孫四郎は、新陰流をつかい彼が赴任して来るまでの、師範役であつたが、巨星巖流のひかりに孫四郎の存在は、いつか有るか無きかになつてしまった。

小次郎は、忠利公に願つて、

「孫四郎殿をも、何とぞ、お見捨てなきように。地味な剣法にはございますが、それがしなど若年の剣よりも、どこかに一日の長もあるように存じますれば」

と、称揚して、指南の勤務も、氏家孫四郎と、隔日ということに、彼の口から提議した。また。ある時、

「小次郎は、孫四郎の剣を、地味なれど一日の長があるという。孫四郎は、小次郎の刀法を、所詮しよせん自分などの及ばぬてんぴん天稟の名手という。いずれが然るか、いちど手合せしてみい」

と、忠利のことばに、

「かしこまつてござりまする」

いなやなく、双方、木剣を把とつて、君前でたたかった折に——小次郎は機を見て、「恐れ入りました」

と、先に木剣を措おいて、孫四郎の足下に坐し、孫四郎もまたあわてて、

「いや、御謙遜。所詮、てまえなどの敵たる其許そこもとではござらぬ」

と、互いに、勝ちをゆずり合つたことなどもあつた。

こうした事々が、いよいよ、

「さすがは、巖流先生」

「おえらいもの」

「奥ゆかしい」

「底の知れぬお方じゃ」

と、衆の信望をあつめて、今では彼が、隔日に、馬上七名の供に槍を立たせて登城の途中でも、その姿を仰ぐ者は、わざわざでも馬前へ寄つて来て、礼を施してゆくくらい、尊敬の的まじになつていた。

——だが。

それほどな、寛度を、落ち目の氏家孫四郎に示す彼も、ひとたび、

(——武蔵も近頃は)

と、不用意にかたわらの者が、宮本とか武蔵とかを口にして、その近畿や東国における世評のよいことを伝えると、

(ああ、武蔵か)

と、巖流の語気はたちまち冷ひややかなる狭小人の陰口に似たものとなり、

(あれも、近頃は、小賢こさかしく世にも知られ、二刀流とか自称しておるそうな。元来、器用

な力のある男で、京大坂あたりでは、ちよつと立ち対<sup>むか</sup>える者もあるまいからな）  
 などと、誹<sup>ひぼう</sup>謗するともつかず、賞<sup>ほ</sup>めるともつかず、その顔色にも何か出すまいとするも  
 のを抑えてというのが常であつた。

## 二

時にはまた、巖流の萩<sup>はぎ</sup>之小路<sup>のこうじ</sup>の屋敷をたずねる遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>の武芸者が、

（まだ一度も、会つてみたことはないが、武蔵どのの名は、名ばかりでなく、上<sup>かみいずみ</sup>泉塚

原以後、柳生家の中興石舟斎をのぞいては、まず当今の名人——名人といつては過賞なら、  
 達人といつてもさしつかえあるまいと、もつぱら称揚する仁<sup>じん</sup>が多いようでござるが）

と、彼と武蔵との、宿年の感情をわきまえずに、凶に乗つていいでもすると、

（そうかな。はははは）

小次郎の巖流は、その面<sup>おもて</sup>の色をかくすによしなく、苦<sup>にが</sup>々<sup>が</sup>しく冷笑して、

「世間は盲<sup>めくら</sup>千人と申すからなあ。彼を、名人という者もあるう。達人と称す人もなくはあ  
 るまい。……だが、それほどに、実は世上の兵法というものが、質において低下し、風に

おいては廃れ、ただ売名に長けた、小賢しき者のみが、横行する時代であることを、証拠だてておるのではなからうかな。——人は知らず、この巖流の眼から見れば、彼がかつて、京都で虚名を売った——吉岡一門との試合、わけて、十二、三歳の一子までを、一乗寺村で斬り捨てたときは、その残忍、その卑劣——卑劣といったのみでは分るまいが、あの時、彼は一人、吉岡方は大勢だったに違いないが、何ぞ知らん、彼は逸早く逃げていたのだ。——その他、彼の生立ちを見、彼の野望する所を見ても、唾棄すべき人物と、それは見ておるが。……ははは、兵法世渡りが達人というなら、賛同できるが、劍そのものの達人とは、それがしには思えぬことだ。世間は甘いものでなあ」

なお。

議論する者が、それ以上に、突つ込んで、武蔵を称めれば、巖流は、それ自体が、自身を嘲 蔑する言葉かの如く、面を朱にしてまでも、

(武蔵は、残忍にして、しかもたたかうに卑屈。兵法者の風上にもおけぬ人物)

と、相手の者をして、是認させてしまわないうちは、歇まないほどな、反感を示した。これには、彼を、

(一箇の人格者)

とまで、尊敬を払っている家中の人々も、ひそかに、意外としていたが、やがて、

(武蔵と、佐々木殿とは、何か積年の怨みのある間だそうだ)

と、伝える者のはなしや、またほどなく、

(近く、君命で、二人の間に、試合が決行される)

とかいわれ出してから、さては、と従来の不審もうなずかれて、一藩の耳目は、ここ数カ月、その試合の期日と成行きとに、そそがれていたのであった。同時に。

かくと城内城下に噂がひろまってから、萩之小路はぎのこうじの巖流のやしきへ何かにつけ、朝夕、足しげく通つて見える人は、藩老のひとり岩間角兵衛であった。

江戸表詰づめの頃、彼を、君公に推挙した関係から、今では殆ど、一族の交わりをしているその角兵衛。

きょうも。

四月のはじめ。

もう、桜は八重も、散りしいて平庭の泉石の陰を綴つづつて、つつじが真まつ紅かに咲いていた。

「在宅か——」

と、おとずれ、案内の小侍について奥へ通つて来ると、

「おう。岩間どのか」

居間は、陽影ひかげのみで、主あるじの佐々木巖流は、庭に立っていた。鷹たかこぶしを拳こぶしに据えて。

そして、よく馴れている鷹は、彼が嘴くちばしの先に出している掌ての上の餌えを、おとなしく喰べていた。

三

主君忠利ただとしの命で、武蔵との試合が決定してからほどなく、君公の思いやりもあり、岩間角兵衛のとりなしもあつて、——当分の間、隔日の御指南の儀、登城に及ばず。

と、それまでの、心静かな休養をゆるされて、毎日、屋敷かんに閑かんを楽しんでいる彼であつた。

「巖流どの。きょうな、いよいよ御前で、試合の場所の評議がきまった。——で、さつそく、お耳に入れに来たが」

角兵衛は、立ったままいう。



小侍が、書院の方から、

「どうぞ」

席を設けて、すすめている。角兵衛はそれへ、ウムと頷いたきりで、

「初めは、きくのながはま聞長浜むらさきがわにしようか、紫川の河原にしようか、などと所々、御評議にの

ぼつたが、とても左様な手狭な場所では、たとい矢来を結ゆめく繞らそうとも、おびただしい見物の混雑はふせぎきれまいとのことだな……」

「なるほど」

巖流は、こぶし拳の鷹えに、餌を喰ませながら、その眼や、くちばし嘴の様に見入っていた。

世間のさわぎや、そんな評議などには、超然として、関心もないように。

——折角、わが事のように、耳に入れに来たものをと、角兵衛は、やや張合いぬけしながら、

「立話もなるまいて。ま、あがらぬか……」

と客である彼の方からうながした。

「しばらく、お待ちを……」

と、巖流は、なお他念なく、

「掌ての上の餌だけ、喰べさせてしまいますから」

「御拝領の鷹じゃの」

「されば、去年の秋、お鷹野のみぎりに、お手ずから戴きましたあまゆみ天弓と名づくる鷹で、馴れるにつれ、可愛いものでなあ」

掌に残された餌を捨て、朱房の紐ひもを手繰たぐりかえして、

「辰たつのすけ之助、鷹小屋へ入れておけ」

と、うしろにいる年少の門人を顧みて、拳から拳へ、鷹を渡した。

「はい」

辰之助は、鷹を持って、鷹小屋のほうへ退がって行く。邸内はかなり広く、築山の彼方は松に囲まれていた。塀の外はすぐ到津いたつの川岸で、附近には藩士の屋敷も多かった。書院に坐して、

「失礼を」

巖流がいうと、

「いやいや、内輪じや、ここへ来れば、わしも、身内か息子の家のように思うておるのだ」  
角兵衛は、かえって、打ちくつろぐ。

そこへ、妙齡としごろの小間使が、楚々そそたる風情ふぜいで、茶を汲んで来た。ちらと、客を見あげ、

「粗葉でござりますが」

角兵衛は、首を振って、

「やあ、お光か。いつもあでやかな」

茶碗を取ると、お光は、襟あしまで紅くして、

「——おたわむれを」

逃ぐるように、客の眼から退さがって、襖ふすまの陰にかくれた。

「馴れば鷹も愛らしいものだが、性は猛鳥だ。……天弓よりはお光のほうが傍に置くはよからう。彼女の身あについても、いちど其許そこもとの胸を篤とくと聞いておきたいこともあるが」

「岩間どののお屋敷へ、いつかそつと、お光めがうかがったことがありはしませぬか」

「内密に——というていたが何も隠しておる要もあるまい。実はわしへ相談に見えたことがあるが」

「女め。——それがしに口を拭いて今日まで何も申しおりません」

巖流は、白い襖ふすまを、ちらと睨ねめつけていった。

## 四

「怒るな。むりもない」

岩間角兵衛は、そう宥<sup>なだ</sup>めて、巖流の眼が柔<sup>やわ</sup>らくのを見てから、

「——女の身としては、むしろ案<sup>な</sup>じるのが当然じやる。其<sup>そこ</sup>許<sup>もと</sup>の心を疑うのではないが、このままで、どうなるのかと、行く末の身を、考えるのは、誰でものこと」

「ではお光から、すべてのこと、お聞き取りでござろうが……。いや、面目もない事情で」  
「なんの——」

巖流が、やや恥じるのを、角兵衛は打ち消して、

「男女の間、ありがちなことじゃ。いづれ其<sup>そこ</sup>許<sup>もと</sup>も、然るべく妻帯もし、家庭らしゆう、一戸の体も立てねばならぬ。大きな屋敷に住み、多くの門人召使も持ったからには」

「しかし、いちど小間使として、屋敷においただけに、世間のでまえも」

「というて、今さら、お光を捨去るわけにもなるまい。それも妻として不足な女ならまた、考えようじゃが、血すじも正しい。しかも聞けば江戸表の小野治郎右衛門忠明の姪<sup>めい</sup>じゃと

いうことではないか」

「そうです」

「お身が、その治郎右衛門忠明の道場へ、単身、試合に向いて、忠明をして、小野派一刀流の衰退を、覚醒せしめたとかいう事件のあった折——ふと、親しくなったとのことだが」

「相違ございませぬ。お恥かしい儀でござるが、恩人たる貴方へ、隠しだしては心苦しい。いつかは自分からお打明けしようと思っていましたこと。……仰つしやる通り、小野忠明殿と試合して、その帰るさ、もう宵となりましたので、あの小娘が——その頃はまだ叔父の治郎右衛門忠明の傍に仕えておりました今のお光が——小提燈をもって、さいかちざか 皂莢坂の暗い道を、町まで送ってくれました」

「ウム。……そんな話だな」

「何げなく、まったく、何のふかい量見もなく、その途中、戯れに申した言葉を真実に取って、その後、治郎右衛門忠明が、出奔の後、自分を訪ねて参りましたので」

「いや、もうよい。……事情はそのくらいでな。ははは」

角兵衛は、あてられたという顔して、手を振った。

しかしそれから間もなく、江戸表の芝の伊皿子いせらひこを引き払って、この小倉へ移って来るまでも、そういう女性が彼の陰にいたことなどは、角兵衛はつい先頃まで知らずにいたので、自分の迂濶うかつに呆れると共に、巖流小次郎のその方の才気や腕や周到なる要意のほどにも、実は舌を巻いたのであった。

「まあ。そのことは、わしにまかせておくとせい。いずれにしても、ここの所では、遽にわかに妻帯の披露もおかしい。——首尾よく、大事の試合を仕果した上のはなしに」

角兵衛はいつて、ふと、その方の要談を思い出した。

角兵衛に取つては、相手の武蔵の如きは、巖流に比して、何者でもない気がした。むしろ巖流の地位、名声をして、いよいよ、大ならしめるための試鍊——とすら自負しきつていた。

「先ほどいった、御評議の上で決した試合の場所じやが、それは、前にもいった通り、御城下の地では、所詮しよせん、混雑はまぬかれまいとの見越みこしから、いつそ海上がよかろう、島がよいとなつて、赤間ヶ関と門司ヶ関との間の小島——穴門ヶ島あなとしまとも、またの名を船島ともいう所ですることと決定いたした」

「ははあ、船島で」

「そうじゃ。——で、武蔵が着かぬうちに一度、よくその地の利を踏んでおく方が、何分でも、勝目を取るといふものではあるまいか」

## 五

試合の前に、試合場所の地の利を知っておくことは、有利にちがひなかつた。

当日の進退に、あしこしら足拵えに、また、附近の木立の有無とか、太陽の方向によつて、どつちへ敵を立たせて迎えるかなど、すくな少くもいきなり行つて勝負にかかるよりは、作戦上にも心の余裕にも差があろう。

岩間角兵衛は、明日にでも、ひとつ釣舟でも雇つて、船島へ下見に行つてみてはと、巖流にすすめたが、巖流がいうには、

「兵法ではすべて、さそく早速の機というものを尊ぶ。こちらに備えあるも、敵が備えを破るに備えの裏を搔いて来る場合は、かえつて、こちらが出鼻の誤算を取つてしまうような例が往々ある。臨機に自由にありのままな心をもつて臨むに如しかずです」

角兵衛は（尤もな意見）と、うなずいて、船島の下見は、もうすすめなかつた。

巖流はお光をよんで酒の支度を吩咐いいつけた。それから宵にかけて打解けて二人は杯に親いんだ。

岩間角兵衛にしてみれば、自分の世話した巖流が、今日かくのごとく名声を得、くんちよ君

寵うも厚く、大きな邸やしきあるじの主ともなつてくれて、その邸でこうして一杯の酒の馳走にでもなるといふことは、世話がいがあったという気持から、人生の欣うれしいことの一つを杯の一口に舐なめているような顔つきだった。

「もう、お光を置いて、いうてもよかろう。ともかく、試合が済んだら、国元から年寄身寄りの近親も呼び、婚儀も披露し、剣道への執心は、勿論よいが、ひとまず家名の土台を固めることだな。そこまでのことがすめば、角兵衛の世話も、まず……というものじゃが」  
親代りになっている気の彼は、ひとりで上機嫌だったが、巖流はしまいまで酔わなかつた。

一日ごとに、彼は無口だった。試合の日が近づくにつれ、急に、人出入りが多くなった。隔日の登城がない代りに、接客にわずらわされて、静養の意味はなくなった。

そうかといつて、彼は、門を閉じて客を謝絶する気にもなれなかつた。巖流殿は門を閉めて人にも会わぬ——といわれるのは、何か卑ひきよう怯ひきようめいて聞えやすい。そういう所に彼は



割合に氣を遣つた。

「辰之助。鷹を出せ」

野支度して、天弓を拳に据え、朝早くから彼は屋敷を出ることにきめた。これはいい思案であつたと自分も思つた。

氣候のよい四月の下旬を、拳に鷹をすえて野山を歩くことは、歩くだけでも大いに氣を養つた。

琥珀色の眸を、油断なく研ぎすまして、獲物を空に追う鷹の姿を、巖流の眼がまた、追つていた。

獲物を、鷹が爪にかけると、チラチラと、鳥の毛が空から降つて来た。——巖流は息もしなかつた。自分が鷹になりきつて見ていた。

「……よし。あれだ」

彼は、鷹を師として、悟るところがあつた。一日ごとに、彼の面上に、自信の色がついて来た。

が、夕方屋敷に帰つてみると、いつもお光の眼は、泣き腫れていた。それを粧い隠しているだけ巖流の胸が傷んだ。だんじて、武蔵に敗れは取らぬと、かたい自信がありながら、

お光のそんな姿を見ると、

(……おれに別れたら)

などと、ふと死後のことが考えられたりした。それからまた妙に、常には考えもしない亡き母のことなども思い出された。

(もう、あと幾日もない)

と思つて眠る夜ごとに、彼の<sup>まぶた</sup>瞼には、琥珀<sup>こはくいろ</sup>色の鷹の眼と、憂<sup>うれ</sup>いに腫れているお光の眼とが、こもごもに見えて、その間に、母の姿が明滅していた。

## 十三日前

### 一

<sup>あかま</sup>赤間<sup>せき</sup>ケ関もそうである。門司ケ関、小倉城下はもちろんのことだった。この数日のあいだに、旅客の去る者はすくなく、留る者は多く、どこの旅<sup>りよしや</sup>舎もいっばいで、旅籠<sup>はたご</sup>の前には必ずある駒<sup>こまつな</sup>繫ぎの棒杭さえ、馬と馬で混み合っていた。

## 布令申す事

ひとつ。

来る十三日辰之上刻、ぶぜんながとのかいもん豊前長門之海門、船島に於て、

当藩士巖流佐々木小次郎儀、試合仰せつけらる被付。

相手方、作州牢人宮本武蔵政名也。

又、ひとつ。

当日、府中火氣嚴禁の事。

双方のひいき、助太刀のやからども輩共一切、渡海の事かたく禁制。

遊觀の舟、便船、漁舟等も同様。海門おうらいどめ往来止たるべし。

ただし辰下刻までの事。以上

慶長十七年四月

各所に、高札が建つた。

船着きに。辻に。高札場に。

そこにも旅人がたかっていた。

「十三日といえあさってば、もう明後日じやな」

「遠国から、わざわざ来る衆も多いそう。逗留とうりゆうしてみやげばなしに、見て行こうか」

「ばかな、一里も沖の船島の試合、見ゆるわけはない」

「いや、風師山かざしやまへ登れば船島の磯の松すら見える。確しかとは分らないでも、その日のお船手の固めや、豊前、長門の兩岸の、物々しい有様を見るだけでも」

「晴ならよいが」

「いや、このあんばいでは、雨にはなるまいて」

巷ちまたの声はもう、十三日の噂ばかりだった。

見物舟や、その他も、海上の往来は、辰の下刻まで停止と布令ふれが出たので、船宿は失望したが、それでも旅客は、当日の景観だけでもと、見晴しの地を心あてに、待ちぬいていた。

十一日の午頃ひるごろである。

門司ケ関から小倉へはいる城下口の一膳飯屋の前を、乳呑み児をあやししながら、行きつ戻りつしている女がある。

つい先頃、大坂の河端で、ふと見かけた又八が、後を追って行き会った、朱実あけみであった。旅の空が、嬰兒あかこも淋しくてか、泣きやまないの——

「ねむたいか。ねんねしや。ねんねしや。オオ、よち、よち、よち……」

乳ぶさをふくませ、足拍子を取つて、見得もない、粧よそおいもない、子があるばかり。

変れば変わるもの——と、以前の彼女を知る者は思うであらう。だが彼女自身には、この変化も、今の生態も、何の不自然もない姿だった。

「おお、坊や、寝たか、まだ泣いているのか。——おい朱実」

飯屋の中から出て来て、こう呼んだのは又八だった。

法衣ころもを返して、俗になつたのもついこの間のこと。やがて髪を蓄たくわえるつもり道の道心頭を、

頭巾で巻いて、渋染の袖そで無なし。あれからすぐ夫婦ふたりして大坂を立ち、道中の路銀とてないの

で飴あめ売りの胴どうらん乱らんをかけて、子の乳となる妻の糧かてを、一銭二銭と働はたらきながら、きょうやつ

と、小倉まで辿たどり着いたところだった。

「さ。おれがかわつて、抱いてやる。はやく御飯をたべて来い。乳が出ないというじやないか。たくさん喰くべて来いよ。たくさん」

抱き取つて、又八は、飯屋の外をうろうろと、子守歌をうたっていた。

すると、通りすがりの旅の田舎いなか武士が、

「おや?」

と、又八を見まもつて、後へ戻つて来た。

## 二

子を抱いた、又八も、

「お、お……？」

立ち止つた旅の武士へ、眼を返して見守つたが、誰だか、何処で会つた顔か思い出せなかつた。

「数年前、京の九条の松原で会つた一ノ宮源八でござるよ。その折は、六部の姿でござつたから、お見忘れもむりはない」

田舎武士は、そういつた。

それでもまだ又八には、明確な記憶をよび起せなかつたが、一ノ宮源八が、ことばを重ねて、

「その時、貴公は、小次郎殿の名を騙り、偽小次郎となつて、所々、徘徊しておられたのを、拙者は真の佐々木小次郎殿と信じ……」

「ああ、あの時の！」

思い出して、大きくいうと、

「そうじゃ。その時の六部でござる」

「それは、どうも」

お辞儀をしたので、せつかく、眠りかけていた嬰児あかごが泣きだした。

「才、ヨシヨシヨシ。泣くな、泣くな。ばア——」

話は、それで飛んでしまい、一ノ宮源八は先を急ぐふうで、

「時に、当御城下にお住居の、佐々木殿のおやしきは、どの辺か、ご存じないか」

「さあ、分りませんね。てまえも実は、今ここへ着いたばかりで」

「ではやはり、武蔵との試合を見届けに？」

「いえ。……べつにその」

一膳飯屋を出て来た仲間ちゆうげん二人が、通りすがりに、源八へ、

「巖流様のおやしきなら、紫川のすぐ側で、わたらの御主人のお屋敷と同じ小路でさ。そこへ行くなら、案内してあげましょうぜ」

「やあ、かたじけない、……では又八氏うじ、おさらば」

源八は、あたふた、仲間たちに尾いて行ってしまう。

その旅装いの、垢や埃のひどさを見送って、

「はるばる、上州から、やって来たのかしら？」

と、何とはなく明後日に迫る今度の試合が、いかに隈なく諸国に聞えているかが思いやられた。

それと、数年前——

あの源八がさがし歩いてきた中条流の印可目録を手に入れて、偽小次郎となつてうろついていた頃の自分の姿が——今になると、浅ましくもあり、何たる懶惰な、破廉恥など、身ぶるいが出るほど苦く思い出された。

その頃の自分と。そして、今の自分と。

考えてみれば、そう気づくだけの進歩はあつた。

(おれでも……こんな凡くらでも、眼がさめてやり直せば、少しずつでも、変わるんだなあ)  
御飯をたべるまも、子の泣き声が耳にあつて、いそがしげに、飯屋のめしを喰べて来た朱実は、その軒から駈けて来て、

「すみません。——負びいますから、背にのせて下さいませ」



「もう、乳はいいのか」

「眠たいのでしよう。背なかにのせれば、寝そうですから」

「そうか。……よいしょ」

又八は、子を、彼女の背なかへ渡した。そして、彼は、飴売りの胴乱を肩にかけた。

仲のよい夫婦飴屋。往來の眼が皆ふり向いて行く。自分たちのそれが皆、満足にゆかないのが多いので、たまたま、路傍でこういうけしきを見ると、羨望せんぼうにたえないらしい。

「よいお子じやのう。お幾歳いくつじや。……ほう、笑っておるがの」

歩み歩み、後から尾ついて来た品のよい切下げ髪きりかみの老婆が、朱実の背をのぞいてあやした。よほど子好きな刀自とじとみえ、供の下男にまで、この愛らしい笑い顔を見よ、というのだつた。

### 三

どこか安い木賃へでもと、子づれの又八と朱実が、裏町へ曲りかけると、  
「そちらへか」

と、うしろについて来た上品な旅の老婆は、にこやかに別れの会釈を送り、事について  
と思ひ出したように、

「あなた方も、旅の衆らしいが、佐々木小次郎の住居は、どこの辺りか、ご存じはないか  
の」

と、たずねた。

それならたつた今、先に尋ねて行つたお侍がある。紫川の側とかいうこと——と又八が  
教えると、老婆は軽く、

「かたじけない」

と、供の下男をうながして、まつすぐに立ち去つた。

又八は見送つて、

「……ああ。おれのおふくろ様も、どうしてござるやら？」

しみじみ、つぶやいた。

子を持つて、彼も初めて、この頃わかりかけて来たここちがする。

「——あなた、行きましたよう」

背の子を揺りあやししながら、朱実はうしろで待つていた。だがなお、又八は茫然と、彼

方へ行く同じ年頃の老婆を見送っていた。

きようは鷹も小次郎も、屋敷の内にはいた。夜来からの来客は、庭内を埋めている。まさか主人が鷹野にも出られなかった。

「何しろ、欣ぶべきことだ」

「巖流先生の名声も、これで否やなく、一決する」

「めでたいといつてもよからう」

「そうだと。曠世の御名譽にもなることだ」

「しかし、敵も武蔵。そこは十分、御自重していただかぬと」

大玄関にも、脇玄関にも、遠来の客のわらじで満ちていた。

はるばる、京大坂から来たというもの。また、中国筋の者、遠いものでは、越前の浄教寺村からという客もある。

家人では手が足りないので、岩間角兵衛の家族が来てもてなしている。また、家中の侍で、平常、巖流に師事している人々も、入り代り立ち代り、ここに詰めて、明後日の十日を待っているのだった。

「明後日というても、もう明日一日だからのう」

およそこにいる縁故や門流の顔ぶれを見ると、武蔵の人物を、知ると知らないにかかわらず、何かの気持から、武蔵を敵視していない者はない。

わけて、吉岡の門流を汲む者は、諸国へ亘<sup>わた</sup>つて、非常な数であるから、今もつて、一乗寺下り松の怨みは、その人々の胸にある。

その他、武蔵が十年の慕<sup>まつしぐ</sup>らな生活の間に武蔵自身も知らぬ敵が、ずいぶん出来ていた。その全部でなくても、一部の人間は、何らかの機縁から、武蔵の反対側にある小次郎の門をくぐつていく。

「上州から、お客でござる」

若侍が、また一名の客を玄関から大勢のいる広間へ連れて来た。

「自分は、一ノ宮源八と申す者で——」

と、質朴な客は、大勢へ向つて、挨拶し、知らぬ顔の中に交<sup>ま</sup>じつて、慎んでいた。

「ほ。上州から」

と、人々は、その遠路をねぎらうように、源八を見まもった。

源八は上州白雲山のお神札<sup>ふだ</sup>をうけて来たから、これを神棚へ上げておいて下さいと門人

へ渡した。

「御祈願までして——」

と、並居る者は、その奇特なところざしに、いよいよ意を強うして、

「十三日は、晴天じやろう」

と、<sup>ひざし</sup>廂ごしに、空を見た。その十一日もはや暮れかけて、夕焼が真つ赤だった。

#### 四

広間に詰めている大勢の客のうちの一人がいう。

「あいや、上州からお越しの、一ノ宮源八どのとやら。巖流先生のため、<sup>かちいの</sup>勝祈りまでなされて、遙々とお出でとは、ご奇特なこと。——して先生とは、どういうご縁故でござるのか」

問われて、源八は、

「てまえは、上州下仁田<sup>しもにた</sup>の、草薙<sup>くさなぎ</sup>家の家来でござる。草薙家の亡主天鬼様は、<sup>かねまき</sup>鐘巻自齋<sup>おいじ</sup>先生の甥御でござった。——で、小次郎どのとは、御幼少から存じておるので」

「あ。巖流先生には、少年の頃、中条流の鐘巻自齋の許におられたそうだが」

「伊藤弥五郎やごろう一刀齋。あのお方とは、同門でございました。その弥五郎どのより、小次郎どのの太刀のほうが、烈しい烈しいと、手前などもよく聞いていたもので」

源八はまたそれから、小次郎が師の自齋の印可目録も辞して、独自独創の流儀を立てる大志を早くから抱いていたことだの、少年時代の負けぬ気だった逸話だのを、問われるまま物語していると、

「先生は？ ……。先生はここにはお見えなさいませぬか」

取次の若侍が、そこへ来ていった。若侍は、大勢のなかを物色したが、見当らないので、他の座敷へ探しに行きかけると、客たちが、

「何じや、何か用か」

と、訊ねた。

「はい。岩国から来たが、小次郎に会わせてくだされと——お身寄りの方らしいご老婆が、ただ今、玄関に見えられましたので」

取次役は、いそがしげに、いうことだけをいうと、足を移して、次の間をのぞき、また、次の間をさがし、小次郎の姿を求めて行った。

「はて、お居間にも見えぬが」

つぶやいていると、そこを片づけていた小間使のお光が、

「鷹小屋たかにいらつしやいます」

と、教えた。

## 五

やしきに満ちている客をよそに、巖流はひとり鷹小屋にはいつて、止り木の鷹と、もくねん、むかい合っていた。

餌えさをやつたり、抜け毛を取つてやつたり、拳こぶしに乗せて、撫でたりなどして。

「先生」

「——誰だ」

「玄関の者でございます。ただいまお表へ、岩国から御老母様が、はるばる、訪ねておいでなされました。小次郎に会えばわかる者——とおっしゃるのみで」

「老母が。……はてのう？ わしの母はもうこの世にいない人だ。母の妹にあたる叔母御

であろう」

「どこへお通しいたしましょうか」

「会いたくないなあ。……かような時には、人には誰とも会いたくない。……だがまあ、叔母御とあれば、ぜひもなからう。わしの居間へご案内いたしておけ」

取次が立ち去ると、

「辰之助<sup>たつのすけ</sup>」

と、外へ呼んだ。

彼の小姓同様に、常に側にいる内弟子の辰之助は、

「はい。御用ですか」

小屋の内へはいって、彼のうしろに片膝を折り敷いた。

「きようは十一日。いよいよ、明後日のことになったな」

「近づきましてございます」

「明日は、久しぶりに登城、殿様にごあいさつ申しあげ、心静かに、一夜を待ちたいものだ」

「それにしては、あまりにご来客が混みあいます。明日は、一切、お客とお会いを避け



て、静かに、時刻も早目に、お寝みなされますように」

「そうしたいものだ」

「広間のお客衆は、ひいきの引倒しというものでございます」

「そういうな、かの衆も、巖流の肩持ちする気で、近郷や遠国から来ておる人々だ。……がしかし、勝敗は時の運。——運ばかりではないが、兵家の興亡も同じこと。もし巖流亡き後は、わしが手文庫のうちの遺書二通。一通は岩間殿へ、一通はお光へ、そちの手から渡してくれ」

「御遺書などとは……」

「武士のたしなみ。あたりまえなことだ。また、当日の朝は、介添かいぞえ一名の同行はゆるされておるから、船島まで、供をして、そちも行け。——よいか」

「冥みょう加がなお供、ありがとう存じまする」

「天あま弓ゆみも」

と、止り木の鷹を見て、

「そちの拳こぶしにすえて、島まで、連れて参ろうな。——海の上一里もある船の中、慰みにもなるで」

「心得ました」

「では、岩国の叔母御に、あいさつして来ようか」

巖流は出て行つた。しかし、そうした人と会うことは、今の心境は、いかにも億劫おっくうらしく見えた。

岩国の叔母は、もうきちんと坐つていた。夕焼雲は、焼刃やきはがね金の冷めたように黒くなつて、室内には、白い灯あかしが燈ともつていた。

「やあ、これは」

末座にさがつて、巖流は頭を低く下げた。母の亡い後は、ほとんど、この叔母の手で育てられたのだった。

母には、子にあまい所もあつたが、この叔母には、みじんもそういう所はなく、ただひたすら、姉の子でありまた、佐々木家の家名を担になう小次郎巖流に対して、よそながらでも、絶えずその将来を見まもつていたただ一人の身寄りであつた。

## 六

「小次郎どの。聞けばこの度は、いよいよ、生涯の大事にのぞむそうな。岩国の故郷くにもと元でも、えらい噂。じつとしてゐるにもいられず、お許もとの顔見に出て来ました。——ようまあ、ここまで立派に出世してござったの」

伝家の一刀を負つて故郷を出た少年の頃の彼のすがたと、今の堂々たる一家の風貌を備えた彼を思い比べて、今昔の感にたえないように岩国の叔母はそういった。

巖流は、低頭して、

「十年の久しいあいだ、お便りもせず無音ぶいんの罪、おゆるし下さい。人目には、出世と見ゆるか存ぜぬが、まだまだ、小次郎の志望は、これしきのことには、満足するものではございませぬ。——それゆえに、つい故郷ふるさとへも」

「いや何。お許もとの消息は、風の便りにもよう聞えて来るほどに、便りはのうても、息災そくさいは知れてある」

「それほど、岩国でも、何かと風評にのぼつておりますか」

「おるどころではない。この度の試合も夙とく知れ渡り、武蔵に敗れては、岩国の恥辱ぞ、佐々木を名乗る一族の名折れぞと、たいそうな肩持ちじや。わけて、吉川きつかわ藩お客分片山ほうぎのかみ伯耆守久安様など、御門下衆を大勢連れ、小倉表まで立たれるそうな」

「ほ。試合を見に」

「したが、高札に依れば、明後日は一切、船出しはならぬ、というお布令。さだめし落胆している衆も多かろうの。……おお余事ばかりいうて忘れていたが、小次郎どの、お許に上げたい土産ひとつ、貰うてくだされ」

旅包を解いて叔母は折畳んだ一枚の肌着を出した。それは白晒布の地に、八幡大菩薩、摩利支天の名号を書き、また、両の袖に、必勝の禁厭という梵字を、百人の針で細かに縫った襦袢であった。

「ありがとうございます」おしいたいで、

「おつかれでしょう。取り混んでおりますゆえ、このままこの部屋で、ご自由におやすみ下さい」

巖流は、それを機に、叔母をのこして、他の間へ立った。すると、そこにも客はいて、「これは、男山八幡のお神札でござる。当日、懐中にお持ちあつて」

と、贈つてくれる者もあるし、わざわざ鎖帷子を届けてくれる者だの、また、台所へは、大きな鯛や酒菰が何処からか運ばれて来るし、巖流は身の置所もなかった。そういう声援者は皆、彼に勝たせたいと念じている者には疑いないが、十中の八、九ま

で、巖流の勝ちを信じ、巖流の立身を見込み、彼との将来の好誼こうぎに自分の望みをも幾分か賭けている人々だった。

(もし、おれが牢人だったら)

と、巖流はふとさびしい気もした。しかし、かくまで、自分を信頼させた者は、誰でもない、自分自身だった。

(勝たねばならない)

と彼も思った。そう思うことはすでに、試合にのぞむ心の邪さまたげとは知りつつ、やはりいつのまにか胸の底で、

(勝たねばならん！ 勝たねばならん！)

人知れず——いや自己さえ意識なく、風騒ぐ池いけの面もの小波さざなみのように絶え間なく胸に繰返していた。

宵になった。

誰が探り、誰が報らせて来たか広間に集まって、酒を酌んだり飯を食べたりしている大勢の間に、

「きょう、武蔵が着いたそうだ」

「門司ヶ関で、船より上がり、御城下へ姿を見せたというが」

「では多分、長岡佐渡のやしきへ落ち着いたことだろう。誰か後で、佐渡のやしきの様子を、ちよつと探つて来てはどうか」

などという声が、今宵にも大事が到来しているように、物々しく、しかし密々ひそひそと伝えられていた。

馬うまの沓くつ

一

——すでに巖流のやしきへは、早耳に伝わっていた通りに。

武蔵の姿は、同日の夕方には、もう同じ土地に見出すことができた。

武蔵は、海路の旅を経て、それより数日前に、赤間ヶ関へ着いていたらしいが、誰あつて彼を彼と知る者はなく、また、彼自身も、何処かへ引籠ったまま、身を休めていたらしい。

その日、十一日には、向う陸の門司ケ関へ渡り、やがて小倉の城下に入り、藩老長岡佐渡のやしきを訪れ、到着の挨拶を述べ、また、当日の場所、時刻、承知の旨を一応答えて、すぐ玄関で帰るつもりであった。

取次に出た、長岡家の家士は、彼のことばを受けながらも、この人がさては武蔵であるのかと、額ひたいごしに、まじまじ見ていたが、

「まことに、行届いたご挨拶。主人はまだお城よりお退りさがはございませぬが、はや、間もなくと存じます。——どうぞお上がりくだされて、ご休息でも」

「忝かたじけうござるが、ただ今のご伝言さえ願えれば、それにて、他にべつだんの用もござらねば」

「でも、せつかくのお越しを。……後にて主人がいかがり残り惜しゅう思われるかもしれませぬ」

と、取次の家士は、自分の一存だけでも、帰したくないように引き止めて、

「では、しばらくお待ちください。佐渡様にはご不在ですが、一応奥へ」

と、いい残して、急いで奥へ告げに行つた。

すると、廊下を。

ばたばたと駈けて来るあしおと蹠音がした。——と思う途端に、

「先生っ」

式台から飛び降りて、武蔵の胸へ抱きついた少年がある。

「才才、伊織か」

「先生……」

「勉強しているか」

「ええ」

「大きくなつたなあ」

「先生」

「なんだ」

「先生は、わたくしが、ここに居ることを知っていたのですか」

「長岡様の手紙で知った。そしてまた、廻船問屋の小林太郎左衛門の宅でも聞いた」

「だから、驚かなかつたんですね」

「むむ。……当家のお世話になつておれば、そちのためには、この上もなく安心だからの」

「……………」



「何を悲しむ」

と、かしら頭を撫でて、

「ひとたびお世話になったからには、佐渡様のご恩を忘るるでないぞ」

「はい」

「武道のみでなく、学問もせねばならぬぞ。平常は何事も、ほうばいしゅう朋輩衆よりも控え目に、ことある時は、人の避けることも進んでするようにな」

「……はい」

「そちにも、母がない、父もない。肉親のない身は世の中をつめたく見、ひがみ易い。……そうなつてはならぬぞ。あたたかい心で人のなかに住め。人のあたたかさは、自分の心があたたかでないなければ分る筈もない」

「……え、え」

「そちはまた、利発のくせに、くわつとすると野育ちの荒気が出る。慎まねばならぬ。まだ若木のそちには、長い生涯があるが、それにせよ、いのち生命を惜しめよ。——事ある時、国のため、武士道のため、捨てるために、生命は惜しむのだ。——いと愛しんで、きれいに持つて。いさぎよく——」

彼の顔を抱いて、そういう武蔵の言には、どこか、名残もこれ限りのような、切実なものがあった。鋭敏な少年は、さなきだに、胸がいっぱいだった所へ、生命という言葉が出たので、遽かに、声をしやくつて武蔵の胸で嗚咽し出した。

## 二

長岡家に養われてからは、なり振りも小綺麗に、前髪もきちんと結って、伊織は、奉公人らしくなく、足袋まで白いのを穿いていた。

武蔵は、それを見ただけで、彼の身については、安心した。そこを見届けた以上、よいなことはないわねばよかつたと、軽く悔いて、

「泣くな」

と、叱ったが、伊織は、泣きやまなかつた。武蔵の着物の胸は、彼の涙で濡れるばかりだった。

「先生……」

「人がわらうぞ。何を泣く」

「でも、先生は、明後日あさってになれば、船島へ行くのでしょう」

「参らねばなるまい」

「勝つてください。これつきり会えなくては嫌です」

「はははは。伊織、そちは明後日あさってのことを考えて泣いているのか」

「でも、多くの人が、巖流殿には敵かなうまい。武蔵も、よしない約束をしたものだ、皆います」

「そうであろう」

「きつと、勝てましようか。先生、勝てるでしようか」

「案じるな、伊織」

「では。大丈夫です」

「敗れても、きれいに敗れたいと念じるのみだ」

「勝てないと思ったら、先生、今のうちなら、遠い国へ行つてしまえば」

「世間の声には、真実ほんとがある。まこと、そちのいう通り、よしない約束事ではある。——  
だが、事ここになつてしまうと、逃げては、武士道すたが廃る。武士道の廃りすたを示しては、わし独りの恥ではない。世人の心を墮落させる」

「でも先生、生命を愛しめと、わたくしへ教えたでしょう」

「そうだったな。——しかし、そちに武蔵が教えたことは、皆、わしの短所ばかり。自分の悪い所、出来ない所。至らないで悔いていることばかりを——そちには、そうあつて貰いたくないために教えておるのだ。武蔵が船島の土になったら、なおさらわしをよい手本に、よしないことに生命は捨てるなよ」

果てしない心地に、彼自身も囚われそうに覚えたので、伊織の顔を強いて、胸から押し  
のけ、

「お取次へも頼み上げておいたが、佐渡様がお帰りになったら、くれぐれも、よろしくお  
伝えを頼むぞ。いずれ、船島で御拝姿申すとな」

門の方へ、辞し去ろうとすると、伊織は師の笠をつかまえて、

「先生つ……。先生」

——何もいえない。

ただ俯むいて、片手に師の笠を離さず、片手を曲げて顔から離さず、じつと、いつまで  
も、肩をふるわせていた。

すると、横の中門の木戸が、少し開いて、

「宮本先生でござりますか。てまえは、当家の若党、縫殿介ぬいのすけと申しますが、伊織の儀もござりませうが、お別れを惜しむ様子。無理ならぬ気がいたします。——他へお急ぎの儀もござりませうが、せめて一夜お泊り下さいますわけには行きますまいか」

「これは——」

と会釈を返して、

「ありがたいお言葉ですが、船島の土になるやも知れぬ身に、一夜二夜の宿縁を、ここかしこに残しては、去る身も、後の人々も、かえつて煩わしいと思われませうば」

「ご斟酌しんしゃくが過ぎます。お歸し申しては、手前どもが、主人より叱言こしごをうけるやも知れませぬ」

「委細、また、書中にいたして、佐渡様まで改めて、申し上げます。——きようは到着の御挨拶までにかがったこと。よろしゅうお伝えを」

と、武蔵は門を出た。

おういーつ。

と、呼ぶ者がある。

間を措おいてまた、誰かが。

おおういつ……

今、長岡佐渡の邸へ、挨拶をすまして、侍小路から伝馬てんま河岸へ出、到津いたつの浜の方へ降りて行った武蔵のうしろ姿へ——その声の主ぬしは、手を振っていた。

四、五名の武士。

細川家の藩士とすぐ分る。そして皆、よい年配だ。白髪しらげの老武士も中に見える。

武蔵は気づかない。

黙然と、波打なみうちざわ際に立っていた。

陽ひは、うすずきかけて灰色の漁船の帆が、昼がすみの中に、静止していた。この辺から海上約一里という船島は、すぐ側のそれよりは大きい彦島の陰にかすかに見える。

「武蔵どの」

「宮本氏みやもとではないか」

年配な藩士たちは、駈け寄って彼のすぐ後ろに立った。

遠くから呼ばれた時、武蔵はいちど振向いて、その人達の来るのは知っていたが、皆見覚えのない者ばかりなので、自分とは思わなかったのである。

「……はて？」

小首を傾げると、中でも年長の老武士が、

「もうお忘れじやろ。われらに、見覚えがないのもむりはない。それがしは内海孫兵衛丞うつみまごべえのじ。元、其許そこもとの郷里、作州竹山城しんめんの新免家で、六人衆といわれた者どもじやよ」

つづいて、次の者が、

「自分は、香山半太夫こうやま」

「わしは井戸かめえもんの右衛門丞のじょう」

「船曳ふなひき左衛門丞もんじょう」

「木南加賀四郎きなみ」

と、名乗って、

「いずれも、御身とは同郷の者ども、そしてまた、この中の内海孫兵衛丞と、香山半太夫の二人は、其許そこもとの父上、新免無二斎しんめんむにさいどのとは、至って親しい友達でもござった」

「……おお、では」

武蔵は、親しみを笑靨えくぼに見せて、その人々へ、会釈をし直した。

なるほど、そう聞けば、この人々には、特有な訛りなまがある。しかもその訛りはすぐ自分の少年時代を思い出させるなつかしい郷里の土の香においまで持っている語音ごいんだった。

「申しおくれました。おたずねの通り、拙者は宮本村の無二齋の伴せがれ、幼名武蔵たけぞうと申した者にござりますが。……どうしてまた、郷里の方々が、かくお揃いで此処にはおいでなされましたか」

「関ヶ原の御合戦の後、知つての通り、主家新免家は滅亡。われらも牢人して、九州落ち。……この豊前へ来て、一時は、馬の草鞋わらじなど作つて、露命をつないでいたものじゃが、その後、倅せがれあつて、当細川家の先殿様せんどのさま、三齋公のお見出しに預り、今では当藩にみな御奉公いたしておる身じゃ」

「さてさて、左様でござりましたか。思わぬ所で、亡父ちちの御友人達にこうしてお目にかかろうとは」

「「こちらも意外。お互いに懐かしいことよ。……それにつけ、その姿を、一目など、亡き無二齋どのに見せたかつたなあ」

半太夫、亀右衛門丞などの人々は、相あいかえり顧みて、またしげしげと、武蔵の姿を見直し



ていたが、

「才、用談を忘れた。実は今ほど、御家老のお邸へ立ち寄った所、おぬしが見えて、すぐ帰つたとのこと。これはいかんと、あわてて追うて来たのじや。——というのは、佐渡様とも申しあわせ、御身が小倉へ到着したら、ぜひ一夜、われらなども交<sup>ま</sup>じえて、一夕<sup>せき</sup>の宴をと、待ちもうけていたのじや」

左右衛門丞がいうと半太夫も、

「それをばさ。すげのう、お玄関で挨拶だけして立帰るといふ法があるものでない。さあござれ。無二齋の伴<sup>せがれ</sup>どの」

手をひかんばかりだし、父の友人という格から、有無をいわさぬ口<sup>くちぶり</sup>吻で、もう先へ歩き出した。

#### 四

拒<sup>こぼ</sup>みかねて、つい武蔵も、ともども歩き出したが、

「いや。やはりお断りいたしましたしょう。ご好意を無にいたすようでござるが」

立ち淀んで、辞退すると、人々は口を揃えて、

「なぜじゃ。折角、われら同郷の者が、御身を迎えて、大事の門口を、祝おうというのに」  
「佐渡様の思し召もそうじゃ。佐渡様にも悪しかろうに」

「それとも、何ぞご不服か」

すこし感情を害したらしく、わけて無二斎とは生前莫逆の友だったという内海孫兵衛丞などは、

「そんな法やある」

といわんばかりな眼である。

「決して左様な心底ではございませぬが」

慇懃に詫びたが、慇懃だけでは済まさず、理由はと、たたみかけられて、武蔵は是非なく、

「——巷のうわさ、取るに足らぬことですが、この度の試合をもつて、細川家の二家老、長岡佐渡様と岩間角兵衛様とを対立して見、そうふたつの勢力に拠つて、一藩の御家中も対峙しておる。そして一方は巖流を擁して、いよいよ君寵のお覚えを待み、長岡様にもまた彼を排し、御自身の派閥を重からしめんとしておるなどと、あらぬことを、道中な

どにても聞き及びました」

「ほほウ……」

「おそらくは、巷の風説。俗衆の臆測でございましょう。——しかし、衆口は怖ろしい。一介の牢人の身には、障る所もござりませぬが、藩政に御関与なさるる長岡様、岩間様には、寸毫すんごうでも、左様な疑いを領民に抱かせてはなりません」

「いやあ、なるほどの！」

老人達は、大きく答えて、

「それで、御身には、御家老のお邸へ、わらじを解くことを、憚はばかって参られたのか」

「いや、それは理窟で」

武蔵は、微笑に打消し、

「実のところは、生来の野人、気ままにおりたいのでござる」

「お心もち、よく相分つた。深く思えば、満ざら、火のない煙ではないかも知れぬ。われらには覚えなくとも」

武蔵の深慮に人々は感じた。しかし、このまま立ち別れるのも残念と、一同は額ひたいをよせて何やら話しあっていたが、やがて木南加賀四郎きみなみが、一同に代って、次のような希望を述

べた。

「——実は毎年、きょうの四月十一日には、吾々どもの寄りあう会合がござって、十年来、欠かしたこともないのでござる。それには、同郷六名と、人数も限り、人を招かぬ会でござるが、貴殿なれば、同じ国者くにもの、わけてお父上無二齋殿の御親友もここにはおるので、よかろうではないかと、ただ今、評議したのでござるが、ご迷惑は察し入るが、その方の席へでも、お越し下さるまいか。——そこなれば、御家老のお邸とは事ちがい、世間の眼もなし、うわさの的まとになる筈もござらぬが」

なお、つけ加えて。

最前はまた、もし貴方あなたが、すでに長岡家へ見えられていたら、自分らのその会合は先へ延ばすつもりで、念のため同家へ寄つて訊ねてみたのであるが、いずれにしても長岡家へお泊りを避けるお心なら、曲げて今夜は、こっちの会合へ臨んでもらいたい——というのであった。

## 五

武蔵も、今は断りかねて、

「それほどまでの仰せなら」

と、承諾すると、人々は非常によろこんで、

「では早速にも」

と、即座に何かと打合せ、武蔵のそばには、木南加賀四郎ひとりを残し、後の者は、

「然らば、いずれまた後刻、よりあい寄合の席にてかかる」

と、その場からめいめい、一度家路へと帰って行った。

武蔵と加賀四郎とは、そこらの茶店先で日の暮るるを待合せ、やがて宵の星空の下を、

加賀四郎の案内で、街から小半里ほどある到津いたつの橋の袂たもとまで導かれて行った。

ここは城下端れの街道筋で、藩士の邸宅などもなければ、酒亭なども見あたらない。橋

袂には、街道の旅人や馬方相手の、見るからにひなびた居酒屋や木賃あかりの灯が、軒端も草に

埋もれて見えるだけだった。

不審な所へ？ ——

と、武蔵は疑わざるを得なかった。ともあれ、最前の人々は、香山半太夫、内海うつみまごへえ孫兵衛のじょう丞をはじめ、その年配なり重々しきから見ても、皆、然るべき位置の藩士達であるの

に、年に一度の寄合という会場の席を、こんな不便な、田舎びた所まで、わざわざ持つて来るとはおかしい。

——ははあ、さてはそういう口実もとの下に、何ぞ謀たくらんでいるのだろうか。いやいや、それにしては、あの人々に何の邪気も殺気も感じられないが。

「——武蔵どの。もう皆、見えております。どうぞ此方こちらへ」

彼を橋はしたもと 袂たへ佇たたせておいて、河原を覗のぞいていた加賀四郎は、そういいながら、堤どての細道を探して自分が先へ降りて行く。

「あ。席は船の中か」

自分の行き過ぎた疑いに苦笑を覚えながら、彼も後から河原へ降りて行ったが、何の事、船などもそこらには見当らない。

だが、加賀四郎を加えて、六名の藩士たちは、すでに来ていた。

見れば、席というのは、河原へ敷いた二、三枚の蓆むしろでしかない。その蓆の上に、最前の香山、内海うつみの二老人を頭かしらに、井戸かめえもんの右衛門丞のじよう、船曳ふなひき左右衛門丞のじよう、安積あさか八弥太など、膝も崩さず坐っていた。

「かような席へ、失礼じゃが、折もよし、年に一度のわれらの寄合へ、同郷の武蔵どのが

来会わされたのも、何かのご縁じやろう。……まずまず、それへご休息を」

と、彼へも一枚の筵むしろをすすめ、さつき浜辺では見えなかつた安積八弥太ひきあを紹介わせ、

「これも、作州牢人のひとり——今では細川家の馬廻うままわり役をいたしておるもので」

と、慇懃いんぎんなことは、床の間や銀襖ぎんぶすまをひかえた客間の応対と変りもなかつた。

武蔵は、いよいよ、不審にたえない。

風流の趣向なのか。何かまた、人目を避けてする必要のある会合なのか。——とにかく

一枚の筵に招かれても客は客であるから、武蔵は慎んで坐っていると、やがて年長者の内

海孫兵衛丞が、

「あいや客まろうど人。お膝をおくずしください。——そして、やがて持参の折や酒などもご

ざるが、それは後で開くといたして、われらの会合の仕来りしきただけを、先へ致しておくこと

にいたすゆえ、長うはかからぬが、暫時ざんじそれにてお待ちねがいたい」

と、いった。

そして一同、袴はかまを割つて、一緒に胡坐あぐらをくんで坐り直すと、銘々たずさが携えて来たらしい一

把わの藁束わらたばを解ほぐして、馬くつの沓くつを作り始めたのであつた。

## 六

作っているのは、馬の脊であるが、それを作る藩士たちの様子は口もきかず、わき目も  
ふらず、謹厳でありまた、おそろしく敬虔であつた。

手に唾し、藁を素ごき、掌と掌を合わせて緬う力にも、何か傍目にも分る熱気がこもつ  
ていた。

「……？」

武蔵は、不審に打たれていたが、人々のすることを、おかし気に見たり、疑つてみたり  
する気には毛頭なれなかつた。

だまつて、謹んで見ていた。

「作れたかな」

やがて、香山半太夫老人がいつて、他の者を見まわした。

老人はもう、一足の沓を作り上げていた。

「出来ましてござりまする」

次に、木南加賀四郎。



「てまえも」

と、安積<sup>あさか</sup>八弥太も、作り上げた一足を、香山老人の前に、さし出した。

順々に、積んで、六足の沓<sup>くつ</sup>ができた。

そこで人々は、袴<sup>はかま</sup>のチリを払い、羽織を着直して、六足の馬の沓を、三方にのせて、六人の中ほどに据えた。

また、べつな三方には、用意して来た杯が乗せられ、側の盆には銚子<sup>ちようし</sup>も供えて、

「さて、御一同」

と、年長の内海<sup>うちみ</sup>孫兵衛丞から、改つた挨拶が述べられた。

「——われらにとつて忘れ難い慶長五年、その関ヶ原の役より、はや十三年になり申す。お互に思わざる生命<sup>いのち</sup>を長らえ、今日、かくある身は、偏<sup>ひとえ</sup>に、藩主細川公御庇護<sup>ごひご</sup>に依るところ。御恩のほど、子孫まで忘れては成り申さぬ」

「はい……」

一同は、やや俯<sup>ふ</sup>し目に、孫兵衛丞のことばを、襟<sup>えり</sup>を正して聞いていた。

「——とはいえ、今は亡びたりといえ、旧主新免家の代々<sup>よよ</sup>の御恩も、忘却してはならぬ。

——なおなお、われらこの地に流浪の日には、落魄<sup>おちぶ</sup>れ果てていたことをも、喉元<sup>のどもと</sup>すぎて、

忘れては身に濟まぬ。……そう三つの事を、忘れぬための、例年の会。まず今年も、息災に打揃うて、お互に祝着に存ずる」

「されば、孫兵衛丞どの、御挨拶のとおり、藩公の御慈愛、旧主の御恩、零落のむかしに  
変る今日の天地の恩。——われら日常も忘れは措きませぬ」

一同して、そういった。

司会者格の孫兵衛丞は、

「では、御礼を」

「はっ」

六名は、膝を正し、両手をつかえて、そこから見える——夜空にも白く仰がれる——小倉城へ向つて、頭を下げた。

次に、旧主の地。また各の祖先の地——作州の方角へ向つて、同様に礼をした。

最後に、自分たちで作った馬の沓へ、両手をつかえて、それをも真心こめて伏し拝んだ。  
「武蔵どの。一同これより、この河原の上の氏神の社まで、参詣して沓を納めて参る。

——それにて式事は済むのでござる。済めば大いに飲みもし話もいたそう程にもう暫時、それにてお待ちを」

一人は、馬沓まぐつをのせた三方を捧げて先へ進み、五名は後に従つて、氏神の境内へ上つて行つた。馬沓は、街道に向つてゐる鳥居前の木に括くくしつけ、拍手かしわでを打つて、一同はすぐ元の河原の蕙むしろへ歸つて来た。

そして、酒もりが始まつた。

——というても、芋の煮たのや、木の芽味噌みその筍たけのこや、せいぜい干し魚いしぐらいな、この辺の農家の馳走ちしうぐらいな質素ではあつたが。

しかし、豪笑快語、酒と話は、はずんで来た。

## 七

打ちとけて、酒と話はずんで来たので、武蔵は初めて、

「お睦むつまじい、そしてふしぎなご会合かいごうに、折よく来合せて、拙者も共に興に入り申した。——しかし最前からの事々、馬沓まぐつを作つたり、それをまた、三方にのせて伏し拝み、郷土やお城へ向つて、改めて礼をなされたり——これは一体どうしたことことでござるのか」

訊ねると、

「よう訊きいて下された。ご不審はごもつともじや」

と、内海孫兵衛丞は、待つていたように、こう話した。

慶長五年。関ヶ原の戦に敗れた新免家の侍たちは、あらかた九州へ落ちて来た。

こう六人の者も敗残者の一組だった。

元より衣食の途みちはつかず、というて、身寄り頼りに縫すがつて、さもしい頭も下げきれず、また、渴かつしても盗泉とうせんの水はくらわず——と頑固に持して、一同、この街道の橋はしたもと袂とに、貧しい納屋なや一軒借りうけ、槍だこに鍛えられている手で、馬うまの沓くつを作つていた。

ここ三年が間は、往來の馬子に、自分らで作つた馬沓ひきを売り鬻ひきいで、細々ながら喰べていたが、

（あの衆は皆、どこか變つてゐるぞ。凡ただもの者ではなからう）

と、馬子たちの噂が、やがて藩に聞え、当時の君公、三斎公の耳にはいった。

調べてみると、旧新免伊賀守の臣で、六人衆といわれた士さむらいたちと分り、不愍ふびんの者、召抱えてつかわせと、沙汰された。

交渉に来た細川藩の臣は、

「思し召しをうけて参つてござるが、禄ろくのほどは仰せもなく、われら重臣どもの協議で、

六名に対し千石を給したいと存ずるがいかがであろうか」  
と、いつて帰った。

六名の者は三齋公の仁慈に感泣した。関ヶ原の敗亡者とあれば、当然、追い立てられても、まだ寛大としなければならぬ所である。それを、六人に千石も給されるというので否やもなかつた。

ところが、井戸かめえもんのじよう 亀右衛門丞の母が、

(お断りせい)

という意見をいいだした。

亀右衛門丞の母がいうには、

(三齋公様のお仁慈は、涙のこぼれるほど欣うれしい。一合のお扶持ふちといえ、馬の沓うまぐつを作る身には、勿体のうて、否応いえたことではない。——したがおん身達は、落魄おちぶれてこそおれ、新免伊賀守様の旧臣、藩士の上に坐りなされたお人達じゃ。それが一ひと纏まとめ千石で、欣よろこんでお召抱えに応じたと聞えては、馬の沓を作っていたことが、真からさもしいことになる。また、三齋公様の御恩にこたえて、不ふ惜しやく身命しんみよの御奉公をなさる覚悟でもなければならぬこと、お救い米のような、六人一ひと括くわげの扶持はそれゆえおうけいたされぬ。お身

たちは出仕しなさろうとも、せがれ伴は出されませぬ)

で、一致して、断ると、藩の者はありのまま、君公へ伝えた。

三齋公は、聞いて、

(長老の内海孫兵衛丞に千石。余の者には一名二百石ずつと、改めて申しやるがよい)と、命じた。

六名出仕ときまつて、いよいよ、お目見得の登城となつたが、その折、六名の貧乏ぶりを目撃して来た使者の者が、

(少々はお手当を先に遣つかさぬと、登城の服装なども、おそらく持ち合すまいと察しられま  
すが)

気を配つたつもりでいうと、三齋公はわらつて、

(だまつて見ておれ。折角の士さむらいどもを迎えながら、こちらが、求めて恥を搔くにもあたる  
まい)

案のじよう。馬うまの沓くつは作つていても登城して来た六名は糊目のりめ正しい衣服を着、大小も皆、それぞれ、ふさわしいのを差していた。

## 八

以上、孫兵衛丞のはなしを、武蔵は興ぶかく聞き入っていた。

「——まず、そういう仕儀で、われら六名、お召抱えになったわけじやが、思うにこれ皆、天地の恩じや。祖先の恩、君公の恩は、忘れんとしても忘れようもないが、一頃、露命をつないだ馬の脊の恩は忘れそうじやと、後々、誠め合うて、細川家へお抱えとなつた今月の今日を、毎年の寄合い日と決め、こうして藁の薙に、昔をしのび、三つの恩を胸に新たにしながら、貧しい酒もりを、大きく飲びおうている次第でござる」

孫兵衛丞は、そういう足してから、武蔵へ杯を向けて、

「いや、われらのことのみいうて許されい。酒は貧しくも、肴はなくも、心ばえは、かよな者ども。——明後日の試合には、どうぞ潔うやって下されよ。骨は、わしらが拾う。ははは」

杯を押しただいて、

「かたじけのうござる。高樓の美酒にもまさるお杯。お心ばえにあやかりますように」

「滅相もない。われらごときにあやかつたら、馬の脊を作らねばならぬぞ」

小石まじりの土が、堤どての上から少しばかり、草間をすべにつつてくずれて来た。人々が振り仰ぐと、ちらと、蝙蝠こうもりのような人影がかくれた。

「誰だつ」

木南きみなみ加賀四郎は、おどり上がって行つた。押とり刀でまた一人つづいた。

堤どての上に出て夜霞の遠くを見ていたが、やがて大きく笑いながら、下の武蔵や友達へ向つて告げた。

「巖流の門人らしい。こんな所へ武蔵どのを招いて、われらが首を集めているので、助太刀の策でも密議していると、変に取つたのじやあるまいか。あわてて、駈け去って行き申したが」

「あははは。その疑い、先方に見れば無理もない」

この人々は、あくまで磊落らいらくであつたが、こよいあたり、城下の空氣がどう動いているか、武蔵には、ふと考えられた。

——長座は無用。同郷の縁故があるだけに、なおさら心しなければならぬ。かかる武士たちへ、よしなき累るいを及ぼしては済まぬ。武蔵はそう考えついて、十分に人々の好意を謝し、一足さきに、楽しい河原の蕙むしろを辞して飄ひょうぜん然と去つた。



飄然——

いかにもそういったふうな武蔵の去来だったのである。

翌日。

すでに十二日である。

当然、武蔵はどこか、小倉城下に泊つて、待機しているものと思ひ、長岡家では、彼の宿所を、手分けして探していた。

「なぜ引き留めて置かなかつた」

と、用人も取次も、後では主人の長岡佐渡に、かなり叱られたこと間違いない。

昨夜、ゆうべ到津いたつの河原へ武蔵を迎えて飲んだという六名の仲間も、佐渡にいわれて探し歩いてきた。

が、分らなかつた。

杳ようとして、武蔵の姿は、十一日の夜から行き先が知れないのであつた。

「こまつたこと！」

明日を前にして、佐渡は白い眉毛に焦躁をたたえていた。

巖流は、その日。

久しぶりに登城して、藩公から懇篤なことばと、お杯をいただいて、意気揚々、騎馬でやしきへ退がっていた。

城下には、夕刻頃、武蔵について種々な浮説が伝えられていた。

「臆<sup>おく</sup>して、逃げたのだろう」

「逃亡したに違いない」

「どう探しても、皆目、姿が見つからないそうだと、いうのである。」

日出づる頃<sup>ひいころ</sup>

一

逃げたろう？——

逃げたに相違ない。

ありそうなことだ。

見えぬ武蔵の姿に對して、紛々たる噂のなかに、十三日の夜は明けた。

長岡佐渡は眠らなかつた。

よもや？ ——とは思うものの、そう思われない人間がよく事の間隙に豹変する。

「——御主君のてまえ」

彼は、切腹すら考えた。

武蔵を推挙した者は自分である。藩の名を以て、試合となつた今日、その武蔵が行方を晦ましたなどということがもし起つたら、自決の道を執るしかない。真面目に、切腹を考えた。佐渡は、きょうも澄みきつた朝の晴天を迎えた。

「……自分の不明か」

あきらめに近い眩きをもらしながら、室内の清掃ができる間、伊織をつれて庭を歩いて来た。

「ただ今戻りました」

その武蔵の居所を、昨夜から探しに出ていた若党の縫殿介が、疲れた顔色を横門から現した。

「どうだった？」

「分りませぬ。皆目、それらしい者も、御城下の旅籠はたごには」

「寺院など、訊いてみたか」

「府中の寺院、町道場など、武芸者の立ち寄りそうな箇所へは、安積あさか様、内海うつみ様などが、手分けして調べて参るといつておりましたが、まだあの六名がたは」

「戻らぬが……」

佐渡の眉には、愁うれいが濃い。

庭木を透すいて、紺碧こんぺきな海が見える。白いしぶきの浪がしらが、彼の胸まで打って来るのだった。

「……………」

梅若葉のあいだを、佐渡は黙々と行きつ戻りつしていた――

「わからぬ」

「どこにも見えぬ」

「こんなことなら、一昨夜別れる時に、確しかと行く先を聞いておくであつたに」

井戸亀右衛門丞、安積あさか八弥太、木南加賀四郎など、夜来、歩き通していた人々も、やがて、げっそりした顔を揃えて帰つて来た。

縁に腰かけて、人々はとかくの評議にいきり立っていた。時刻は迫るばかりなのだ。——今朝、佐々木小次郎の門前をよそながら見て通ったという木南加賀四郎の話によれば、昨夜来、そこには約二、三百名の知己門人が詰めきつて、門扉もんびを開き、大玄関にはりんどうの紋のついた幕をめぐらし、正面に金屏風きんびょうぶをすえ、早朝には、城下の神社三カ所へ門人たちが代参して、きょうの必勝を期している——という旺さかんな様子であったという。

それにひきかえて！

と口には出さぬが、人々は惨さんたる疲れをお互いの顔に見合った。一昨夜の六名にしても、武蔵の生しょうごく国こくが、自分らと同じ作州であるというだけでも、藩へも世間へも、顔向けがならない気がするのだった。

「もうよい。……今から探しても間にあうまい。御一同、お引き揚げ下さい。慌てれば慌てるほど見苦しい」

佐渡は、そう告げて、人々に無理に引き取らせた。木南加賀四郎や安積八弥太などは、「いや、見つける。たとえ今日が過ぎても、あくまで見つけ出して、斬り捨ててくれる」昂奮して帰って行った。

佐渡は、清掃された室内に上がって、香炉に香を焚いた。それはいつもの事ながら、

「……さてはお覚悟を」

と、縫殿介ぬいのすけは、胸を衝かれた。すると、まだ庭先に立ち残って、海の色を見ていた伊織が、ふと彼へいった。

「縫殿介さん。下関の廻船問屋、小林太郎左衛門の家を訊ねてみましたか」

二

大人の常識には限界があるが、少年の思いつきには限界がない。

伊織のことばに、

「そうだった。……おお」

佐渡も縫殿介ぬいのすけも、的確に目標を指さされた心地がした。或は？——いやいやこの上は、武蔵のいそうな処としては其処以外には考えられない。

佐渡は、眉を開いて、

「縫ぬい。不覚じやったな。慌あわてぬようでも、慌あわてておるわい。——すぐ其方参ってお迎えして来い」

「はつ、承知いたしました。伊織どの、よう気がついたな」

「わたしも行く」

「旦那さま。伊織どのも、一緒にと申しますが」

「ウム。行って来い。——待て待て。武蔵どのへ一筆書くから」

佐渡は手紙をしたためた。そしてなお口上でもいいふくめた。

試合の時刻、辰の上刻までに、相手方の巖流は、藩公のお船をいただいて、船島へ渡ることになっている。

今からなら時刻もまだ十分。尊公にも、自分のやしきへ来て支度をととのえ、船も、自分の持船を提供するゆえ、それへ乗って、晴の場所へ臨んでは如何いかが。

佐渡のそうした旨を受けた縫殿介と伊織は、御家老の名を以てお船手から藩の早舟を出させた。

ほどなく下関へあがる。

下関の廻船問屋、小林太郎左衛門の店はよく知っている。店の者に訊ねてみると、

「何か知らないが、先頃からお住居の方に、お若いお武家が一人、泊っていることはいらうようです」

と、いう。

「ああ、やはり此家に」

縫殿ぬいのすけ介と伊織とは、顔見合せてにことした。住居はすぐ店の浜納屋はまなやつづきである。あるじ主

の太郎左衛門に会つて、

「武蔵様には当家に御逗留ごとうりゆうでございましょうか」

「はい、お在いでになります」

「それを聞いて、安心いたしました。昨夜来、御家老にも、どれほど、御心配なされてい  
たか分りませぬ。早速、お取次を願ねがいとうござるが」

太郎左衛門は、奥へはいつて行つたが、すぐ戻つて来て、

「武蔵様は、まだお部屋で、お寝みになつておりますが……」

「えっ?」

思わず、呆れ顔して、

「起して下さい。それどころではござらぬ。いつもこう、朝は遅いお方でござるか」

「いえ。昨夜は、てまえとさし対むかいで、深更まで、世間はなしに興じておりましてので」

召使を呼んで、縫殿介と伊織を、客間へ通しておき、太郎左衛門は、武蔵を起しに行つ



た。

間もなく、武蔵は、二人の待つている客間へ姿を見せた。十分、熟睡をとった彼のひとも、嬰兒あかごの眼のようにきれいだつた。

その眼元に、微笑を寄せながら武蔵は、

「やあ、お早く。——何事でござりまするか」と、いつて坐つた。

その挨拶にも、縫ぬい殿のすけ介は、力ぬけを感じたが、すぐ長岡佐渡の書面をさし出し、また、口上でも、いい足した。

「それはそれは」

武蔵は、手紙へ頭を下げて、封を切つた。伊織は、その姿を、穴のあくほど見つめていた。

「……佐渡様の思し召、ありがたいことに存じますが」

武蔵は、読みおえた手紙を巻きながら、ちらと、伊織の顔を見た。伊織はあわてて俯うつむ向いた。眼から涙があふれかけたので——。

## 三

武蔵は、返事をしたためて、

「委細、書中にいたしましたれば、佐渡様へは、よろしゅうお伝えを」  
とのことだった。

そして、船島へは、自身、頃を計つて出向くゆえ、お氣遣いなく——ともいった。

やむなく、二人は、返書を持つてすぐ辞した。——帰るまで、伊織は遂に何もいえないでいた。武蔵も一言もことばをかけてやらないのである。しかし、無言の中に、師弟の情と、言葉以上のものは尽きていた。

二人の戻りを、待ちかねていた長岡佐渡は、武蔵の返書を手にして、まずほつと眉をひらいた。

文面には、

私事、お許様御舟にて、船島へ遣さる可旨、仰せ被聞、重疊お心づかいの  
段、辱なくぞんじ奉候

然れどこの度、私と小次郎とは敵対の者にて御座候。しかるに小次郎は君公の御舟

にて遣され、私は其許様お舟にて遣され候旨に御座候処、右、御主君に被<sup>たいせ</sup>対<sup>せられ</sup>、如何わしく存じ奉候。この儀、私にはお構いなされず候て然る可<sup>べく</sup>とぞんじ奉り候

此段、御直<sup>おんじき</sup>に申し上<sup>あぐべく</sup>可<sup>べく</sup>とぞんじ候えども、御承引なさるまじく候に付、わざと申しあげず、爰<sup>ここもと</sup>元<sup>ここもと</sup>へ参り居候（中略）

爰<sup>ここもと</sup>元<sup>ここもと</sup>の舟にて、能き時分参り申すべく候間、左様に思し召さるべくそろ。以上

四月十三日

宮本武蔵

佐渡守様

と認<sup>したた</sup>めてあつた。

「……………」

佐渡は、黙然と、読後の文字をなお見入っていた。

謙虚の美。ゆかしい思い配り。何にしても行届いた返書。と心を打たれている容<sup>ようす</sup>子<sup>す</sup>だつた。

それとまた、佐渡は、昨夜からの自分の焦<sup>しょうそう</sup>躁<sup>そう</sup>が、この返書に対して、面映<sup>おもは</sup>ゆくあつた。謙虚な心の持主に対して、少しでも疑つたことが自ら恥じられた。

「縫殿介」  
めいのすけ

「はっ」

「武蔵どのの、この御書面を携たずえてすぐ、内海孫兵衛丞どのや、その他の衆たに、廻めぐり状じやういたして来い」

「承知いたしました」

退さがりかけると、襖ふすまの陰かげに控ひかえていた用人が、

「御主人様。御用がおすみ遊あそばしたら、今日のお立会のお役目、はやお支度しどを遊あそばしませぬと」

と、うながした。

佐渡は落着いて、

「心得ておる。じやが、まだ時刻には早はやかろう」

「お早くはござりますが、同じく今日のお立会役、岩間角兵衛様にはもはやお船を仕立てられ、今し方、浜をお離はなれなされましたが」

「人は人。あわてずともよい。——伊織、ちよつとこれへ来い」

「はい……御用ですか」

「そちは、男だの」

「え、え」

「いかなることがあつても、泣かぬという自信があるか。どうじゃ」

「泣きませぬ」

「然らば、わしの供をして、船島へ行け。——じゃが、次第に依つては、武蔵どのの骨を拾うて帰るかも知れぬのだぞ。……行くか。……泣かずにいられるか」

「行きます。……きつと、泣かないで」

奥の声をうしろに。

縫殿ぬいのすけ介は門の外へ駈け出していた。すると、塀の陰から彼を呼ぶ見すばらしい旅の女があつた。

#### 四

「お待ち下さいませ。……長岡様の御家来さま」

女は、子を負っていた。

縫殿介は、気が急せいでいる。しかし、旅の女の風態に、怪しみの眼をみはつて、

「何じゃ。お女中」

「ぶしつけではございますが、かような身なりの者、お玄関へ立つことも憚はばかられまして」  
「では、御門前で待っていたのか」

「はい……今日に迫った船島の試合に、きのうから、武蔵様が逃げたとやら……町の噂に聞きましたが、それは本当でございませうか」

「ば、ばかなこと！」

ゆうべからの鬱うつぶん憤ふんを、いちどに吐いて、

「左様な武蔵どのか、武蔵どのでないか、辰の刻になれば分る。——たった今、わしは武蔵どのお会いして、御返書までいただいで来たところだ」

「えつ……。お会いなされましたか。して、何処どこに？」

「其方そなたは？ ……何じゃ」

「はい」

さし俯うつむ向むいて、

「武蔵様とは、知る辺への者でござりますが」

「ふム。……ではやはり根もない噂に案じていたのか。では、これから急ぐ出先だが、武蔵どのの御返書を、ちよつと見せて上げる。心配なさるな、これこの通りに——」

縫殿介ぬいのすけがそれを読み聞かせてやっていると、彼のうしろへ立ち寄つて、共に、涙の眼をもつて、偷み読みぬすよしている男があつた。

縫殿介が、ふと気づいて、自分の肩を振り向くと、男は間まが悪そうにお辞儀して、あわてて、眼をふいた。

「誰だ？ ……おぬしは」

「はい。その女房の、連れの者でございます」

「なんだ。御亭主か」

「有難うございました。武蔵どのの、懐かしい文字を見て、何だか、会つたもおなじ気がしました。……なあ女房」

「ほんに、これで安心いたしました。——欲には、遠くからでも、試合の場所を、拝んでいとうございます。たとえ、海を隔てても、私たちの心がそこに働きますよう」

「才、それなら、あの海沿いの丘へ上がつて、遥かに、島の影など見ていなされ。——いやいや、きようは、ばかに晴れているから、船島の渚なみぞあたりは、かすかに見えるかも知

れぬぞ」

「お急ぎのところ、足をお止めして、済みませんでした。——では、御免なされませ」  
子を負った旅の夫婦者は、城下端れの松山をさして、足を早めかけた。

縫殿介も、急ぎかけたが、あわてて呼び止めた。

「もしもし。お前たちの、名前は何という人か。さし問えなければ聞かしておいてくれ」  
夫婦は、振り返って、またていねいに遠くからお辞儀をした。

「武蔵どのと同じ作州の生れ——又八と申します」

「朱実あけみといまする」

縫殿介は、うなずくと、もう一散に、使い先へ駆けて行った。

ややしばらく見送っていたが、眼を見合すと、二人は口もきかず、城下の外へ急いだ。  
小倉と門司ケ関のあいだの松山へ、喘あえぎ喘あえぎ、登って行った。

真正面に、船島が見える。幾つもの島影も見える。いや海門の彼方、長門ながとの山々の巒ひだま  
で今日はあざやかに見える。

二人は、たずさえている菰こもを敷き、海へ向って、並んで坐った。

ざあ、ざあつ……と断崖の下の潮ちようおん音は、親子三人の上に、松の葉を降りこぼした。



朱実は、子を降ろして、乳ぶさに抱え、又八はじつと、膝に掌をむすんだまま、口もきかず、子もあやさず、一念、海の青を見入っていた。

彼かの人ひと・この人ひと

## 一

縫ぬい殿のすけ介は、いそいで来た。

主人の長岡佐渡が、今朝、船島へ出向くまでに間に合うようにと。

吩咐いらいけられた六名の屋敷を、それぞれ駈け廻って、武蔵の返書と次第を告げ、どこでも茶ものまず引り返して来た途中なのである。

「あつ。巖流の……？」

彼は、そのいそぐ足をも止めて、思わず物陰にたたずんだ。

そこは、御浜奉行の役宅から半町ほど先の海辺だった。

その岸からは、早朝よりたくさんな藩士が、きょうの試合の立会や、検視や、また、

不慮の場合の警備だの、試合場の準備だのとして、番頭ばんがしら以下足輕組まで——幾組にもわかれて、ぞくぞくと船島をさして先発していた。

——今も。

お船手の藩士が、一艘の新しい小舟を寄せて、待っていた。舟板から水みず箒ぼうきやもやいの棕しゅろ柵なわ縄なわまで卸おろしたばかりの真新しい舟だった。

縫殿介は一目見て、それは藩公から特に巖流へくだされた舟と知った。

舟に、特徴はないが、そこらに佇たたずんでいる百名以上の人々の顔ぶれが、皆、日ごろ巖流と親しい者か、或は見馴れない顔ばかりなので、すぐ知ったのである。

「おお、お出いでになった」

「見えられた」

人々は、舟の両側に立って、おなじ方角を、振り向いていた。

磯松の陰から、縫殿介も、彼方を見ていた。

御浜奉行の休み所に、乗って来た駒を繋いで、佐々木巖流は、しばらくそこに休息を取っていたものとみえる。

その役人達にも見送られ、巖流は、日頃の愛馬を、託していた。——そして供として、

内弟子の辰之助たつのすけ一名を連れ、砂を踏んで此方こなたの舟のほうへ歩いて来た。

「……………」

人々は、巖流の姿が、近づいて来るにつれ、肅しゆくとして、おのずから列をなし、彼の道を開いていた。

それと人々は、その日の巖流の晴の扮装いでたちに恍惚こうこつとして、自分達までが武者振いのよなものを覚えた。

巖流は、浮織うきおりの白絹の小袖に、眼のさめるような、猩々しようじよう緋の袖無羽織むでなしをかさね、葡萄色どういろの染革そめがわの裁附袴たつけはを穿はいていた。

足拵あしごしらえは、もちろん、草鞋わらじ——すこし潤しめしてあるかに見える。小刀は日頃の物であったが、大刀は、仕官以後は遠慮して差さなかつた例の無銘むめい——しかし肥前ひぜん長光ながみつともいわれている——愛刀物干竿ものほしざおを、久しぶりに、その腰間ようかんに、長やかに横たえていた。

その刀は、三尺余もあるので、見るからに業刀わざもの刀と思われ、送りの人々の眼をみはらせだが、より以上、その長剣がすこしも不似合でない彼の優すぐれた骨がらと、猩々しようじよう緋の真まつ紅かなのと、色の白い豊頬ほうぎような面おもてと、そして眉もうごかさないう落ちついた態度の美に——何か莊重なものを見ていた。

波音と、風に紛れて、縫殿介がいる辺りまでは、人々の声も、巖流のことばも、聞えては来なかつたが、巖流の面には、これから生死の場所へ臨む者とは見えぬ和やかな笑みが、遠くからでも明るく見えた。

彼は、その笑みを、能うかぎり、知己朋友に、万遍なくふり撒いて、やがて、どよめく声援者につつまれながら、新しい小舟へ乗った。

弟子の辰之助も乗った。

船手方の藩士が、二人乗りこんで、一名は舳に腰かけ、一名は櫓をにぎる――

それと、もう一つの供のものは、辰之助の拳に据えて来た鷹の天弓である。小舟が岸を離れると一斉に歓声を送った人々の声に愕いたのである。天弓は、パツとひとつ、大きく翼を搏った。

## 二

浜辺に立つて見送っている人々は、いつまでも立ち去らなかつた。

それへ応えて、巖流も、舟の中から、振り向いていた。

櫓を漕ぐ者も、殊さら、舟を迅く行ろうとはせず、大きく弛く、波を切っていた。

「そうだ、時刻が迫った。おやしきの旦那様にも早……」

縫殿介は、われに回つて、たたずんでいる磯松の陰から、急に帰りかけた。

その時、ふと気づいたのであった。彼が姿を倚せていた松から六、七本目の同じような磯松の陰に、ひたと身を寄せて、独り泣いている女がある。

遠く小さく——海の青に溶けてゆく小舟を——いや巖流の姿を、見送ってはまた、よよと木陰に泣いていた。

それは巖流が、小倉に落ち着いてからの浅い年月、巖流のそばに仕えて来たお光であった。

「……………」

縫殿介は、眼を反らした。そして彼女の心を愕かさぬように、足音を忍ばせて、浜から町の道へ出て行つた。

ふと、気になるまま、

「——誰にも、裏と表はあるもの。晴の姿の陰には、愁いに傷む人のあるもの……」  
と、つぶやいて、人目を離れて悲しむ一人の女性と、もう沖へ、うすれて行く巖流の舟

とを、もう一ぺん、振りかえつてみた。

浜辺の人々は、三々五々、もう波打際から散らかっていた。口々に巖流の落ちつきぶりを称え、きよようの試合の必勝を、彼の上に期待しながら――。

「辰之助」

「はっ」

「天弓を、これへ」

巖流は、左の拳をさし伸べた。

辰之助は、自分の拳にすえていた鷹を、巖流の手へ移して、少し退がった。

舟は今、船島と小倉との間を漕いでゆく。海峡の潮流は、ようやく急であった。空も水も、澄みきった好晴の日であったが、浪はかなり高かった。

舷から水玉のかかるたびに、鷹は逆毛を立てて、凄愴な姿態を作った。今朝は、飼い馴れたこの鷹にも、戦気があった。

「お城へ帰れ」

巖流は、鷹の足環を解いて、鷹を拳から空へ放った。

鷹は、常の狩場の的まとのように、空へ翔けると、逃げる海鳥へかかって、白い羽毛を降らした。しかし再び飼主が呼ばないので、お城の空や、島々の翠みどりをかすめて、やがてどこかへ見えなくなつた。

巖流は、鷹の行方を見ていなかった。鷹を放つと、巖流はすぐに、身に着けている神仏のお札ふだやら手紙の反古ほごやら、また、岩国の叔母が、心をこめて縫つて来た梵字ぼんじの肌着までを——すべて元来の自己以外の物は——みな投げて、潮へ流してしまつた。

「さつぱりした」

巖流はつぶやいた。

今の絶対的なものへ向つて行くあの気持には、あの人、この人と、思い出さるる、情や絆きずなは、すべて心の曇りになると思つた。

自分に勝たせようと祈つてくれる、大勢の人々の、好意も重荷であつた。神仏のお札さえ、邪よこしまげと彼は思つたのである。

人間。——素肌の自己。

これ一箇しか、今は、恃たのむもののないことを、さすかに悟つていた。

「……………」

潮風は、無言の彼の面をおもてふいた。その眸に——船島の松や雑木の翠が、みどり刻々に、近づいていた。

## 三

一方——

同じ準備は、対岸の赤間ヶ関にある武蔵のほうにも、当然のこと、はや迫っていたわけである。

早朝。

長岡家の使いとして、縫殿介ぬいのすけと伊織のふたりが、武蔵の返書を携たずさえて、立帰って行つたあと。——彼の身を寄せている廻船問屋の主あるじ、小林太郎左衛門は、浜納屋はまなやの露地づたいに、店頭みせさきへ姿を見せ、

「佐助。佐助はいないか」

と、探していた。

佐助というのは、大勢の雇人やといにんの中でも、よく気をつく若い者で、住居の方でも重ちよう



宝ほうに使い、暇があると店のほうを手伝っていた。

「おはようございます」

主人の姿を見て帳場から降りて来た番頭は、まず朝の挨拶をして、

「佐助をお呼びで。——はい、はい、今しがたまで、そこらにおりましたが」

と、他ほかの若い者へ向い、

「佐助を探しておいで、佐助を——。大旦那がお召しだ。いそいで」

と、いいつけた。

それから番頭は何か、店の事務について、荷物の回漕やら船配りなどについて、さつそく、主人に報告的なおしやべりを始めたが、太郎左衛門は、

「後で。後で」

耳たぶの蚊を払うように顔を振り——それとはまったく関かかわりのないことを訊たずね出した。

「誰か、店のほうへ、武蔵様を訪ねて見えた者があるかね」

「へ。ああ、奥のお客様のことで。——いや今朝がたも、訪ねて見えたお人がございましたが」

「長岡様のお使いだろう」

「左様で」

「その他ほかには」

「さあ？ ……」

と、頬を抑えて、

「てまえが会ったものではございませんが、昨晚、大戸おろを卸してから、穢むきい身なりをした眼のするどい旅の男が、櫛かの杖つえについて、のっそりはいって来て——武蔵先生にお目にかかりたい。先生には下船以来、当家に御逗留うけたまわと承るが——といって、しばらく帰らなかつたそうでございますよ」

「誰がしゃべつたのだ。あれほど、武蔵様の身については口止めしておいたのに」

「何しろ、若い衆たちは、きょうのことがございますので、ああいうお方が、御当家に泊っているということは、何か自分たちの自慢のように、つい口へ出てしまいうらしいので——てまえも厳やかましく申し聞かせてはございますが」

「そして、ゆうべの、櫛の杖をついた旅の人とかはどうしたのか」

「総兵衛そうべえどのが、言い訳に出まして、何かのお聞き違いでございましょうと——どこまでも武蔵様はいないことに押し通して、やっと、帰したそうでございませう。——誰かその時、

大戸の外にはまだ二、三人も——女子の影も交じって佇んでいたとやらいうておりました  
が」

そこへ。

船着きの棧橋の方から、

「佐助でございます。大旦那、何か御用でございますか」

「おお佐助か。べつに、他の用じやないが、お前には今日、大役を頼んである。念を押す  
までもないが合点だろうな」

「へい。ようやく心得ております。こんな御用は船師一代のうちにもないことだと思いま  
して、今朝はもう暗いうちから起きて、水垢離をかぶり、新しい晒布で下つ腹を巻いて待  
っておりますんで」

「じゃあ、ゆうべも吩咐しておいたが、舟の支度も、いいだろうな」

「べつに、支度といつて、何もございせんが、たくさんな輕舸の中から、脚の早い、そ  
して穢れのないのを選つて、すっかり塩を撒いて、船板まで洗って置きました。——いつ  
でも、武蔵様のほうさえ、お支度がよければ、お供をするようになっております」

## 四

太郎左衛門はまた、

「そして、舟は、どこへ繋いでおいたかと、たずねた。」

佐助が、いつもの船着きの岸に——と答えると、太郎左衛門は考えていたが、

「そこでは、お立ちの際、人目につく。——どこまでも、人目だたぬようというのが武蔵様のお望み、どこぞ、他の場所へ廻しておいてもらいたいのう」

「かしこまりました。では、どこへ着けておきましようか」

「住居すまいの裏より、二町ほど東の浜辺——あの平家松へいけまつのある辺りの岸なら、往来も稀だし、人目にもそうかかるとまい」

そう吩咐いいつけている間も、太郎左衛門は、自分までが、何やら落着かぬ様子だった。

店も、平常ふだんとちがって、今日はめつきり暇ひまだった。子の刻こく過ぎまで、海門の船往来が止められているせいもあるうし、また、対岸の門司ケ関や小倉と共に、その長門領ながと一帯でも、すべての者が、船島のきょうの試合を、心がかりにしているせいもあるう。

そう思つて往来を眺めると、どこへ指して行くのか夥おびただしい人出であつた。近藩の武士らしい人々、牢人、儒者風の者、鍛冶かじ、塗師ぬりし、鎧師よろいしなどの工匠たくみたち、僧侶から雑多な町人や百姓までが——その中には被衣かすきだの市女笠いちめがさだの女のおいをも蒸れ立てて——おなじ方角へ、流れて行くのだった。

「はよう、来やい」

「泣くと、捨てて行くぞよ」

漁師りょうしの女房たちであろう、子を背負つたり、手に曳いたり、今が今にも、何事かあるように、わめいて通るのもあつた。

「なるほど、これでは……」

と、太郎左衛門も、武蔵の気もちが分る気がした。

識者しきしやがお顔する者の、毀誉褒貶きよほうへんさえかなり耳うるさいところへ、この人出の埃ほこりは、他人の死ぬか生きるかを、勝つか負けるかを、ただ興味として、見物に駈けて行く——

しかもまだ、時刻までには、幾刻いくときか間まもあるのに。

そして、船止めふなどとなつてゐるからには、元より海上へは出られず、遠く陸地とは絶縁されてゐる船島の現地が、たとえ山や丘へ上がったも、見える筈もあり得ないのに。

しかし、人が行く。そして、人が行くと、家にいられない人々が、わけもなく、ぞろぞろと行くのだった。

太郎左衛門は、ちよつと往来へ出て、一巡そんな空気に触れながら、やがて、住居へ戻つて来た。

彼の居間も、武蔵の寝ていた部屋も、もうすっかり、朝の掃除が終っていた。

開けひろげた浜座敷の天井の木目に、ゆらゆらと、波紋の渦がうごいていた。すぐ裏がもう海だった。

波から匆<sup>は</sup>ね返る朝の陽が、ふわ、ふわ、と光の斑<sup>ふ</sup>になって、壁にも障子にも遊んでいる。

「お帰りなさいませ」

「お。お鶴か」

「どちらへお出<sup>い</sup>でになったのかと彼方<sup>あ</sup>此方<sup>こ</sup>、さがしていましたのに」

「お店の方にいたのだよ」

お鶴のついで茶を取つて、太郎左衛門は、静かに見入っていた。

「……………」

お鶴もだまって海を見ていた。

太郎左衛門が、眼に入れても痛くないほど可愛がつているこの一人娘は、先頃まで泉州さかいみなと堺港の出店にいたが、ちようど武蔵が来る折、同じ船で、父の許へ帰っていた。——お鶴はかねて伊織をよく世話したこともあるので、武蔵が疾く伊織の消息に詳しかったのは、船中で、この娘から、何かのはなしを聞いていたのかも知れなかった。

## 五

また。こうも想像される。

武蔵が、この小林太郎左衛門の住居へ、先頃から身を寄せたのも、そうした縁から、伊織の世話になった礼をのべるためにも、下船後、太郎左衛門の家へ立ち寄り、太郎左衛門と親しくなったことからではあるまいか。

が——何はともあれ。

武蔵が逗留中は、父のいいつけで、お鶴が彼の身のまわりを世話していた。

現に、昨夜なども、武蔵が父と夜更くるまで、話しこんでいるあいだ、彼女はほかの部屋で、頻りと縫物などしていた。それは武蔵が、

(試合の当日は、何も支度は要り申さぬが新しき晒布さすろしの肌着と下帯だけは整えておきたく  
思います)

と、何かの折にいったので、肌着のみならず黒絹の小袖も帯紐おびひもも新しく縫って今朝までに、しつけ糸を抜けばよいように、すべて揃えてあるのだった。

仮に――

ほんの、かりそめに、太郎左衛門だけの親心であったが、

(娘は、あの人に、淡い思いを寄せているのではあるまいか。――もし、そうだとしたら、今朝のお鶴の心は)

と、ふと、そんな思い過しもしてみるのだった。

いや、思い過しでもないかもしれなかった。お鶴の今朝の眉には、どことなく、そうした心の色がただよっている。

今も。

父の太郎左衛門に茶を汲んでから、父が黙然と海を見ていると、彼女も、いつまでも黙って、物思わしく、海の青を凝視ぎようししていた。そして、その眸ひとみまでが、海にあふるる如く、涙になりかけた。



「お鶴……」

「はい……」

「武蔵様は、どこにお在いでか。朝の御飯は、さし上げたか」

「もう、お済みでございます。そして、あちらのお部屋を閉めて」

「そろそろ、お支度中か」

「いいえ、まだ……」

「何をしていらつしやるのだ」

「画えを描いていらつしやるようです」

「画を……?」

「はい」

「……ああ、そうか。心ないおねだりをした。いつぞや、画のはなしが出た折、なんぞ一筆でも、後の思い出にも——と、わしが御無心しておいたので」

「きょう船島まで、お供をしてゆく佐助にも、一筆遺物かたみに描いてつかわすと、仰つしやつておいでになりましたから……」

「佐助にまで」

太郎左衛門はつぶやいて、急に自分が落ちつかない気もちにせかれた。

「——もう、こうしている間にも、時刻は迫るし、見えもせぬ船島の試合を、見ようと騒いでゆくたくさんの人たちも、ああして往來を押し流して行くのに」

「武蔵様は、まるで、忘れたようなお顔をしていらっしやいます」

「画などの沙汰ではない。……お鶴、お前が行って、どうぞもう、そのようなことは、お捨て措おき下さいと、ちよつと申し上げて来い」

「……でも、わたしには」

「いえないのか」

太郎左衛門は、その時、はつきりとお鶴の気持を覚った。父と娘とは、ひとつ血である。彼女の悲しみも傷いたみも、そのまま、太郎左衛門の血にひびいていた。

が男親の顔は、さり気げなかつた。むしろ叱げるように、

「ばか。何をめそめそと」

そして自分で——武蔵のいる襖ふすまのほうへ立って行った。

## 六

そこは、ひそと、閉めきつてあつた。

筆、硯、筆洗などをおいて、武蔵は、寂として坐つていた。

すでに描き上がっている一葉の画箋には、柳に鷺の図が描いてあつた。

——が、前に置いてある紙には未だ一筆も落してなかつた。

白い紙を前にして、武蔵は、何を描こうかと、考えているらしい。

いや、画想をとらえようとする理念や技巧より前に、画心そのものに成りきろうとする自分を静かにととのえている姿だつた。

白い紙は、無の天地と見ることができると。一筆の落墨は、たちまち、無中に有を生じる。雨を呼ぶことも、風を起すことも自在である。そしてそこに、筆を把つた者の心が永遠に画として遺る。心に邪があれば邪が——心に墮氣があれば墮氣が——匠氣があればまた匠氣のあとが蔽い隠しようもなく遺る。

人の肉体は消えても墨は消えない。紙に宿した心の象はいつまで呼吸してゆくやら計りがたい。

武蔵は、そんなこともふと思ふ。

が、そんな考えも、画心の邪よこしまげである。白紙のような無の境に自分もなろうとする。そして筆持つ手が、我でもなく、他人ひとでもなく、心が心のまま、白い天地に行動するのを待っているような気持——

「……………」

その姿に、狭い一間は寂しやくとしていたのである。

ここには往来の騒音もなければ、きようの試合もよそ事のようにだった。ただ中庭の坪つぼの女竹めたけが、ときおり、かすかな戦そよぎを見せるだけで——。

「……………もし」

音もなく、いつか、彼のうしろの襖ふすまが少し開いていた。

主あるじの太郎左衛門であった。そつと、そこを窺うかがったものの、あまりに静かな彼の姿に、呼びかけるのさえ、憚はばられて、

「……………武蔵様。もし……………せつかくお楽しみのところを、お邪魔いたして恐れ入りますが」彼の眼にも、武蔵のそうしている容ようす子は、いかにも面に楽しんでる姿に見えたのだつた。

武蔵は、気がついて、

「おう、亭主どのか。……さ、はいらしい、そのようにしきいぎわ 闕しきいぎわ 際しきいぎわ で、なにをご遠慮」

「いえ、今朝はもう、そうしてもおられますまい。……やがて、お時刻が迫りまするが」  
「承知しています」

「お肌着や、懐紙、手拭など、お支度の物を取揃えて、次の部屋に置きましたゆえ、どうぞいつなりとも」

「かたじけのうござる」  
「……そしてまた、てまえどもへくださるための画でございましたなら、どうぞもうお捨て置きくださいませ。……また、首尾よう船島からお帰りの後にはゆるゆると」

「お気づかいなさるな。どうやら今朝は、すがすがしゅうござるゆえ、かような時に」

「でも、時刻が」

「存じています」

「……では、お支度にかかる時には、お呼びくださいませ、あちらで控えておりますから」  
「恐れ入るのう」

「どういたしまして」

かえって、邪魔をしてもと、太郎左衛門が退さがりかけると、

「あ。亭主どの——」

と、武蔵のほうから呼び止めて、こう訊ねた。

「この頃の、潮の満干は、みちひ、どういう時刻になつておろうか。今朝は、ひきしおどぎ、引潮時でござるか、あ、上げ潮時でござろうか」

## 七

潮の満干は、みちひ、太郎左衛門には、店の商売上と、直接の関係があるので、問われると、言下に、

「はいこの頃は、明けの卯之刻うのこくから辰のあいだに、潮が干きひりまして——左様、もうそろそろ潮が上げ始めている頃あいでござりまする」

と、答えた。

武蔵は、うなずいて、

「左様か」

と、つぶやいたきり、また、白い画箋がせんに向つて、もくねんとしていた。

太郎左衛門は、そうつと、襖ふすまをしめて、元の座敷へ退さがつて行った。——他人事たにじでなく、気にはかかるが、どうしようもなかった。

元の位置に、自分も落ちつくつもりで、しばらく坐つてみたが、時刻が、時刻が、と思うと、坐つてもいられなくなる。

つい立つて、浜座敷の縁へなど出てみた。海門の潮は今、奔流のように動いていた。浜座敷の下の干潟ひがたへも、見ているうちに、ひたひたと潮は上げて来る。

「お父さま」

「お鶴か。……何をしているのじゃ」

「もうお出ましも間もないかと、武蔵様のお草鞋わらじを、庭口のほうへ廻して参りました」

「まだだよ」

「どうなされましたか」

「まだ、画を描いていらつしやるのだ。……よいのかなあ、あんなにご悠ゆるりしていて」

「でも、お父さまは、お止めとしに行つたのじやないのですか」

「——行つたのだが、あの部屋へ行くと、妙に、止めるのもお悪い気がしてなあ」

——すると、何処かで、

「太郎左衛門殿つ、太郎左衛門殿つ」

声は、家の外だった。

庭先の下ひがたの干潟へ、細川藩の早舟が一艘そう、漕こぎ寄せていた。その早舟の上に突っ立っている侍が呼んだのだ。

「おう、縫ぬい殿のすけ介様で」

縫殿介は、舟から上がらなかつた。縁に太郎左衛門の姿が見えたのを幸いに、そこから仰向いて、

「武蔵どのには、もはや、お出ましなされたか」

と、訊ねた。

太郎左衛門が、まだ——と答えると、縫殿介は早口に、

「では、少しも早く、ご用意をととのえて、お出向き下さるよう、お伝え下さい。——すでに相手方の佐々木巖流どのにも、藩公のお舟にて、島へ向われたし、主人長岡佐渡様にも、今し方、小倉を離れましたれば」

「かしこまりました」

「くれぐれも、卑怯の名をおとりなさらぬよう、老婆心までに一言を——」



いい終ると、先を急せくように、早舟はすぐ櫓ろを回かえして、漕こぎ去いった。

——が。太郎左衛門もお鶴も、奥の静かな一間を振り向いたのみで、そのまま、わずかな時間を長い気持で、縁の端にならんで待つていた。

けれど、いつまでも、武蔵のいる部屋の襖ふすまは、開こうともしなかった。物音らしい気配も洩もれて来こなかつた。

二度目の早舟がまた、裏の干潟に着いて、一人の藩士が駈かけあがって来た。こんどの使しいは、長岡家の召使ではなく、船島から直じかに来た藩士であつた。

## 八

襖ふすまの音に、武蔵は目を開いていた。——で、お鶴が声をかけるまでもなかつた。

二度まで、催促の便が、早舟で来た由を告げると、武蔵は、

「そうですか」

ニコと、ただうなづく。

だまつて、どこかへ出て行つた。水屋で水音がする。一睡すいした顔を洗い、髪でも撫なでつ

けているらしい。

その間、お鶴は、武蔵がいたあとの畳へ眼を落していた。さつきまで、白紙だった紙には、どつぷり墨がついている。一見、雲のようにしか見えないが、よく見ると、破墨山はぼくさんす水の図であった。

画はまだ濡れていた。

「お鶴どの」

次の間から武蔵がいう。

「——その一図は、御主人に上げてください。また、もう一図は、きょう供をしてくれる船頭の佐助に後でお遣わし下さい」

「ありがとうございます」

「意外なお世話に相成ったが、なんのお礼とてもできぬ。画は遺物かたみがわりに」

「どうぞ、きょうの夜にはまた、ゆうべのように、お父さまと共に、同じ燈火ともしびの下でお話ができますように」

お鶴は、念じていった。

次の間では、衣きぬの音がしていた。武蔵が身支度しているものと思われた。襖ふすまごしの声が

しなくなつたと思うと、武蔵の声は、もう彼方の座敷で、父の太郎左衛門と何か二言三言、話している様子だつた。

お鶴は、武蔵が支度していた次の部屋を通つた。彼の脱いだ肌着小袖は、彼自身の手で、きちんと畳まれて、隅のみだれ箱に重ねてあつた。

いい知れぬ寂しさが、お鶴の胸をつきあげた。お鶴は、まだその人の温ぬくみを残している小袖の上に顔を投げ伏せた。

「……お鶴。お鶴」

やがて。

父の呼ぶ声だつた。

お鶴は、答える前に、そつと瞼まぶたや頬を指の腹で撫でていた。

「……お鶴つ。何をしておる。お立ちになるぞ。はや、お立ちになるぞ」

「はいっ」

われを忘れて、お鶴は駈け出して行つた。

——と見れば、武蔵はもう草鞋わらじを穿はいて、庭の木戸口まで出ている。彼は、あくまで人目立つのを避けていた。そこから浜づたいに少し歩けば、佐助の小舟が、疾とくから待って

いる筈だった。

店や奥の者、四、五人が、太郎左衛門と共にそこへ出て、木戸口まで見送った。お鶴は、何もいえなかつた。ただ武蔵のひとみが、自分のひとみを見た機しおに、だまって、皆と一緒に、頭を下げた。

「——おさらば」

最後に、武蔵がいった。

頭つむりを下さげ揃そろえたまま、誰も頭を上げなかつた。武蔵は柴折しおりの外へ出て、静かに柴折戸を閉め、もう一度いった。

「では、ご機嫌よう……」

人々が、頭を上げた時は、もう武蔵の姿は彼方を向いて、風の中を歩いていった。

振向ふりかえるか——振ふりかえ顧かえるか——と太郎左衛門を始め、取り残された人々は、縁や庭垣から見まもつていたが、武蔵は振向ふりかえかなかつた。

「あんなものかなあ、お侍というものは、なんと、あつさりしたものじやろう」

誰か、つぶやいた。

お鶴は、すぐ、そこに見えなくなつていった。太郎左衛門もそれを知ると、共に奥へ姿を

隠した。

太郎左衛門の住居の裏から浜辺づたいに一町ほど歩むと、巨おおきな一つ松がある。平家へいけま松まつとこの辺りで呼ばれている松——

先に小舟を廻して、雇やといにん人の佐助は、今朝夙とくからそこに待っていた。武蔵の姿が今、その辺りまで近づいたかと思うと、誰か、

「おおう！ ……先生ツ」

「武蔵どの」

ばたばたと、足もとへ転まろび伏すばかりに、駈かけ寄つて来た者があつた。

## 九

一步——

闘しぎしを踏んで出た武蔵には、今朝はもう何も頭になかった。

多少の思ひは、皆、真つ黒な墨にこめて、白紙の上へ、一掃そうの水墨画として吐いてしま

った感じである。——その画もわれながら、今朝は気もちよく描けたと思う。

そして、船島へ。

潮うしおにまかせて、渡ろうとする気もちには、なんら常の旅立ちと変った所はなかった。きよう彼かじこ処へ渡つて、再びこの岸へ帰れるか、帰れないか。今の一步一步が、死の府へ向つているのか、なお、今こんじょう生の長い道へ歩んでいるものか——そんなことすら思つてもみなかった。

かつて二十二歳の早春、一乗寺下り松の決戦の場所へ、孤剣を抱いて臨んだ時のような——ああした満身の毛穴もよだつような悲壮も抱かなければ感傷もない。

さればといって。

あの時の百余人の大勢の敵が強敵か。きょうのただ一人の相手が強敵かといえ、烏合うごうの百人よりもただ一人の佐々木小次郎のほうが、遥かにおそ懼るべきものであることは勿論だった。武蔵に取つては生涯またとあるかないかの、今日こそは大難に違いなかった。一生の大事に違いなかった。

——が、今。

自分を待つ佐助の小舟を見て、何気なく急ぎかけた足元へ、自分を先生と呼び、また、

武蔵どのか呼びかけて、まろ転び伏した二人の者を見ると、彼の平静な心は、一瞬、揺れかけた。

「おお……権之助ではないか。ばば殿にも。……どうして此処へは？」

不審そうにいう彼の眼の前に、たびあか旅垢にまみれた夢想権之助とお杉ばばとは、浜砂の中に埋まるように坐って、手をつかえていた。

「きょうの試合。一期いちごのお大事と存じまして」

権之助のことばに次いで、ばばもいった。

「お見送りにのう。……そしてまた、わしは其方そなたにきょうまでの詫言わびごとをしに来ました」

「はて。ばば殿が、この武蔵に詫言とは」

「ゆるしたも！ ……武蔵どの。長い間の、ばばが心得ちがいを」

「……えっ？」

むしろ疑うばかりに、武蔵は彼女のそういう面おもてを見まもって、

「ばば殿、それはまた、どういう気持でわしへ仰つしやるのか」

「何もいわぬ」

ばばは胸に、りょうて両掌を合せて、今の自分の心の相すがたを、象かたちに見せた。

「——過ぎ来し方の事々。一つ一ついうたら、懺悔申すにも懺悔しきれぬ程あるが、すべてを水と流したも。武蔵どの、ゆるしたも。皆……子ゆえに迷うたわしの過ちであった」

「……………」

じつと、その相を見入っていた武蔵は、あな勿体なしといわぬばかりに、遽かに膝を折って、ばばの手を取って伏し拝み、しばらく顔も上げ得なかったのは——胸もつまって涙がつきあげそうになつて来たからであろう。

ばばの手もわなわな顫え、彼の手も微かに戦っていた。

「ああ、武蔵に取つて、今日はなんたる吉日でしょうか。それ聞いて、今死ぬも、惑いなき心地がします。はつきりと、何か真実のものが観て取れた喜び——ばば殿のおことばを信じます。そして今日の試合には、一層、すがすがしい心で臨めると存じます」

「では、ゆるして下さいるか」

「なんの、左様に仰せられますは、武蔵こそ、遠い以前にさかのぼって、ばば殿の前に幾重にも詫びせねばなりません」

「……欣喜や。ああこれで、わが身は心まで軽くなった。じゃが、武蔵どの、もうひとり



世にも不愠ふびんな者、ぜひにも、其方そなたに救うてもらわねばなりませぬぞい」

ばばは、そういつて、武蔵の眼を誘うように、振り向いた。

——と見れば、彼方の松の木陰に、さつきからじつとうずくまったまま、顔も上げずに咲いている露草つゆくさのような、弱々しい女性の姿があつた。

## 十

——いうまでもない。それはお通つうであつた。お通は、遂に、ここまで来た。遂に来たという姿であつた。

手に市女笠いちめがさを持つて。

杖と、病やまいを持つて。

なお、燃ゆるばかりのものを抱いていた。その烈しい炎の如きものもしかし、驚くばかり窶やつれた肉体に抱かれていた。——武蔵が見たとたんにも、真つ先にそれをはつと感じた。

「……ああ。お通……」

凝然ぎようぜんと、彼は彼女のまえに立っていた。そこまで、黙々と運んで来た脚をすら忘れ

ていた。彼方に置き残された権之助もばばも、わざと寄って来なかった。むしろ身を消して、この浜辺を、彼と彼女との二人だけのものにして遣りたい気持すら抱いた。

「お通……さんか」

それだけの嘆声か、武蔵にも精いっぱいな言葉だった。

この年月の空間を、単なる言葉でつなぐには、あまりにも多恨であり過ぎた。

しかも、問うにも語るにも、今はそうしている時刻の余裕すらも既にないのである。

「からだか快くないようだが……。どんなだな」

やがていった。ぼつりと、前後もない言葉だった。——長い詩のうちの一句だけを摘んでつぶやくように。

「……ええ」

お通は、感情に咽せて、武蔵の面へ、眸さえ上げ得なかった。——が、生別となるか死別となるか、この大事な一瞬を、徒らに取乱したり、空しく過してはならないと、自ら誠めているらしく、じつと、理念の中に、自分を努めて冷やかに守っていた。

「かりそめの風邪か。それとも、もう永い煩いか。どこが悪い？ ……そして近頃は何処に、どこに身を寄せておるのか」

「七宝寺に、戻っております。……去年、秋の頃から」

「なに、故郷ふるさとに」

「……ええ」

初めて、彼女の眸は、武蔵をじつと見た。

深い湖のように、眼は濡れていた。睫毛まつげは、からくも溢あふれるものを支えていた。

「故郷……。孤児みなしごのわたくしには、人のいう故郷はありません。あるのは、心の故郷だけです」

「でも、ばば殿も、今では其女そなたにやさしゅうしてくれる様子。何よりも、武蔵は欣しい。静かに病やまいを養つて、其女そなたも幸せになつてくれよ」

「今は、幸せでございます」

「そうか。それを聞いて、わしも少しは安んじて行かれる。……お通」  
膝を折つた。

ばばや権之助の人目を感じるのです、彼女は居い疎すくんだまま、よけい身をちぢめたが、武蔵は誰が見ていることも忘れていた。

「痩せたなあ」

と、掻き抱かぬばかり、背に手をのせて、熱い呼吸を弾ませている彼女の顔へ顔を寄せ、

「……ゆるせ。ゆるしてくれい。無情い者が、必ずしも、無情い者ではないぞ、其女ばかりが」

「わ、わかっております」

「わかつているか」

「けれど、ただ一言、仰つしやつて下さいませ。……つ、妻じやと一言」

「分つておるといふ口の下に。——いうては、かえつて味ないもの」

「でも……でも……」

お通はいつか、全身で嗚咽していた。とつぜん、懸命な力で、武蔵の手をつかんで叫んだ。

「死んでも、お通は。——死んでも……」

武蔵は、もくねんと、大きく頷いて見せたが、細くて怖ろしく強い彼女の指の力を、一つ一つ挽ぎ離すと振り退けるようにして、突っ立った。

「武士の女房は、出陣にめめしゆうするものでない。笑うて送つてくれい。——これ限り

かも知れぬ良人の舟出とすれば、なおさらのことぞ」

## 十一

傍らに人はいた。

けれど、二人のわずかな間の語らいを、邪ける者はいなかった。

「――では」

武蔵は、彼女の背から手を離れた。お通はもう泣いていなかった。

いや、強いて、微笑んで見せようとさえしながら、わずかにやっと、涙を泳えとめて、

「……では」

と、同じ言葉で。

武蔵は起つ。

彼女も、蹠りと、起つた。――傍らの樹を力に。

「おさらば」

いうと、武蔵は、大股に浜辺の波際へ向って歩みだした。

お通は……喉<sup>のど</sup>までつき上げて来た最後のことばを、その背へ、遂にいえなかった。なぜならば、武蔵が背を向けた弾<sup>はず</sup>みに、

(もう泣くまい)

と、していた涙が、滂<sup>ぼう</sup>沱<sup>だ</sup>となつて、武蔵の姿すら見えなくなつてしまつたからである。

岸に立つと、風がつよい。

武蔵の鬢<sup>びん</sup>の毛を、袂<sup>たもと</sup>を、袴<sup>はかま</sup>のすそを、潮の香のつよい風が颯<sup>さつ</sup>々<sup>さつ</sup>と撲<sup>なぐ</sup>つて通つた。

「佐助」

そこにある小舟へ呼ぶ。

佐助は、初めて振り向いた。

さつきから、彼は武蔵の来たことを知っていたが、わざと、小舟の中で、あらぬ方<sup>かた</sup>へ、眼をやっていたのだった。

「お。……武蔵様。もうよろしいのでございますか」

「よし。舟を、もう少し寄せてくれい」

「ただ今」

佐助は、繫<sup>もやい</sup>綱<sup>い</sup>を解き、棹<sup>さお</sup>を抜いて、その棹で、浅瀬を突いた。

翻ひら——と、武蔵の身が、その舳みよしへ跳び移った時である。

「——あつ。あぶない、お通さんつ」

松の陰で、声がした。

城太郎である。

彼女と共に、姫路からついて来た青木城太郎だった。

城太郎も、一目、師の武蔵に——と志して来たのであったが、最前からの様子に、出る機しおを失つて、樹陰のあたりに、やはりあらぬ方へ眼をやったまま——佇たたずんでいたものらしかった。

ところが今。武蔵が、足を大地から離して、舟の人となつたかと思えた途端に、何思つたかお通が、水へ向つて、驀まっしぐらに駈け出したので、城太郎は、もしやと直ぐ気をまわして、

(あぶない！)

と、思わず、追いかけてながら叫んでしまったものだった。

彼が、彼ひとりの臆測で、あぶないと呶鳴とつぎつたために、権之助も、ばばも、すべてがお通の気もちを、咄嗟とつぎに穿はきちがえたものらしく、

「あつ……どこへ」

「短慮な」

と、左右からあわただしく駈け寄るなり、三人して、確しかと、抱き止めてしまった。

「いいえ。いいえ」

お通は、静かに顔を振ってみせた。

肩で、息こそ喘あえいでいるけれど、決して、そんな浅あさはか慮はかなことを——と笑ってみせるように、抱き支えた人々へ、安心を乞うた。

「どう……どうしやるつもりか……？」

「坐らせて下さいませ」

声も静かである。

人々は、そつと手を離れた。するとお通は、波打際から遠くない砂地へ、折れるように坐った。

しかし、襟元も、髪のはつれも、きりつと直して、武蔵の舟の舳みよしへ向い、

「お心措こころおきなく……。行っていらっしやいませ」

と、手をつかえていった。



ばばも坐つた。

権之助も城太郎も——それに倣つてびたと坐つた。

城太郎は遂に一言も、この際を、師と語ることもできなかつたけれど、その時間だけ、お通に分け与えたのだと思うと、悔む気もちは少しも起らなかつた。

魚歌水心

一

潮は上げている旺だつた。

海峡の潮路は、激流のように迅い。

風は追手。

赤間ヶ関の岸を離れた彼の小舟は、時折、真つ白なしぶきをかぶつた。佐助は、きょうの櫓を、誉れと思つていた。漕ぐ櫓にも、そうした気ぐみが見えた。

「だいぶかかろうな」

行くてを眺めながら、武蔵がいう。

舟の中ほどに、彼は、膝広く坐つていた。

「なあに、この風と、この潮なら、そう手間はとりません」

「そうか」

「ですが——だいぶ時刻が遅れたようでございます」

「うむ」

「辰の刻は、とうに過ぎました」

「左様——。すると船島へ着くのは」

「巳の刻になりましょう。いや巳の刻過ぎでございましょうよ」

「ちよどうぞよろう」

その日——

巖流も仰ぎ、彼も仰いでいた空は、あくまで深い碧さだった。そして長門ながとの山に白い雲が、旗のように流れているほか、雲の影もなかった。

門司もじケ関せきの町屋、風師山かぜしやまの山の皺しわも、明らかに望まれた。そこから辺りに群れ上のぼつて、見えぬものを見ようとしている群衆が、蟻ありのかたまりのように黒く見える。

「佐助」

「へい」

「これを貰つてよいか」

「何です」

「舟底にあつた櫂かいの割れ」

「そんな物——要りはしませんが、どうなさいますんで」

「手頃なのだ」

武蔵は、櫂かいを手にとつていた。片手に持つて、眼から腕の線へ水平に通して見る。幾分、水気をふくんでいたので、木の質は重く感じる。櫂の片刃そに削そげが来て、そこから少し裂けているので、使わずに捨ててあつた物らしい。

小刀を抜いて、彼は、それを膝の上で、気に入るまで削り出した。他念のない容ようす子である。

佐助でさえ、心にかかつて、幾度も幾度も赤間ヶ関の浜を——平家松のあたりを目じるしに——振り向いたことなのに、この人には、微塵みじん、後ろ髪をひかれる風は見えない。

いったい、試合などへ臨む者は、皆、こういう氣持になるものだろうか。佐助の町人か

ら観た考えでは、あまりに冷た過ぎるようにさえ思える。

櫂が削り終えたとき、武蔵は袴や袂の木屑を払って、

「佐助」

と、また呼ぶ。

「——なんぞ、着る物はあるまいか、蓑でもよいが」

「お寒いのでございますか」

「いや舷からしぶきがかかる。背中へかけたものだ」

「てまえの踏んでいる艦板の下に、綿入れが一枚、突っこんでありますか」

「そうか。借りるぞ」

佐助の綿入れを出して、武蔵は背へ羽織った。

まだ船島は、霞んでいた。

武蔵は、懐紙を取り出して、紙縫を作り始めた。幾十本か知れぬほど縫っている。そし

てまた、二本縫に縷い合せて、長さを測り、襷にかけた。

紙縫襷というのは、むずかしい口伝があるものとか聞いていたが——佐助が見ていた

ところでは、ひどく無造作に見えたし、また、その作りかたの迅いのと、襷にまわした手

際のきれいなのに、眼をみはった。

武蔵は、その襷に、潮のかからぬよう、ふたたび、綿入れを上から羽織って、

「あれか、船島は」

はや間近に見えて来た島影を指して訊ねた。

二

「いえ。あれやあ母島の彦島ひこしまでございます。船島は、もう少し行かないと、よくお分りになりますまい。彦島の北東に、五、六町ほど離れて、洲すのように平ひらたく在るのがそれで

——

「そうか。この辺りに、幾つも島が見えるので、どれかと思うたが」

「六連むつれ、藍島あいしま、白島しろしまなど——その中でも船島は、小さい島でございます。伊崎、彦島

の間が、よくいう音渡おんどの迫門せとで」

「西は、豊前ぶぜんの大里だいりの浦か」

「左様でございます」

「思い出した——この辺りの浦々や島は、げんりやく元暦の昔、九郎判官殿や、たいらとももりきよ平の知盛卿などの戦の跡だの」

こういう話などしていて一体いいものだろうか。自分の漕ぐ櫓ろに、舟が進んで行くにつれ、佐助は、ひとりでさつき先刻から、はだえあわ肌はだに粟あわを生じ、気はたか昂たかまり、胸は動悸どうきしてならないのである。

自分が試合するのではなし——と思つてみても、どうにもならなかった。

きょうの試合は、どっち道、死ぬか生きるかの戦である。今乗せてゆく人を、帰りに乗せて帰れるかどうか——。乗せてもそれは、惨たる死骸であるかも知れないのだ。

佐助には、分らなかつた。武蔵のあまりにも淡々とした姿が。

空をゆくひとひら一片の白雲。

水をゆくへんしゅう扁舟の上の人。

同じようにすら見えるのであつた。

だが、佐助の眼にも、そう怪しまれるほど、武蔵は、この舟が目的地へ赴ゆくあいだ、何も考えることがなかつた。

彼はかつて、退屈たいくつというものを知らずに生活して来たが、この日の、舟の中では、いさ

さか退屈をおぼえた。

櫂かいも削こつたし、紙こ縫よりも縫よれたし——そして考える何事も持たない。

ふと。

舷ふなべりから真つ蒼な海水の流紋に眼を落して見る。深い、底知れず深い。

水は生きている。無窮むきゆうの生命を持つているかのようである。しかし、一定の形を持たない。一定の形に囚とらわれているうちは、人間は無窮の生命は持ち得ない。——真の生命の有無は、この形体を失つてからの後のことだと思ふ。

眼前の死も生も、そうした眼には、泡沫に似ていた。——が、そういう超然らしい考えがふと頭をかすめるだけでも、体じゅうの毛穴は、意識なく、そそけ立っていた。

それは、ときどき、冷たい波しぶきに吹かれるからではない。

心は、生死を離脱したつもりでも、肉体は、予感する。筋肉が緊しまる。ふたつが合致しない。

心よりは、筋肉や毛穴が、それを忘れている時、武蔵の脳裡にも、水と雲の影しかなかった。

「——見えた」

「おお——ようやく、今頃」

船島ではない。そこは彦島の勅使待の浦であつた。

約三、四十名の侍が、漁村の浜辺にむらがつて、先刻から海上をながめ合つていた。

この者たちは皆、佐々木巖流の門人であり、その大半以上が、細川家の家中であつた。

小倉の城下に、高札が立つと直ぐ、当日の船止めの先を越して、島へ渡つてしまつたのである。

(万が一にも、師の巖流先生が敗れた時は、武蔵を、生かして島から歸すまいぞ)

と、密かに、盟を結んだ輩が、藩の布令をも無視して、二日も前から、船島へ上がつてきようを待ち構えていた。

だが、今朝になつて。

長岡佐渡、岩間角兵衛などの奉行や、また、警備の藩士たちがそこへ上陸するに及んで、すぐ発見され、きびしく不心得を諭されて、船島から隣り島の——彦島の勅使待へと、追い払われてしまつたものだつた。



## 三

その日の禁令上、試合に立会う役人側では、そういう処置を取ったものの、しかし、藩士の八分までは、当然、同藩の巖流に勝たせたいと祈っていたし、また、師を思うの余りから、そういう行動に出た門下たちに、肚はらでは同情もよせていた。

で、一応。

役儀上、彼らを船島からは追い払ったものの、すぐ側の彦島へ移っていることなら、不問に済ましておく考えだった。

なお。

試合がすんで――

万一にも、巖流のほうに打ち負けた場合は、それも船島の上では困るが、船島を武蔵が離れてからならば、師の巖流の雪せつえん怨えんという意趣から、どういう行動に出ようとも――それは自分らの関かかわり知ったことではない。

――というのが、処置を取った役人側の偽いつわらぬ肚はらだった。

彦島へ移った巖流の門下たちはまた、それを見抜いている。そこで彼らは、漁村の小舟

を狩り集め、約十二、三の舳へさきを勅使待の浦へ着けておいた。

そして、試合の様子を、直ぐここへ報知する伝令を、山の上に立たせておき、万一の場合には、すぐ三、四十人が各 小舟で海上へ出て、武蔵の帰路を遮ささえぎり、陸路へ追跡して討ち取るなり、場合によつては、彼の舟を覆くつがえして、海峡の底に葬り去つてしまおうとも——  
謀しめし合せていたのだ。

「——武蔵か」

「武蔵だ」

呼び交わして、彼らは、小高い所へ駈け上がったたり、手をかざして、真昼の陽ひのきらきら反射する海面へ、眸をこらしていた。

「船往來は、今朝から止まっている。武蔵の舟にちがいない」

「一人か」

「一人のようだ」

「つくねんと、何か羽織つて坐つておるぞ」

「下へ、小具足こぐそくでも着けて来たものだろう」

「何せい、手配をしておけ」

「山へ、行つたか。見張に——」

「登っている。大丈夫」

「では、われわれは、舟のうちへ」

いつでも、綱を切れば、漕ぎ出られるように、三、四十名の者達は、どやどやと、思い思いに小舟へかくれた。

舟には、一筋ずつの長槍も伏せてあつた。物々しい扮装振りいでたちぶりは、巖流よりも、また、武蔵よりも、その人々の中に見られた。

——一方。

武蔵見えたり！

という声は、そのみでなく、同じ頃に、船島にも当然伝わっていた。

ここでは。

波の音、松の声、雑木や姫笹ひめざさの戦そよぎも交まじつて、全島、今朝から人もないような気配だつた。

気のせいしやうざつか、蕭殺しょうざつとして、それが聞えた。長門領ながとの山からひろがった白雲が、ちようど中天の太陽を時折かすめて、陽かげが陰ると、全島の樹々や篠しののそよぎが、暗くなつた。

——と思うと、一瞬にまた、くわつと陽が照った。

島は、近寄って見ても、極めて狭い。

北はやや高く丘をなして、松が多い。そこから南の懐が、平地から浅瀬となつたまま海面へのめりこんでいる。

その丘ふところの平地から磯へかけて、きよの試合場と定められていた。

奉行以下、足軽までの者は、磯からかなり距つた所に、樹から樹へ、幕を繞らし、鳴りをひそめていた。巖流は藩籍に在る者であり、武蔵は扱る所のない者なので、それが相手方への威嚇にならない程度には、心して控えている陣容だった。

しかし約束の時刻が、もう一刻以上も過ぎていること。

二度も、ここからの飛脚舟で催促をやつてあることなどで、静肅なうちにも、やや焦躁と反感とを一樣に抱いていた所である。

「武蔵どの！ 見えましてっ」

絶叫しながら、磯に立つて見ていた藩士が、遠い床几と幕の見える方へ駈けて行つた。

#### 四

「——来たか」

岩間角兵衛は、思わずいつて、床几から伸び上がった。

彼は、きよようの立会人として、長岡佐渡と共に、派遣されて来た役人ではあるが、彼がきよようの武蔵を相手とする人間ではない。

しかし、口走った感情は、自然の流露であつた。

彼のわきに控えていた従者や下役の者も、皆、同じ眼色を持って、

「お！ あの小舟だ」

と、一緒に起ち上がった。

角兵衛は、公平なる藩役人の身として、すぐその非に気づいたらしく、

「控えろ」

と、まわりの者をいまし誡めた。

じつと、自分も、腰をすえた。——そして静かに、巖流のいるほうへ流し目を送った。

巖流のすがたは見えなかつた。ただ、山桃の樹四、五本のあいだに、りんどう龍胆の紋のついた幕がひらめいていた。

幕のすそには、青竹の柄えのついた柄杓ひしゃくを添えた新しい手桶が一箇あつた。だいぶ早目に島へ着いた巖流は相手の来る時刻が遅いので、さつき、水桶の水をのんでいた。そして幕とぼりの陰で休息していたが、今は、そこに見当らなかつた。

その幕とぼりを挟んで、少し先の土坡どぼの向う側には、長岡佐渡の床几場しょうぎばがあつた。

ひとかたまりの警固の士と、彼の下役と、彼の従者として伊織がわきに控えていた。

今——武蔵どのが見えた！ という声を触れながら、磯のほうから一人が駈けて、警備の中にはいり込むと、伊織の顔いろは、唇まで白くなつた。

正視したまま、動かずにいた佐渡の陣笠が、自分の袂たもとを見るように、ふと横を見——

「伊織」

と、低声こしえでよんだ。

「……はっ」

伊織は、指について、佐渡の陣笠の裡うちを見上げた。

足もとから顫ふるえてくるような全身のおののきを、どうしようもなかつた。

「伊織——」

もいちど、その眼へ、じつといつて、佐渡は訓おしえた。

「よう、見ておれよ。うつろになつて、見のがすまいぞ。——武蔵どのが、一命を曝さらして、そちへ伝授して下さるものと思うて今日は見ておるのだよ」

「……………」

伊織は、うなずいた。

そしていわれた通り、眼を炬きよのようにみはつて、磯のほうへ向けていた。

磯まで、一町の余はあろう。波打際の白いしづきが、眼に沁しむほどだったが、人影といつては、小さくしか見えないのである。試合となつても、実際の動作、呼吸などを、つぶさに目撃するわけにはゆかない。——しかし、佐渡がよく見よと訓おしえたのは、そういう技わざの末のことではあるまい。人と天地との微妙な一瞬ひとときの作用を見よといったのだろう。また、こういう場所に臨むもののふの心構えというものを、後学のため、遠くからでもよく見届けておけといったのであろう。

草の波が寝ては起きる。青い虫がときおりとぶ。まだひよわい蝶が、草を離れ、草にすがつては、何処いずこともなく去つてゆく。

「——ア。あれへ」

磯の先へ、徐々と、近づいて来た小舟が、伊織の眼にも、今見えた。時刻はちようど、

規定の刻限よりも遅れること約一刻——巳の下刻（十一時）ごろと思われた。

しいんと、島の内は、真昼の陽だけにひそまり返っていた。

その時、床几場しょうぎばのあるすぐ後ろの丘から、誰やら降りて来た。佐々木巖流であった。待ちしびれていた巖流は、小高い山に上って、独り腰かけていたものとみえる。

左右の立会役たちあいやくの床几へ礼をして巖流は、磯のほうへ向い、静かに、草を踏んで歩み出していた。

## 五

陽は、中天に近かった。

小舟が、島の磯近くへ入ってくると、幾ぶん入江になっているせいか、波は細やかになり、浅瀬の底は青く透いてみえた。

「——どの辺へ？」

櫓ろの手を弛ゆるめながら、佐助は磯を見まわして訊ねた。

磯には、人影もなかった。



武蔵は、かぶっていた綿入れを脱ぎ捨てて、

「真つ直に——」

と、いった。

舐<sup>へ</sup>はそのまま進んだ、けれど佐助の櫓の手は、どうしても大きく動かなかつた。——寂<sup>じやく</sup>

として、人影も見えない島には、鴨<sup>ひよどり</sup>が高く啼いていた。

「佐助」

「へい」

「浅いなあ、この辺は」

「遠浅です」

「むりに漕ぎ入れるには及ばぬぞ。岩に舟底を噛まれるといけない。——潮は、やがてそ

ろそろ退<sup>ひきしお</sup>潮ともなるし」

「……?」

佐助は答えを忘れて、島の内の草原へ、眼をこらしていた。

松が見える。地味<sup>ちみ</sup>の痩せをそのまま姿にしているひよろ長い松だ。——その木陰に、ち

らと、猩々<sup>しやうじやう</sup>緋の袖無羽織のすそが翻<sup>ひら</sup>めいていた。

——来ている！ 待構えている。

巖流の姿があれに。

と、指さそうとしたが、武蔵の様子を窺うと、武蔵の眼もすでにそこへ行っている。

眸を、そこに向けながら、武蔵は、帯に挟んで来た洩染の手拭をぬいて、四つに折り、頻りに潮風にほつれる髪を撫で上げて鉢巻した。

小刀は前に帯び、大刀は、舟の中へ置いてゆくつもりらしく——そして、飛沫に濡れぬ用意に、蓆を着せて、舟底へ置いた。

右手には、櫂を削って木剣とした手作りのそれを握った。そして舟から立ち上がると、

「もうよい」

と、佐助へいった。

——だが。

まだ磯の砂地までは、水面二十間もあつた。佐助は、そういわれてから、二ツ三ツ大きく櫓幅を切った。

舟は、急激に、ググツと突き進んで、とたんに浅瀬を噛んだものとみえる。舟底がどすんと持ち上がったように鳴った。

左右の袴はかまの裳もすそを、高く褰かかげていた武蔵は、その弾はすみに、海水の中へ、軽く跳び下りていた。

飛沫しぶきも上がらないほど、どぼつと、脛すねの隠れるあたりまで。

ぎゅー！

ぎゅー！

ぎゅー……

かなり早い足で、武蔵は、地上へ向つて歩き出した。

引つ提ひきげている櫛かみの木剣の切つ先も、彼の蹴る白い水泡みなわと共に、海水を切っている。

五歩。

——また十歩と。

佐助は櫓ろを外はずしたまま、後ろ姿を自失して見ていた。毛穴から頭のしんまで寒気立って、どうすることも忘れていたのである。

と、その時。

はつと、彼は息づまるような顔をした。彼方のひよろ松の陰から、緋ひの旗でも流れて来るように巖流のすがたが駈けて来たのである。大きな業わざ刀もののぬり鞘ざやが陽はを匆はね返し、銀ぎ

狐この尾のように光つて見えた。

……ざ。ざ。ざッ。

武蔵の足は、まだ海水の中を歩いていた。

早く！

と、彼が念じていたのも空しく、武蔵が磯へ上がらぬ間に、巖流の姿は水際みずぎわまで駆け寄っていた。

しまった——と思うと共に、佐助はもう見ていられなかった。自分が真二つにされたように、舟底へ俯うつ伏ぶしてふるえていた。

## 六

「武蔵か」

巖流から呼びかけた。

彼は、先せんを越して、水際に立ちはだかった。

大地を占めて、一步も敵にゆずらぬように。

武蔵は、海水の中に踏み止まったまま、いくぶん、微笑をもった面で、

「小次郎よな」

と、いった。

櫂の木剣の先を、浪が洗っている。

水にまかせ、風にまかせ、ただその一木剣があるだけの姿だった。

しかし——

汚染の鉢巻に幾分つきあがった眦はすでにふだんの彼のものではない。

射るといふ眼はまだ弱いものである。武蔵の眼は吸引する。湖のように深く、敵をして、自己の生気を危ぶませるほど吸引する。

射る眼は、巖流のものだった。双眸の中を、虹が走っているように、殺気の光彩が燃えている、相手を射竦めんとしている。

眼は窓という。思うに、ふたりの頭脳の生理的な形態が、そのまま巖流の眸であつたであらう、武蔵の眸であつたにちがいない。

「——武蔵っ」

「……………」

「武蔵っ！」

二度いった。

沖鳴りが響いてくる。二人の足もとにも潮が騒いでいた。巖流は、答えない相手に対して、勢い声を張らないでいられなかつた。

「怯れたか。策か。いずれにしても卑怯と見たぞ。——約束の刻限は疾く過ぎて、もうひととき一刻の余も経つ。巖流は約を違えず、最前からこれにて待ちかねていた」

「……………」

「一乗寺下り松の時といい、三十三間堂の折といい、常に、故意に約束の刻をたがえて、敵の虚を突くことは、そもそも、汝のよく用いる兵法の手癖だ。——しかし、きようはその手にのる巖流でもない。末代もの囁いのたねとならぬよう潔く終るものと心支度して来い。——いざ来いつ、武蔵！」

いい放つた言葉の下に、巖流は、鎧を背へ高く上げて、小脇に持っていた大刀物干竿を、ぱつと抜き放つと一緒に、左の手に残つた刀の鞘を、浪間へ、投げ捨てた。

武蔵は、耳のないような顔をしていたが、彼の言葉が終るのを待つて——そしてなお、磯打ち返す波音の間を措いてから——相手の肺腑へ不意にいった。

「小次郎っ。負けたり！」

「なにっ」

「きょうの試合は、すでに勝負があつた。汝の負けと見えたぞ」

「だまれっ。なにをもつて」

「勝つ身であれば、なんで鞆さやを投げ捨てむ。——鞆は、汝の天命を投げ捨てた」

「うぬ。たわ言を」

「惜しや、小次郎、散るか。はや散るをいそぐかつ」

「こ、来いッ」

「——おおっ」

答えた。

武蔵の足から、水音が起つた。

巖流もひと足、浅瀬へぎぶと踏みこんで、物干竿をふりかぶり、武蔵の真つ向へ——と構えた。

が、武蔵は。

一条の白い泡つぶを水面へ斜めに描いて、ザ、ザ、ザと潮を蹴上げながら、巖流の立つ

ている左手の岸へ駆け上がった。

## 七

水を切つて岸へ、斜めに、武蔵が駆け上がったのを見ると、巖流は、波打際の線に添つて、その姿を追つた。

武蔵の足が、水を離れて磯の砂地を踏んだのと、巖流の大刀が——いや飛魚のような全姿が、

「喝<sup>か</sup>ッ」

と、敵の体へ、すべてを打ち込んだのと、ほとんど、同時であつた。

海水から抜いた足は重かつた。武蔵はまだ戦う体勢になかつた瞬間のように見えた。物干竿の長剣が、自己のうえに、ひゅっ——と来るかと感じた時、彼のからだはまだ、駆け上がつて来たまま、いくぶんか前のめりに屈曲していた。

——が。

櫂<sup>かい</sup>削<sup>けず</sup>りの木剣は、両の手で、右の小脇<sup>こわき</sup>から背へ隠すように深く、横へ構えられていた。



「……ムむ！」

といったような——武蔵の声なきものが、巖流の面を吹いた。

頂天から斬り下げて行くかと思えた巖流の刀は、頭上に鏗鳴りをさせたのみで、武蔵の前へ約九尺ほども寄ったところで、却って、自身から横へぱつと身を反らしてしまった。

不可能を覚ったからである。

武蔵の身は、巖のように見えた。

「……………」

「……………」

当然、双方の位置は——その向きを変えている。

武蔵は、居所のままだった。

水の中から、二、三步あがったままの波打際に立って、海を背後に、巖流のほうへ向き直った。

巖流は、その武蔵に直面し——また、前面の大海原に対して、長剣物干竿を諸手に振りかぶっていた。

「……………」

「……………」

こうして、二人の生命は今、完全な戦いの中に呼吸し合った。  
元より武蔵も無念。

巖流も、無想。

戦いの場は、真空であつた。

が、なみざい波騒の外——

また、草そよぐ彼方の床しょうぎば几場の辺り——

このこの真空中の二つの生命を、無数の者が今、息もつかずに見まもっていたに違いなかつた。

巖流のうえには、巖流を惜しみ、巖流を信じる——幾多の情魂やいの禱りがあつた。

また、武蔵のうえにもあつた。

島には、伊織や佐渡。

赤間ヶ関の渚なみざいには、お通やばばや権之助や。

小倉の松ヶ丘には、又八や朱実なども。

その各が、ここを見る目もとどかない所から、ひたすら、天を祈っていた。

しかし、この場所には、そういう人々の祈りも涙も加勢にはならなかった。また、偶然や神助もなかった。あるのは、公平無私な青空のみであった。

その青空の如き身になりきることがほんとの無念無想の相すがたというのであろうか、生命いのち持つ身に容易になれないことは当然である。ましてや、白刃対白刃のあいだでは。

ふと。おのれツと思う。

満身の毛穴が、心をよそに、敵へ対して、針のようにそそげ立って歇やまない。

筋、肉、爪、髪の毛——およそ生命に附随しているものは、睫毛まつげひとすじまでが、みな挙あげて、敵へ対し、敵へかかろうとし、そして自己の生命を守りふせいでいるのだった。

その中で、心のみが、天地と共に澄みきろうとすることは、暴雨あらしの中に、池の月影だけ揺れずにあろうとするよりも至難であった。

長い気もちのする——しかし事實はきわめて短い——寄せ返す波音の五たびか六たびも繰り返すあいだであつたらうか。

やがて——という程の間もないうちにである。大きな肉声は、その一瞬<sup>ひととき</sup>を破つた。

それは、巖流のほうから発したものだつたが、殆ど、同音になつて、武蔵の体からも声が出た。

巖<sup>いわ</sup>を搏<sup>わ</sup>つた怒濤のように、二つの息<sup>そくせい</sup>声<sup>こゑ</sup>が、精神の飛沫<sup>しぶき</sup>を揚げ合つたとたん、中天の太陽をも斬つて落すような高さから、長刀物干竿の切つ先は、細い虹をひいて、武蔵のまっ向へ跳んで来た。

武蔵の左の肩が——

その時、前下がりに躲<sup>かわ</sup>つた。腰から上の上半身も、平面から斜<sup>しゃ</sup>角<sup>かく</sup>に線を改めた時、彼の右足は、すこし後ろへ引かれていた。そして諸<sup>もろ</sup>手の櫂<sup>かい</sup>の木剣が、風を起してうごいたのと、巖流の長剣が、切つ下がりに、彼の真<sup>ま</sup>眉<sup>みげん</sup>間<sup>ま</sup>を割つて来たのと、そこに差というほどの差は認められなかった。

「……………」

「……………」

ぱつと、もつれた一瞬の後は、ふたりの呼吸が磯の波よりは高かった。武蔵は、波打際から、十歩ほど離れて、海を横にし、跳びのいた敵を、櫂かいの先に見ていた。

櫂の木剣は、正眼せいがんに持たれ、物干竿の長剣は、上段に返っていた。

しかし、ふたりの間隔は、相搏あひうつた一瞬に、おそろしく遠退とのおいていた。長槍と長槍とでも届かないくらいな間隔にわかれていたのである。

巖流は、最初の攻勢に、武蔵の一髪も斬ることはできなかったが、地の利は、思うように占め直したのである。

武蔵が、海を背にして、動かなかつたのは、理由があつたことである。真昼の中の陽は海水につよく反射して、それに対つてむかっている巖流に取つては、はなはだしい不利だったのだ。もし、その位置のまま武蔵の守勢むせに対して、ぐつと対峙たいじしていたら、慥たしかに、武蔵よりも先に精神も瞳もつかれてしまったに違いないのである。

——よしつ。

思うように、地歩を占め直した彼は、すでに武蔵の前衛を破つたかのような意気を抱いた。

と——巖流の足はじりじりと小刻みに寄って行つた。

間隔をつめて行く間に敵の体形のどこに虚があるかを観、同時に、自己の金剛身をかためて行くべく、それは当然な小刻みの足もとだった。

ところが、武蔵は、彼方からずかずかと歩み出して来た。

巖流の眼の中へ、櫂の先を突つ込むように、正眼に寄って来たのである。

その無造作に、巖流が、はつと詰足を止めた時、武蔵の姿を見失いかけた。

櫂の木剣が、ぶんと上がったのである。六尺ぢかい武蔵の体が、四尺ぐらいに縮まって見えた。足が地を離れると、その姿は、宙のものだった。

「——あツつ」

巖流は、頭上の長剣で、大きく宙を斬つた。

その切つ先から、敵の武蔵が額を締めていた柿色の手拭が、二つに断れて、ぱらつと飛んだ。

巖流の眼に。

その柿色の鉢巻は、武蔵の首かと見えて飛んで行つた。血とも見えて、颯々と、自分の刀の先から刎ね飛んだのであつた。

ニコ、と。

巖流の眼は、楽しんだかも知れなかった。しかし、その瞬間に、巖流の頭蓋は、櫛の木剣の下に、小砂利のように砕けていた。

磯の砂地と、草原の境へ、仆れた後の顔を見ると、自身が負けた顔はしていなかった。唇の端から、こんこんと血こそ噴いていたが、武蔵の首は海中へ斬って飛ばしたように、いかにも会心らしい死微笑を、キュツと、その唇ばたにむすんでいた。

## 九

「——ア。アツ」

「巖流どのが」

彼方の床几場のほうで、そうした声が、さつと流れた。

われを忘れて。

岩間角兵衛も起ち、その周りの者も、悽惨な顔をそろえて、伸び上がった。——が、すぐ側の、長岡佐渡や伊織たちのいる床几場のひとかたまりが、自若としているのを見て、

強しいて平静よそおを装よそおいながら、角兵衛もその周囲も、じっと、動かないことに努めていた。

が——蔽おほいようもない敗色と、滅失の惨気が、巖流の勝ちを信じていた人々のうえを包んだ。

「……？」

しかもなお、未練や煩惱は、そこまでの現実を見ても、自分らの眼あやまの過あやまりではないか——と疑うように、生つばをのんで、しばしは放心していた。

島の内は、一瞬の次の一瞬も、人なきように、ひそまり切っていた。

無心な松風や草のそよぎが、ただ遽にわかに、人間の無常観をふくだけだった。

——武蔵は。

一朵いちたの雲を、見ていた。ふと見たのである、われに返って。

今は雲と自身とのけじめを、はつきり意識にもどしていた。遂にもどらなかつた者は、敵の巖流佐々木小次郎。

足数にして、十歩ほど先に、その小次郎は俯うつつ伏ぶせに仆たおれている。草の中へ、顔を横にふせ、握りしめている長剣の柄つかには、まだ執着の力が見える。——しかし苦しげな顔では決してない。その顔を見れば、小次郎は自己の力を挙げて、善戦したという満足がわかる。



戦に戦いきった者の顔には、すべて、この満足感があらわれているものである。そこに残念——と思い残しているような陰は少しも見当らない。

武蔵は、斬れ落ちていている自分の渋染しぶぞめの鉢巻に眼を落して、肌あわに粟を生じた。

「生涯のうち、二度と、こういう敵と会えるかどうか」

それを考えると、卒然そつぜんと、小次郎に対する愛惜と、尊敬を抱いた。

同時に、敵からうけた、恩をも思った。剣を把とつての強さ——単なる闘士としては、小次郎は、自分より高い所にあつた勇者に違いなかつた。そのために、自分が高い者を目標になし得たことは、恩である。

だが、その高い者に対して、自分が勝ち得たものは何だつたか。

技わざか。天祐てんゆうか。

否——とは直ぐいえるが、武蔵にも分らなかつた。

漠ぼくとした言葉のままいえば、力や天佑以上のものである。小次郎が信じていたものは、技や力の剣であり、武蔵の信じていたものは精神の剣であつた。それだけの差でしかなかつた。

「……………」

もくねんと、武蔵は、十歩ほどあるいた。小次郎の体のそばに膝を折った。

左の手で小次郎の鼻息びそくをそつと触れてみた。微かな呼吸がまだあった。武蔵はふと眉を開いた。

「手当に依つては」

と、彼の生命に、一縷るの光を認めたからである。と同時に、かりそめの試合が、この惜しむべき敵を、この世から消し去らずに済んだかと、心もかろく覚えたからであった。

「……おさらば」

小次郎へも。

彼方の床几場の方へも。

そこから手をついて、一礼すると武蔵の姿は、一滴の血もついていないか權いの木太刀を提さげたまま、さつと北磯のほうへ走り、そこに待っていた小舟の中へ跳びのつてしまった。

どこへ指して、どこへ小舟は漕ぎ着いたか。

彦島に備えていた巖流方の一門も、彼を途中に擁ようして師巖流のとむらいがっせん弔とむらいがっせん合あ戦せんに及んだというはなしは遂に残っていない。

生ける間は、人間から憎悪やあいしゆう愛あ執しゆうは除けない。

時は経ても、感情の波長はつきつきにうねってゆく。武蔵が生きている間は、なお快しこころよとしない人々が、その折の彼の行動を批判して、すぐこういった。

「あの折は、帰りの逃げ途も怖いし、武蔵にせよ、だいぶ狼狽しておったさ。何となれば、巖流に止刀を刺すのを忘れて行ったのを見てもわかるではないか——と。

波なみぎ騒いは世の常である。

波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚ざこは歌い雑魚ざこは躍る。けれど、誰か知ろう、百尺下の水の心を。水のふかさを。



# 青空文庫情報

底本：「宮本武蔵（七）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年1月11日第1刷発行

2002（平成14）年12月5日第37刷発行

「宮本武蔵（八）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年1月11日第1刷発行

2003（平成15）年1月30日第37刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※副題は底本では、「円明《えんみょう》の巻」となっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年12月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 宮本武蔵

## 円明の巻

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>